
川 越 市 / 坂 戸 市

牛原／御新田／番匠・下道 横沼新田／北谷

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う川越坂戸地区
埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 8

国土交通省 関東地方整備局
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 牛原遺跡航空写真



2 牛原遺跡第3号住居跡

この本で報告する遺跡について

本書では、圏央道の新設工事にともなって川越市と坂戸市で実施した発掘調査の成果を報告します。鶴ヶ島ジャンクションの東側にあたる両市域において、当事業団は9遺跡の調査を行いました。本書では、このうち市境付近に所在する5遺跡をまとめました。

これらの遺跡は、入間川^{こまがわ}と高麗川^{たかまがわ}に画された入間台地の北東に立地しています。最も南西の宮廻館跡^{みやまわり}では、入間台地の内部を流れる大谷川^{おおやがわ}を間近に見ることができ、これに対し、最も北東の木曾免遺跡^{きそめん}は、台地の北東端にあり、越辺川^{おつべがわ}の広大な低地帯が一望できます。この間、小さな流れや入り組んだ谷がそれぞれの遺跡を画しています。

ちなみに、本書の遺跡掲載順は、南西方から路線をたどる順としてあります。また、木曾免遺跡・宮廻館跡は当事業団第352集・第354として本書と同時に報告されます。

牛原遺跡の紹介

牛原遺跡^{うしはら}は、縄文時代を中心とする遺跡です。発掘調査の結果、中期前半（4500年前）の環状にめぐる遺構群や後期初頭（4000年前）の敷石住居跡などが発見されました。これに加え、中世に敷設されたと考えられる道路跡も見つかっています。

埼玉県で知られている縄文時代中期前半の集落跡は数少なく、それも南西部に片寄っています。今回発見した遺構群は、その北東のはずれにあたるものと考えられます。写真に示した小さな竪穴では、人の居場所がないほどに柱穴などが設けられ、いろり脇の土器片は、ヘビの文様を入口に向けて据えられていたようにもみえます。

また、遺跡のすぐ南に残る大堀山館跡^{おほぼりやま}と同じ方向に向いた道路跡は、堀兼道^{ほりがみち}と呼ばれる中世古道の延長上で見つかっています。



1 牛原遺跡第4号住居跡（橋鏡形敷石住居跡）



2 牛原遺跡第4号住居跡（完掘）

牛原遺跡の敷石住居跡（1）

牛原遺跡で見つかった縄文時代後期初頭の敷石住居跡には、結晶片岩が敷き詰められていました。周辺に石を採集できるような河原はなく、しかも、小川町や長湍など、産地が限られている結晶片岩が使用されていたことより、数百kgもの石材がはるばる遠方から運ばれてきたことが証明できます。このような遠距離大量輸送の形跡が見つかることは、縄文時代の遺跡ではきわめてめずらしいことです。



1 牛原遺跡第4号住居跡敷石状況

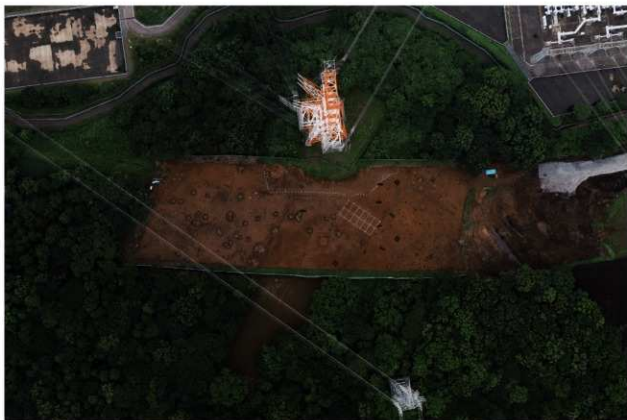


2 牛原遺跡第4号住居跡敷石拡大

牛原遺跡の敷石住居跡（2）

一見したところ、整然と敷かれた平石は、中央でコの字に組まれた大石から始まり、余白を埋めるように外周へと順次並べられたように思えます。ところが、詳しく検証したところ、先ず径30cmほどの石を外周に配置して内部空間を分割した上で内部の石が周到に割り振られ、規格に沿うように整形されていたことがわかりました。前頁下段の写真では、中央左下の平石が分割した石と重ならないように加工された痕跡が見られます。

縄文人の優れた企画性と幾何学的な綿密さは、第IX章に示した図でも垣間見ることができでしょう。



1 御新田遺跡航空写真



2 御新田遺跡第1号住居跡

御新田遺跡の紹介

おしんでん
御新田遺跡は、牛原遺跡から北東に400mほどの、谷を挟んだ向かい側に広がっています。やはり縄文時代を中心とする集落跡で、牛原遺跡とおなじ中期前半の竪穴住居跡しゅうせきどこうや集石土壇が発見されました。

また、これに加え、早期前葉（9000年前）や前期半ば（6000年前）に建てられた竪穴住居跡も見つかっています。とくに、早期前葉の住居跡は、県内の数遺跡でしか発見されていません。加えて、確認の困難さから、竪穴の形や詳しい時期がわからない例がいくつもあります。今回の調査で発見された住居跡は、竪穴の掘り込みが深く、特徴を同じくする複数の土器が床面から出土するなど、この期では指おりの住居跡例といえます。



1 番匠・下道遺跡航空写真



2 番匠・下道遺跡第5号住居跡カマド遺物出土状況

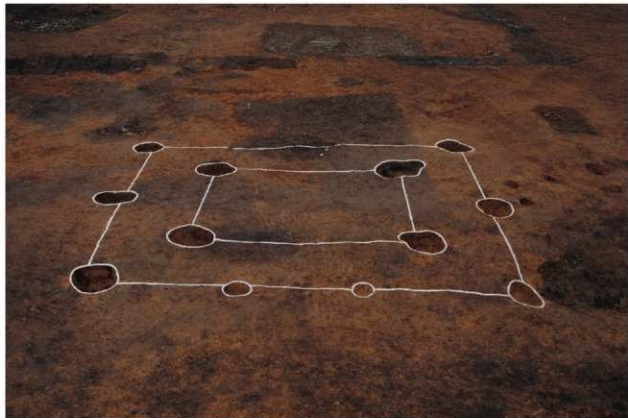
番匠・下道遺跡の紹介

ばんしょう しちみち
番匠・下道遺跡は、御新田遺跡の北東約200mに広がっています。この間小さな流れが横たわり、その流れを拠り所とするかのように、縄文時代早期後葉（7500年前）の炉穴や前期の竪穴住居跡がつくられていました。

さらに北東では、平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が築かれていました。集落としては小規模ですが、5棟が発見された掘立柱建物跡が南に開くコの字に並び立ち、知識階級の道具である硯を所持するなど、当時の文化や権力の母胎であった官側とのつながりが推測できます。また、ここの人々は高価な施釉陶器や豊富な壺甕類を所有しており、暮らしぶりは優雅であったようです。



1 横沼新田遺跡航空写真



2 横沼新田遺跡第6号掘立柱建物跡

横沼新田遺跡、北谷遺跡の紹介

よこぬましんでん
横沼新田遺跡は、番匠・下道遺跡と県道をはさんで隣接しています。発見された遺構は、縄文時代を除いて、同遺跡とも共通し、とくに平安時代については両遺跡がおなじ集落であることが判明しました。集落の最北には、平入りのお堂とみられる建物があり、番匠・下道遺跡のコの字建物群とともに、当時の村落景観を考える格好の題材といえます。

これに対し、浅い窪地形などを介してさらに北東に立地する北谷遺跡では、古墳時代初頭（1700年前）の大規模な方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼが見つかりました。調査区は、氷河期に形づくられた浅い低地に低台地が北に向かって突出する先端にあたることから、ここが墓域と定められて最初につくられた象徴的な大型墳墓である可能性があります。

序

埼玉県は、「人と自然にやさしい道づくり」を道路整備の基本理念とし、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を進めております。

国土交通省による一般国道468号首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の新設事業もその施策の一つとして位置づけられています。首都圏を放射状に貫く各高速自動車道だけでなく、各中核都市を横に連絡することにより、渋滞を解消し、高度化する産業活動の円滑化を図り、均衡ある発展につなげるための事業です。

川越・坂戸両市にかかる圏央道の路線内には、旧石器時代から始まる先人の生活跡が数箇所に残されていました。これら埋蔵文化財の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が関係諸機関と慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の処置を講じることとなりました。

発掘調査は、国土交通省関東地方整備局の委託をうけて当事業団が実施いたしました。本報告書はこれらの遺跡のうち、平成17年度から18年度にかけて調査した牛原、御新田、番匠・下道、横沼新田、北谷遺跡の報告であります。

調査では、縄文時代や平安時代の集落跡などから、たくさんの遺構や遺物が発見されました。とくに、牛原遺跡で発見された縄文時代後期の敷石住居跡からは、500kgを超える結晶片岩が出土し、比企郡小川町の石材産地からはるばる数十kmも運ばれてきたことが証明されました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所、川越市教育委員会、坂戸市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成20年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 刈 部 博

例言

1. 本書は、埼玉県川越市及び坂戸市に所在する牛原遺跡第1次、御新田遺跡第1次、番匠・下道遺跡第7・8次、横沼新田遺跡第1次、北谷遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。

御新田遺跡の成果については、すでに下記の誌上で一部が公表されている（黒坂・宅間2007）が、本書が正式報告となる。

2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

牛原遺跡（USHR）

（第1次・第2次）

埼玉県川越市下広谷字牛原377-4番地他
平成18年2月6日付け 教生文第2-97号
平成18年5月9日付け 教生文第2-12号

御新田遺跡（OSNDN）

（第1次・第2次）

埼玉県坂戸市横沼字御新田1256-6番地他
平成18年3月14日付け 教生文第2-105号
平成18年5月3日付け 教生文第2-16号

番匠・下道遺跡（BNSUSMMT7・8）

（第7次・第8次）

埼玉県坂戸市青木字番匠585-3番地他
埼玉県坂戸市青木字番匠568-2番地他
平成17年4月20日付け 教生文第2-4号
平成17年11月30日付け 教生文第2-81号

横沼新田遺跡（YKNMSNDN）

（第1次）

埼玉県坂戸市横沼139-2番地他
平成17年4月20日付け 教生文第2-6号

北谷遺跡（KTY）

（第1次）

埼玉県坂戸市横沼1270-3番地他
平成17年8月26日付け 教生文第2-53号

3. 発掘調査は、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事に伴う川越坂戸地区埋蔵文化財

の記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育庁生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3の組織により実施した。各遺跡の発掘調査日程と担当者は以下のとおりである。

牛原遺跡第1次調査（黒坂慎二）

平成18年2月1日から平成18年2月28日まで
牛原遺跡第2次調査（黒坂・篠田泰輔）

平成18年5月1日から平成18年8月31日まで
御新田遺跡第1次調査（黒坂）

平成18年3月1日から平成18年3月31日まで
御新田遺跡第2次調査（宅間清公）

平成18年5月1日から平成18年7月31日まで
番匠・下道遺跡第7次調査（吉田稔・田中広明・宅間・清水慎也）

平成17年4月8日から平成17年10月31日まで
番匠・下道遺跡第8次調査（坂野和信・中村倉司・村端和樹）

平成17年11月1日から平成18年3月31日まで
横沼新田遺跡第1次調査（中村・吉田・宅間・村端）

平成17年4月8日から平成17年8月31日まで
北谷遺跡第1次調査（中村・村端）

平成17年8月25日から平成17年9月30日まで
また、整理報告書作成事業は平成19年4月9日から平成20年3月24日まで黒坂が担当して実施し、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第353集として印刷・刊行した。

5. 発掘調査における遺跡基準点測量は、精進測量設計株式会社（牛原遺跡、横沼新田遺跡）・朝日航洋株式会社（御新田遺跡）・株式会社東京航業研究所（番匠・下道遺跡、北谷遺跡）に、遺跡航空写真撮影は中央航業株式会社（牛原遺跡、

- 御新田遺跡、番匠・下道遺跡第7次)・株式会社
シン技術コンサル(番匠・下道遺跡第8次、横
沼新田遺跡)に委託した。
6. 発掘調査時の写真撮影は、各担当者と岡田勇
介・澤口和正が行い、出土遺物の写真撮影は黒
坂と山北美穂が行った。
7. 出土品の整理と図版作成は黒坂が行い、赤熊
浩一・岩瀬譲・鈴木孝之・西井幸雄の協力を得、
兵ゆり子・山北の補助を受けた。
8. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村
支援部生涯学習文化財課、V-1-(1)
~(4)・VI-1を西井、V-1-(5)を大屋道
則、IX-1を西井・黒坂、その他を黒坂が行っ
た。
9. 本書の編集は、黒坂があたった。
10. 本書にかかる資料は、平成20年度以降、埼玉
県教育委員会が管理・保管する。
11. 発掘調査から整理・報告書作成のあいだ、下
記の機関・方々からご教示・ご協力を賜りまし
た。記して感謝いたします(敬称略)。
- 川越市教育委員会 坂戸市教育委員会
鶴ヶ島市教育委員会 日高市教育委員会
秋田かな子 阿部友寿 天野賢一 内田正英
大澤健 岡田賢治 小川裕久 加藤恭明
倉持雅史 小林敏男 笹森健一 清水理史
菅谷通保 鈴木加津子 鈴木徳雄 鈴木正博
高橋好信 田中和之 田中信 中平薫 西川制
早川修司 平野寛之 松岡喜久次 松田光太郎
松本尚也 宮瀧交二 柳楽理 山口逸弘

凡例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系による平面直角座標第IX系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を示す。
2. 調査で使用したグリッド網は、平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体を覆う方眼を組んだ。ただし、その原点（A-1杭）は各遺跡個別に設定しており、その座標値は以下のとおりである（m）。
牛原遺跡…X=-4510.00, Y=-36390.00
御新田遺跡…X=-4200.00, Y=-35810.00
番匠・下道遺跡、横沼新田遺跡
…X=-3710.00, Y=-35520.00
北谷遺跡…X=-3440.00, Y=-35040.00
調査区中央付近の座標値（m）と経緯度は以下のとおりである。
牛原遺跡…I-11グリッド北西杭
X=-4590.00, Y=-36290.00
北緯35°57'28.67", 東経139°25'51.66"
御新田遺跡…G-7グリッド北西杭
X=-4260.00, Y=-35750.00
北緯35°57'39.41", 東経139°26'13.16"
番匠・下道遺跡…G-25グリッド北西杭
X=-3950.00, Y=-35460.00
北緯35°57'49.51", 東経139°26'24.68"
横沼新田遺跡…L-14グリッド北西杭
X=-3840.00, Y=-35410.00
北緯35°57'53.08", 東経139°26'26.66"
北谷遺跡…C-4グリッド北西杭
X=-3470.00, Y=-35020.00
北緯35°58'05.13", 東経139°26'42.00"
3. 各グリッドの名称は、北西隅の杭を基点とし、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばR-8グリッド等と呼称した。
4. 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。
S J…竪穴住居跡 S B…掘立柱建物跡
S A…柵列 S C…集石土壇 S K…土壇
S P…穴 S D…溝・堀跡 S E…井戸跡
Pit・P…小穴・柱穴
5. 本書における挿図の縮尺は、基本的に以下のとおりであるが、遺跡全体図や概念図などの例外は、その都度示した。
溝跡平面図…1/200
方形周溝墓平面図…1/140
その他の遺構平面図・断面図…1/60
旧石器実測図…4/5
縄文土器実測図…1/4・1/5
縄文土器展開図…1/10
縄文土器拓影図…1/2・1/3
縄文石器実測図…2/3・1/3・1/5
平安時代以降の土器・陶磁器実測図…1/4
鉄製品実測図…1/4
土製品実測図・銭貨拓影図…1/2
6. 平安時代土器類実測図では、須恵器の断面を黒塗りとし、白抜き土師器と区別した。
また、遺物観察表中の胎土混入粒子・焼成状態は、以下の基準・種類で表記している。
胎土 雲…雲母 片…片岩 角…角閃石
長…長石 石…石英 砂…砂粒子
赤…赤色粒子 白…白色粒子
黒…黒色粒子 針…白色針状物質
焼成 良好・普通・不良の三段階
さらに、残存率は、図示した器高に対する大まかな数値を%で示した。
7. 測量・遺物図内の網部・ドット指示は以下のとおりである。
黒丸…遺物・集石土壇中の礫
黒四角…礫・石器

左下がり斜線…土壤による地山

砂目…焼土・施釉

その他、個別の分割・強調についてはその都度凡例を示した。

8. 断面図中の土層番号は、ローマ数字が遺跡全体に通じる基本土層、算用数字が遺構個別の観察結果を表す。
9. 本文・挿図・表中に用いた度量衡の記載基準は以下のとおりである。

標高・遺構等計測値…m/kg単位

遺物計測値…cm/g単位

10. 文中の註は、各節末にまとめた。
11. 文中の引用文献は、(著者 発行年)の順で表現し、その他の参考文献とともに巻末で一覧を掲載した。
12. 遺跡位置図および調査区位置図では、国土地理院発行の1/25000地形図と、川越市・坂戸市発行の1/2500都市計画図を使用した。

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 調査の概要	1	(5)黒曜石の産地分析	92
1. 発掘調査に至るまでの経過	1	2. 縄文時代の遺構と遺物	93
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1)竪穴住居跡	93
(1)牛原遺跡の発掘調査	2	(2)集石土壌	99
(2)御新田遺跡の発掘調査	2	(3)落とし穴状遺構	103
(3)番匠・下道遺跡の発掘調査	2	(4)土壌	104
(4)横沼新田遺跡の発掘調査	3	(5)炬穴	109
(5)北谷遺跡の発掘調査	3	(6)遺構外	110
(6)整理・報告書作成	3	3. 中近世の遺構と遺物	114
3. 発掘調査・報告書作成の組織	4	(1)掘立柱建物跡	114
II 遺跡の立地と環境	5	(2)溝跡	114
III 遺跡の概要	15	(3)土壌	117
IV 牛原遺跡の遺構と遺物	27	(4)柱穴跡	122
1. 縄文時代の遺構と遺物	27	VI 番匠・下道遺跡の遺構と遺物	123
(1)竪穴住居跡	27	1. 旧石器時代の遺構と遺物	123
(2)集石土壌	43	(1)石器集中	123
(3)落とし穴状遺構	50	(2)集中外出土旧石器	123
(4)土壌	55	2. 縄文時代の遺構と遺物	125
(5)遺構外	67	(1)竪穴住居跡	125
2. 中近世の遺構と遺物	73	(2)土壌	127
(1)道路跡	73	(3)炬穴	131
(2)溝跡	73	(4)遺構外	131
(3)柱穴跡	73	3. 平安時代の遺構と遺物	136
V 御新田遺跡の遺構と遺物	75	(1)竪穴住居跡	136
1. 旧石器時代の遺構と遺物	75	(2)掘立柱建物跡	154
(1)概要	75	4. 中世以降の遺構と遺物	160
(2)石器集中	76	(1)溝跡	160
(3)礫群	80	(2)土壌	175
(4)出土石器	81	(3)井戸跡	205

(4)柱穴跡	212	2. 古墳時代の遺構と遺物	272
VII 横沼新田遺跡の遺構と遺物	213	(1)方形周溝墓	272
1. 平安時代の遺構と遺物	213	(2)土墳	273
(1)竪穴住居跡	213	3. 近世の遺構と遺物	274
(2)掘立柱建物跡	221	(1)溝跡	274
2. 中世以降の遺構と遺物	227	(2)土墳	274
(1)掘立柱建物跡	227	(3)柱穴跡	278
(2)柵列	239	IX 調査のまとめ	279
(3)溝跡	239	1. 旧石器時代	279
(4)土墳	248	2. 縄文時代	280
(5)井戸跡	264	3. 古墳時代	286
(6)柱穴跡	266	4. 古代	287
VIII 北谷遺跡の遺構と遺物	267	5. 中近世	289
1. 縄文時代の遺構と遺物	267	引用文献	291
(1)土墳	267	写真図版	
(2)炉穴	267	抄録	
(3)遺構外	271		

挿 図 目 次

〔概要・概観〕	
第 1 図	埼玉県の地形と報告遺跡……………5
第 2 図	周辺の遺跡……………7
第 3 図	牛原遺跡、御新田遺跡と周辺の地形 15
第 4 図	牛原遺跡全体測量図……………17
第 5 図	御新田遺跡全体測量図……………18
第 6 図	番匠・下道遺跡、横沼新田遺跡、北谷遺跡と周辺の地形……………19
第 7 図	番匠・下道遺跡全体測量図 (1) ……20
第 8 図	番匠・下道遺跡全体測量図 (2) ……21
第 9 図	横沼新田遺跡全体測量図……………23
第 10 図	北谷遺跡全体測量図……………24
〔牛原遺跡〕	
第 11 図	第 1 号・第 2 号住居跡……………28
第 12 図	第 1 号 (1)・第 2 号住居跡出土遺物……………29
第 13 図	第 1 号住居跡出土遺物 (2)……………30
第 14 図	第 3 号住居跡……………31
第 15 図	第 3 号住居跡出土遺物……………31
第 16 図	第 4 号住居跡……………33
第 17 図	第 4 号住居跡変遷図……………34
第 18 図	第 4 号住居跡敷石および出土状況……………38
第 19 図	第 4 号住居跡出土遺物 (1)……………40
第 20 図	第 4 号 (2)・第 5 号住居跡出土遺物……………41
第 21 図	第 5 号・第 6 号・第 7 号住居跡……………42
第 22 図	集石土壌 (1)……………44
第 23 図	集石土壌 (2)……………48
第 24 図	集石土壌・落し穴状遺構出土遺物……………50
第 25 図	落し穴状遺構 (1)……………52
第 26 図	落し穴状遺構 (2)……………54
第 27 図	縄文時代の土壌 (1)……………56
第 28 図	縄文時代の土壌 (2)……………59
第 29 図	縄文時代の土壌 (3)……………61
第 30 図	縄文時代の土壌 (4)……………63
第 31 図	縄文時代の土壌出土遺物 (1)……………63
第 32 図	縄文時代の土壌出土遺物 (2)……………64
第 33 図	縄文時代の土壌出土遺物 (3)……………65
第 34 図	遺構外出土遺物 (1)……………68
第 35 図	遺構外出土遺物 (2)……………69
第 36 図	遺構外出土遺物 (3)……………70
第 37 図	道路跡・溝跡……………74
〔御新田遺跡〕	
第 38 図	旧石器調査区……………75
第 39 図	器種別分布図……………77
第 40 図	石材別分布図……………78
第 41 図	礫分布図……………79
第 42 図	出土旧石器 (1)……………80
第 43 図	出土旧石器 (2)……………81
第 44 図	出土旧石器 (3)……………82
第 45 図	出土旧石器 (4)……………83
第 46 図	出土旧石器 (5)……………84
第 47 図	第 1 号住居跡……………93
第 48 図	第 1 号住居跡出土遺物……………94
第 49 図	第 2 号住居跡……………96
第 50 図	第 2 号住居跡出土遺物……………97
第 51 図	第 3 号住居跡……………98
第 52 図	第 3 号住居跡出土遺物……………99
第 53 図	集石土壌……………101
第 54 図	集石・土壌・炉穴出土遺物……………102
第 55 図	落し穴状遺構……………104
第 56 図	縄文時代の土壌 (1)……………106
第 57 図	縄文時代の土壌 (2)……………108
第 58 図	炉穴……………109
第 59 図	遺構外出土遺物 (1)……………112
第 60 図	遺構外出土遺物 (2)……………113
第 61 図	第 1 号掘立柱建物跡……………115
第 62 図	溝跡……………116

第63図	近世の土壌(1)	118
第64図	近世の土壌(2)	120
第65図	近世の土壌(3)	122

〔番匠・下道遺跡〕

第66図	旧石器調査区および出土石器	123
第67図	集中外出土石器	124
第68図	第1号住居跡	126
第69図	第1号住居跡出土遺物	127
第70図	縄文時代の土壌	128
第71図	縄文時代の土壌出土遺物	129
第72図	炉穴	130
第73図	遺構外出土遺物(1)	132
第74図	遺構外出土遺物(2)	133
第75図	遺構外出土遺物(3)	134
第76図	第2号住居跡	137
第77図	第2号・第3号住居跡出土遺物	138
第78図	第3号住居跡	138
第79図	第4号住居跡	139
第80図	第4号住居跡出土遺物	140
第81図	第5号住居跡	141
第82図	第5号住居跡出土遺物(1)	142
第83図	第5号住居跡出土遺物(2)	143
第84図	第6号・第10号住居跡	145
第85図	第6号・第10号住居跡出土遺物	146
第86図	第7号住居跡	147
第87図	第7号住居跡出土遺物	148
第88図	第8号住居跡	150
第89図	第8号住居跡出土遺物	151
第90図	第9号住居跡	152
第91図	第9号・第11号住居跡・第1号掘立柱建物跡・単独柱穴出土遺物	153
第92図	第11号住居跡	154
第93図	第1号掘立柱建物跡	155
第94図	第2号掘立柱建物跡	156
第95図	第3号掘立柱建物跡	157
第96図	第4号掘立柱建物跡	158

第97図	第5号掘立柱建物跡	159
第98図	溝跡(1)	161
第99図	溝跡(2)	162
第100図	溝跡(3)	163
第101図	溝跡(4)	164
第102図	溝跡(5)	166
第103図	溝跡(6)	168
第104図	溝跡(7)	170
第105図	溝跡(8)	172
第106図	溝跡(9)	174
第107図	溝跡出土遺物	175
第108図	中世以降の土壌(1)	176
第109図	中世以降の土壌(2)	178
第110図	中世以降の土壌(3)	180
第111図	中世以降の土壌(4)	182
第112図	中世以降の土壌(5)	184
第113図	中世以降の土壌(6)	186
第114図	中世以降の土壌(7)	188
第115図	中世以降の土壌(8)	190
第116図	中世以降の土壌(9)	191
第117図	中世以降の土壌(10)	192
第118図	中世以降の土壌(11)	193
第119図	中世以降の土壌(12)	195
第120図	中世以降の土壌(13)	196
第121図	中世以降の土壌(14)	198
第122図	中世以降の土壌(15)	200
第123図	中世以降の土壌(16)	202
第124図	中世以降の土壌出土遺物(1)	203
第125図	中世以降の土壌(2)・井戸跡出土遺物	204
第126図	井戸跡(1)	207
第127図	井戸跡(2)	208
第128図	井戸跡(3)	209
第129図	井戸跡(4)	210

〔横沼新田遺跡〕

第130図	第1号住居跡	213
-------	--------	-----

第131図	第1号住居跡出土遺物	214
第132図	第2号・第3号住居跡	215
第133図	第2号住居跡出土遺物	216
第134図	第3号・第5号住居跡出土遺物	217
第135図	第4号・第5号住居跡	218
第136図	第6号・第7号住居跡	219
第137図	第1号掘立柱建物跡	220
第138図	第2号・第3号掘立柱建物跡	222
第139図	第4号掘立柱建物跡	223
第140図	第4号掘立柱建物跡出土遺物	224
第141図	第5号掘立柱建物跡	224
第142図	第6号掘立柱建物跡	225
第143図	第7号掘立柱建物跡	226
第144図	第8号掘立柱建物跡	227
第145図	第9号・第10号掘立柱建物跡	228
第146図	第11号掘立柱建物跡	229
第147図	第12号・第14号掘立柱建物跡	230
第148図	第13号掘立柱建物跡	231
第149図	第15号掘立柱建物跡	232
第150図	第16号掘立柱建物跡	233
第151図	第17号・第18号掘立柱建物跡	234
第152図	第19号掘立柱建物跡	235
第153図	第20号・第21号掘立柱建物跡	237
第154図	第22号・第23号掘立柱建物跡	238
第155図	柵列	239
第156図	溝跡(1)	241

第157図	溝跡(2)	242
第158図	溝跡(3)	243
第159図	溝跡(4)	244
第160図	溝跡(5)	245
第161図	溝跡(6)	246
第162図	中世以降の土壌(1)	249
第163図	中世以降の土壌(2)	251
第164図	中世以降の土壌(3)	252
第165図	中世以降の土壌(4)	254
第166図	中世以降の土壌(5)	258
第167図	中世以降の土壌(6)	260
第168図	中世以降の土壌(7)	262
第169図	井戸跡(1)	265
第170図	井戸跡(2)	266

〔北谷遺跡〕

第171図	土壌・炉穴	268
第172図	炉穴・遺構外出土遺物	270
第173図	方形周溝墓・古墳時代の土壌	272
第174図	溝跡	275
第175図	近世の土壌(1)	276
第176図	近世の土壌(2)	278

〔まとめ〕

第177図	牛原遺跡第4号住居跡敷石規格	283
-------	----------------	-----

表 目 次

〔概要・概観〕

- 第1表 遺構番号新旧対照表(1) ……25
第2表 遺構番号新旧対照表(2) ……26

〔牛原遺跡〕

- 第3表 第4号住居跡敷石計測表 ……39
第4表 牛原遺跡出土石器計測表 ……72

〔御新田遺跡〕

- 第5表 御新田遺跡出土旧石器計測表(1) ……85
第6表 御新田遺跡出土旧石器計測表(2) ……86
第7表 御新田遺跡出土礫計測表(1) ……87
第8表 御新田遺跡出土礫計測表(2) ……88
第9表 御新田遺跡出土礫計測表(3) ……89
第10表 御新田遺跡出土礫計測表(4) ……90
第11表 御新田遺跡出土礫計測表(5) ……91
第12表 御新田遺跡出土黒曜石産地推定表 ……92
第13表 御新田遺跡出土石器計測表 ……111

〔番匠・下道遺跡〕

- 第14表 番匠・下道遺跡出土旧石器計測表 ……124
第15表 番匠・下道遺跡出土石器計測表 ……135
第16表 第2号・第3号住居跡出土遺物観察表
……………138
第17表 第4号住居跡出土遺物観察表 ……140
第18表 第5号住居跡出土遺物観察表 ……144
第19表 第6号・第10号住居跡出土遺物観察表
……………146
第20表 第7号住居跡出土遺物観察表 ……149
第21表 第8号住居跡出土遺物観察表 ……150
第22表 第9号・第11号住居跡・第1号掘立柱建
物跡・単独柱穴出土遺物観察表 ……153

〔横沼新田遺跡〕

- 第23表 第1号住居跡出土遺物観察表 ……214
第24表 第2号住居跡出土遺物観察表 ……216
第25表 第3号・第5号住居跡出土遺物観察表
……………217

	6	第10号土墳	図版18	1	第3号住居跡
	7	第11号土墳		2	第1号住居跡遺物出土状況(1)
	8	第12号土墳		3	第1号住居跡遺物出土状況(2)
図版11	1	第16号土墳		4	第3号住居跡炉跡
	2	第23号土墳		5	第3号住居跡遺物出土状況
	3	第27号土墳	図版19	1	集石土壇群確認状況
	4	第30号土墳		2	第1号集石土壇出土状況
	5	第34号土壇遺物出土状況		3	第1号集石土壇断面
図版12	1	第34号土壇遺物出土状況		4	第7号集石土壇礫・遺物出土状況
	2	第34号土壇完掘		5	第1号土壇
	3	第35号土墳	図版20	1	第2号土壇
	4	第36号土墳		2	第3号土壇
	5	第37号土墳		3	第4号土壇断面
	6	第39号土墳		4	第5号土壇
	7	第43号土墳		5	第3号土壇断面
	8	第44号土墳	図版21	1	第8号・第9号土壇
図版13	1	第47号土墳		2	第10号土壇
	2	第50号土墳		3	第11号土壇
	3	第51号土墳		4	第17号土壇遺物出土状況
	4	第52号土墳		5	第18号土壇
	5	第54号土墳		6	第18号土壇遺物出土状況
	6	第55号土墳		7	第19号土壇
	7	第57号土墳		8	第20号土壇
	8	第60号土壇	図版22	1	第25号土壇遺物出土状況(1)
図版14	1	道路跡		2	第24号土壇
	2	第1号溝跡		3	第25号土壇
				4	第25号土壇遺物出土状況(2)
				5	第25号土壇遺物出土状況(3)
		[御新田遺跡]			
図版15	1	御新田遺跡航空写真	図版23	1	第2号炉穴
	2	台地東部遺構群		2	第1号掘立柱建物跡(1)
図版16	1	旧石器出土状況(1)	図版24	1	第1号掘立柱建物跡(2)
	2	旧石器調査区		2	第5号～第7号溝跡
	3	旧石器出土状況(2)	図版25	1	第27号土壇
	4	旧石器出土状況(3)		2	第49号土壇
	5	搔器出土状況		3	第56号土壇
図版17	1	第1号住居跡		4	第59号土壇
	2	第2号住居跡		5	近世柱穴群

- | | | | |
|------|----------------------|------|------------------------|
| 図版78 | 1 御新田遺跡集石土壇・土壇出土土器 | 図版86 | 1 牛原遺跡第4号住居跡出土土器 |
| | 2 御新田遺跡土壇・炉穴出土土器 | | 2 牛原遺跡第4号住居跡出土土器 |
| 図版79 | 1 御新田遺跡遺構外出土土器 | 図版87 | 1 牛原遺跡第4号住居跡出土土器 |
| | 2 御新田遺跡遺構外出土土器 | | 2 牛原遺跡集石土壇・土壇出土土器 |
| 図版80 | 1 御新田遺跡遺構外出土土器 | 図版88 | 1 牛原遺跡遺構外出土土器 |
| | 2 御新田遺跡遺構外出土土器 | | 2 御新田遺跡出土日石器 |
| 図版81 | 1 番匠・下道遺跡第1号住居跡出土土器 | 図版89 | 1 御新田遺跡出土日石器 |
| | 2 番匠・下道遺跡土壇出土土器 | | 2 御新田遺跡出土日石器 |
| 図版82 | 1 番匠・下道遺跡遺構外出土土器 | 図版90 | 1 御新田遺跡、番匠・下道遺跡出土石鏃 |
| | 2 番匠・下道遺跡遺構外出土土器 | | 2 御新田遺跡遺構出土土器 |
| 図版83 | 1 番匠・下道遺跡遺構外出土土器 | 図版91 | 1 御新田遺跡遺構外出土土器 |
| | 2 番匠・下道遺跡遺構外出土土器 | | 2 番匠・下道遺跡出土日石器 |
| 図版84 | 1 北谷遺跡炉穴・遺構外出土土器 | 図版92 | 1 番匠・下道遺跡、北谷遺跡出土土器 |
| | 2 北谷遺跡遺構外出土土器 | | 2 番匠・下道遺跡薄跡・土壇・井戸跡出土磁石 |
| 図版85 | 1 牛原遺跡出土石鏃 | | |
| | 2 牛原遺跡第1号・第4号住居跡出土土器 | | |

I 調査の概要

1. 発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では、平成19年度からの新5か年計画「ゆとりとチャンスの埼玉プラン」に「渋滞のない円滑な自動車交通の実現」という基本目標を掲げている。こうした中で、国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所が主体となって建設を進める首都圏中央連絡自動車道は県内を東西に結ぶ大動脈としてその完成が特望されている。

さて、本書で報告される牛原遺跡 (No19-341) 等5遺跡が所在する地区は、平成12年11月30日付け大國調二第66号により「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会がなされた。これに対し、県教育委員会では平成13年度に北谷遺跡 (No27-038)、16年度に番匠・下道遺跡 (No27-064)、横沼新田遺跡 (No27-065)、17年度には新たに牛原遺跡、御新田遺跡 (No27-151) の試掘調査を実施し、所在が明らかとなった (平成13年12月6日付け教文第1218号、平成17年3月1日付け教文第1920号、平成17年10月27日付け教文第1814号、平成17年12月28日付け教文第2197号にて回答)。

これらの遺跡の埋蔵文化財の取扱いについては、大宮国道事務所と県教育委員会との間で協議を重ね、平成17・18年度に発掘調査を実施することになった。発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとなった。

なお、発掘調査は次のとおり実施した。
牛原遺跡：平成18年2月1日～平成18年2月28日、平成18年5月1日～平成18年8月31日
御新田遺跡：平成18年3月1日～平成18年3月31日、平成18年5月1日～平成18年7月31日
番匠・下道遺跡：平成17年4月8日～平成17年10月31日、平成17年11月1日～平成18年3月31日
横沼新田遺跡：平成17年4月8日～平成17年8

月31日

北谷遺跡：平成17年8月25日～平成17年9月30日

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は関東地方整備局大宮国道事務所長から以下のとおり提出された。これらに対する保護法上必要な通告は括弧内に記したとおりである。

牛原遺跡：平成18年1月20日付け大國工第247号 (平成18年2月6日付け教文第3-904号)

御新田遺跡：平成18年1月20日付け大國工第247号 (平成18年2月6日付け教文第3-993号)

番匠・下道遺跡：平成17年3月30日付け大國工第183号 (平成17年3月31日付け教文第3-1058号)

横沼新田遺跡：平成17年3月30日付け大國工第184号 (平成17年3月31日付け教文第3-1059号)

北谷遺跡：平成17年3月30日付け大國工第188号 (平成17年3月31日付け教文第3-1063号)

文化財保護法第92条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査の届出に対する指示通知番号は以下のとおりである。

牛原遺跡：平成18年2月6日付け教文第2-97号、平成18年5月9日付け教文第2-12号

御新田遺跡：平成18年3月14日付け教文第2-105号、平成18年5月3日付け教文第2-16号

番匠・下道遺跡：平成17年4月20日付け教文第2-4号、平成17年11月30日付け教文第2-81号

横沼新田遺跡：平成17年4月20日付け教文第2-6号

北谷遺跡：平成17年8月26日付け教文第2-53号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 牛原遺跡の発掘調査

川越市北東部に所在する牛原遺跡は、オオタカの営業地に近く、繁殖期への配慮から、2ヶ月の中断をはさんだ二次にわけて調査を行った。

平成18年2月1日から2月28日までは、表土の掘削・事務所設営・基準杭の設置など、本格的な調査の準備を行った時期である。これを第1次調査とした。

第1次調査での表土掘削は、調査区の北部より開始したが、オオタカへの悪影響を避けるために試掘が実施できなかった北西谷部では、遺構・遺物ともにきわめて希薄であることが判明した。そのため、この範囲はトレンチ調査にとどめ、全面掘削を行っていない。

第2次調査は平成18年5月1日より着手し、8月31日まで実施した。作業は、器材搬入・遺構確認より開始し、調査区の北東から縄文時代を主体とする遺構群の精査を実施した。確認できた遺構を掘り下げ、途中、堆積土層の断面図や遺物の出土状況図などを作成しつつ、これを完掘し、写真を撮影した後、平面図を作成した。

発見遺構の精査は7月中におおよそその目処がつき、8月に遺跡の航空写真を撮影した後、縄文時代敷石住居跡の補足調査、中期遺物集中区の精査、旧石器時代遺構・遺物の確認調査などを行い、下旬に器材を撤収した上で事務所を撤去し、調査を終了した。

この間、7月中旬から8月上旬にかけて、近隣住民や地元小中学生を対象とした参観形式の見学会を実施し、調査の成果を公開した。

(2) 御新田遺跡の発掘調査

御新田遺跡は、坂戸市の東部に所在するが、川越市の牛原遺跡と至近の距離にあり、同じように3月中旬から4月中にかけてはオオタカへの配慮が必要であった。そのため、牛原遺跡第1次調査

に続き、平成18年度の本格的な調査に備えた表土掘削・事務所設営・基準杭の設置などの準備を平成18年3月1日から3月31日の日程で行った。これが第1次調査である。

第2次調査は平成18年5月1日より着手し、7月31日まで実施した。作業は、遺構確認より開始し、調査区の北東から縄文時代と近世を主体とする遺構の精査を実施した。遺構精査の手順は、牛原遺跡と同様である。途中、工事用道路を施設するために調査区の北側を先行して引き渡すこととなり、7月上旬に引き渡し部分の遺跡航空写真を撮影した。

引き続き、遺構の精査は7月中も行き、その間旧石器の石器集中区や礫群の発見と精査などを経て下旬に調査を完了、牛原遺跡とともに再度の航空写真撮影を行い、器材及び事務所の撤去をもって事業を終了した。

(3) 番匠・下道遺跡の発掘調査

番匠・下道遺跡第7次調査は、遺跡の北半を対象に平成17年4月8日から10月31日まで行った。4月の表土掘削開始とともに諸準備を進め、事務所設営・基準杭の設置を経て、4月下旬より本格的な調査に着手した。

平安時代と中近世を主体とする遺跡に対しては、調査区の北部から精査を進めた。その手順は、牛原遺跡と同様である。途中、6月下旬には橋脚工事のため県道上井草坂戸線に接する調査区の北端を先行して引き渡すこととなり、航空写真撮影を行った。

遺構精査は7月以降も引き続き進め、南半の遺構群を完掘した上で、10月中旬に再度の航空写真撮影を行い、第7次の調査を完了した。

これに対し、第8次調査は、第7次調査区の南に隣接する圏央道路線を対象に、平成17年11月1日から平成18年3月31日までの日程で行った。

11・12月に表土掘削・基準杭の設置・器材搬入などの準備を進め、1月より縄文Ⅱ時代や近世を主体とする遺構群の精査に着手した。

第8次調査区は、井戸跡が多く、最南部には縄文時代の埋没谷も広がっており、それらの補足調査を十分に行うため、遺跡の航空写真は2月中旬に撮影した。その後、井戸跡の下層部や縄文時代埋没層の調査を実施し、3月下旬には、これらの調査を完了し、御新田遺跡の調査に備え事務所を移設、器材を移動して事業を完了した。

(4) 横沼新田遺跡の発掘調査

横沼新田遺跡の第1次調査は、平成17年4月8日から8月31日まで行った。調査の準備は、県道上井草坂戸線を挟んで南に隣接する番匠・下道遺跡とともにに行った。4月の表土掘削開始とともに諸準備を進め、事務所設営・基準杭の設置を経て、4月下旬より本格的な調査に着手した。

圏央道が県道上井草坂戸線と交差するための橋脚は、番匠側だけでなく、横沼側にも建設されるため、平安時代と中近世を主体とする遺跡に対しては、調査区の南部から精査を開始した。その手順は、牛原遺跡と同様である。

6月下旬に番匠・下道遺跡とともに航空写真撮影を行い調査区の南端を引き渡した後、北方に向かい精査を進め、8月にこれを終え、再度、航空写真を撮影した。そして、井戸跡などの補足調査を完了した下旬には器材を移転、あわせて休憩・器材棟などを撤去し、事業を完了した。

(5) 北谷遺跡の発掘調査

北谷遺跡の第1次調査は、平成17年8月25日から9月30日まで行った。事務所の設営、重機による表土の掘削、基準杭の設置、器材の搬入などの準備を経て、9月上旬に縄文時代を主体とする遺跡の調査に着手した。遺構精査の手順は、牛原遺跡と同様である。

発見できた遺構は、炉穴など、小規模なものが多かったため、精査は順調に進み、8月下旬にはこれを完了、器材撤収から事務所撤去を経て8月末に事業を完了した。

(6) 整理・報告書作成

整理・報告書作成作業は、平成19年4月9日より平成20年3月24日まで実施した。

作業はまず、出土遺物の水洗・註記を行った後、接合・復元を実施した。さらに、土器や石器を分類した上で報告書への掲載資料を抽出、遺物の種類や残存率などにより、実測図や拓影図を作成した。土器類の実測では、機械実測による素図をもとに完成図を作成し、製図ペンで墨入れ（トレース）し、遺物挿入図の版下とした。

これに対し、遺構図面は、第二原因を作成した上で、数値的・論理的な検証を加えて加除・補正などを行い、画像データとしてコンピュータに移した後、指示記号や諸情報を追加して遺構挿入図の版下とした。

このほか、調査時のデータや遺物の属性は、コンピュータに入力した上で一覧化した。また、抽出した資料を写真撮影し、発掘調査時の遺構写真とともに写真図版の版下とした。

以上の作業に基づき、説明原稿や調査のまとめを執筆し、各種挿入図、図版とともに割付を作成、印刷業者を決定後、入稿し、3回の校正を経て3月下旬に報告書を発行した。

また、校正と並行して、発掘調査や整理作業に関わる図面・写真・遺物・データ類を整理し、報告書との対照を可能にした上で収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成17年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼管理部長	保 永 清 光	調査部長	今 泉 泰 之
管理部		調査部副部長	坂 野 和 信
管理部副部長	村 田 健 二	主席調査員（調査第一担当）	昼 間 孝 志
主 席	高 橋 義 和	統括調査員	中 村 倉 司
		統括調査員	黒 坂 禎 二
		統括調査員	吉 田 稔
		統括調査員	田 中 広 明
		調 査 員	宅 間 清 公
		調 査 員	清 水 慎 也
		調 査 員	村 端 和 樹

平成18年度（発掘調査）

理事長	福田 陽 充	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	今 泉 泰 之
総務部		調査部副部長	小 野 美代子
総務部副部長	昼 間 孝 志	主幹兼調査第一課長	金 子 直 行
総務課長	高 橋 義 和	主 査	黒 坂 禎 二
		主 事	宅 間 清 公
		主 事	篠 田 泰 輔

平成19年度（報告書作成）

理事長	刈 部 博	調査部	
常務理事兼総務部長	岸 本 洋 一	調査部長	村 田 健 二
総務部		調査部副部長	磯 崎 一
総務部副部長	昼 間 孝 志	整理第一課長	宮 井 英 一
総務課長	松 盛 孝	主 査	黒 坂 禎 二

II 遺跡の立地と環境

地形的環境

今回報告する5遺跡は、東武東上線若葉駅の東北東2kmから4kmの位置に点在している。区画整理が行き届き、商業施設や高層住宅が林立する若葉台地区に隣接しているながら、畑や林、そして金魚の養殖池や養蜂施設が点在する農村的景観を色濃く残す地域である。

遺跡群が立地する、いわゆる入間台地は、ともに外秩父山地に源を発する越辺川と入間川に挟まれた台地をさしている。北は凝灰岩質の比企丘陵を望み、南は高位の武蔵野台地と対峙しており、台地を画する両川が目指す北東には、都幾川や吉野川をはじめとする諸河川が形成した荒川低地帯が広がっている。

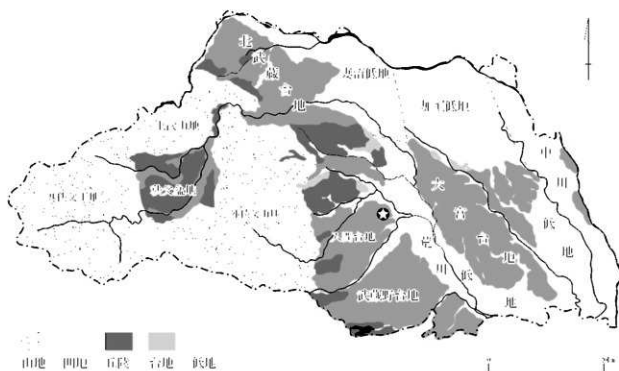
この台地は、南に広がる武蔵野台地と対になる扇状の地形を残している。これは、太古に外秩父山地を越えた古荒川が扇形を形づくり、その後、

入間川や高麗川などが現地形の元となる基盤を生成したものである。

この経緯を反映するように、地傾斜は、扇頂部にあたる日高・飯能地区から北東の坂戸・鶴ヶ島地区に向かって緩やかに移行している。そして、扇端ほどに傾きも穏やかとなり、一部でわずかな低台地を残しつつ、5m前後の崖線をもって荒川低地帯へと消える。

台地内にはいくつもの河川が流下しているが、すべてこの扇状地形に沿った方向性を示している。その流域相は大きく三種に分けられる。

一つは台地を画する両河川と並ぶほどの氾濫原を残しつつ越辺川に注ぐ高麗川である。外秩父山塊の残丘である毛呂山丘陵を蝕むような勢いによるものか、高麗・越辺両川に挟まれた通称毛呂山台地は、起伏が多く、複雑な地形が展開している。また、台地を成する地層も粘質が強い。



第1図 埼玉県の地形と報告遺跡

もう一つの残丘である加治丘陵周辺に複数の源流をもち、これらを統合しつつ台地を開析するのが小群川である。その下流では、いくつかの開析小谷を取り込み、小規模な沖積地を従えつつ、荒川低地帯に至る。

左岸にあたる鶴ヶ島市松ヶ丘付近では台地との比高差が10m近くにおよぶ箇所もあり、同川がもたらした強い浸食作用を彷彿させる。逆に、右岸にあたり、入間川とに挟まれた通称飯能台地は、低位の台地が北西に向かい長くのびている。

さらに、毛呂山・飯能両台地に挟まれた一帯は坂戸台地と称されている。下流に向かい先細る一方の毛呂山・飯能台地に対し、坂戸台地はさらに小規模な河川を内包している。その最も有力な水源は、鶴ヶ島市南部域に散在する扇端湧水であり、南で大谷川、北で飯盛川が比較的大きな流路を形成している。

坂戸台地内の河川延長は極端に短く、沖積地も発達していない。また、氾濫による周辺への影響も少なく、付近は平坦で水はけのよい大地が広がっている。今回報告遺跡のうち西部の4遺跡は、さらに大谷・飯盛両川の間刻まれた二階川という小川と、狭い開析谷を抛り所としている。

二階川は、若葉台地区に発し、幾度かの蛇行を経つつ、坂戸市横沼地区で越辺川の低地に接続する。上流にあたる牛原遺跡付近では、巷の水路と

見分けづらいほどの幅であるものの、隣接する戸宮前遺跡の堀跡を調査した際には、これに向かい浪々と湧き出る伏流水に手を焼く程であった。

その水位は高く、台地中でありながら、夏期では地表下2mに達する前に水が湧き、鉄分が沈着した帯水変質層に行き着く。しかし、その基層土はあくまでロームである。

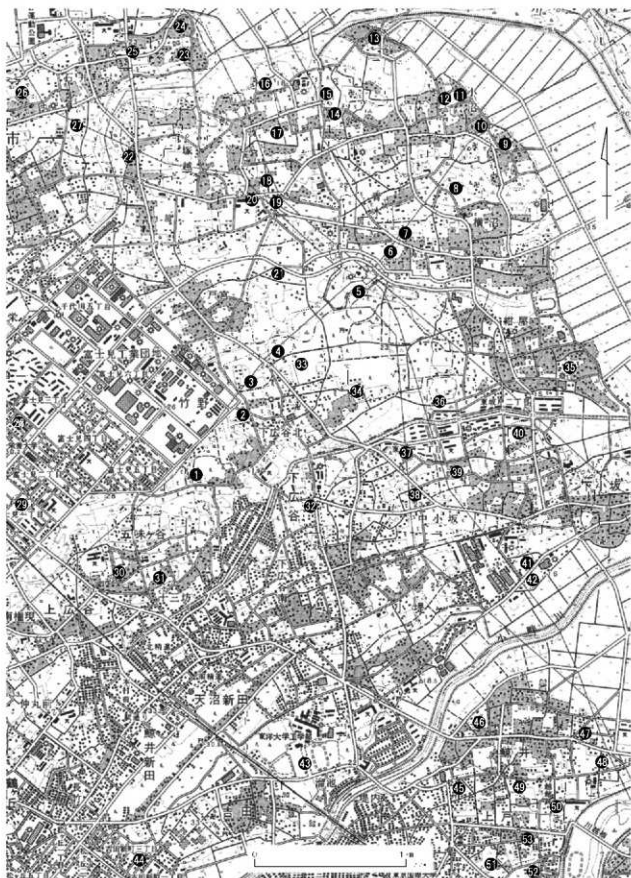
二階川の谷では、その源からしてローム上や内部の伏流であるため、河原は一切形成されていない。さらに、谷を埋める沖積土は漆黒色で、粘性が少ない。現状での落差は、牛原遺跡付近で約1m、御新田遺跡や番匠・下道遺跡として、横沼新田遺跡付近でも2mに満たない。

一方、北谷遺跡は前記4遺跡とは異なり、越辺川の大谷から湧入する奥行き1kmほどの小谷に面している。この付近は坂戸台地の最東端にあたり、更新世に越辺川がもたらした氾濫土である礫混じりの茶褐色土が基盤に広がっている。純粋なローム土の堆積は1.5mほどで、これとても、台地中の順当な風成堆積に対比できない。

風成ローム土が認められない後背湿地状の窪地は、遺跡の北側を巻くように広がっている。そして、これに接続して下向する小さな谷は、遺跡の東を抜けて程なく田面へと達する。だが、そこは雨水溝が設けられている程度で、平時に流水を見ることがない。

周辺の遺跡

1 宮畑館跡	2 在家遺跡	3 戸宮前館跡	4 牛原遺跡	5 御新田遺跡	6 番匠・下道遺跡
7 横沼新田遺跡	8 北谷遺跡	9 木曾免遺跡	10 小沼堀之内遺跡	11 牛塚山古墳群	12 五反田遺跡
13 附島遺跡	14 雷電塚古墳群	15 別所遺跡	16 塚越渡戸遺跡	17 明泉遺跡	18 青木堀ノ内遺跡
19 宮町遺跡	20 住吉中学校遺跡	21 精進場遺跡	22 塚越古墳群	23 勝呂古墳群	24 勝呂遺跡
25 勝呂庵寺跡	26 新町古墳群	27 移遺跡	28 若葉台遺跡	29 富士見一丁目遺跡	30 岸田氏館跡
31 松原前遺跡	32 古海道東遺跡	33 大堀山館跡	34 宮前遺跡	35 高窪遺跡	36 景台遺跡
37 大穴館跡	38 金山遺跡	39 上谷遺跡	40 天王山古墳群	41 下小坂古墳群	42 登戸遺跡
43 東洋大学構内遺跡	44 鶴ヶ丘遺跡	45 日枝神社遺跡	46 有泉遺跡	47 会下遺跡	48 花見堂遺跡
49 龍光遺跡	50 河越氏館跡	51 山王久保遺跡	52 雷ヶ岡遺跡	53 天王遺跡	



第2図 周辺の遺跡

周辺の旧石器・縄文時代遺跡

入間台地での旧石器遺跡は、近年の圏央道新設にともなう一連の調査で、その成果が急増している。限られた路線部分での調査であり、分布論的な広がりにはつながらないが、路線にかかる確率や密度からすると、坂戸台地には、かなり濃密に同時代の遺跡群が埋もれているようである。

まず、大谷川流域では、横田遺跡（田中1995）を中心とする旧石器終末期の遺跡群がある。この周辺は同川の最上流域にあたり、扇端湧水が清水を湧出させている。流水による開析作用はさほどおぼえず、沖積地との比高差がほとんどない低台地がこの界隈に広がっている。

その縁辺では圏央道建設の際、2kmほどの間に5箇所の旧石器遺跡が新たに発見された。横田遺跡の北には柳戸遺跡、さらに南には向山、青棚、新山遺跡が並ぶ（西井1995）。このうち、柳戸、横田、新山の3遺跡では、細石刃文化期の石器集中が検出されている。

横田遺跡では他にも、尖頭器石器群の製作跡、「IV層下位」ナイフ形石器群や、これに伴う礫群なども検出されている。細石器と尖頭器の石材は、黒曜石がもっぱらで、わずかに大型ナイフ形石器に安山岩などの他石材が使用されている。

加えて、これら遺跡群では、周辺ではあまり出土を見ない縄文時代草創期や早期前葉・中葉の遺物も出土しており、継続した占地の好みを推し量ることができる。

さらに、圏央道関連の調査ではないが、柳戸遺跡の600m北方にあたる鶴ヶ島ジャンクション西では、多彩な原材をもとにした櫛状剝離を有する尖頭器や搔器などを擁する石器群が泉橋遺跡から発見されている（関口2003）。また、横田遺跡の東500mに位置する地産沼遺跡でも、チャートを原材とする尖頭器製作跡の可能性が強い石器集中が調査されている（清水2003）。

このように、大谷川上流域の旧石器遺跡は密度

濃く、しかも内容が終末期に集中する。

横田群と同じような時代選択の傾向は、同遺跡からさらに南に3kmほどを隔てた飯能台地の日高市向山遺跡（田中1995）で見ることができる。至近に位置する下向山遺跡（岡本1993）とともに、細石刃文化期の黒曜石製遺物が出土している。また、前者では「IV層下位」のナイフ形石器の集中区も検出されている。

横田遺跡から同じような距離ながら、南に目を向けると、小群川左岸の坂戸台地上に立地する鶴ヶ丘遺跡群（44、谷井1976、岩瀬1985）と、飯能台地にあたる右岸の御伊勢原遺跡（立石1989）が対面するように立地している。前者では4箇所の集中区が検出され、後者は住居跡への混入品であるが、まとまった資料が発見されている。

これらは大型のナイフ形石器を主体とする遺跡群で、良好な縦長剝片を含め、大半が黒曜石を原材としている。こちらでは、細石刃文化期の遺物は出土しておらず、横田遺跡周辺のような縄文時代早期までの継続性は認められない。

そしてさらに、南西の飯能台地中央から奥部に目を移すと、チャート製ナイフ形石器群の単相遺跡が展開する。このうち、西久保遺跡（西井1995）では、3,000点を超えるナイフ形石器群を擁する11箇所の石器集中が調査された。これらは「IV層下位」と「砂川期」を指標とする二期にわたって形成されているが、素材をふんだんに使った大型製品が特徴的である。

このように、入間台地中央から奥部の旧石器遺跡は、横田・日高向山群のような終末期石器群と縄文時代への継続性、鶴ヶ丘群のような黒曜石製大型ナイフ形石器、西久保群にみるチャート製大型ナイフ形石器など、それぞれの小地域で石器相や石材、大きさなどを異にしながら漸移的に台地端部へと拡散する傾向がある。

これに対し、鶴ヶ島ジャンクション以東の坂戸台地北東部では、黒曜石を主体としながらも、そ

れらが入り混じる石器相が見てとれる。

圏央道関連の調査ではないが、その北300mに位置する若菜台地区の富士見一丁目遺跡（第2図29）では、砂川期ナイフ形石器群と複数の上ヶ屋型彫器を特徴とする石器群が大谷川からのびる埋没谷に沿って展開していた（黒坂1998）。

また、同遺跡から1.5km東方の圏央道用地にあたる在家遺跡（2）では、大谷川の支谷に面して黒曜石を主体とする「IV層下位」と砂川期の豊富な石器群や、チャート主体の礫群が調査された（亀田・青木2004、村端2007）。

さらに、大谷川と800mほどを隔てて並流する二階川の流域では、今回報告する旧石器遺跡群が展開する。在家遺跡から北東に700m、同川右岸の御新田遺跡（5）では、黒曜石主体の槌状剝離を有する尖頭器や搔器を指標とする石器群が見つかった。また、対岸の番匠・下道遺跡（6）でも、著しい攪乱でまともには把握できなかったが、黒曜石の剝片がローム中から出土している。

さらには、越辺川の低地を望む台地北東端の木曾免遺跡（9）では、後世に破壊されたナイフ形石器主体の集中や、炭化物の散布地区などが発見されている（西井2008）。そして、これらの遺跡でも、もれなく燃系文系や条痕文系などの縄文早期遺物群が出土している。

以上、入間台地を圏央道に沿った形で旧石器遺跡を概観したが、飯能台地中央から奥部にみる定型的な素材と石器群に対し、坂戸台地中央から北東部では、黒曜石を主体とした多岐にわたる石器群が混交し、しかも縄文時代に継続される地形環境への選択指向を汲みとることができる。

とはいうものの、坂戸台地における縄文時代曙光期の遺跡は、発掘件数に対してみると、さほど多くはない。草創期の遺物は、横田・地慶沼両遺跡で土器小片が発見されているにすぎない。

しかし、燃系文系期になると、夏島・稻荷台期の土器が多く出土した飯盛川上流の鶴ヶ島中学西

遺跡（早川1997）や、既出の大谷川上流遺跡群をはじめ、鶴ヶ島市の南東で散布例が増加する。その拠り所となるのは、旧石器時代と同じく、比高差が少ない台地内部の小河川沿岸である。

この傾向は中葉から後葉の条痕文系期に至るまで継続したようで、同遺跡では60を上回る鶴ヶ島台期の屋外礫群が形成されている。これはまた、大谷川中流域から坂戸台地北東部でも共通しており、在家遺跡や、今回報告の御新田遺跡、番匠・下道遺跡や北谷遺跡（8）でも条痕文系期の屋外礫が残されていた。

旧石器時代との共通という点では、さらに御新田、番匠・下道、木曾免遺跡で発見された燃系文系の土器群があげられる。これらは、燃系文系でも末期の稲荷原から東山式にかけてに集中しており、御新田遺跡では深い壑穴住居跡が発見された。これは、大谷川上流遺跡群や日高向山遺跡での様相と類似している。だが、両者では押型土器が多く出土したものの、今回の報告遺跡では、北谷遺跡で1点を見たにすぎない。

ところが、前期に降ると、坂戸台地における遺跡立地は一変する。前半の羽状縄文系では、関山式期の住居跡が羽島遺跡（13、加藤1985b）、木曾免遺跡（加藤・北畑・柳楽1987）、景台遺跡（36、加藤1997）で発見されている。他に、同期の斜面包含層が木曾免遺跡で、土壌が番匠・下道遺跡でも検出されている。

住居跡が発見され、一定規模の集落が想定される3遺跡は、いずれも越辺川の大谷に程近い位置に立地しており、早期の遺跡密集地であった大谷川上流域は低調となる。

さらに次の黒浜期では、番匠・下道遺跡、御新田遺跡、松原前遺跡（31、註1）、横田遺跡などで住居跡が発見されており、大谷川を中心に再び上流へ移行するのにも見える。だが、いずれも単発で、後半の竹管文系期では、遺物の散布を見るものの、遺跡密集地や集落発見の兆しはない。

この傾向は中期前半まで続くとともに、これ以降、縄文時代のあいだは坂戸台地北東部が遺跡分布の面で県内の他地域を凌ぐことはない。あくまでその範囲ではあるが、この地域が再び活気づくのは中期中葉の勝坂末期から加曾利E期にかけてであり、これは、県内他地域の動向とも一致する。景台遺跡（加藤・北堀・柳楽1991、加藤1999）、上谷遺跡（39、伊藤他1983）、東洋大学工学部敷地内遺跡（43、小泉他1972）などで竪穴住居跡が発見されているが、景台遺跡で環状化の気配を見せるものの、その分布密度は薄い。

そのようななか、勝坂系の中葉にあたる環状遺構群が今回報告の牛原遺跡（4）で発見されたことは、特筆に値する。勝坂前・中葉の遺跡分布は武蔵野台地や飯能台地奥部に片寄っており、坂戸台地では既出遺跡で竪穴住居跡数軒が見ついているのみである。単発だが同期の住居跡や集石土壙が見つかった御新田遺跡とは二階川の緩い蛇行を介して対面しており、連携や反復移動など、単一集落から踏み出す議論も可能である。

この他、周辺の中期遺跡で発見された竪穴住居跡は、加曾利E系でも前半が多い。そして、その後の坂戸台地北東部では過疎化が一段と進み、塚越渡戸遺跡（16）で後期の住居跡が発見されている程度にすぎない（加藤・北堀・柳楽1987）。

だが、遺構こそ見つからなかったものの、景台遺跡や上谷遺跡では称名寺I bから堀之内I式の土器が、そして、前出の鶴ヶ島中西遺跡では加曾利EIV・称名寺I a式土器がまとめて出土している。それでもなお、遺跡の分布は早期や中期に比べると極端に少ない。

この遺跡推移を見るかぎり、今回報告する牛原遺跡の敷石住居跡が構築される下地はない。破格の敷石住居跡は、同じ加曾利EIV式土器を出土する大型土壙とともに見つかり、双方に廃棄行為が認められることから、その後に関わり集落を近辺に想定することもできる。

さらにその後、移遺跡（27、加藤2001）で堀之内II式土器が、鶴ヶ島中西遺跡で加曾利B 1～B 2式土器が残されたのを最後に、坂戸台地の北東部は空白期を迎えることになる。

周辺の弥生・古墳時代遺跡

弥生時代中期後半に至り、この地が再び胎動し始めたとき、遺跡分布の様相は激変する。埼玉県内におけるこの期はそもそも遺跡が少ないのはあるが、その全てが越辺川の大谷にほど近い限られた一帯に展開する。南方に登戸遺跡（42、小泉・小久保1976）や霞ヶ関遺跡（52、屋間1976）、そして西方に新町遺跡（26、加藤・北堀・柳楽1988）が点在するものの、とりわけ密度が際立つのが坂戸台地の北東端である。

越辺川低地に小島のように残る低台地上に立地する附島遺跡では、中期宮ノ台式期の集落と墓域が発見されている。住居跡や方形周溝墓の位置や分布密度から類推すると、残丘状の台地の大半を占める大集落となる可能性を秘めている。

また、附島遺跡から500m程西方の塚越渡戸遺跡でも台地突端に同じような構成の集落が発見されており、逆に附島遺跡から600m程南東に位置する小沼之内遺跡（10、加藤1985a）では、直近の湧水から派生する小さな谷に面して壺棺墓が見つかりしている。

残念ながら、これらの調査は道路幅やその拡張に伴うもので、詳細を把握しにくい。ところが、小谷を挟んで小沼之内遺跡と対峙する木曾免遺跡では、圏央道の事前調査により一つの環濠集落の全容が判明した（藤田2008）。

木曾免遺跡では、これまでに数次にわたる調査が南側で実施されていた（加藤・北堀・柳楽1987）。しかし、ここも同じく市道用地で、密集した住居群が発見されたものの、全形が想定しづらく、その展開もつかめぬままであった。

圏央道対象地となったのは遺跡の北端で、明らかに南の既調査地とは別に区切られた環濠集落

と、同じ台地内の南西に形成された墓域が発見された。環濠と住居跡10軒、土壇4基、壺形墓1基、そして方形周溝墓3基というこじんまりした構成ではあるが、住居跡は大中小の規模差と占地規制が彷彿でき、台地突端の楕円状大型土壇や埋まりかけの環濠に埋置された壺形墓など、往時を類推するに格好の素材が多く見つかった。

附島遺跡を要とする1.5kmほどの間に、少なくとも3箇所の本格集落が連続するような分布は県内ではめずらしく、未熟な土木や栽培技術でも対処可能な特有の可耕地が拠り所となっていると考えられる。例えば、附島遺跡と台地本台との間に横たわる幅200mの沖積地や、木曾免遺跡南方の谷などが候補にあげられよう。また、その簡便性を加味すれば、木曾免遺跡と北谷遺跡の間に広がる粘性に富む更新世の後背湿地にも触手が及んだかも知れない。

一方、後期ではあるが、同じようにその構造が明らかになりつつあるのが弥生遺跡である。同遺跡では長径10mを超える大型住居跡をはじめとする居住域と方形周溝墓が居並ぶ南西部域とが明確に区別される様を垣間見ることが出来る。

後期の集落跡は、木曾免遺跡や附島遺跡など、中期の立地傾向を踏襲しつつ、さらに台地の中まで入り込む。弥生遺跡の南に位置する石井前原遺跡(加藤・北堀・柳楽1988)、新町遺跡西方の勇福寺遺跡(加藤・北堀・柳楽1987)だけでなく、大谷川上流の鶴ヶ岡遺跡(加藤・北堀・柳楽1987)などにも集落が形成される。

このうち、石井前原遺跡では古墳時代前期の集落跡が、また、勇福寺遺跡では同時期の方形周溝墓群も発見されているが、直接の継続関係であるかはさておいて、木曾免遺跡をはじめ、周辺の弥生時代後期の遺跡では古墳時代前期の集落跡が合わせて検出される例が多い。

その木曾免遺跡では、南方で発見された住居跡に加え、洋梨形の台地地形の北側突端で方形周溝

墓も見つかっている。最北に位置する20m級のもの、中軸を揃えてほぼ1/2の規模でこれに追加された小周溝墓が並んでおり、大型周溝墓では、方角ごとに趣向を凝らした供献土器の様子が溝に転落した土器から類推できる。

類似する地形と集落・墓域の関係は、飯能台地の上層遺跡でも発見された(黒坂1989)。さらに、今回報告の北谷遺跡も共通する地形の北端に同規模の周溝墓が築造されていた。木曾免遺跡とは谷を隔てて向かい合っており、近い間柄の集団が同じ集落構成で併存していたとも考えられる。

さらに、周辺では、附島遺跡や高窪遺跡(35、加藤・北堀・柳楽1991)など、多くの集落が形成されているものの、その規模は小さく、景台遺跡や勇福寺遺跡の方形周溝墓も北谷・木曾免遺跡に匹敵するものはない。このうち高窪遺跡では中期の住居跡も発見されているが、他遺跡も含め、この趨勢にかわりはない。

ところが、後期になると、弥生以降の伝統的な遺跡占地指向を踏襲しつつ、再び集落形成は活発化する。だが、現状では各地で細々とした遺物の出土を見るものの、本格的な集落遺跡の調査は、6世紀代を中心に77軒の住居跡を発見した上谷遺跡(田中1976)にしか及んでいない。

集落なしでは成立し得ない古墳群の分布でこれに代えてみると、第2図の範囲だけでも牛塚山(11)、雷電塚(14)、塚越(22)、勝呂(23)、新町(26)、天王山(40)、下小坂(41)など、小中規模ではあるものの、やはり台地の縁辺に沿って多くの古墳群が形成されている。

このようにして高まった在地勢力を背景に勝呂廃寺(25、伊藤・加藤1981)は建立されたとみられている(高橋1982)。だが、坂戸台地北東部では今のところ、同時期の大集落は廃寺を取り巻くように展開する勝呂遺跡(24、加藤・北堀・柳楽1987)でしか見ることができない。

そして、その分布は越辺・高麗川の大谷や、そ

れに注ぐ谷の湾口部周辺に片寄る弥生以降の分布をそのままに踏襲しており、例えば牛原遺跡付近の準内陸では、縄文時代からの空白が続いている。偶然もあるだろうが、圏央道に先立つ一連の調査では、木曾免遺跡の斜面包含層で7世紀代の土師器坏片が数点出土した他は、まったくこの期の遺構を発見できなかった。

台地奥を含め、付近の土地利用が最も高揚するのは、古代に至ってからである。

周辺の奈良・平安時代遺跡

この期における周辺の遺跡については(昼間1991)、(富田1992、1994)などに詳しい。このなかで、富田は旧入間郡・高麗郡の同時代遺跡の立地と展開について、いくつかの地理的まとまりを単位に解説している。

本遺跡の立地する入間台地の北東部についてみれば、古墳時代からの伝統的集落展開をさらに発展させる越辺川沿岸の坂戸市西部入西地区周辺の遺跡群と、同様ながらより権力構造が反映されている台地先端の勝呂廃寺周辺の遺跡群、古墳時代よりの継続性を認めるが古代にいたり飛躍的な発展を遂げる入間川沿岸の川越市霞ヶ関周辺の遺跡群、そして、古代に至って忽然と現れる台地中の若葉台地区周辺の遺跡群という集落群の立地と形成過程の偏差が指摘されている。

その性質は異なれども、遺跡の爆発的な増加は、台地の内外や高麗・入間、勢力の新旧のちがいが多く現れており、この周辺では、本格的な調査の半數以上で何らかの古代遺構が発見されている。

なかでも特徴的なのが、若葉台遺跡(28)とその周辺集落である。同遺跡では、これまで住居跡279軒、掘立柱建物跡234棟を上回る数が調査・報告されている(加藤2005)。この遺構比率のみならず、3間4間の身舎に四面庇を加えた建物跡や、桁行き5間梁行き3間を超える長大な掘立柱建物跡の普遍的な存在など、一般の集落とは異なった遺構の存在も古くから明らかとなっている。

遺物もこれを裏付けるかのように、奈良三彩壺、和同開珎、各種の硯、帯金具、銅鈴、銅線など多彩なものが出土している。

同遺跡群は、可耕地から隔絶した台地内部に立地する。このことから、政治的・計画的な入植を示唆する向きも多い。とくに、他を寄せつけぬ孤高を守りつつ、遺跡の北東部に整然と配置された長大な建物群を拠り所として、調査初期から郡家や寺領荘園、有力氏族の居館など、その性格をめぐり論議がなされ(斉藤・加藤他1983他)、近年でも霊龜二年の高麗建郡を意識した高麗郡家や養蚕集落説など、さまざまな解釈が披露されている(宮瀬1999、加藤2005他)。

その当否については立ち入る術をもたないが、この遺跡の奈良・平安時代遺構群は、竪穴住居跡の検出数に匹敵する掘立柱建物跡の棟数が特徴の一つであり、このような両者の比率は、唯一、若葉台遺跡群の南、かつ押野の間柄にある富士見一丁目遺跡(29)で見るとみられる。

だが、若葉台の掘立柱群が、一部を除いて一見脈絡なく展開するのに対し、富士見では大型住居や井戸跡を抱き込む形でこの字にめぐる建物群が二期にわたって配置されている。この計画・継続性をもって富士見側が若葉台の単なる衛星・拡張集落ではない微妙な差を認めることもできる。

これに対し、若葉台群を上回るほどの密度と性格が露わになりつつあるのが、数能台地先端の遺跡群である。とくに、霞ヶ関遺跡では、溝や柵列もしくは塀に区画された長大な桁行の掘立柱建物跡が複数調査されている(平野2002)。

さらに、掘立柱建物跡の掘り方からは、「入厨」と印された9世紀初頭の墨書土器2点などが発見されている。以前より想定されていた(酒井1987)ところではあるが、一部8間以上を数える長大な建物跡と、この土器により、平安時代における入間郡家の最有力地にあてられている。

ところが、この域の集落跡は細かな調査が多い

ため、全体の遺構配置関係に不明な点が多い。この中で、霞ヶ関遺跡の南西400mに位置する東下川原遺跡(早川1995)では8世紀初頭から9世紀後半まで継続した集落が営まれている。だが、掘立柱建物跡は1棟も検出されていない。

これのみで飯能台地先端部の全てを推し量るわけにはいかないが、近隣の会下遺跡(47、川越市教育委員会1996)、花見堂遺跡(48、田中1996)、天王遺跡(53、平野2005)でも掘立柱建物跡が少ない傾向があり、霞ヶ関遺跡の公的建築物と思しき一部を除けば、竪穴住居跡を中心とする在来的な基本構成が維持されていたようである。

一方、富田により継続的な発展型を指摘された坂戸台地北東部であるが、古墳時代の遺跡分布をもとにさらに細かく見ると、台地縁辺と準内陸の類型に二分できることがわかる。現入間郡内でも屈指の古墳群を残す台地縁辺の遺跡群は、勝呂廃寺を象徴とするような古墳時代からの継続性と遺跡分布の濃密性を兼ね備えている。

同廃寺は、台地縁辺に分布する古墳群を維持した在地勢力を背景に、7世紀の後半に創建されたとされる。近隣では7世紀代(加藤1981)や、8世紀代の集落(加藤・北堀・柳塚1989)が検出されており、越辺川低地帯を対象とした継続的な生業基盤の維持が私的権力の自生と継続を支えていたととれる。また、台地先端の附島遺跡では、朝り抜き杵が設置された大型井戸を伴う古代集落が展開している(加藤他1987)。

これに対し、南には樟科の石製鋳や「路家」と印された墨書土器が出土した宮町遺跡(19、大谷1991)などが新たに出現する。ところが、台地縁辺の勝呂群とは対照的に、古墳時代まで空白域であったこの付丘では、一部で小谷が湾入するものの、広大で安定した可耕地の確保を望めない。

宮町遺跡ではこれまで、住居跡29軒に対し、掘立柱建物跡21棟以上と、若菜台に並ぶ遺構比率に加え、方位に沿った溝跡や特殊な須恵器器種も発

見されている。隣接する住吉中学校遺跡(20、加藤・北堀・柳塚1987)などを含め、縁辺の遺跡群とは異なる生業形態や目的をもった遺構群の形成を憶測させる。

さらに南の精進場遺跡(21)では、道路や住宅建設で繰り返し調査が行われ、住居跡38軒、掘立柱建物跡8棟、井戸跡4基以上が発見されている(埼玉県教育委員会2002他)。同じ空白域に新たに展開しながらも、こちらの遺構比率は勝呂群との大きな違いは見られない。しかし、その分布は住吉中学校遺跡や、平成2年度に5軒の住居跡が調査された番匠・下道遺跡などと間断なく連続することが見込まれており、特殊な遺構構成の宮町遺跡を核として一般集落がこれを取り巻きつつ膨張した状況が想定される。

若菜台と同じく、宮町群が自身を賄う可耕地を持つことなく村落を形成・維持せしめた背景には、やはり東山道武蔵路と、その後継となる交通路を想起せざるを得ない。

霞ヶ関遺跡から入間川を遡ること2.5kmに位置する八幡前・若宮遺跡では、「驛長」と墨書された8世紀初頭の土師器が粘土採掘坑より出土している(富元2005)。時代はやや降るものの、前述した宮町遺跡出土の墨書土器とあわせ、8世紀代に機能した武蔵路の経路や、入間川渡河に関わる駅家を示唆する遺物として理解されている。

さらに、入間川渡河点から北の東山道支路は、女堀(立石1987)に沿って北上するものと想定されていた(木本1992、酒井1993)。また、富元は、前掲書で女堀案に加え、川越・坂戸市境をかすめる中世堀兼道に沿った経路案を示した。

いずれにせよ、同路の推定線を横切る形となる圏央道の新設では、事前の発掘調査を通じてそのルートが確定されるというのが大方の予想であった。だが、鶴ヶ島ジャンクション以東、越辺川低地帯までの調査を完了した現在、同路に値する遺構は特定できていない。

ところが近年、旧堀兼道案に沿った古海道東遺跡(32)で東山道武蔵路の側溝とされる溝跡の発見が公表された(内田2007)。路盤は川越・坂戸市境にあたる現道下にあり、詳細な指向方位は本報告を待たねばならないが、現道の方位性や旧入間・高麗郡界と八幡前・若宮遺跡の位置から察するに、この道路跡が女堀案とは相容れないのは明らかである。結果、東山道の推定ルートは有力な二者が対立するようになった。

番匠・下道遺跡や、同一の集落と目される横沼新田遺跡(7)、そして精進場遺跡などが形成する宮町群は、まさに古海道東ルートの延長上に展開している。

周辺の中近世遺跡

古代に活況を呈した坂戸台地北東部も、9世紀後葉を境に、暮らしの痕跡がまったく認められなくなる。今回の調査では番匠・下道遺跡で12世紀に遡るとも考えられる渥美甕が出土しているが、この後構造物や生活跡が盛んに残されるようになるのは中世の後半を迎えてからである。

中世の道路跡を発見した牛原遺跡の周辺では、この期に並立していたと考えられる館跡が密集している。道路跡は、このうち南東至近に残る大堀山館跡(33、川越市教育委員会2005)の西側外堀と約50mの間隔をもって併走することが推定される。そして、その延長では、古海道東遺跡で「鎌倉街道堀兼道」が特定されている。

同遺跡跡を南北に走る川越市道は、以前から鎌倉街道の名残とされており、牛原遺跡周辺では県道片柳川越線に合流する説や、大堀山館跡を東に迂回する経路が想定されていた(村本・小川1992他)。はたして、同館跡の西に接する今回発見の道路跡が、新たに取って代わるのだろうか。

その点については第IX章でふれるが、この鎌倉街道跡を囲むように、5つの館跡が北に向かって鶴翼を成するように立ち並ぶ。西から宮廻(1、木戸2004、大谷2008)、戸宮前(3、同)、大堀山、

宮前(34、関口1990)、そして、大谷川をはさんだ南には大穴館跡(37、同)がある。

これらのうち宮廻館跡と大堀山館跡は、本郭部分に本調査がおよんでいるが、後世の改修も相まって、その築造時期が確定できていない。出土遺物の大勢から判断した最古の時期として、宮廻館跡、戸宮前館跡、堀兼街道、大堀山館跡ともに15世紀半ばから後半があてられている。

年代測定の可能性は残るものの、築造の技術的側面も織り交ぜた論議は、同じ頃に付近で攻防を繰り返した扇谷・山内両上杉氏を念頭に進められている。だが、館跡間との連携の有無、その戦略的意図については未だ定見に達していない。

いずれにせよ、戦術的優位性に乏しい地形環境のなかでこれらの館を構えるにあたっては、東山道武蔵路の名残や鎌倉街道、さらには近世川越児玉往還(吉田1994)から大きく遡ると考えられる県道片柳川越線など、新旧の要道が錯綜するこの地に蟠居し、行き交う人やものに視みを利かせる目的も兼ねていたのは確かだろう。

これに対し、中近世の一般階層を彷彿させる調査例は、方形小壁穴群が発見された飯能台地先端の天王遺跡(平野2005他)をはじめとする河越氏館跡(50)周辺を除き、極端に少ない。

そのようななか、昭和62年度に実施された番匠遺跡西部の調査では、掘立柱建物跡や地下式塙、井戸跡などが調査区を埋め尽くすほどの密度で分布し、土鍋やかわかけ、渡来銭が多く発見されている(加藤・北堀・柳楽1991)。

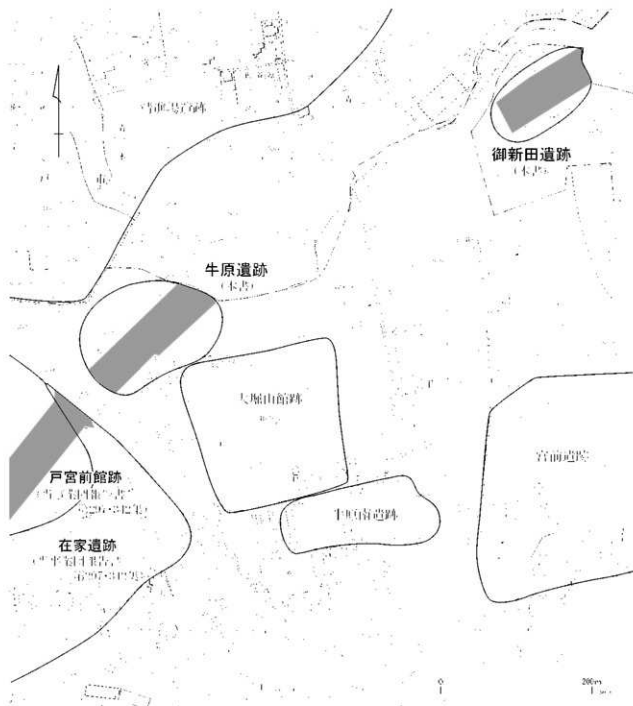
以上、入間台地北東部を中心に旧石器時代から中世までを通過したが、弥生時代から古墳時代にかけては同時に発刊される当事業団報告書第352集、中世については同第354集で詳しく扱っている。合わせて参照されたい。

註1 平成19年度、当事業団調査。

III 遺跡の概要

本書で報告する5遺跡は、川越市北東部から坂戸市東部にかけての2kmほどの間に点在している(第2図4～8)。鶴ヶ島ジャンクション以東、越辺川以西の圏央道新設にあたり調査を実施した遺

跡群のうち、既報告の宮廻館跡、在家遺跡、戸宮前館跡(1～3)に続くものである。また、越辺川低地に面する木曾免遺跡(9)も、別冊をもって同時に報告する。



第3図 牛原遺跡、御新田遺跡と周辺の地形

本書で扱う5遺跡のうち、牛原から横沼新田までの4遺跡は、坂戸市紺屋付近の越辺川低地から坂戸台地に湾入する二階川を拠る所にする。この小谷は、遺跡群の西にあたる鶴ヶ島・坂戸両市の境にあたる若葉台地区で消滅する奥行き3kmほどのもので、谷幅は最大でも100mに満たない。牛原遺跡と御新田遺跡は右岸に接して立地しており、番匠・下道遺跡、そして同種の遺跡内容である横沼新田遺跡は、その対岸に位置している。

これに対し、北谷遺跡は坂戸市横沼地区から湾入する小谷の右岸にあたり、北には更新世の後背湿地の名残である盆状の低地が広がっている。

牛原遺跡 (第3・4図)

牛原遺跡は、前述の小谷に面した台地が北西に突出する端部に展開している。調査区はその中央南寄りを南西から北東に200mほど路線幅で貫く形となった。東は湾入する低地部に面しており、その一部は遺構・遺物が発見できなかったため、作業時の排土置き場として利用した。

調査区の現況は、大部分が山林であり、表土が比較的残ったことも相まって、木の根による地山の損傷や遺物の混じり込みが多かった。

発見できた遺構は、縄文時代の所産が中心で、竪穴住居跡7軒、集石土壇31基、落し穴状遺構12基、土壇62基である。

さらにこれらは、大きく二つの時代群に分けられる。すなわち、集石のすべてを含む大部分の縄文遺構は中期前葉の勝坂期に構築されたものであり、これらが犬路20mほどの幅をもって弧状にめぐっている。未調査部の台地地形を加味すると、全体では環状に遺構が分布すると考えられる。

もう一つは、加曽利EIV式土器を目安とする中期末から後期初頭の時期で、調査区の中央で敷石住居跡と、大量の遺物が廃棄された大型土壇などを調査した。敷石は、一部を失っていたものの、敷設時の規格が推定でき、すべてを復元することが可能である。さらに、産地が限られる結晶片岩

が用いられていたことで、縄文時代における遠距離大量物資輸送が証明できる事例としても稀有な発見となった。

このほか、中近世の溝跡4条を調査したが、西に戸宮前、南に大堀山という中世館跡に接しているものの、戸宮前館跡や在家遺跡などで見られた中世館関連の街区割り(木戸2004・村端2007)は、1条の方形区画溝を除いて見られなかった。

しかし、この区画溝と軸をともにし、平行する溝跡が発見できた。これらは、他に連動するものがないこと、そして、第4章で詳しく述べる周辺遺跡での成果を加味し、路盤こそ見つからなかったものの、中世の道路跡と判断した。

御新田遺跡 (第3・5図)

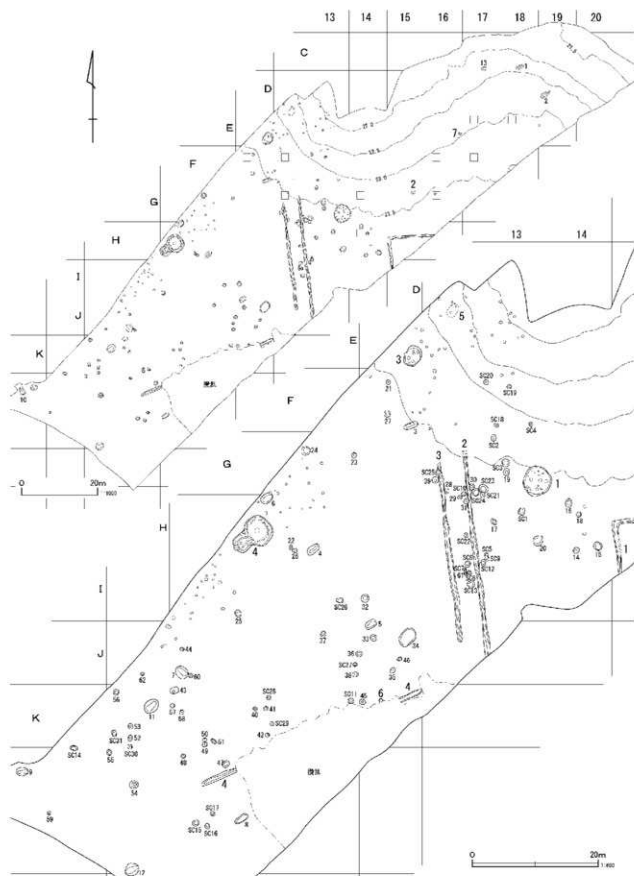
牛原遺跡の北西約450mに位置する御新田遺跡は、北方に張り出す台地上に広がっている。調査区は、想定される遺跡範囲の中央を約150mにわたって貫く形となった。

調査区の中央北部は、北側の変電所建設に際しての削平がおよぶとともに、全体にわたって山林に起因する地山の損傷が著しかった。

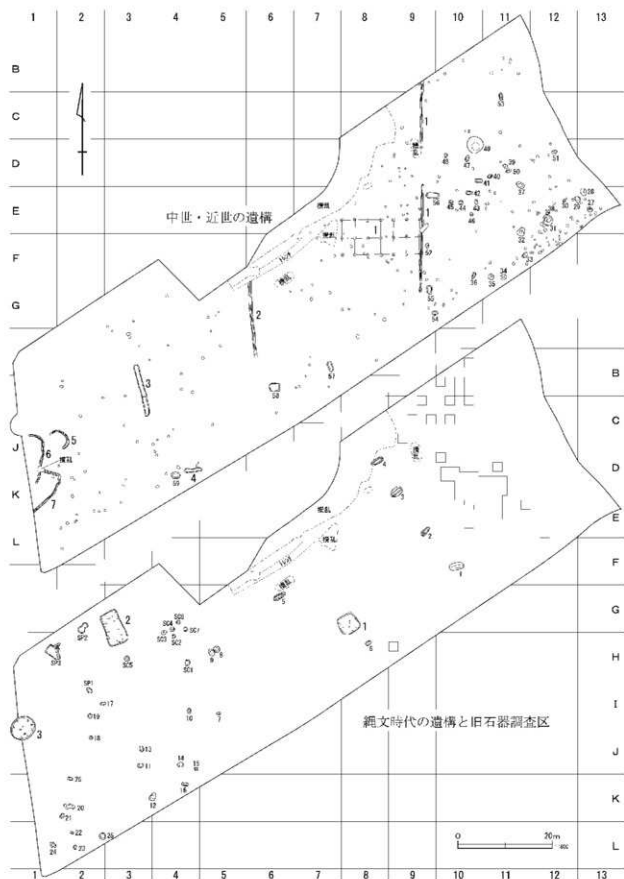
発見できた遺構は、旧石器時代から近世期にわたる。このうち、調査区の東部では旧石器時代の遺物集中が発見され、尖頭器・彫器・掘器を中心とする石器群と礫群が検出された。

これに対し、調査区の西半では、縄文時代の竪穴住居跡3軒、集石土壇7基、落し穴状遺構5基、土壇26基、炉穴3基を発見した。住居跡は、それぞれ構築期が異なるが、とくに早期撚糸文系後葉の住居跡が目立つ。とくに疑問を抱かれがちな時期の竪穴としては掘り込みが深く、床面直上から詳しい時期比定が可能な口縁部破片が数個体分出土している。

また、1軒のみ住居跡が残されていた前期黒浜式期の他、中期勝坂期では住居跡と集石土壇、土壇なども発見できた。牛原遺跡と同じく、詳しい時期は瀬内期に相当し、詳細な時期がわからない



第4図 牛原遺跡全体測量図



第5図 御新田遺跡全体測量図

落し穴状遺構も含め、小谷の湾入部をはさむ両地
が運動していた様子がうかがえる。

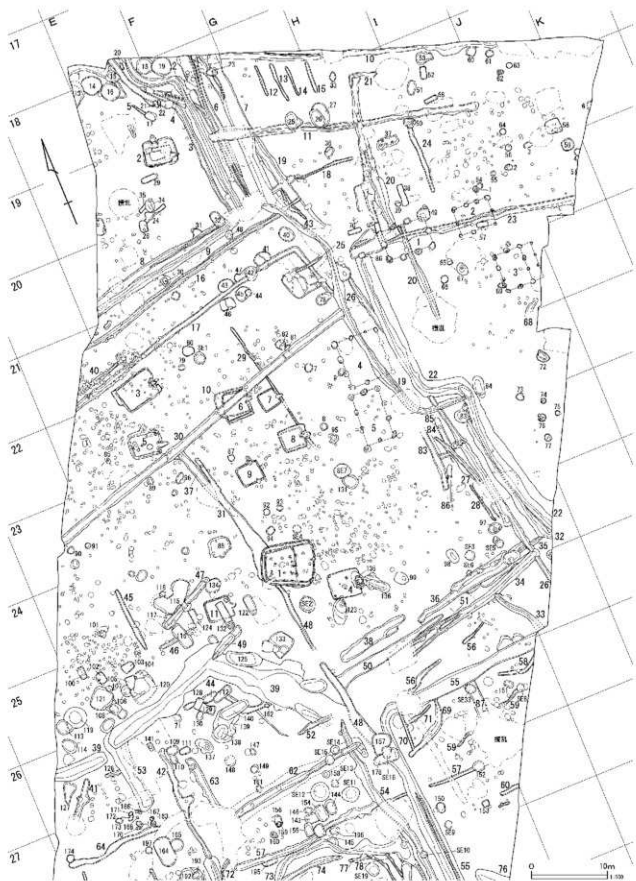
このほか、主として調査区の東側で近世の大型
総柱掘立柱建物跡1棟や土壇33基、溝跡7条、多
数の柱穴跡なども調査している。

番匠・下道遺跡（第6～8図）

番匠・下道遺跡は、既述の小谷を隔てて御新田
遺跡から約200mの位置に広がる。推定される遺
跡の範囲は東西に長く、今回の調査は、その東端
をかすめたことになる。南は小谷への傾斜面にあ



第6図 番匠・下道遺跡、横沼新田遺跡、北谷遺跡と周辺の地形



第7図 番匠・下道遺跡全体測量図(1)



第8図 匠匠・下道遺跡全体測量図(2)

たり、沖積土が厚く堆積しており、調査区中央東側でも二階川から派生したと考えられる浅い傾斜地が広がっていた。

調査範囲は路線幅で約200m、現道を除き、調査区を大きく変形させる削平などは無い。だが、至る所に小規模な掘込みが広がり、とくに南側で小さな遺構を確認するのは不可能であった。

発見した遺構は、大きく縄文時代と平安時代、さらに中世から近代に三分される。

このうち縄文時代では、黒浜期の竪穴住居跡1軒と、関山期の土壇1基、おそらく同時期であろう11基の土壇、早期の竪穴7基を調査した。住居跡は2回の拡張を経て最終的には典型的な梯形の前期住居跡に成長している。また、南の斜面では、早期の竪穴群が形成されるとともに、広い時期幅の遺物が出土した。

これに対し、平安時代では、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡5棟を調査した。住居跡は散漫に分布し、その規模や構造に特筆できるものはないが、施釉陶器や硯が出土し、一般の須恵器でも壺瓶類比が高いなど、住民階層の高さが想像できる。

また、掘立柱建物跡は、5棟のすべてが欄柱建物で、南に開くコの字に配置されている。15間四方の敷地範囲には、他遺跡の類似配置に見るような大型住居跡や井戸跡は存在しなかった。

さらに、中世以降では、溝跡92条、土壇195基、井戸跡33基を発見した。溝跡の多くは、ほぼ方位に沿った区画を成すもので、再三の養生や掘り直しを経た結果、当初の断面形が失われていたり、数条が併走する箇所が多く見られる。このなかで、2条のみ堀跡ともいえる溝を検出したが、主郭部や全形を特定するに至らなかった。

土壇のなかで、少なくとも堀跡周辺の4基は中世まで遡る地下式壇となる。周辺では中世期の遺物が多く出土したが、その後さまざまな掘削が及んでおり、大半がそれらへの紛れ込みで現代に伝えられる結果となった。

井戸跡は、調査区の南側を中心に分布していたが、その構築期は中世から近代までの幅でとらえるしかない。底底は、掘削開始から1mも経る間もなく現れるものもあり、台地上に関わらず、水位が高かったことをものがたっている。

横沼新田遺跡 (第6・9図)

横沼新田遺跡は、番匠・下道遺跡と泉道土井草坂戸線をはさみ北側に対峙する位置にある。推定される遺跡の範囲は、番匠より東にずれ、路線はその東半分を占める形で計画されていた。

調査区は、現道をはさみ、南と北に分かれている。遺跡の密度が北ほどに薄くなるため、北側は遺構の存在が判明した部分についてのみ調査を実施した結果である。

発見できた遺構は、平安時代と、中世から近代に大別できる。双方ともに、その性格は南の番匠・下道遺跡とかわらず、両時代に関しては同一遺跡と言いつける内容である。

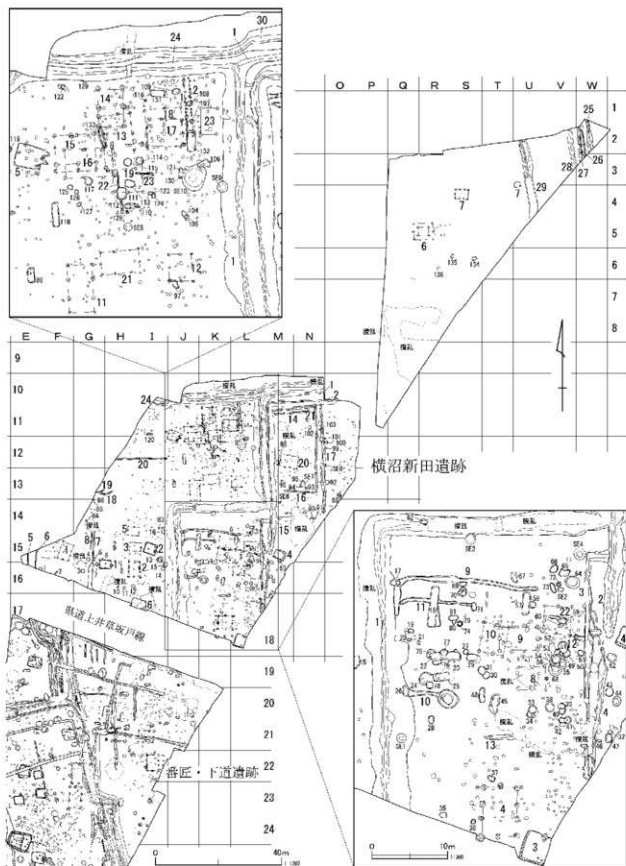
このうち、平安時代は竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡7棟を調査した。ともに番匠とかわらぬ傾向だが、掘立柱建物跡は一部で並列化するものの、コの字を形成するには至っていない。しかし、北調査区で堂跡と考えられる構造の建物跡が発見できている。周囲の台地地形と遺構分布から見て、番匠・横沼集落に付属するものと見せる。

一方、中世以降の遺構群は、溝跡30条、掘立柱建物跡16棟、欄柱2条、土壇136基、井戸跡10基を調査した。溝跡は、区画を成すものが主だが、こちらは整然と方位軸を指している。

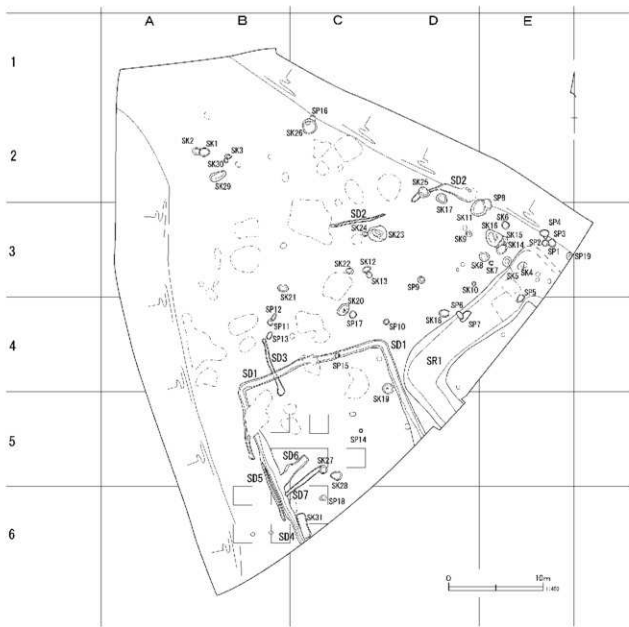
また、掘立柱建物跡は北端の区画で最も密集しており、これに沿う欄柱も併っている。土壇・井戸跡は、中世期に遡れるものはなく、建物跡と同様、むしろ近世期に集中すると考えられる。

北谷遺跡 (第6・10図)

北谷遺跡の調査区は、横沼新田遺跡から約350mを隔てた位置にある。隣接する寺脇遺跡とともに、この周辺はインター予定地であるものの、試



第9図 横沼新田遺跡全体測量図



第10図 北谷遺跡全体測量図

掘の結果、推定された範囲の多くが更新世に形成された後背湿地であったことが判明した。

第6図に見るように、後背湿地の名残は、現代では北谷遺跡周辺の金魚養殖池の分布でも見ることができる。今回の調査区は、越辺川低地から湾入する谷部と養殖池にはさまれた、北に突出する立川面の台地上に限定された。

発見できた遺構は、縄文時代の土壇3基、炉穴19基、古墳時代前期の方形周溝墓1基、土壇2基、近世の溝跡7条、土壇26基である。

この中で特筆すべきは古墳時代の周溝墓である。外周幅約20mの大型周溝墓で、地形との関係から、鋭く突出した台地北端が墓域に選ばれた際、いち早く構築された周溝墓と想像できる。

なお、本書で扱った多くの遺跡、かつ、多岐にわたる時代や遺構種を混乱なく報告するため、整理作業途上で調査時の遺構番号を修正し、新番号を付与している(第1・2表)。原図や遺物の実見の際には留意されたい。

第1表 遺構番号新旧対照表(1)

牛原遺跡			御新田遺跡			番匠・下道遺跡											
新番	旧番	旧番	新番	旧番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番		
縄文住居			縄文住居			縄文住居		中世以降掘立		縄文住居		21溝	SD21	82溝	SD82	62土	SK55
1住	SJ1	13土	SK3	1住	SJ1	1掘立	SH1	1住	SJ1	22溝	SD22	83溝	SD83	63土	SK56		
2住	SJ2	14土	SK4	2住	SJ2			縄文土壌		23溝	SD23	84溝	SD84	64土	SK58		
3住	SJ3	15土	SK5	3住	SJ3	1溝	SD1	1土	SK43	24溝	SD24	85溝	SD85	65土	SK59		
4住	SJ4	16土	SK6	縄文集石土壌			2溝	SD2	2土	SK45	25溝	SD25	86溝	SD86	66土	SK60	
5住	SJ5	17土	SK7	1集	SC1	3溝	SD3	3土	SK47	26溝	SD26	87溝	SD87	67土	SK61		
6住	SJ6	18土	SK8	2集	SC2	4溝	SD4	4土	SK51	27溝	SD27	88溝	SD88	68土	SK62		
7住	SP1	19土	SK9	3集	SC3	5溝	SD5	5土	SK52	28溝	SD28	89溝	SD89	69土	SK63		
縄文集石土壌			20土	SK10	4集	SC4	6溝	SD6	6土	SK57	29溝	SD29	90溝	SD90	70土	SK64	
1集	SC1	21土	SK14	5集	SC5	7溝	SD7	7土	SK79	30溝	SD30	91溝	SD91	71土	SK65		
2集	SC2	22土	SK16	6集	SC6	中世以降土壌		8土	SK90	31溝	SD31	92溝	SD92	72土	SK66		
3集	SC3	23土	SK17	7集	SC7	27土	SK1	9土	SK96	32溝	SD32	中世以降土壌		73土	SK67		
4集	SC4	24土	SK18	1土	SK28	28土	SK2	10土	SK206	33溝	SD33	13土	SK1	74土	SK68		
5集	SC5	25土	SK19	縄文落穴		29土	SK3	11土	SK207	34溝	SD34	14土	SK2	75土	SK69		
6集	SC6	26土	SK20	1土	SK29	30土	SK4	12土	SK208	35溝	SD35	15土	SK3	76土	SK70		
7集	SC7	27土	SK21	2土	SK31	31土	SK4	縄文貯穴		36溝	SD36	16土	SK4	77土	SK71		
8集	SC8	28土	SK22	3土	SK34	31土	SK5	1貯	FP1	37溝	SD37	17土	SK5	78土	SK72		
9集	SC9	29土	SK23	4土	SK35	32土	SK6	2貯	FP2	38溝	SD38	18土	SK6	79土	SK73		
10集	SC10	30土	SK26	5土	SK39	33土	SK7	3貯	FP3	39溝	SD39	19土	SK7	80土	SK74		
11集	SC11	31土	SK32	縄文土壌		34土	SK8	4貯	FP4	40溝	SD40	20土	SK8	81土	SK75		
12集	SC12	32土	SK34	6土	SK33	35土	SK9	5貯	FP5	41溝	SD41	21土	SK9	82土	SK76		
13集	SC13	33土	SK36	7土	SK40	36土	SK10	6貯	FP6	42溝	SD42	22土	SK10	83土	SK77		
14集	SC14	34土	SK37	8土	SK41	37土	SK11	7貯	FP7	43溝	SD43	23土	SK11	84土	SK78		
15集	SC15	35土	SK38	9土	SK42	38土	SK12	平安住居		44溝	SD44	24土	SK12	85土	SK80		
16集	SC16	36土	SK39	10土	SK43	39土	SK13	2住	SJ1	45溝	SD45	25土	SK13	86土	SK81		
17集	SC17	37土	SK41	11土	SK44	40土	SK14	3住	SJ2	46溝	SD46	26土	SK14	87土	SK82		
18集	SC18	38土	SK42	12土	SK45	41土	SK15	4住	SJ3	47溝	SD47	27土	SK15	88土	SK83		
19集	SK11	39土	SK43	13土	SK46	42土	SK16	5住	SJ5	48溝	SD48	28土	SK16	89土	SK84		
20集	SK13	40土	SK45	14土	SK47	43土	SK17	6住	SJ6	49溝	SD49	29土	SK17	90土	SK85		
21集	SK27	41土	SK46	15土	SK49	44土	SK18	7住	SJ7	50溝	SD50	30土	SK18	91土	SK86		
22集	SK28	42土	SK48	16土	SK50	45土	SK19	8住	SJ8	51溝	SD51	31土	SK19	92土	SK87		
23集	SK29	43土	SK49	17土	SK51	46土	SK20	9住	SJ9	52溝	SD52	32土	SK20	93土	SK88		
24集	SK30	44土	SK51	18土	SK52	47土	SK21	10住	SJ10	53溝	SD53	33土	SK21	94土	SK89		
25集	SK31	45土	SK52	19土	SK53	48土	SK22	11住	SJ11	54溝	SD54	34土	SK22	95土	SK91		
26集	SK33	46土	SK53	20土	SK54	49土	SK23	平安掘立		55溝	SD55	35土	SK23	96土	SK92		
27集	SK40	47土	SK54	21土	SK55	50土	SK24	1掘立	SB1	56溝	SD56	36土	SK24	97土	SK93		
28集	SK44	48土	SK60	22土	SK56	51土	SK25	2掘立	SB2	57溝	SD57	37土	SK25	98土	SK94		
29集	SK47	49土	SK61	23土	SK57	52土	SK26	3掘立	SB3	58溝	SD58	38土	SK26	99土	SK95		
30集	SK66	50土	SK62	24土	SK58	53土	SK27	4掘立	SB4	59溝	SD59	39土	SK27	100土	SK97		
31集	SK69	51土	SK63	25土	SK59	54土	SK29	5掘立	SB5	60溝	SD60	40土	SK28	101土	SK98		
縄文落穴			52土	SK64	26土	SK60	55土	SK30	中世以降溝		61溝	SD61	41土	SK29	102土	SK99	
1土	SK1	53土	SK65	縄文貯穴		56土	SK32	1溝	SD1	62溝	SD62	42土	SK30	103土	SK100		
2土	SK2	54土	SK67	1貯	FP1	57土	SK37	2溝	SD2	63溝	SD63	43土	SK31	104土	SK101		
3土	SK15	55土	SK68	2貯	FP2	58土	SK38	3溝	SD3	64溝	SD64	44土	SK32	105土	SK102		
4土	SK24	56土	SK70	3貯	FP3	59土	SK48	4溝	SD4	65溝	SD65	45土	SK33	106土	SK103		
5土	SK25	57土	SK71					5溝	SD5	66溝	SD66	46土	SK34	107土	SK104		
6土	SK35	58土	SK72					6溝	SD6	67溝	SD67	47土	SK35	108土	SK105		
7土	SK50	59土	SK73					7溝	SD7	68溝	SD68	48土	SK36	109土	SK106		
8土	SK55	60土	SK74					8溝	SD8	69溝	SD69	49土	SK37	110土	SK107		
9土	SK56	61土	SK75					9溝	SD9	70溝	SD70	50土	SK38	111土	SK108		
10土	SK57	62土	SK76					10溝	SD10	71溝	SD71	51土	SK39	112土	SK109		
11土	SK58	中世以降道路						11溝	SD11	72溝	SD72	52土	SK40	113土	SK110		
12土	SK59	2-3溝 SD2-3						12溝	SD12	73溝	SD73	53土	SK41	114土	SK111		
			中世以降溝						13溝	SD13	74溝	SD74	54土	SK42	115土	SK112	
			1溝		SD1				14溝	SD14	75溝	SD75	55土	SK44	116土	SK113	
			4溝		SD4				15溝	SD15	76溝	SD76	56土	SK46	117土	SK114	
									16溝	SD16	77溝	SD77	57土	SK48	118土	SK115	
									17溝	SD17	78溝	SD78	58土	SK49	119土	SK116	
									18溝	SD18	79溝	SD79	59土	SK50	120土	SK117	
									19溝	SD19	80溝	SD80	60土	SK53	121土	SK118	
									20溝	SD20	81溝	SD81	61土	SK54	122土	SK119	

第2表 遺構番号新旧対照表(2)

番匠・下道遺跡		横沼新田遺跡										北谷遺跡			
新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番	新番	旧番
123土	SK120	184土	SK181	平安住居		25溝	SD25	55土	SK55	116土	SK118	縄文土塊		中世以降土塊	
124土	SK121	185土	SK182	1住	SJ1	26溝	SD26	56土	SK56	117土	SK119	1土	SK28	6土	SK2
125土	SK122	186土	SK183	2住	SJ2	27溝	SD27	57土	SK57	118土	SK120	2土	SK29	7土	SK4
126土	SK123	187土	SK184	3住	SJ3	28溝	SD28	58土	SK58	119土	SK122	3土	SK31	8土	SK5
127土	SK124	188土	SK185	4住	SJ4	29溝	SD29	59土	SK59	120土	SK123	縄文穴		9土	SK6
128土	SK125	189土	SK186	5住	SJ5	30溝	SD30	60土	SK60	121土	SK124	10井	SP1	10土	SK7
129土	SK126	190土	SK187	6住	SJ6	中世以降土塊		61土	SK61	122土	SK125	2井	SP2	11土	SK8
130土	SK127	191土	SK188	7住	SJ7	1土	SK1	62土	SK62	123土	SK128	3井	SP3	12土	SK9
131土	SK128	192土	SK189	平安孤立		2土	SK2	63土	SK63	124土	SK129	4井	SP4	13土	SK10
132土	SK129	193土	SK190	1孤立	SB1	3土	SK3	64土	SK64	125土	SK130	5井	SP5	14土	SK11
133土	SK130	194土	SK192	3孤立	SB2	4土	SK4	65土	SK65	126土	SK131	6井	SP6	15土	SK12
134土	SK131	195土	SK193	3孤立	SB3	5土	SK5	66土	SK66	127土	SK132	7井	SP7	16土	SK13
135土	SK132	196土	SK194	4孤立	SB4	6土	SK6	67土	SK67	128土	SK134	8井	SP8	17土	SK14
136土	SK133	197土	SK196	5孤立	SB7	7土	SK7	68土	SK68	129土	SK135	9井	SP9	18土	SK15
137土	SK134	198土	SK197	6孤立	SB22	8土	SK8	69土	SK69	130土	SK136	10井	SP10	19土	SK16
138土	SK135	199土	SK198	7孤立	SB23	9土	SK9	70土	SK70	131土	SK137	11井	SP11	20土	SK17
139土	SK136	200土	SK199	中世以降孤立		10土	SK10	71土	SK71	132土	SK138	12井	SP12	21土	SK18
140土	SK137	201土	SK200	8孤立	SB5	11土	SK11	72土	SK72	133土	SK139	13井	SP13	22土	SK19
141土	SK138	202土	SK201	9孤立	SB6	12土	SK12	73土	SK73	134土	SK140	14井	SP14	23土	SK20
142土	SK139	203土	SK202	10孤立	SB8	13土	SK13	74土	SK74	135土	SK141	15井	SP15	24土	SK21
143土	SK140	204土	SK203	11孤立	SB9	14土	SK14	75土	SK75	136土	SK142	16井	SP16	25土	SK22
144土	SK141	205土	SK204	12孤立	SB10	15土	SK15	76土	SK76	中世以降土塊		17井	SP17	26土	SK23
145土	SK142	206土	SK205	13孤立	SB11	16土	SK16	77土	SK77	1井	SE1	18井	SP18	27土	SK24
146土	SK143	207土	SK209	14孤立	SB12	17土	SK17	78土	SK78	2井	SE2	古墳南溝墓		29土	SK26
147土	SK144	中世以降井戸		15孤立	SB13	18土	SK18	79土	SK79	3井	SE3	1周	SR1	30土	SK27
148土	SK145	1井	SE1	16孤立	SB14	19土	SK19	80土	SK80	4井	SE4	古墳土塊		31土	SK30
149土	SK146	2井	SE2	17孤立	SB15	20土	SK20	81土	SK81	5井	SE5	中世以降溝		1溝	SD1
150土	SK147	3井	SE3	18孤立	SB16	21土	SK21	82土	SK82	6井	SE6	1溝	SD2	2溝	SD2
151土	SK148	4井	SE4	19孤立	SB17	22土	SK22	83土	SK83	7井	SE7	3溝	SD3	3溝	SD3
152土	SK149	5井	SE5	20孤立	SB18	23土	SK23	84土	SK84	8井	SE8	4溝	SD4	4溝	SD4
153土	SK150	6井	SE6	21孤立	SB19	24土	SK24	85土	SK85	9井	SE9	5溝	SD5	5溝	SD5
154土	SK151	7井	SE7	22孤立	SB20	25土	SK25	86土	SK86	10井	SE10	6溝	SD6	6溝	SD6
155土	SK152	8井	SE8	23孤立	SB21	26土	SK26	87土	SK87			7溝	SD7	7溝	SD7
156土	SK153	9井	SE9	中世以降雑列		27土	SK27	88土	SK88						
157土	SK154	10井	SE10	1掘列	SA4	28土	SK28	89土	SK89						
158土	SK155	11井	SE11	2掘列	SA5	29土	SK29	90土	SK90						
159土	SK156	12井	SE12	中世以降溝		30土	SK30	91土	SK91						
160土	SK157	13井	SE13	1溝	SD1	31土	SK31	92土	SK92						
161土	SK158	14井	SE14	2溝	SD2	32土	SK32	93土	SK93						
162土	D26-P1	15井	SE15	3溝	SD3	33土	SK33	94土	SK94						
163土	SK160	16井	SE16	4溝	SD4	34土	SK34	95土	SK95						
164土	SK161	17井	SE17	5溝	SD5	35土	SK35	96土	SK96						
165土	SK162	18井	SE18	6溝	SD6	36土	SK36	97土	SK97						
166土	SK163	19井	SE19	7溝	SD7	37土	SK37	98土	SK98						
167土	SK164	20井	SE20	8溝	SD8	38土	SK38	99土	SK99						
168土	SK165	21井	SE21	9溝	SD9	39土	SK39	100土	SK100						
169土	SK166	22井	SE22	10溝	SD10	40土	SK40	101土	SK101						
170土	SK167	23井	SE23	11溝	SD11	41土	SK41	102土	SK102						
171土	SK168	24井	SE24	12溝	SD12	42土	SK42	103土	SK103						
172土	SK169	25井	SE25	13溝	SD13	43土	SK43	104土	SK104						
173土	SK170	26井	SE26	14溝	SD14	44土	SK44	105土	SK105						
174土	SK171	27井	SE27	15溝	SD15	45土	SK45	106土	SK106						
175土	SK172	28井	SE28	16溝	SD16	46土	SK46	107土	SK107						
176土	SK173	29井	SE29	17溝	SD17	47土	SK47	108土	SK108						
177土	SK174	30井	SE30	18溝	SD18	48土	SK48	109土	SK109						
178土	SK175	31井	SE31	19溝	SD19	49土	SK49	110土	SK110						
179土	SK176	32井	SE32	20溝	SD20	50土	SK50	111土	SK111						
180土	SK177	33井	SE33	21溝	SD21	51土	SK51	112土	SK112						
181土	SK178			22溝	SD22	52土	SK52	113土	SK113						
182土	SK179			23溝	SD23	53土	SK53	114土	SK114						
183土	SK180			24溝	SD24	54土	SK54	115土	SK115						

IV 牛原遺跡の遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第11~13図)

G-13グリッドで発見した。竪穴の平面形はほぼ円形、柱穴と炉の配置から算定した主軸方位はN-52°-Eである。

覆土は黒褐色から暗褐色系土が大半を占め、下層ほど黄色味を増す。床面は、外周部がなだらかに傾斜しており、壁溝は認められなかった。

構造物は、炉跡と主柱穴、入口施設の支持孔を発見できた。炉跡は、中央北東寄りに地床炉が設けられている。主軸北寄りに第12図2の深鉢が埋設され、南寄りには同図1が打割の上並べられていたようである。また、掘り込みの南辺には棒状の石が横たえられていた。石は1点のみであるが、第3号住居跡との共通から、炉跡施設として扱われていたことがわかる。

柱穴は、一際太いP2~P5の4本が主柱穴となり、南方壁際のP1が入口施設になると考えられる。主要施設の調査後、拡張や建て替えを想定し、疑わしい土色の変化を逐一精査し、記録にとどめたが、図中で柱穴番号を付与しなかったこれらは、本住居跡に伴うものではなく、近世の所産(白抜き)や自然営力の結果と思われる。主柱穴、および入口部施設の覆土は、竪穴覆土と共通し、自然流入の状況が見てとれた。柱痕は発見できず、主柱穴に関しては掘削抜き取りが行われたものと判断できる。

遺物は、274点が出土した。このうち264点が土器で、炉出土の2個体のほかは埋設時の投棄・流入である。図示した27点は、勝坂中葉期の所産で、隆帯の圧着を兼ねた脇の縁取りは、押|や三角押など、点列施文手法で行うのが一般的である。様々な器種・型式が含まれているようだが、すべてにわたっての特定は困難である。

口縁部文様帯をもつものには1・2・4・7などがあるが、胴部にも類似横帯が帯開するのが見て取れるのは7の1点のみである。また、3・22は抽象文の系統、14~16は阿玉台系の影響を受けた在地系統の個体となるだろう。24・25は浅鉢の破片と思われる。

一方、10点が出土した石器類の内訳は、石鏃・石匙・磨石・凹石・敲石が各1、黒曜石の刮片類が2、砂岩の刮片が2、緑泥片岩の刮片が1であった。石匙は、中期遺跡で多いホルンフェルス製の大型粗製品である。

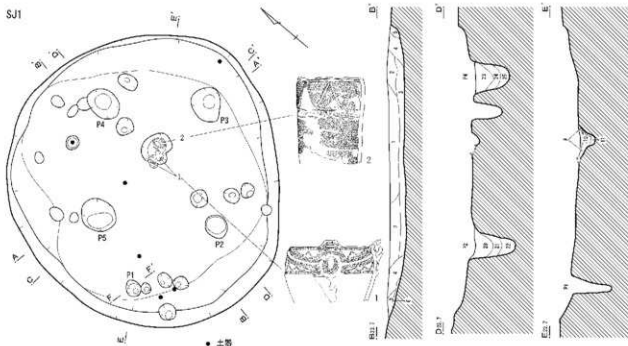
第2号住居跡 (第11・12図)

遺構確認時にG-15グリッドで炉跡と炉体土器を発見し、周辺を念入りに精査したが、これに伴うと考えられる柱穴や壁溝跡は見つからなかった。炉体に供された土器の系統から、おそらく無柱穴の小規模な住居跡であったと考えられる。

炉跡面の観察では、埋設土器の掘り方土(2層)が炉体上限にまで観察できた。したがって、周囲の炉跡部分は炉体土器がない状態で機能し、その後中央に土器が埋め込まれたと考えられる。4層は焼土ブロックを大量に含んでおり、第1次使用時の炉床、あるいはそれに近い部分と推定できる。また、3層は炉体設置までには埋まってはならないが、自然堆積か人為埋戻しかの判断はつかなかった。これに対し、1層に相当する部分は、炉跡使用時には開口していたと考えられる。

出土遺物は、炉に埋設された土器1個体のみである。28は、口縁部に4単位の隆帯貼付を施す阿玉台系の深鉢であるが、胎土に雲母が混入されていない。口縁部は押圧を加える棒状と、押圧のないY字状貼付が繰り返されるようだが、すべてが揃っていないため、確定はできない。

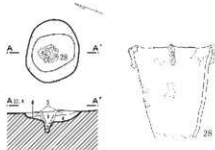
SJ1



- 第1号住居断面
- 1 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) 多く含む
炭化砂子 (1~2cm) 含む
 - 2 黒褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 含む
炭化砂子 (1~3cm) 少し含む
 - 3 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) ・ブロック (3~5cm)
・炭化砂子 (1~2cm) 含む
 - 4 褐色土 ローム砂子 (2~4cm)
・ブロック (3~5cm) 少し含む
 - 5 黒褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 多く含む
 - 6 褐色土 ロームブロック (3~7cm) 多く含む

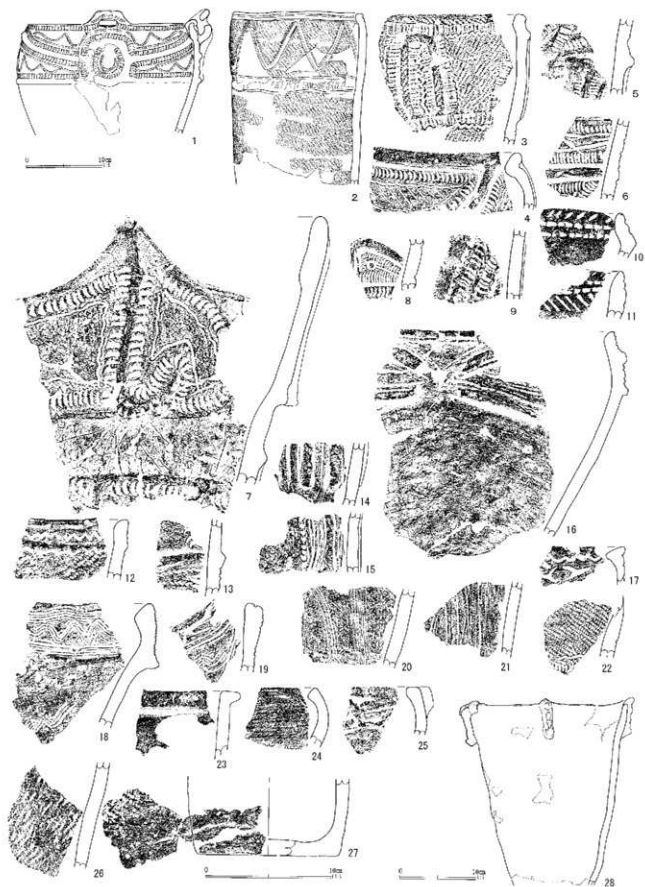
- 7 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm)
・炭化砂子 (1~2cm) 含む
- 8 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) 多く含む 粘土 (1~2cm)
- 9 黒褐色土 ローム砂子 (3~5cm) 多く含む
- 10 黒褐色土 粘土・炭化砂子 (1~2cm) 少し含む 炭層土
- 11 黒褐色土 ローム砂子 (3~4cm) 多く含む
ロームブロック (1~3cm) 含む
- 12 黒褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 多く含む
炭化砂子 (1~3cm) 含む
- 13 黒褐色土 ロームブロック (3~5cm) 含む
- 14 黒褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 多く含む
ロームブロック (1~3cm) 含む
- 15 黒褐色土 ローム砂子 (2~3cm) ・ブロック (3~5cm) 含む
炭化砂子 (2~4cm) 含む
- 16 黒褐色土 ロームブロック (3~5cm) 含む
- 17 褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 少し含む
- 18 褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 少し含む
- 19 褐色土 砂子層とほとんど含まない
- 20 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) ・ブロック (1~2cm)
- 21 褐色土 ローム砂子 (1~3cm) ・ブロック (1~2cm) 少し含む
- 22 褐色土 ほとんど砂子を含まない
- 23 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) 多く含む
ロームブロック (1~2cm) ・炭化砂子 (1~2cm) 含む
- 24 褐色土 ローム砂子 (1~2cm) ・ブロック (1~2cm) 少し含む
- 25 褐色土 ほとんど砂子を含まない
- 26 黒褐色土 ローム砂子 (1~2cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
炭化砂子 (1~2cm) 少し含む
- 27 褐色土 ローム砂子 (1~2cm) 含む

SJ2

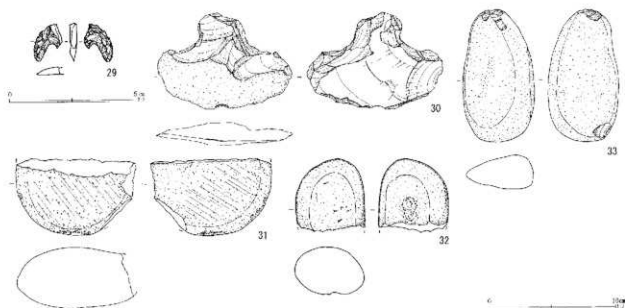


- 第2号住居断面
- 1 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) 少し含む 砂層土
 - 2 黒褐色土 ローム砂子 (1~3cm) ・ロームブロック (1~5cm) 含む 粘土層あり
 - 3 黒褐色土 ローム・粘土・炭化砂子 (1~3cm) 含む
 - 4 褐色土 ローム砂子 (2~4cm) 含む 粘土ブロックを多く含む

第11図 第1号・第2号住居跡



第12图 第1号(1)・第2号住居跡出土遺物



第13図 第1号住居跡出土遺物(2)

第3号住居跡(第14・15図)

E-11グリッドで発見した。長軸方向3.36m、単軸方向2.46m規模の楕円小竪穴に4本の支柱穴、さらには入口部の支持柱穴を備え、炉に土器を埋設し、炉辺施設を追加する、いささか窮屈な住居跡である。

竪穴形状および柱穴と炉の配置から算定した主軸方位はN-25°-E。壁に重複し、主軸に対して線対称になる2穴も発見したが、覆土から、明らかに近世期の所産であることが判断できた。

竪穴の覆土は、自然堆積の状況が見てとれ、中央上層の黒褐色から外周下層の褐色へと漸移的に変化する。床面は外周部がやや傾斜気味であるが、おおよそ平坦で、竪穴縦横の比率に則るよう、4本の支柱穴と、南辺で外壁に向かって傾斜する入口部施設が配置されている。

炉跡は、主軸北方の柱穴近くに偏在し、同方向に長い楕円の掘り込みが基調である。北寄りには第15図1の下半を裁断した深鉢を埋設し、これにもたせかけるように同図2の浅鉢片が逆位におかれていた。

この位置関係は、第1号住居跡での棒石と共通

し、意図的な設置であることが唱明できる。さらに、この土器片は分層貼付の蛇体文を配する浅鉢であるが、蛇体が中心になるよう慎重に打割されており、入り口から正視できるような角度が調節されている(図版3写真3・4)。小さな竪穴に不づり合いな施設配置とともに、この住居跡のただならぬ性格を表象しているかのようである。

遺物は、炉内に設置された土器2個体のほかに、覆土中より36点、P4中より1点の土器が出土した。拓影として図示した5点のほかに、みな小片で、埋没途上に入力したものと考えられる。

1は、口縁部に素文帯を配するものの、藤内期の典型的な深鉢である。胴部は幅広の文様帯が少なくとも2段配置されることがわかる。基本的には隆帯脇に爪形文と蛇行沈線文を沿わせ、三角文を展開させるが、上段はデフォルメされた平行四辺形と化している。これに対し、2は、既述したとおりの浅鉢である。短い粘土紐を逆U字に貼付し、向かって右側を変形させて蛇頭を表現している。さらに、3~5は勝坂系、6・7は阿玉台系の土器片である。また、覆土中より、黒曜石の小剝片も1点出土している。

第4号住居跡 (第16~20図・第3表)

H-9グリッドの表土掘削途中、大型の結晶片岩の上面を引っかけた。当初は板石塔婆が廃棄された井戸などと思ったが、覆土が縄文時代の特徴を示すとともに、広範囲にわたっており、土中にピンを刺したところ、弧状に展開する板石群の存在を確認した。そこで、柄鉢形敷石住居跡を前提に確認を繰り返し、精査に臨んだ。

調査の結果、住居跡は数次にわたって縮小を繰り返していたことが明らかになった。これを第Iから第III期に分ち、さらに、竪穴住居が曖昧な第I期の改築をA・Bに分割した。

竪穴の最終的な掘り上がりは、第17図左上に示したとおり、エラが張り、N-52-Eを指す主軸方向にややひしゃげた五角形の主体部に、やや太めの柄部が付属する。主体部中央には方形の掘り込みに円形の受熱痕が残る跡が存在し、外壁から0.5~0.6m内側に間断なく柱穴が巡る。大小が交互に並ぶ柱穴が形成する円は、主体部外形を反映し、主軸方向に0.3mほどひしゃげている。

張り出しとの連結部には対ピットが掘られていたが、繰り返された掘削養生によって双方が連結してしまい、両者の間にはわずかな稜線しか残っていない。対ピットは、位置的に独立しておらず、柱穴が形成する弧線の延長線上にある。

対ピットを結節点として、張り出しは4本の柱穴によって上部構造が支持されている。P33・P34とP40・P41は、それぞれ改築時のつけ替えであり、P35とP39は、そのまま維持されていたようである。これら張り出し柱穴を結ぶように壁溝が一部巡るが、不安定で、全周はしない。

張り出し中央には、さらに一段の掘り込みがあり、ほぼ軸線上に2穴、北にずれて1穴が設けられている。前者は一般の柄鉢形住居跡における柄部先端の埋設土器の位置に相当することから、土器こそ発見できなかったが、かつては埋設が存在していたと思われる。また、北の1穴は、用途は

不明だが、構築初期に目的を達し、その後の縮小時には無意味化していたと考えられる。

さらに、張り出しの突端には、短い壁溝状の掘り込みが追加されている。内側にもう一つ存在することが、この壁溝が確実な施設であることを示すとともに、改築の経過を証明する。

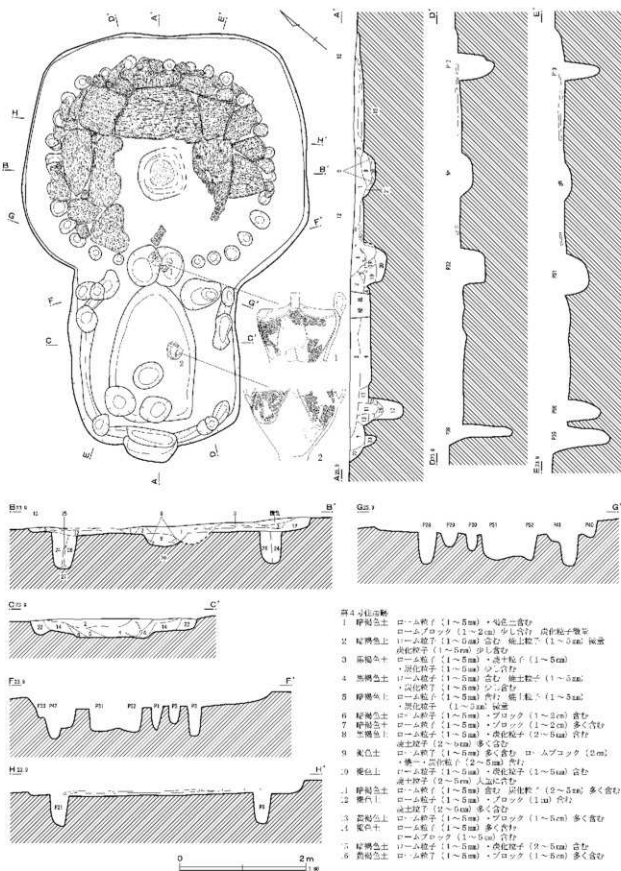
一方、敷石は、張出部から1点の石材も出土しなかったことから、主体部のみに施設されていたと考えられる。伊を囲む一帯は方形に土間が残り、外は柱穴列に合致し、主軸方向にひしゃげている。南側の1/4は敷石を欠失するが、現況床面下までの破壊がわずかなことから、取り去られたと解釈できる。また、対ピット左側では、開口部と同じ大きさの平石が斜めに突き刺さっていた。本来の位置ではないと判断し、測量図には残さなかったが、ピット上を塞いでいたのは確実である。

敷石の外側およびその下は、意図的に焼土をまぶした12層で埋戻されている。これは、敷石上位の覆土である1~7層とは容易に識別できた。また、主体部の柱穴内にも類似する24層が補填されており、敷石敷設に先立ち、柱の除去と埋戻しが行われたと考える。

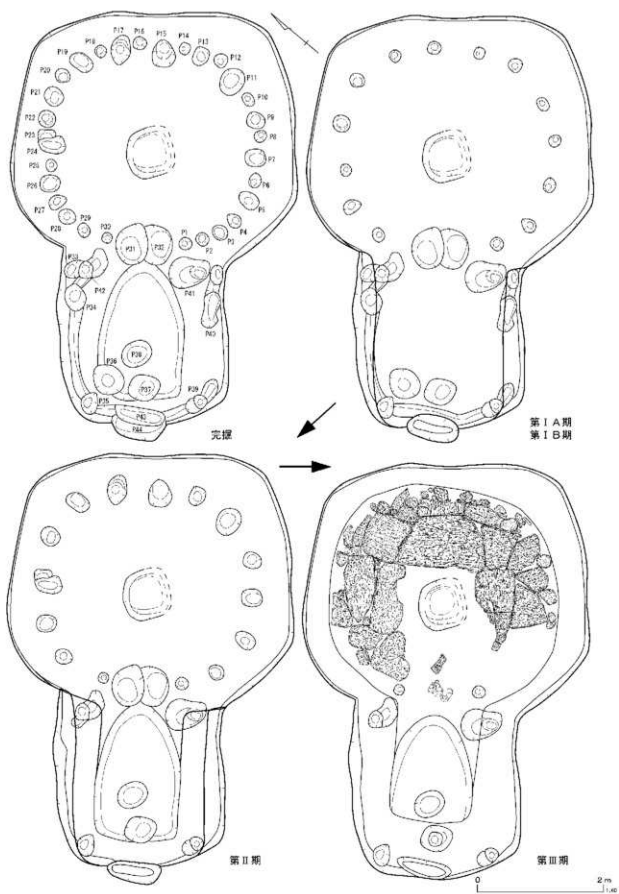
これに対し、柄部でも、やはり類似する埋戻し土の13・14層が確認できた。12層に比べると焼土粒子が少ないが、柄部の最終堆積土である2から6層と14層との差もブロックの量比と柄内土壌部の立ち上がりで容易に見分けることができる。13層は特にローム混入が多いが、柄部埋戻しに設定された11層の立柱を支えるための入念な埋戻しを反映しているのかも知れない。

また、6層と14層の関係のうち、6層上位は14層の上まで広がる。これは、13層が覆土最上部まで達していないことと共通しており、埋戻し部は竪穴外壁と同じ高さまで埋戻されるのではなく、鉢状に整えられていたと解釈できる。

さらに、埋戻しである14層の外側に堆積、あるいは壁溝を塞いでいる22層・23層は、ロームブ



第16図 第4号住居跡



第17图 第4号住居跡变迁图

ロックを多量に含んでおり、竪穴掘削に際して出た土をもって柄部を整形した痕跡とされる。こちらは雑壇で残されていたかは不明だが、柄部支柱のうち連結部分の2穴（P33・P40）は、すでに整形された柄部の外側に存在したと考えられ、それを加味すると、やはり竪穴外形からみて雑壇状に整えられていたと推定できる。

このような埋戻し過程の観察をもとに、前述のとおり、本住居跡の第ⅠからⅢ期を想定した。

第Ⅰ期は外周整穴掘削と2層・23層による柄部整形の段階である（第17図右土）。第ⅠA期・第ⅠB期は、この整形が竪穴掘削後即座に行われたか否かが不明なため、その前後をあてている。

主体部の柱穴は、掘り上がりのうち、小さい方だけが相当すると判断できるが、その根拠については第Ⅱ期でふれる。結果、対ピットとも1穴ずつ等距離で配置が整う。張り出し先端の短溝は、第Ⅸ章で示す主軸線上での外形とが跡との距離的案分関係から、初期から存在したと考えられる。

また、柄部先端の土器埋設用小穴は、P37があたりであったであろうが、土器は遺存していない。15-17層がその埋土と判断したが、とくに16層はハードロームを固めたようで、17層とあわせ、埋戻を抜いた際の乱れを感じさせない。逆に、16層は、第Ⅲ期に設けられた柱穴（11層）の柱受として13層・15層とともに養生されたともとれる。しかし、根拠を欠くため、第Ⅲ期に埋戻位置を変更する際に抜き取り埋戻されたと考えておきたい。

一方、主軸線上に位置しないP36は、第Ⅱ期・第Ⅲ期の柄部縮小の想定線にかかることから、第Ⅰ期でのみ機能したと判断できる。この小穴を認識した当初は、上屋構造を支える柱穴と思い線対称の位置にもう一つを探し求めたが、確認できなかった。明確な埋戻しや柱痕は認定できなかったが、封土されていたことは確実である。

後述するように、P37・P38の埋戻用小穴では、黒曜石やチャートの石鏝・削片・碎片類が出土し

ている。とくにP38でのチャート13点は、埋戻埋設の有無を別としても、人為的な所作を反映しているとしが考えられない。このことから、柄部先端への特別な思い入れが伺えるが、P36でも黒曜石の碎片が出土しており、この付近の3穴には類似する思い入れが込められていることがわかる。

その点では、同穴も埋戻用小穴といえないわけではないが、ここが柄部先端となることを示す柱穴や段差は見つかっていない。したがって、P36は、住居構築初期に埋納・埋設に共通する思い入れのもとに掘削され、削片や何らかの有機物を納めた後、即座に埋戻されたと解される。

これに対し、第Ⅱ期は、主として柱穴の組み替えと柄部の縮小についての改築が行われる。主体部の形態および床高は、全体を埋戻した12層が第Ⅲ期での敷石敷設面を整える目的が伺えることから、外周の埋戻しもなく、第Ⅰ期と同じ外形と深さを保っていたものと考えられる。

柱穴は第Ⅰ期の径の小さなものから、その間に新たに掘削した大きいものへと組み替えられる。大小をそれぞれの期にあてる根拠は、第Ⅸ章で示したとおり、第Ⅲ期での敷石設定に大きい穴の名残が影響しているとみられるからである。

敷石を残した段階では、識別が容易な柱穴を掘りきり、写真撮影などを実施している。結果的に1箇所確認があるものの、第Ⅱ期の柱穴だけを掘ることとなった。大小の覆土差は歴然としており、小さい柱穴はロームブロックが多く混じる褐色土で、確認しづらく、焼土粒子の混和が少ない。これに対し、大きい柱穴は焼土粒子の混和で12層と共通する24層とともに、立柱時の補填土である26層の暗褐色が確認を容易にした。

土層解釈の相場からすれば、24層より黒味を帯びた26層の方が柱痕ということになるのだろうが、24層が柱抜き取り後、即座に焼土粒子をまぶした特別な埋戻し土で満たされたと仮定すれば、土色の逆転もあり得ることになる。

このように、第III期への連続性を加味すると、大きい柱穴を第II期にあてるのが妥当である。

主屋部の柱穴は、第I期と同様な間隔と配列を保ちながら奥壁の中心に柱穴が移動し、反対に、対ピット部では両者の間にその位置取りが与えられる。また、張出部では、連結部にぶら下がるような分銅形の土壌が掘削され、その周囲が14層で埋戻され、細く短くなる。柄部先端の埋戻は維持されたようで、第I期の柄部先端にあった短溝は、埋戻しにより見かけの柄部と離れてしまったように見えるが、第III期での同種構造物間の位置取りの共通性を加味すると、埋戻されずに独立して機能を果たしていたようである。

先にもふれたが、14層による埋戻しは、竪穴の深さすべてを覆ったわけではなく、竪穴外形を縮小するには至らず、雑壇の外に当初の掘り方壁が残されていたと想定できる。これに伴い、張出部構造物を支える4本の柱も、周囲の埋戻しに関わらずそのまま維持されたと推定できる。

さらに、第III期は主屋部外周と柄部先端を縮小し、柱穴はすべて埋戻される。第IX章に示した敷石規格から、柱は計画的に分配された台石上に立てられたと考えられる。放射溝置の中心は主軸線上で北にずれる。

竪穴掘削当初は、奥壁と柱配置の中心であった炉跡、そして柄部先端との比が1:2であったものが、放射溝置の中心が炉跡からずれた結果、1:3に変化する。同様に、柄部の幅は当初の半分になり、対ピット間を主屋・柄部の結節点と見た場合、柄部の長さは2/3となる。

第III期に際しての埋戻しも、第I期・第II期と同様、旧来の雑壇を拡張するように行われたことが13層の遺存高より証明できる。したがって、柄部上屋の支持柱も主屋の柱とは異なり、取り外されずに継続したと考えられる。

柄部先端の短溝は、柄部の縮小に伴い土器埋設部とともに移し替えられているが、第II期での位

置関係を保ち、雑壇上に独立して機能している。加えて、旧埋戻しには新たに小規模な柱穴が設けられ、13層はその支持も兼ねている。

埋戻は見つからなかった。だが、埋土からは13点のチャート碎片が出土した。特定の位置にまつまっていたわけではないので、埋戻の際に振りまいたと考えられる。

結節部の対ピットは20層によって半ばまで埋戻され、胴部下位を切断された第19図1が伏せて埋められていた。ただし、裏込となる19層は、埋戻しのはずだが、土器内の18層と類似しており、下位の20層とは極端に特徴を異にする。20層は第II期にすでに埋戻されていたともとれる。

また、18層・19層の類似からすると、伏襲は内部も埋戻され、埋戻のように切断面が球面上に露出していたと考えられる。だが、古い攪乱の1層によって破壊され、散乱した状態で出土したため、詳細は不明である。

この1層は、近年の攪乱とは異なり、明確な遺構状ともならない。敷石を欠く主屋部の南東では床面下まで及ばず、そもそも敷石がなかった炉や基部埋襲付近ではこれが深く及んでいることから、敷石の回収を目的とした掘削痕と考えられる。堆積状況もしっかりしていることから、この住居跡の存在と構造を認識している時代、すなわち同時代のうちに掘削されたと判断できる。

同じように破壊された炉跡だが、掘り方の三方が遺存し、隅丸方形の外形は復元できる。21層の掘り方を除く8から10層が覆土だが、最下の10層は最初期、もしくは炉使用時の堆積と考えられる。この10層の分布と同じ円形に炉床が受熱赤化しており、周囲の斜面部にはこれが及ばない。

このことから、初期には炉外壁に熱が及ばない埋設土器や石皿の遮蔽物が備わっていたと解せる。受熱部が平に近いことから胴部下半を切断した大型土器が埋められていた可能性が強い。9層は21層と類似し、上下に比べて極端に焼土粒子

が少ない。この敷設物の除去に際して裏込の21層が崩落した痕跡ととらえることもできる。

また、8層が自然堆積の状況であることから、炉体土器は第III期より前に抜かれ、同期では8層下位を炉床とした可能性も考えられる。

敷石は、ガサ跡を避け、かつ以前の柱穴列の範囲に合わせて敷設されている。周囲は雑壇の12層で縁取られ、下位も同層で石材の高さを調節している。敷石を境に、それ以降に自然堆積した2層から7層は黒褐色から暗褐色系土で占められ、褐色の12層とは歴然とした差が認められる。

第3表に示したとおり、遺存した敷石の面積は5.596㎡で、想定される往時の敷石面積7.272㎡の77%にあたる。現存する敷石の総重量は472.2kgであることから、面積比を援用して当時の敷石総重量を導くと、613.6kgと推定される。

敷石石材のうち、結晶片岩は、原産地で切り出されたものや、産地の河川で採取され、敷石を目的として搬入されたと考えられる。その重量と比率を計算すると、434.2kg、92.0%となる。これらにより、搬入された結晶片岩の総重量を推定すると、564.2kgという膨大な重量となる。

敷石の石材は、大きく4種類に分けられる。もっとも多いのが岩盤から切り出した結晶片岩であり、面積的には敷石の大部分を占める。主要箇所には絹雲母片岩が覆され、発見時には土中の鉄分が沈着し一部赤化していたが、往時は銀色に輝き屋内に華やきをもたらしていたであろう。次いで多いのが、同じく切り出された緑泥片岩であり、絹雲母片岩が形づくるコの字状配置の結節点などに組置かれ、彩りを添える。

次に、第IX章で詳しく説明するが、柱を受けるためにあらかじめ配置された20~30cmの平石類がある。石材に統一性はなく、台石などの石器や既入手の結晶片岩なども転用されている。とくに厚く割れにくいものがこれにあてられている。

切り出し石の外周、柱受の平石類の不足は、搬

入された端材や既入手の石材、石器類で埋められる。思い入れを反映しているのか、奥壁近くに石器類の充填が多く、第20図19のような磨製石斧も充填に利用されていた。

そして最後に、切り出し石のずれを防ぐために石間を穴埋めする玉石や片岩端材がある。

図版6写真1に示したように、切り出し石の一部には、柱受石の位置取りを優先させるための加工痕や平石を分割するための穴なども見て取ることができた。このような調整の痕跡は、数こそ少ないものの、入念な計画のもとに敷石敷設が行われたことをものかたっている。

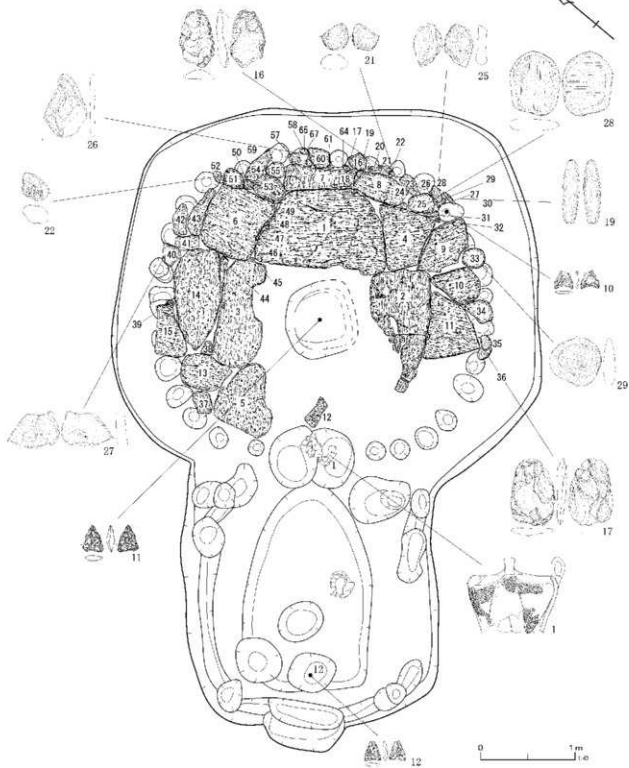
一方、遺物は、111点が出土した。このうち土器は75点であり、第III期の伏壁にされた第19図1を除き、すべてが最終覆土中の出土である。この中で、同図2は、柄部の中央下層で形を保ったまま出土したが、埋設の痕跡はなかった。

第19図1は緩い四単位波状口縁の一端に橋状の把手が取り付けられる深鉢で、2は鉢形器形の両耳壺である。双方とも連続波状文を基調とした沈線による区画文を展開するが、1は区画が曖昧で、2は大単位化している。7の縦位区画を除き、拓影の大半も同様な構成で、3~6は沈線、7・8は微隆起で施文帯を区画する。また、9は橋状把手部の破片である。

これに対し、石器は、覆土中で出土したものの他に、第3表に示したように、敷石に転用されていたものが10点あり、これが、本住居跡における石器類の出土比率を嵩上げしている。

また、柱穴の覆土より石鏝や破片類が多く出土している。たとえば、P11ではチャートの石鏝・破片がそれぞれ1点、敷石下で黒曜石の破片が3点などであるが、張出部の柱穴では、P36で黒曜石剥片1、破片2、P37で黒曜石剥片1、P38でチャート破片13点が出土するなど、立柱時や、土器の埋設時にこれらの剥片・破片類をちりばめたとも考えられる。

- | | | | | |
|---------|------------------------------------|--------------------|---------|-----------------------------------|
| 17 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む | ロームブロック (1~5cm) 含む | 26 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1cm) 含む |
| 18 緑褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) 含む | 底土粒子 (1~5mm) 少量 | 25 黄褐色土 | 底土粒子 (2~5mm) 多く含む |
| 19 白褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1~5cm) 含む | | 24 黄褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1~2cm) 多く含む |
| 20 褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む | ロームブロック (1~3cm) 含む | 23 黒色土 | ローム・粘土粒子 (1~5mm) 含む |
| 21 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1~5cm) 多く含む | | 22 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1~3cm) 多く含む |
| 22 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む | | 21 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む |
| 23 黒色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む | | 20 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む |
| 24 黄褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む | | 19 白褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む |
| 25 黄褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1~5cm) 含む | | 18 緑褐色土 | ローム粒子 (1~5mm) 含む |
| 26 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) ・ ブロック (1cm) 含む | | 17 赤色土 | ローム粒子 (1~5mm) 多く含む |
| 27 黄褐色土 | ローム・粘土粒子 (1~5mm) ・ 炭化粒子 (1~5mm) 少量 | | | |



第18図 第4号住居跡敷石および出土状況

第3表 第4号住居跡数石計測表 (cm/kg)

No	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	取得	備考
1	138.0	85.0	5.5	102.4	網雲母片岩	切出	経年赤化
2	130.0	64.5	4.0	29.4	網雲母片岩	切出	経年赤化
3	114.0	50.5	4.0	33.7	網雲母片岩	切出	経年赤化
4	45.0	70.5	3.0	20.7	点紋麻面石片岩	切出	一部経年赤化
5	78.0	64.5	3.5	18.4	緑泥石片岩	切出	一部経年赤化
6	66.5	74.0	6.0	65.0	網雲母片岩	切出	一部経年赤化
7	26.5	74.0	3.0	11.2	網雲母片岩	切出	経年白化
8	56.0	30.5	2.5	9.0	網雲母片岩	切出	経年赤化
9	60.5	42.0	3.0	12.2	緑泥石片岩	切出	33を避け加工、一部経年赤化
10	50.0	38.5	3.0	12.8	網雲母片岩	切出	
11	58.0	72.5	3.5	19.6	点紋麻面石片岩	切出	分割痕2ヶ所、一部経年赤化
12	32.0	14.5	2.5	1.5	網雲母片岩	切出	経年白化
13	53.5	34.0	3.0	9.6	網雲母片岩	切出	
14	105.5	52.0	4.0	48.0	網雲母片岩	切出	
15	34.0	56.5	4.0	12.0	網雲母片岩	切出	経年白化
16	19.5	18.0	2.5	1.1	網雲母片岩	切出	案分石
17	6.5	4.0	3.0	0.1	チャート	拾得	円礫
18	7.0	4.0	1.5	0.1	網雲母片岩	拾得	破砕礫
19	9.5	5.0	4.0	0.2	砂岩	拾得	円礫破損
20	10.5	4.5	1.5	0.1	緑泥石片岩	拾得	破砕礫
21	15.3	9.0	2.7	0.5	蛇紋岩	転用	砥石転用石弁(逆か)、19図16
22	8.0	4.0	3.5	0.1	チャート	拾得	円礫
23	24.0	14.5	4.0	2.5	チャート	転石	
24	7.1	7.0	3.6	0.2	四稜岩	転用	磨石破損、20図21
25	28.5	22.0	5.1	5.1	安山岩	転用	案分石、台石完形、20図28
26	7.0	4.5	2.5	0.1	砂岩	拾得	円礫
27	4.5	3.5	1.5	0.1	チャート	拾得	円礫
28	19.0	12.8	4.8	12.6	緑泥石片岩	転用	石皿破損、裏面凹石、20図25
29	6.5	4.0	2.0	0.1	ホルンフェルス	拾得	破砕礫
30	16.7	4.5	3.3	0.5	変理燧岩	転用	盤状磨製石弁完形、20図19
31	17.5	7.5	2.5	0.5	緑泥石片岩	拾得	破砕礫
32	6.5	3.5	3.0	0.1	砂岩	拾得	円礫
33	22.6	20.9	5.0	3.7	安山岩	転用	案分石、凹石完形、20図29
34	32.5	23.0	5.5	6.0	紅麻石片岩	転石	案分石
35	14.5	13.0	3.0	1.1	砂岩	拾得	円礫
36	17.7	11.7	2.1	0.5	緑泥石片岩	転用	打製石弁、19図17
37	26.0	18.5	5.5	4.1	石墨片岩	拾得	案分石、破砕礫
38	15.5	15.0	7.5	1.2	砂岩	拾得	円礫破損
39	8.0	6.5	1.5	0.1	蛇紋岩	拾得	破砕礫
40	17.9	25.3	5.0	3.3	砂岩	転用	台石・凹石破損、20図27
41	26.0	14.0	3.0	2.4	網雲母片岩	切出	案分石
42	32.5	14.0	1.5	1.3	緑泥石片岩	切出	
43	54.0	15.5	3.0	4.1	緑泥石片岩	切出	
44	15.0	8.0	1.5	0.4	網雲母片岩	切出	経年赤化
45	12.0	4.5	2.0	0.1	ホルンフェルス	拾得	円礫破損
46	9.0	3.0	1.5	0.1	緑泥石片岩	拾得	円礫
47	4.5	4.5	2.5	0.1	チャート	拾得	円礫
48	6.0	5.0	3.5	0.1	チャート	拾得	円礫
49	5.0	4.0	1.5	0.1	土器	拾得	勝板式
50	15.0	12.0	2.5	0.4	緑泥石片岩	切出	
51	22.0	18.5	2.0	0.9	緑泥石片岩	切出	案分石
52	15.0	8.5	1.5	0.1	緑泥石片岩	切出	
53	34.5	23.5	2.5	6.0	緑泥石片岩	転石	一部経年赤化
54	42.0	17.5	1.5	1.8	緑泥石片岩	切出	
55	16.5	18.0	3.5	1.7	緑泥石片岩	転石	一部経年赤化
56	5.0	3.5	3.0	0.1	チャート	拾得	円礫
57	13.5	12.0	2.0	0.3	緑泥石片岩	拾得	破砕礫
58	8.5	6.0	2.0	0.2	砂岩	拾得	円礫
59	7.4	6.8	4.8	0.3	砂岩	転用	磨石破損、20図22
60	27.9	19.2	2.3	1.5	緑泥石片岩	転用	案分石、石皿破損、20図26
61	6.5	3.0	2.5	0.1	チャート	拾得	円礫
62	4.5	3.0	2.0	0.1	チャート	拾得	円礫
63	7.0	3.5	3.0	0.1	チャート	拾得	円礫
64	6.5	3.0	3.0	0.1	砂岩	拾得	円礫破損
65	4.5	3.0	2.0	0.1	チャート	拾得	円礫破損
66	6.5	3.5	2.0	0.1	砂岩	拾得	円礫破損
67	5.5	3.5	3.0	0.1	チャート	拾得	円礫

【計測値】

- 結晶片岩は獣に沿った方向を長さとして計測
- 片岩を除く石材は長軸を長さとして計測
- 石器は完形・破損に関わらずとして計測

【石材の特徴】

- ◎1～3・8・44＝同一岩
- ◎4・11＝同一岩
- ◎7・12・15＝同一岩

【石材調達の分類】

- 切出…原産地で切り出し
- 転石…原産地近くの河川で採取
- 転用…集落内の石器類を転用
- 拾得…集落内の廃材利用

【備考凡例】

- 赤化…土中の鉄分が節理に浸透沈着したもの
- 白化…風化により劣化し変色したもの
- 案分石…数石敷設の目安として配された石

【敷石面積の推定 (㎡/%)】

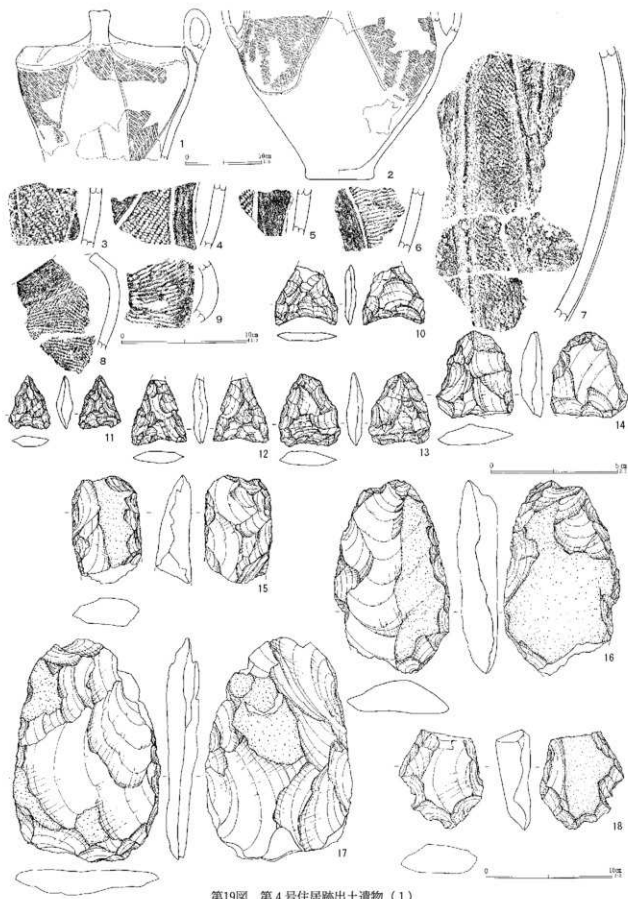
遺存部面積	5.596 (A)
欠損部推定面積	1.676 (B)
推定敷石総面積(A+B)	7.272 (C)
遺存部面積比(A/C)×100	76.953 (D)

【敷石重量の推定 (kg/%)】

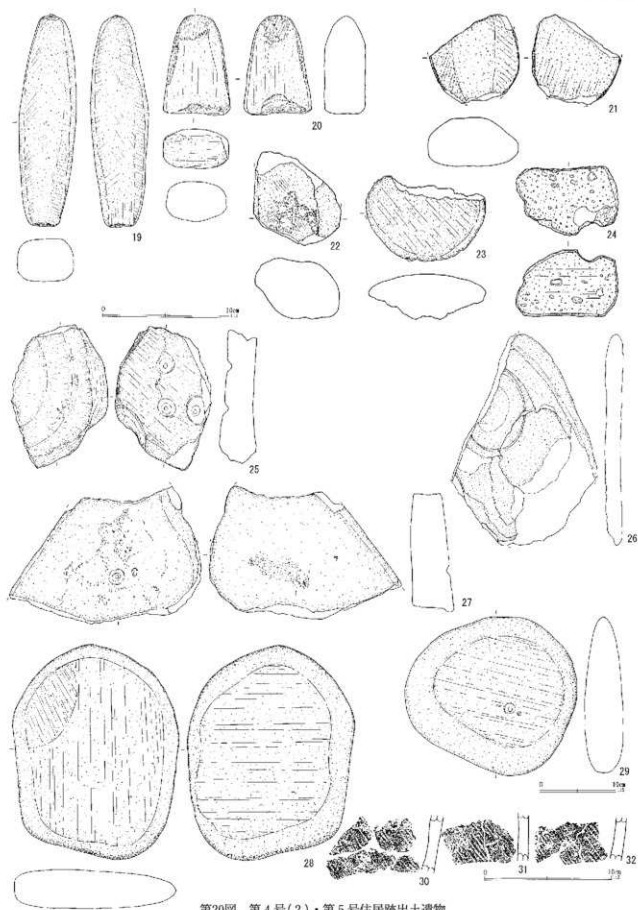
遺存敷石重量	472.200 (E)
推定敷石総重量(E)×100/D	613.624 (F)

【搬入石材重量の推定 (kg/%)】

遺存搬入材重量(切出・転石計)	434.200 (G)
遺存搬入材重量比(G/F)×100	91.953 (H)
推定搬入材総重量(F)×H/100	564.243 (I)



第19图 第4号住居跡出土遺物(1)



第20图 第4号(2)・第5号住居跡出土遺物

10～14は石鏝類であるが、14は側縁加工が行き届かないことから、未製品と考えられる。いずれも凹基、あるいは平基で、側縁が彫らむ傾向がある。また、15～18は打製石斧であるが、敷石に転用されていた16・17は蛇紋岩や緑泥石片岩を荒く加工した粗野なもので、躁野的な性格が強いものである。さらに、18は使用時の破損が刃部の全体に及んでいる。

第20図に示した石器11点は研磨加工の石器類である。このうち19・20は磨製石斧であるが、19は先端が細る壺状の石器で、20は破損刃部を平坦に細加工し、研磨具として転用している。

これに対し、21以下の加工具は、23・24を除く7点が敷石に供されていたものである。21～23が磨石、24が研磨具として使用されたと考えられる軽石、25・26が石皿、27・29が据置型の凹石、28が磨痕残る台石である。大型品の26・28・29は敷石の規格割り振りを案分する柱受石として優先的に転用されている。

第5号住居跡 (第20・21図)

第3号住居跡北東の谷寄りのD・E-12グリッドで検出したが、斜面部であるため、炉跡の残骸と柱穴1基を発見したにすぎない。

炉跡は、焼土粒子を含むわずかな黒褐色土が遺存してのみであったが、立位の土器が出土したことから、埋設土器の一部と考えられる。

これに対し、柱穴は柱痕までもが残るが、対応するものは存在しなかった。炉と柱穴の間隔は、

第3号住居跡の炉と入口柱穴と同等であることから、中央の炉と入口柱穴を結ぶ線を中軸とする楕円の壁穴が伴っていたと推定できる。

炉内から出土した土器は、1個体分の深鉢胴部である。散乱して出土し、割れ口の風化著しいため、接合はかなわなかった。同一個体の3点を第20図に掲げる。石器類は出土していない。

30～32は、縦位施文の単節LRが浅く施文されている。後二者には綾織文の圧痕も認められる。

第6号住居跡 (第21図)

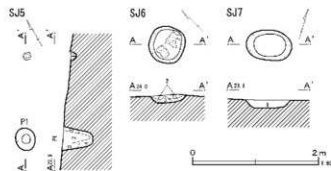
K-11グリッドで検出した。焼土跡を発見後、周囲を探したが、確定できる構造物は見つからなかった。炉跡の覆土は焼土粒子混じりの褐色土で占められ、下に焼土塊が分布していた。

炉内からは黒曜石の小削片2点と、ホルンフェルスの小削片1点が出土したのみである。構築期を判定する土器を欠くが、集落の分布状況から、中期前半にあたるものと推定できる。

第7号住居跡 (第21図)

調査区北東方のE-16グリッドで発見した。遺構確認時に焼土跡を発見し、縄文中期の住居跡・同早期の屋外炉の両面から精査を進めたが、確信には至らなかった。今回の調査では早期後葉の遺物は限られており、環状分布からはずれるが、中期住居跡の炉である可能性が高い。

炉跡の覆土は暗褐色土で占められ、中央下層に焼土粒子が多く分布するが、明確な炉床は形成されていない。遺物は、出土しなかった。



- 第5号住居跡
- 1 黒褐色土 焼土粒子 (1～3mm) ・ロームブロック (3～5cm) 少し含む
 - 2 赤褐色土 ローム粒子 (1～3mm) ・炭化灰 (1～3mm) 含む 粘板
 - 3 褐色土 ローム粒子 (1～3mm) ・ロームブロック (1～3cm) 含む 割れ方
 - 4 黄褐色土 ロームブロック (3～5cm) 含む 割れ方
- 第6号住居跡
- 1 褐色土 ローム粒子 (1～3mm) ・ブロック (1～3cm) 少し含む 焼土粒子 (3～5mm) 大量に含む
 - 2 褐色土 ローム粒子 (1～3mm) 含む
 - 3 赤褐色土 ロームブロック (1～3cm) ・焼土粒子 (3～5mm) 多く含む 焼土層
- 第7号住居跡
- 1 暗褐色土 焼土粒子 (2～5mm) 含む 中央に多く分布

第21図 第5号・第6号・第7号住居跡

(2) 集石土壇

牛原遺跡では、31基の集石土壇を調査した。これらは、調査区内では、いくつかか至近に分布して群を形成しながら竪穴住居跡と重なり合うような弧状に展開しており、同期の土壇とともに環状分布の主体を担っている。

覆土中には礫が含まれているが、その大きさと数はさほど多くない。また、集石土壇でよく見られる壇底や側壁での大石による縁取りや受熱による赤化も見あたらない。ただ、被熱によって破砕した礫が含まれ、他の土壇とは明らかに異なる、ひととき黒い覆土が各壇に共通することより、集石土壇と判断した。

また、まとまった礫の出土が見られないもの、覆土に共通するいくつかの土壇も、今報告では集石土壇として扱った。

これからは、縄文時代後期初頭の土器も出土しているが、木の根による攪乱が著しいことと、環状分布の統一性、覆土の共通性から、すべて中期前半に構築されたものと考えている。

第1号集石土壇 (第22図)

H-13グリッドで検出した。土壇掘り方の平面形態は円形、断面形態は鍋底形である。覆土は、中央部が黒褐色系の土で占められ、外周部がやや黄色味を帯びる。礫は中央の上層付近で多く含まれていた。

出土した礫は、総数で104個、3200gの重量であった。平均の礫大は4cm程度で、総重量を個数で割った1個あたりの重量は30.8gとなる。破砕率は約60%で、石材はチャートが84.6%、そして砂岩が11.5%とこれに次ぐ。その他の石材が3.8%あるが、個数では4個と少ない。

遺物は、出土しなかった。

第2号集石土壇 (第22・24図)

G-13グリッドで検出した。土壇の平面形態は円形、断面形態は鍋底状となる。覆土は、上層が黒褐色系土で占められ、下層ほどに黄色味を増す。

礫の大半はこの上層に含まれている。

出土した礫は総数で105個だが、破砕率が約90%に達するため、平均22.9gと、粒が小さいものが多く、総重量は2400gであった。平均の礫大は3cm程度で、石材はチャートが88.6%で、砂岩の9.5%がこれに次ぎ、その他の石材が1.9%であった。一部の礫には煤が付着し黒化していた。

遺物は、第24図1に示した補修孔ある勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したのみである。

第3号集石土壇 (第22図)

G-13グリッドで検出した。土壇部の平面形態は円形、断面形態は鍋底状である。覆土は、上層が黒褐色系土で占められ、礫の大半がこの土層に含まれていた。

覆土中から出土した礫は、総数で229個あった。破砕率が約90%に達し、礫大が3.5cm程度だが、総重量は検出集石土壇のなかで第13号に次いで多い3500gに達した。石材はチャートが87.8%で、砂岩の9.6%がこれに次ぎ、その他の石材が2.6%であった。煤が付着し黒化した礫が多かった。

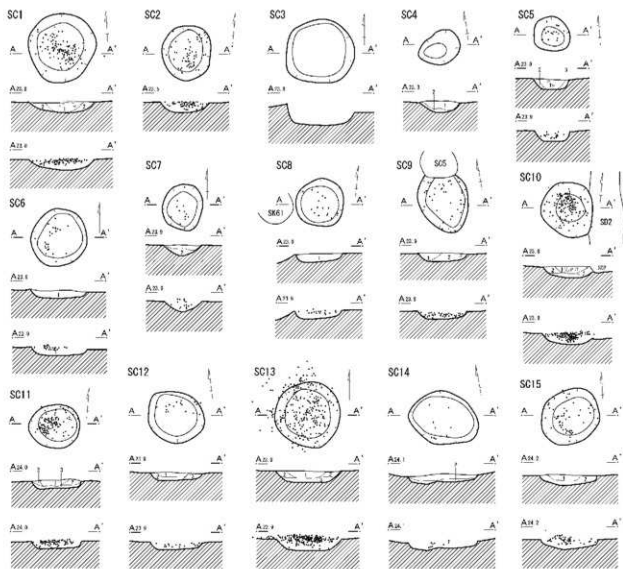
遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が4点出土したが、図示できるものはなかった。

第4号集石土壇 (第22・24図)

F-13グリッドで検出した。土壇の平面形態は楕円形、断面形態は緩やかな傾斜の椀状となる。覆土は、上層が黒褐色系土で占められ、下層の一部に崩落した黄褐色土が堆積する。礫の大半は上層に含まれている。

覆土上層からは17個の礫が出土した。平均3cm大だが、80%が受熱破砕している。総重量は1000g、大きな石が紛れていたため、1個平均では58.8gと発見した集石土壇ではもっとも重い。石材は、チャートが64.7%、さらに砂岩が23.5%とこれに次ぐ。他の石材が11.8%と比率が高い。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が10点と、砂岩製の打製石斧が1点出土した。第24図2は勝坂系、3・4は阿玉台系の土器片である。いずれ



第1号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~4mm) 含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 (1~2mm) 少し含む ロームブロック (2~4mm) 含む
- 第4号集石土壌
- 1 暗褐色土 ロームブロック (1~2mm) + 炭化粒子 (1~2mm) 含む
 - 2 黄褐色土 ロームブロック (2~4mm) 含む

第10号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~4mm) + ブロック (3~6mm) 含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) + ブロック (1~3cm) 含む
- 3 黄褐色土 ロームブロック (3~5mm) 含む

第6号集石土壌

- 1 暗褐色土 暗褐色土ブロック含む ローム粒子 (2~5mm) 多く含む
- 2 ロームブロック (2~6mm) 含む

第7号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) + ブロック (1~3mm) 含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) + ブロック (1~3mm) 含む

第8号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (3~6mm) + ブロック (1~3cm) 含む

第9号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) 含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) + ブロック (3~6mm) 多く含む

第10号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~5mm) 含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (2~5mm) 多く含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (2~5mm) 大量に含む ロームブロック (2~3cm) 含む

第11号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~4mm) 多く含む ロームブロック (1~2cm) + 炭化粒子 (1~3mm) 含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) 含む ロームブロック (1~3cm) 少し含む
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) + ブロック (1~3mm) 多く含む

第12号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (1~3mm) + ブロック (1~3mm) 含む
- 炭化粒子 (2~4mm) 多く含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) 含む ロームブロック (3~5cm)
- 3 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) 多く含む

第13号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~4mm) + ブロック (1~3mm) 含む
- 炭化粒子 (3~5mm) 多く含む

第14号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム + 炭化粒子 (3~5mm) 多く含む
- ロームブロック (1~3mm) 少し含む
- 2 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) + ブロック (3~6mm) 多く含む

第15号集石土壌

- 1 暗褐色土 ローム粒子 (3~5mm) 含む ロームブロック (3~4cm) 多く含む
- ローム下土 (3~5mm) 多く含む
- 2 暗褐色土 ロームブロック (3~5mm) 大量に含む



第22図 集石土壌 (1)

も点列系の工具施文によって文様が描かれている。また、5は打製石斧で、厚い一次削片を用いるなど、礫器的に加工されている。

第5号集石土壌 (第22図)

H-12グリッドで検出した。第9号と重複するが、その部分が少なく、先後は確認できなかった。土壌の平面形は円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、上層が黒褐色系土で占められ、下層壁際に向かい黄色味を増す。出土礫の大半は黒褐色土中に含まれていた。

出土した礫は24個である。平均3cm大ですべて受熱により破砕している。総重量は500g、1個あたりの重さは20.8gであった。石材に砂岩はなく、91.7%がチャート、8.3%がその他の石材で占められていた。

遺物は、出土しなかった。

第6号集石土壌 (第22図)

H・I-12グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は鍋底状となる。覆土は褐色土が主体だが、掘り込みが浅いことから、下位の層のみが遺存しており、往時の上層には黒褐色系土が堆積していたものと考えられる。ほとんどの礫は、確認面で出土した。

本城からは23個の礫が出土したが、第5号集石土壌と似通った傾向を示す。1個あたり21.7gの礫は平均3cm大で、すべて受熱破砕している。総重量は500g、石材はチャート82.6%、砂岩8.7%、他の石材が8.7%の構成であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点出土したが、図示できるものはなかった。

第7号集石土壌 (第22図)

I-12グリッドで検出した。第61号土壌と重複するが、掘り込みが浅く、先後の半断がつかなかった。土壌掘り方の平面形態はほぼ円形、断面形態は緩やかな壁面傾斜の椀状となる。覆土は自然形成と見られる堆積で、下層ほど黄色味を増す。礫の出土は上層が主体だが、点数の割には上下のば

らつきが大きい。

出土した礫は平均大3cmが14個と少なく、総重量で300g、1個あたりでは21.4gであった。約60%が受熱のため破砕している。石材はほとんどがチャートで、92.9%、砂岩はなく、その他の石材が1点7.1%の構成であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したが、図示できなかった。

第8号集石土壌 (第22図)

I-12グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は鍋底状だが、掘り込みが浅く、最下の褐色土のみが残されていた。礫の出土も確認面での採集が大半であった。

出土した礫は平均大4cmのものが16個であった。約90%が受熱破砕しているこれらの総重量は400g、1個あたりでは25.0gであった。石材は、チャートが81.3%、砂岩が6.3%、その他の石材が12.5%であった。

遺物は、加増利E系の土器が3点出土したが、混入と考えられる。

第9号集石土壌 (第22図)

H-12・13グリッドで検出した。前述のとおり、第5号集石土壌と重複するが、先後は確定できなかった。土壌の平面形態は楕円形、断面形は鍋底状だが、掘り込みが浅い。覆土は、暗褐色系土が西側下位まで堆積しており、壙底の近くまで礫の出土がみられた。

礫はすべて受熱しており、2cm大に破砕している。40個が出土したが、総重量は300g、1個あたり7.5gであった。石材は、チャートが95.0%、砂岩が5.0%、他の石材は出土しなかった。

遺物は、図示不可能な勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したにすぎない。

第10号集石土壌 (第22・24図)

G-12グリッドで検出した。中世道路跡の倒溝である第2号溝跡に一部破壊されているが、確認の大勢に影響はない。土壌の平面形態は円形、断

面形は鍋底状である。覆土は、上層中央に暗褐色の1層が、西側と下層には褐色土が堆積していた。礫は、主として1層から出土しているが、中央では下位にも及んでいる。

覆土中からは、平均4cmの礫168個が出土した。総重量は3100g、1個あたりでは18.5gとなる。約70%が被熱破砕しており、一部は煤の付着で黒化している。石材は、チャート89.9%、砂岩5.4%、その他の石材が4.8%の構成であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系の土器片が4点、加曾利E系の土器片が1点出土した。第24図6は押引で鋸歯文を描く阿玉台系土器である。

第11号集石土壌 (第22図)

K-10グリッドで検出した。土壌の平面形態は略円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、中央上層に黒褐色土の1層、周囲と下層には褐色土の2層、そして3層が堆積していた。礫の大半は上層中央より出土した。

覆土からは、平均して3cm大の礫127個が出土した。総重量は1500g、約90%が被熱破砕しており1個あたりでは11.8gとなる。石材は、チャートが86.6%、砂岩が10.2%、その他の石材が3.1%の比率であった。

遺物は、出土しなかった。

第12号集石土壌 (第22図)

H・I-12グリッドで検出した。土壌平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状である。覆土は、西上層に黒褐色土が、下位に褐色土が、そして東の最下位に暗褐色土が堆積していた。礫の大半は分層線をまたぎ、北側上層にも含まれている。

覆土中からは、平均で3cmとなる大きさの礫が78個出土した。その総重量は1100g、約90%が被熱により破砕しており、1個あたりでは14.1gとなる。石材は、チャートが80.8%、砂岩が10.3%、その他の石材が9.0%の構成であった。

遺物は、出土しなかった。

第13号集石土壌 (第22・24図)

I-12グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、中央上層に黒褐色土、その周囲と下層全体には褐色土が堆積していた。礫は、根による攪乱のためか、掘り込みの周囲にも散乱していた。礫の出土層は上位に大半が集中しており、北東側でとくに多い。

覆土からは、平均3cmの礫274個が出土した。総重量は3800gと集石土壌のなかでは一番多いが、約90%が被熱破砕していることから、1個あたりでは13.9gとなる。石材は、チャートが85.8%、砂岩が7.7%、他が6.6%存在した。

遺物は、加曾利E系の土器小片が7点出土しているが、混入と考えられる。第24図にこのうち3点を示したが、7が沈線、8が微隆起で文様を区画する深鉢で、9は蛇行状線が全面に施文される鉢形土器と思われる。

第14号集石土壌 (第22・24図)

K-6グリッドで検出した。土壌の平面形は楕円、掘り込みが浅く断面形がはっきりしないが、おそらく鍋底状と考えられる。覆土は、上下層ではっきり分かれ、下層ほど黄色味を増す。礫は下層にも分布している。

覆土中からは、平均4cm大の礫10個が出土した。その総重量は300gと少なく、約90%が被熱破砕しているが、1個あたりの重量は30.0gと重い。石材の比率は、チャート60.0%、砂岩30.0%、その他が10.0%である。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が5点出土した。第24図10は口縁部に簡単な文様帯を設ける阿玉台系の鉢あるいは浅鉢、11は系統不明の無文土器である。

第15号集石土壌 (第22・24図)

M-8グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は墳底が荒れた鍋底状となる。覆土は、中央上層のみに黒褐色土が分布し、他は褐色土で占められる。礫の出土は、ややばらつきがあ

るが、上層に多い。

覆土からは、2cm大の礫が63個出土した。総重量は500g、約90%が被熱破碎しており、1個あたりでは7.9gと、発見集石土壌のなかでもっとも軽い。石材は、チャートが82.5%、砂岩が7.9%、その他の石材が9.5%の構成であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が18点出土したが、小片が多い。第24図12は勝坂系の縄文施文片で、13は阿玉台系の列点施文が垣間見られるものの、構図は不明である。

第16号集石土壌 (第23図)

M-8グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は緩やかな傾斜の鍋底状となる。覆土は、上下の2段に分かれ、それぞれ中央に黒味を帯びた土が堆積している。礫の出土は、上層外周の2層中でも若干出土したが、中央の1層に集中していた。

出土した礫の総重量は600g、平均で2cm大の礫が73個あり、そのすべてが被熱破碎し、1個あたりでは8.2gとかなり小さい。石材は、チャートが80.8%、砂岩が5.5%、その他の石材が13.7%の比率であった。

遺物は、出土しなかった。

第17号集石土壌 (第23図)

L・M-8グリッドで検出した。土壌の平面形態はほぼ円形、断面形は鍋底状だが、やや片流れとなる。覆土は、西側の上層に黒褐色土の1層が堆積し、下層の東寄りに褐色土の2層が認められた。礫の出土は少なかったが、1層の分布に近い傾向が把握できた。

出土礫は20点、総重量は200gと、発見集石土壌のなかでもっとも軽い。すべてが被熱破碎しており、平均2cm程度に分割されている。1個あたりの重量は10.0g、石材の比率は、チャートが60.0%、砂岩10.0%、他が30.0%であった。

遺物は、出土しなかった。

第18号集石土壌 (第23図)

F-13グリッドで検出した。土壌の平面形態は略円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、上層がローム粒子含む黒褐色土で占められ、下層はブロックを含む黄褐色土となる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が5点出土したものの、図示できるものはなかった。

第19号集石土壌 (第23・24図)

F-13グリッドで検出した。土壌の平面形は楕円、断面形は鍋底状となる。覆土は、上層にロームブロックを含む黒褐色土、さらに、暗褐色土を介して下層の黄褐色土へと移行する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点、さらに、第24図14に示したホルンフェルス製の礫器が1点出土した。

第20号集石土壌 (第23図)

谷が湾入する斜面のF-12・13グリッドで検出した。土壌の平面形はほぼ円形、断面形は椀状となる。覆土は、上層に炭化物含む黒褐色土、直下にロームブロック含む褐色土が積もるが、斜面下側ではブロックを含まない3層が堆積する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点出土したが、小片であった。

第21号集石土壌 (第23図)

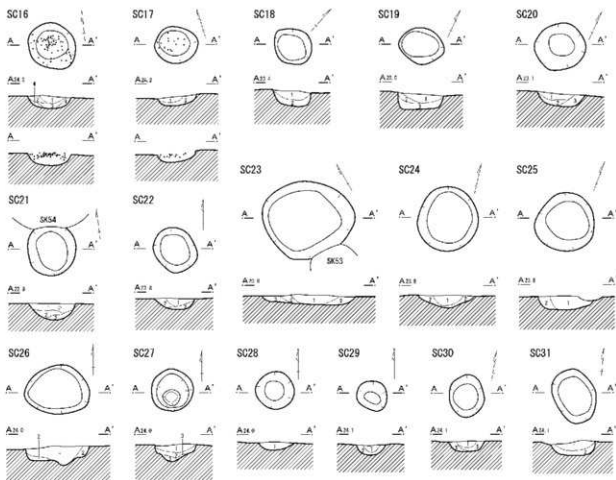
G-12グリッドで検出した。土壌の平面形態はほぼ円形、断面形は椀状である。覆土は、上層に黒褐色土が珪成され、下層はロームブロックを増した黄色味の強い土に変異していく。

遺物は、図示できない加曽利E系の土器小片が4点出土したが、混入と思われる。

第22号集石土壌 (第23図)

H-12グリッドで検出した。土壌の平面形は円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、上層の黒褐色土から、外周、さらに下層に至る過程で黄色味とロームブロックの混入量が増す。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点出土したが、図示できるものではなかった。



第26号遺構

- 1 跡地色：ローム・炭化灰下 (1~3m) 多く含む
- 2 跡地色：ロームブロック (1~3m) 少し含む
- 3 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・ブロック (3~5m) 多く含む
- 4 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・土に含む

第27号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 多く含む
- 2 跡地色：ロームブロック (1~3m) ・炭化灰下 (1~3m) 含む

第28号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~2m) 含む
- 2 跡地色：ロームブロック (1~3m) 含む

第29号遺構

- 1 跡地色：ロームブロック (2~5m) 含む
- 2 跡地色：ロームブロック (1~3m) 含む
- 3 跡地色：ロームブロック (1~3m) 含む

第30号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・炭化灰下 (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (1~3m) 含む
- 3 跡地色：ローム粒 (1~3m) 含む

第31号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (2~4m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・ブロック (1~3m) 含む
- 3 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (3~5m) 含む

第32号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (1~3m) 含む
- 3 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (3~5m) 含む

第23号遺構

- 1 跡地色：ローム粒下 (1~3m) ・ブロック (3~5m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~4m) 含む
- 3 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (1~3m) 含む

第24号遺構

- 1 跡地色：ローム粒下 (1~3m) 少し含む
- 2 跡地色：ローム粒 (2~4m) ・ブロック (3~5m) 含む

第25号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (1~3m) 含む

第26号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (2~5m) ・ブロック (2~5m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~5m) 含む
- 3 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・ブロック (3~5m) 含む

第27号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (2~4m) ・ブロック (3~5m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~4m) ・ブロック (3~5m) 多く含む
- 3 跡地色：ローム粒 (3~4m) ・ブロック (3~5m) 多く含む

第28号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~5m) 含む

第29号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (3~4m) ・ブロック (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (3~5m) 多く含む
- 3 跡地色：ローム粒 (1~3m) ・ブロック (3~5m) 多く含む

第30号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 含む
- 2 跡地色：ローム粒 (1~3m) 多く含む
- 3 跡地色：ローム粒 (3~5m) ・ブロック (3~5m) 多く含む

第31号遺構

- 1 跡地色：ローム粒 (1~3m) 多く含む
- 2 跡地色：ローム粒 (3~5m) 多く含む



第23図 集石土壇 (2)

第23号集石土壌 (第23・24図)

G-12グリッドで検出した。土壌掘り方の平面形態は楕円形、断面形態は壁面傾斜が緩い皿状となる。掘り込みは浅いが、他の集石土壌に比べて土壌掘り方の規模が大きい。覆土は、ほぼ中央に黒褐色土が堆積し、これが墳底まで続く。周囲には同質の暗褐色土が分布し、ロームブロックを多く含むようになる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点、加曾利E系土器の破片が5点出土した。後者のうち沈線区画文の2点を第24図15・16として示したが、後世の混入と考えられる。

第24号集石土壌 (第23図)

G-12グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形態は壁面が緩やかな椀状となる。覆土は、上層の中央に黒褐色土、外周と下層には褐色土が分布する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が4点出土したが、小片であった。

第25号集石土壌 (第23・24図)

G-12グリッドで検出した。中世に構築されたと考えられる道路跡の側溝部に相当する第3号溝の一部を破壊されていたが、同溝による破壊は浅く、大勢の把握に影響はない。

土壌の形態は円形、断面形態は大略鍋底状である。覆土は、上層東寄りに黒褐色土、西寄りと下層に褐色土が堆積する。

遺物は、加曾利E系土器の破片が1点出土した。第24図17にこの波状文系深鉢を示したが、混入したものと考えられる。

第26号集石土壌 (第23図)

I-10グリッドで検出した。土壌の平面形態は楕円形、断面形態はほぼ鍋底状を呈するが、一部に窪みがある。上層から続く暗褐色土がこの中にも認められるため、この集石土壌に伴う窪みと解釈することができる。

遺物は、図示し得ない加曾利E系土器の破片が

3点出土したが、混じり込みと思われる。

第27号集石土壌 (第23図)

J-10グリッドで検出した。土壌掘り方の形態は円形、断面形の基調は鍋底状だが、中央にわずかな小穴が設けられている。

覆土は、上層に黒褐色、中層に暗褐色、下層に褐色土と、下位になるほどに黄色味を増すが、中層の暗褐色土が小穴の中にまで入り込んでいた。したがって、この小穴は本墳に伴い設置されたものと判断できる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したが、図示できなかった。

第28号集石土壌 (第23図)

K-9グリッドで検出した。土壌の開口部はほぼ円形で、断面形態は壁面の傾斜が緩い椀状となる。覆土は、黒褐色土のみの単一層であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の小破片が2点出土したにすぎない。

第29号集石土壌 (第23図)

K-9グリッドで検出した。土壌の平面形態はほぼ円形、断面形態は鍋底状である。覆土は、中央の上層に黒褐色土、上層外周と下層には褐色土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第30号集石土壌 (第23図)

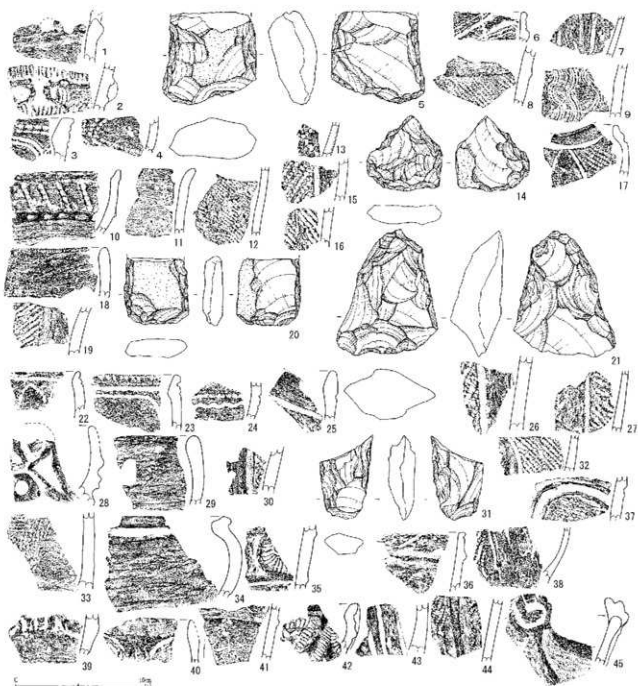
K-7グリッドで検出した。土壌掘り方の平面形態はほぼ円形で、断面形態はやや壁面の傾斜が緩い鍋底状であった。覆土は、中央の上層に黒褐色土が堆積し、おなじ上層でも外周部、そして下層に至るほどに黄色味を増す。

遺物は、出土しなかった。

第31号集石土壌 (第23図)

K-7グリッドで検出した。土壌の開口部形状は楕円形、断面はほぼ鍋底状であった。覆土は、上層が黒褐色土で、下層ほどに黄色味を増す。

遺物は、出土しなかった。



第24図 集石土壌・落し穴状遺構出土遺物

(3) 落し穴状遺構

第1号土壌 (第25図)

第2号とともに、台地の北東端の斜面部、C-18グリッドに構築されている。開口部の平面形は長楕円形、坑底の形態は、直線部が際だつものの、楕円形である。断面形はV字形、平坦な坑底では小穴等は見つからなかった。坑底の長軸方位はN-63°-Eである。

覆土は、上層に自然流入の黒褐色土が堆積しているが、2層以下の各層は、壁面の崩落を伴うロームブロックを多く含む黄褐色系土であった。3層は灰色がかっており、第2号とも共通するが、台地上の落し穴状遺構には見られないことから、谷部の季節的な帯水が坑壁に影響を与えたものと考えられる。遺物は出土していない。

第2号土壌 (第25図)

第1号と同じく、台地の北東端、谷部に面したD-18・19グリッドに構築されている。平面形・断面形・覆土の特徴ともに第1号に共通するが、こちらの方がやや短軸が長い。堀底の長軸方位はN-55°Eである。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点出土したが、図示できるものはなかった。

第3号土壌 (第24・25図)

F-11グリッドで検出した。ややうねりがあるが、平面形は長楕円形で、断面形は箱形に近い。堀底は平坦で、小穴などの施設は発見できなかった。堀底の長軸方位はN-63°Eである。

覆土は、4層に分層したが、2層と4層が壁面の崩落土と考えられる。これに対し、1層は焼土粒子含む黒褐色、3層は上下の崩落層と近似する質だが、周囲より黒味を帯びた土が堆積していた。上面が平らであることから、埋設途上の再利用なども考えたが、確定はできなかった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点、加曾利E系土器が4点、砂岩製打製石斧とホルンフェルス製礫器がそれぞれ1点出土した。第24図18・19は加曾利E系土器の口縁部無文部と胴部区画文部である。また、20は打製石斧刃部、21は洋梨形の縦型礫器である。

第4号土壌 (第24・25図)

H-10グリッドで検出した。第5号・第6号土壌とともに調査区の中央で3基が並列化しており、連携して機能していたものと解する。

平面形は長楕円形で、断面形の基調はV字から箱形だが、壁面の崩落著しく、上位と中位で不整形となってしまう。堀底の長軸方位はN-50°Eである。

覆土は、上層の中央が焼土粒子を含む黒褐色土で、自然流入土と考えられる。また、2層は壁面が崩落した土が主体の褐色土である。さらに、以下も流入・崩落が互層になっており、4層が崩落

土主体の黄褐色土となる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が7点、加曾利E系土器の破片が8点、黒曜石とチャートの剥片がそれぞれ1点出土した。第24図22~24は連続刺突系沈線で文様を描く阿玉台系土器、25~27は沈線区画の加曾利E系深鉢の胴部片である。

第5号土壌 (第24・25図)

I・J-11グリッドで検出した。第4号・第6号土壌と並列しており、連携していたと考えられる。堀底の長軸方位はN-59°Eである。

平面形はやや長方形に近い長楕円形で、断面形は台形状となる。堀底は平坦で、小穴等の施設は認められなかった。堀底の形態は、角がはつきりする傾向があるが、南西側の落し穴状遺構のように撥形にまでは至っていない。

覆土は、他の土壌に多い、流入土と崩落層の互層とはならず、最上層の黒褐色土から下層に向かい順に黄色味を加えるとともにロームブロックの量が増える。埋設の早い時期に壁面が安定し、崩落が止んだと考えられる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が17点、加曾利E系土器の破片が9点、砂岩製の打製石斧が1点出土した。第24図28は勝坂系土器の突起部片で、29・30は加曾利E系深鉢の口縁無文部片と胴部区画文部片である。

第6号土壌 (第24・25図)

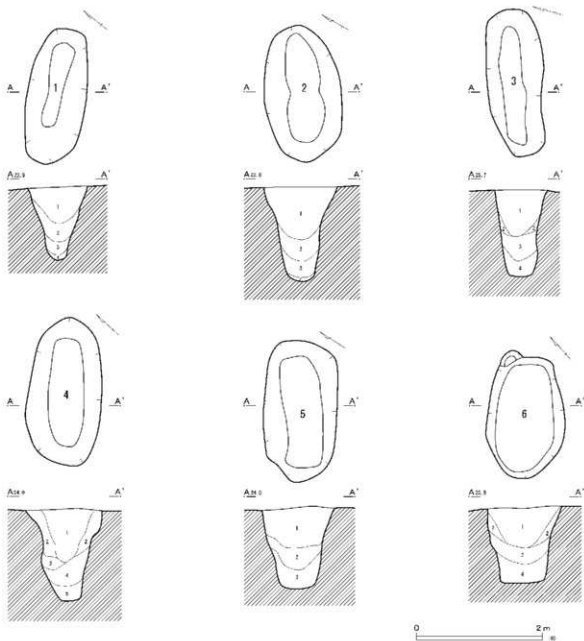
G・H-9グリッドで検出した。第4号・第5号土壌と並列している。開口部形は楕円だが、他に比して短軸値が大きい。堀底は、開口部とほぼ同形で、丸みを帯びている。堀底の形態から算定した長軸方位はN-41°Eである。

覆土は、最上層と最下層が自然流入土で、中層の2層・3層が壁面などの崩落土である。

遺物は、加曾利E系土器の破片が5点出土した。第24図32は同系の渦巻区画文部の破片である。

第7号土壌 (第24・26図)

J-8グリッドで検出した。開口部の形状は楕



第1号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム粒子 (2~4mm) 含む
- 2 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む
- 3 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む
- 4 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む

第2号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム粒子 (2~4mm) 含む
- 2 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む
- 3 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む
- 4 腐植土上 ヨームブロック (2~5mm) 多く含む

第3号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム・粘土粒子 (2~5mm) 含む
- 2 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) ・ブロック (2~5cm) 大量に含む
- 3 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) ・ブロック (2~5cm) 多く含む
- 4 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) ・ブロック (2~5cm) 大量に含む

第4号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) 多く含む 腐植土 (3~4mm) 腐植
- 2 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) 大量に含む
- 3 腐植土上 ヨームブロック (1~5mm) 多く含む
- 4 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) 含む ヨームブロック (1~5mm) 少し含む
- 5 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) ・ブロック (1~5cm) 大量に含む
- 6 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) ・ブロック (1~5cm) 含む

第5号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム粒子 (1~5mm) 大量に含む 粘土粒子 (1~3mm) 腐植
- 2 腐植土上 ヨーム粒子 (3~5mm) 多く含む ヨームブロック (3~5cm) 含む
- 3 腐植土上 ヨーム粒子 (1~5mm) 含む ヨームブロック (3~8mm) 大量に含む

第6号土壌

- 1 腐植土上 ヨーム粒子 (2~5mm) 多く含む 粘土粒子 (2~4mm) 腐植
- 2 腐植土上 ヨーム粒子 (3~5mm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
- 3 腐植土上 ヨーム粒子 (3~5mm) ・ブロック (3~5cm) 大量に含む
- 4 腐植土上 ヨーム粒子 (3~5mm) 含む ヨームブロック (3~5cm) 多く含む

第25図 落し穴状遺構 (1)

円形、他の落し穴状遺構に比して横幅が大きいが、これに伴い、長方形に近い墳底も大きいのが、小穴などの施設は発見できなかった。墳底の長軸方位はN-48°-W、隅部は丸みを帯びている。

覆土は、単純堆積のようで、上層に積もる焼土粒子含む黒褐色土から、下層に至るにつれ黄色味とロームブロックを増す。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が19点、加曾利E系土器の破片が3点、黒曜石の碎片が1点出土した。このほか、覆土中で礫が38点出土しているが、これは、他の落し穴状遺構にはない埋没状況である。第24図33は勝坂系深鉢の胴下半、34は同系の無文浅鉢片である。

第8号土墳 (第24・26図)

L・M-9グリッドで検出した。開口部は長楕円形、断面形は箱形に近い。墳底は開口部と同形状、平坦で、小穴などの施設は見あたらない。墳底の長軸方位はN-58°-Eである。

覆土は、2層・4層・5層が壁面の崩落土にあたり、上層中央と最下層が自然流入土と解釈できる。後世の帯水位上昇の影響か、最下層では鉄分の沈着塊が見られた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が26点、加曾利E系土器の破片が4点出土した。第24図35は勝坂系深鉢の胴部楕円区画帯部、36は阿玉台系土器の平縁部片である。

第9号土墳 (第24・26図)

L-5グリッドで検出した。開口部形は楕円、断面形はやや開く箱形で、墳底に施設はない。また、東の墳底が広がり、一部横穴状になるが、人為的か地下水などによる崩落かは判断できなかった。もう一方は角がはっきりしており、やや撥形となる。長軸方位はN-85°-Eである。

覆土は、順当な堆積状況を示しており、焼土粒子を含む最上層の黒褐色土から、下層ほどに黄色味とロームブロックの量や大きさが増す。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が54点、加

曾利E系土器の破片が4点出土した。第24図37は加曾利E系深鉢の渦巻区画文部、38は区画文の下位末端である。

第10号土墳 (第26図)

L-5グリッドで検出した。開口部の平面形は長楕円形、断面形は台形である。墳底は平坦で施設はないが、その形状がはっきりとした撥形を示す。墳底の長軸方位はN-21°-Wである。

覆土は、脇に前段階の壁面崩落土、中央に後段階の自然流入土が堆積しているが、これが少なくとも二回繰り返されたようである。

遺物は、出土しなかった。

第11号土墳 (第24・26図)

K-7グリッドで検出した。開口部の形態は楕円形、断面形は台形で、長方形の墳底は平坦で施設はない。長軸方位はN-51°-Eである。

覆土は、最下層の初期崩落土、両脇の短期崩落土、中央の自然流入主体土の三種に分けられる。大半の層に焼土粒子が含まれるのが他の落し穴状遺構と異なる点である。

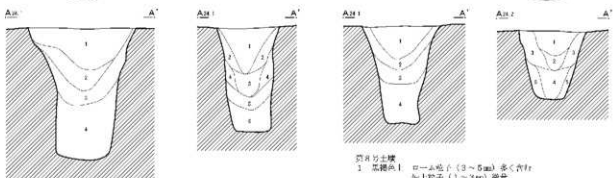
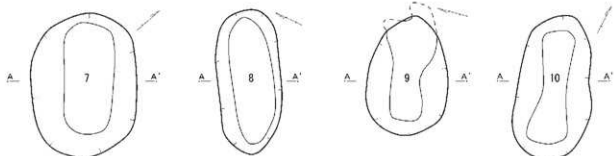
遺物は、条痕文系土器の破片が1点、勝坂・阿玉台系土器が24点、加曾利E系土器の破片が4点、ホルンフェルス製の礫器が1点出土した。第24図39~43は勝坂・阿玉台系土器で、ほとんどが列点手法で描画している。また、44は加曾利E系深鉢の縦位区画帯部である。

第12号土墳 (第24・26図)

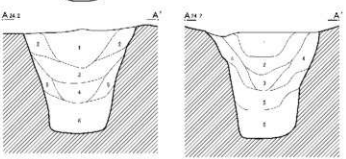
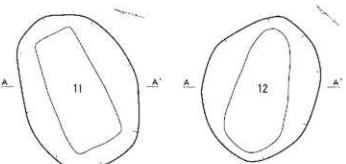
M-7グリッドで検出した。開口部形は楕円形、断面形は略台形となる。墳底は平坦で小穴などの施設は見られない。墳底の形状は楕円形、また、墳底の長軸方位はN-64°-Eである。

覆土は、上層の焼土粒子含む黒褐色土から、下層に至るにしたがい黄色味とロームブロックの量や大きさを増していく。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器が11点、加曾利E系土器の破片が3点出土した。第24図45は前者の渦巻文を加える波状口縁頂部である。



- 第7号土塚
- 1 赤褐色土 ローム地子 (3~5m) 多く含む
粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 2 黄褐色土 ローム地子 (3~5m) 多く含む
ロームブロック (3~5cm) 含む
 - 3 暗褐色土 ローム地子 (3~5m) 大量に含む
ロームブロック (3~5cm) 含む
 - 4 灰褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (3~8cm) 多く含む
 - 5 褐色土 ローム地子 (4~7m) ・ブロック (3~8cm) 大量に含む
 - 6 暗褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (3~5cm) 含む



- 第8号土塚
- 1 赤褐色土 ローム地子 (1~3m) 大量に含む ロームブロック (1~3cm) ・粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 2 暗褐色土 ローム地子 (1~3m) 多く含む ロームブロック (3~5cm) 含む
 - 3 黄褐色土 ローム地子 (3~5m) 多く含む ロームブロック (2~4m) 大量に含む
 - 4 褐色土 ローム地子 (3~5m) 多く含む ロームブロック (3~8cm) 大量に含む
 - 5 灰褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (6~8cm) 大量に含む

- 第9号土塚
- 1 赤褐色土 ローム地子 (1~3m) ・ブロック (1~3cm) 大量に含む 粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 2 暗褐色土 ローム地子 (1~3m) 多く含む ロームブロック (1~3cm) ・粘土粒子 (1~3cm) 散見
 - 3 暗褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (3~5cm) 含む
粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 4 褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (3~5cm) 多く含む 粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 5 黄褐色土 ローム地子 (5~8m) ・ブロック (5~8cm) 大量に含む 粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 6 黄褐色土 ローム地子 (5~8m) ・ブロック (3~5cm) 大量に含む 粘土粒子 (1~3m) 散見

- 第10号土塚
- 1 赤褐色土 ローム地子 (2~4m) 大量に含む
 - 2 暗褐色土 粘土粒子 (1~3m) 散見
ロームブロック (1~3cm) 少量含む
 - 3 暗褐色土 ローム地子 (3~5m) 多く含む ロームブロック (2~4m) 含む
 - 4 褐色土 ローム地子 (3~5m) ・ブロック (3~5cm) 多く含む
粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 5 黄褐色土 ローム地子 (5~8m) ・ブロック (5~8cm) 大量に含む 粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 6 黄褐色土 ローム地子 (5~8m) ・ブロック (3~5cm) 多く含む
ロームブロック (5~8cm) 大量に含む

- 第7号土塚
- 1 赤褐色土 ローム地子 (3~5m) 大量に含む 粘土粒子 (1~3m) 散見
 - 2 暗褐色土 ローム地子 (4~7m) ・ブロック (3~5m) 多く含む
 - 3 暗褐色土 ローム地子 (4~7m) ・ブロック (3~5m) 大量に含む
 - 4 灰褐色土 ローム地子 (4~7m) 多く含む
ロームブロック (4~7m) 大量に含む



第26図 落とし穴状遺構 (2)

(4) 土壌

第13号土壌 (第27図)

C・D-17グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状を呈する。覆土は、ローム粒子含む黒褐色土の単層であった。覆土の特徴は、中近世の土壌との疑いもあったが、谷部に面した斜面部に位置することから、台地上の土壌の覆土と趣を異にすると判断した。

遺物は、出土しなかった。

第14号土壌 (第27図)

H-14グリッドで検出した。平面形は楕円、断面形は鍋底状となる。覆土は、中央上層に黒褐色土、外周と下層に暗褐色土が堆積していたが、他の土壌に比べてロームブロックが多い。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点出土したが、図示できるものではなかった。

第15号土壌 (第27・31図)

H-14グリッドで検出した。開口部の平面形はやや楕円形、掘り込みは浅いが、鍋底状の断面形がはっきり認識できる。覆土は、中央の上層に炭化物粒子を含む黒褐色土が堆積しており、その外周と下層は、同質ながらも黄色味を増した土が堆積していた。

覆土中からは破砕礫が61点出土しており、土色の特徴が異なるものの、あるいは集石土壌として機能していたものかも知れない。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点出土した。第31図1は、縦列点が見られる阿玉台系深鉢片である。

第16号土壌 (第27図)

H-14グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、大半がローム粒子含む暗褐色土で占められ、下層の一部に壁面崩落に起因する黄褐色土が堆積していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したものの、図示できなかった。

第17号土壌 (第27図)

H-12・13グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は傾斜が緩い皿状になる。覆土は、南寄り上層に暗褐色土が堆積し、北および下層になるとともに黄色味を増す。

遺物は、出土しなかった。

第18号土壌 (第27・31図)

H-14グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状を呈する。覆土は中央の大半を軟化したロームブロック含む黒褐色土が占め、下層外周に褐色土が堆積する。

遺物は、加曽利E系土器の破片が2点出土し、それらを第31図に示した。2は渦巻、あるいは連続波状区画文の深鉢胴部片、3は両耳壺の無文口縁部片である。

第19号土壌 (第27図)

G-13グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形は緩い碗状となる。覆土は、ロームブロック含む暗褐色土で占められ、隣接し、似通った掘り込みをもつ第3号集石土壌とは歴然とした土色の差があった。

遺物は、出土しなかった。

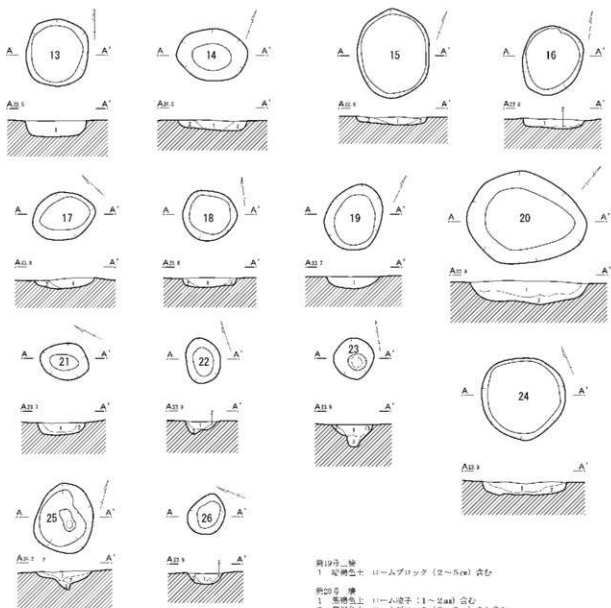
第20号土壌 (第27・31図)

H-13グリッドで検出した。平面形は卵形、断面形は緩い鍋底状となる。覆土は大きく2層に分層できたが、上層の黒褐色土から下層の黄褐色土まで漸移的に移行する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が18点、緑泥石片岩製の打製石斧が1点出土した。第31図4に示した口縁片は勝坂系口縁部文様帯土器の突起直下にあたる。突起化に貼付された隆帯は押圧された頂部でY字状に広がる。

第21号土壌 (第27・31図)

F-11グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形はほぼ鍋底状である。覆土は、中央上層に黒褐色土、外周と下層にロームブロック含む暗褐色土が堆積していた。



第13号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (2~5cm) 含む 一部ブロック化

第14号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~3cm) 含む
2 黒褐色土 コームブロック (1~3cm) 含む

第15号1層
1 黒褐色土 コームブロック (1~3cm) 含む 酸化粒子 (1~3mm) 少し含む
2 黒褐色土 コームブロック (1~3cm) 含む

第16号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2cm) 含む
2 黒褐色土 コームブロック (必ず4個3~5cm) 含む

第17号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 少し含む
2 褐色土 コームブロック (1~3cm) 含む

第18号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2cm) 含む コーム質のブロック含む
2 褐色土 コーム粒子 (1~2cm) 含む

第19号1層
1 黒褐色土 コームブロック (2~5cm) 含む

第20号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2cm) 含む
2 黒褐色土 コームブロック (3~5cm) 少し含む

第21号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2cm) 含む
2 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 少し含む コームブロック (2~4cm) 含む

第22号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (2~4cm) 含む
2 褐色土 コーム粒子 (1~2cm) ブロック (3~5cm) 含む

第23号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 含む
2 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 含む コームブロック (2~5cm) 含む
3 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) ブロック (3~5cm) 含む 燻煙土層

第24号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 含む
2 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) ブロック (3~5cm) 含む

第25号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) 含む
2 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) ブロック (3~5cm) 含む
3 黒褐色土 コーム粒子 (1~2mm) ブロック (1~3cm) 含む

第26号1層
1 黒褐色土 コーム粒子 (1~3mm) ブロック (3~5cm) 含む
2 黒褐色土 コーム粒子 (2~4mm) 含む
3 褐色土 コームブロック (1~3cm) 含む

第27図 縄文時代の土壌 (1)

遺物は、条痕文系土器の破片が1点、勝坂・阿玉台系土器の破片が26点出土したが、図示に適した破片はほとんどなかった。第31図8は縄文地に直接施文された横位区画を観察できる。

第22号土壌 (第27・31図)

H-9グリッドで検出した。平面形は円形に近く、断面形は墳底が片流れになる。覆土は、上層に黒褐色土、下層に褐色土が堆積している。

遺物は、加曾利E系土器の破片が2点、黒曜石の剝片が1点出土した。第31図9は同系の区画文深鉢の破片である。

第23号土壌 (第27・31図)

G-10グリッドで検出した。開口部の平面形は円形、断面形は中央に向かって錐鉢状になる。覆土の主体は暗褐色だが、下位の2層はより黒味を増していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器が6点出土したが、第31図10の阿玉台小片が示せたのみである。

第24号土壌 (第27図)

G-10グリッドで検出した。平面形は円形で、径は1mを超え、本遺跡の土壌のなかでは大型である。墳底は荒れているが、断面形はほぼ鍋底状、覆土はローム粒子含む暗褐色土で、下層ではブロックを混入する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点、加曾利E系土器の破片が1点、黒曜石の破片が1点出土したが、図示できるものはなかった。

第25号土壌 (第27図)

I-9グリッドで検出した。平面形は略円形、鍋底状の墳底にもう一段の小穴を設ける。土層断面の観察結果から、この小穴は本墳に伴うものと考えた。覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗褐色土が堆積するが、小穴の内部はふたたび黒褐色土となる。土壌を覆う構造物を支える小さな柱を立てた痕跡とも考えられるが、確証はない。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の小片が1点出土したにすぎない。

第26号土壌 (第27・31図)

H-9・10グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形は鉢形となる。覆土は、中央に黒褐色土が堆積し、周囲ほど黄色味を増す。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点出土した。第31図11は受口形の素文口縁をもつ条線文土器である。

第27号土壌 (第28図)

F-11グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は不均等な鍋底となる。覆土は、炭化物含む暗褐色土と下層の褐色土で構成されている。

遺物は、加曾利E系土器小片が2点出土した。

第28号土壌 (第28図)

G-12グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は壁面が緩やかな鍋底状となる。覆土は、暗褐色土を基調に下層東側が黄色味を増す。

遺物は、出土しなかった。

第29号土壌 (第28図)

G・H-12グリッドで検出した。開口部の平面形は円形で、断面形は椀状となる。覆土は、上層西側の暗褐色土を基調に下層、そして東側に移るにしたがい黄色味を増す。

遺物は、加曾利E系土器の破片が2点出土したが、図に示せるものはなかった。

第30号土壌 (第28図)

G-12グリッドで検出した。開口部の平面形は略円形、断面形はやや片流れきみながら鍋底状に近い。覆土は、上層中央に黒褐色土、外周と下層に褐色土が堆積していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点、加曾利E系土器の破片が3点出土したが、すべて小片であった。

第31号土壌 (第28図)

H-12グリッドで検出した。中世に構築されたと考えられる道路跡の側溝にあたる第2号溝跡に一部破壊されるが、全体の把握に影響はない。

平面形は円形、断面形は鍋底状である。覆土の

ほとんどはローム粒子含む黒褐色土で占められ、西側の一部に褐色土が分布する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が21点出土したが、拓影化に不足する破片であった。

第32号土壌 (第28図)

I-11グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は緩やかな錐底状となる。覆土は、すべて自然堆積の褐色土で、ローム粒子とブロックの混入の割合によって分層した。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点、加曾利E系土器の破片が3点出土したが、図化可能なものはなかった。

第33号土壌 (第28図)

J-11グリッドで検出した。開口部の平面形は円形、断面形は緩やかな錐底状となる。覆土は、暗褐色を基調とし、下層ほどに黄色味を増す。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器が1点、加曾利E系土器が5点出土したが、小片であった。

第34号土壌 (第28・32・33図)

J-11グリッドで検出した。他の土壌とは異なり、平面規模が大きい特異な小竪穴状の土壌である。確認段階では、その位置や軸方位、形態や規模、そして散乱していた土器の時期から、第4号住居跡と軸方向を同じくしつづ並列する柄鏡形住居跡の柄部を念頭に検出作業を重ねた。だが、主体部にあたる柱穴列や跡などは発見できず、単独の土壌であると結論づけた。

開口部の平面形は長短軸の差が少ない楕円形、掘り込みは竪穴状で、壁面はなだらかである。掘り方外形の長軸方位はN-42°-Eであり、ほぼ同じ時期の遺物が出土した第4号住居跡の主軸方位と平行する。

壕底南西には2箇所の小穴が設けられている。これらは軸に対し直交するような位置関係に掘削されているが、掘り込みは浅く、本格的な構造物を支持したとは思えない。

覆土は、大きく上層と下層に分離できる。上層

は、黒褐色土から暗褐色系土で、炭化物粒子を含む。これに対して下層は褐色系土で、ロームブロックを含む。遺物は、この上下間にあたる中層から多くが出土した。

遺物は、591点が出土した。このうち土器は、埋没の際に混入した勝坂・阿玉台系が90点、人為的に一括廃棄された加曾利EIV式が494点出土した。発見時の破片化の割合には接合率が高く、9個体の器形が復元できた。

第32図21~32は、混入した勝坂・阿玉台系土器である。21~26は隆帯脇の圧着を爪形文で行い、24などではさらにその脇に蛇行沈線を加えている。口縁・胴部、爪形の手法も微妙に異なるが、破片が小さく、全体の器種・型式や横帯区画、区画内の構図は想像ができない。

また、27は櫛状工具による横位の押引帯が重層施文され、28は三角を基調とした区画に縦位の単沈線を充填している。さらに、29~31は角押的な隆帯脇の沈線が特徴的な阿玉台系土器で、32は0段多条RLの縦位施文痕のみが観察できる勝坂系胴部下半の破片である。

これに対し、12~20・33~第33図55は本壕埋没途上に廃棄された加曾利E系土器で、12~16・33・47~52らは沈線で文様帯を区画するものである。構図は渦巻と、上下交差の連続波状に限られている。また、17~20・37~46などは微隆起線で区画を成するものであり、こちらも4単位の入り組み波状か、単純な下位解放縦位区画に構図が限られている。

縄文は、縦位施文を基調とした充填縄文であり、復元できた土器に無節斜縄文の比率が高いことが特徴となるだろう。

これらのうち、18は両耳鉢となり、14も口縁部の湾曲からみてその可能性がある。加えて、20も同じような口縁部の無文帯幅があるものの、器形に全く変化がないことから、縄文全面施文の深鉢であると思われる。

一方、石器類は、チャート製の石鏃が1点、石鏃未製品がチャート・黒曜石それぞれ1点、閃緑岩製の磨石1点、安山岩と緑泥石片岩製の凹石片が各1点、砂岩製の砥石が1点出土した。

56～58が石鏃類だと考えるが、三者とも現況に見られる厚さや形態に違和感があり、器種比定の自信がない。とくに57・58の二者は、その厚さから未製品と考えられる。また、58は、他の石鏃類とは異なり、長さに秀でていることから、石鏃の未製品としてはなく、石鏃の完成品と見なすこともできる。

この他、59は片側縁に敲打痕が残る磨石で、腹部や他の外周部には加工の跡は見られない。さらに、60は略方形に整えられた砥石と考えられる被研磨石器である。

第35号土壙 (第28図)

J-11グリッドで検出した。開口部の平面形はほぼ円形、断面形は若干片流れ気味の鍋底状となる。覆土は、上層が暗褐色、下層が褐色土で占められ、その間漸移的に変化する。

遺物は、出土しなかった。

第36号土壙 (第28・33図)

J-10・11グリッドで検出した。平面形は略円形、断面形はほぼ鍋底状となる。覆土は、上層に黒褐色から暗褐色系土、下層にロームブロックを多く包含する褐色土が堆積している。

遺物は、第33図61に示した阿玉台系深鉢の蛇行隆帯が加えられた把手部のみが出土した。

第37号土壙 (第29図)

J-10グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、暗褐色系土の上層から、下層に移行するほどに黄色味を増していく。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点、加曾利E系土器の破片が1点出土したが、図に示せるものはなかった。

第38号土壙 (第29図)

J-10グリッドで検出した。開口部の形態は略円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、上層に暗褐色土、下層にローム粒子・ブロックを多く含む黄褐色土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第39号土壙 (第29・33図)

G-12グリッドで検出した。開口部の平面形は円形で、断面形の基調は鍋底状だが、壙底に断面台形の小穴が追加されている。覆土は、小穴部にローム粒子・ブロックを多く含む暗褐色土が認められ、上位がほぼ平らになる。埋戻したとも考えられるが、確定はできない。さらに上位では、上層の黒褐色土を基調に下層へ向かうほどに黄色味が強くなる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が12点出土したが、小片が多く、第33図62の三角押文で区画を成する勝坂系土器を示せたのみである。

第40号土壙 (第29・33図)

K-9グリッドで検出した。開口部の平面形はほぼ円形、断面形は、壙底に若干の変化があるものの、ほぼ鍋底状である。覆土は、暗褐色土の単一層であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点、磨石が1点、黒曜石破片が1点出土した。第33図63は閃緑岩製の磨石で、腹部両面に複数の凹部も追加されている。端部を除く4面に磨面が残る、断面形はほぼ方形になる。

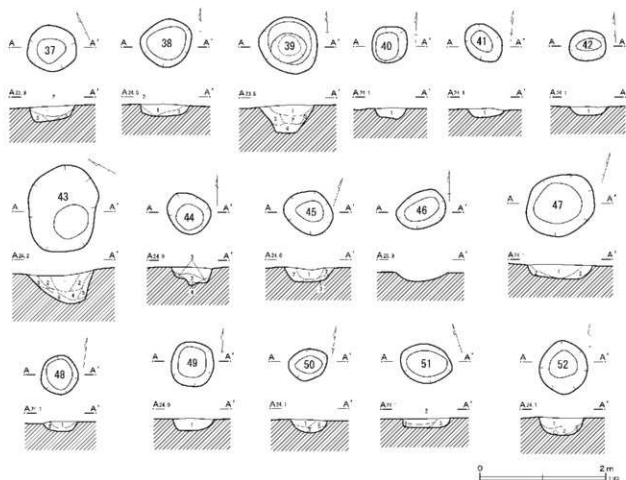
第41号土壙 (第29図)

K-9グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、断面形はおおよそ鍋底状である。覆土は褐色土の単一層で、ローム粒子やロームブロックを多く含んでいる。

遺物は、出土しなかった。

第42号土壙 (第29図)

K-9グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形、断面形は壁面がやや緩やかな鍋底状にな



第37号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
- 2 褐色土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多く含む
- 3 灰褐色土 rome土粒 (3~5cm) 多く含む、romeブロック (3~5cm) 大量に含む

第38号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- 2 灰褐色土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

第39号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- 2 褐色土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多く含む
- 3 褐色土 rome土粒 (3~5cm) 多く含む、romeブロック (2~4cm) 含む
- 4 埴埴土 rome土粒 (3~5cm) 大量に含む、romeブロック (3~5cm) 多く含む

第40号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む、romeブロック (3~5cm) 少し含む

第41号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む、romeブロック (3~5cm) 多く含む

第42号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (2~4cm) 含む

第43号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- 2 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む、romeブロック (1~3cm) 少し含む
- 3 褐色土 rome土粒 (3~5cm) 含む、romeブロック (3~5cm) 多く含む
- 4 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む、romeブロック (3~5cm) 少し含む
- 5 褐色土 rome土粒 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む
- 6 褐色土 rome土粒 (3~5cm) 多く含む、romeブロック (3~5cm) 大量に含む

第44号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (2~4cm) 含む、romeブロック (1~3cm) 少し含む
- 2 埴埴土 rome土粒 (3~5cm) 多く含む、romeブロック (1~3cm) 含む
- 3 褐色土 rome土粒 (3~5cm) 大量に含む、romeブロック (2~4cm) 含む
- 4 褐色土 rome土粒 (3~5cm) 大量に含む、romeブロック (2~5cm) 多く含む

第45号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- romeブロック (1~3cm) 少し含む
- 2 褐色土 rome土粒 (2~4cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
- 3 灰褐色土 rome土粒 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

第47号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- 2 灰褐色土 rome土粒 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 大量に含む

第48号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
- 2 褐色土 rome土粒 (1~3cm) 多く含む
- 3 romeブロック (1~3cm) 含む

第49号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- romeブロック (1~3cm) 多く含む

第50号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
- 2 褐色土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多く含む
- 3 灰褐色土 rome土粒 (3~5cm) 多く含む
- romeブロック (2~4cm) 大量に含む

第51号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- romeブロック (1~3cm) 多く含む
- 2 褐色土 rome土粒 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む
- 3 灰褐色土 rome土粒 (1~3cm) 含む
- romeブロック (3~5cm) 大量に含む

第52号土溝

- 1 埴埴土 rome土粒 (3~5cm) 含む
- romeブロック (1~3cm) 少し含む
- 2 褐色土 rome土粒 (3~5cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
- 3 灰褐色土 rome土粒 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多く含む

第29図 縄文時代の土溝 (3)

る。覆土は、暗褐色土の単一層であった。

遺物は、加曾利E系土器の破片が5点出土したが、図示できるものはなかった。

第43号土壌 (第29・33図)

J・K-8グリッドで検出した。平面形は一方に張り出した楕円形、断面形は摺鉢状である。覆土は、中央に黒味の強い層が、外周と下層に褐色土が堆積していた。

また、上層から中層にかけて計34点の破砕した礫が出土しており、報告した集石土壌とは覆土の特徴が異なるものの、似通った機能を果たしたことも考えられる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が15点、加曾利E系土器が3点出土した。第33図64は無節Lが縦位施文された勝坂系土器の底部である。

第44号土壌 (第29図)

J-8グリッドで検出した。平面形はほぼ円形だが、鍋底状となる断面形の锅底は起伏がある。覆土は、上層の黒褐色土から、下層に至るにつれ黄色味やロームブロックを増す。

遺物は、出土しなかった。

第45号土壌 (第29図)

K-10・11グリッドで検出した。平面形は卵形、断面形は壁面の傾斜が緩い鍋底状となる。覆土は、上層中央に暗褐色土、その周囲と下層には褐色土が堆積していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点出土したが、小片であった。

第46号土壌 (第29図)

J-11グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は壁面がなだらかな皿状で、覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第47号土壌 (第29・33図)

L-8グリッドで検出した。開口部の平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状となる。覆土は上層中央の黒褐色から、周辺および下層に向かい褐色へ

と漸移的に変化する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が5点出土したが、拓影として示せたのは65の阿玉台系口縁部片のみである。

第48号土壌 (第29図)

L-8グリッドで検出した。平面形は円形、断面形はほぼ鍋底状である。覆土は、上層に暗褐色土、下層に褐色土が堆積していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が3点出土したが、図に示せるものはなかった。

第49号土壌 (第29図)

K-8グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状である。覆土は、褐色土の単一層で、ロームブロックを多く含む。

遺物は、出土しなかった。

第50号土壌 (第29図)

K-8グリッドで検出した。開口部の平面形は楕円形、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色から褐色を基調とし、下層はローム粒子・ブロックを多く含む黄褐色土に変化するが、埋戻したとは考えられない。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の小片が1点出土したのみである。

第51号土壌 (第29図)

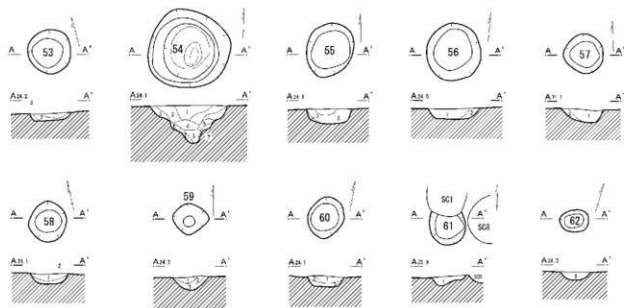
K-8グリッドで検出した。開口部の平面形は楕円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、中央の上層と外周に黄褐色土、中央の下層に褐色土が堆積し、いずれもロームブロックを多く含んでいた。埋戻されたとも考えられるが、確証はない。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したが、図示できなかった。

第52号土壌 (第29・33図)

K-7グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形、断面形はやや丸みをもった鍋底状である。覆土は、上層に黒褐色土、下層にロームブロックを多く含む褐色土が堆積していた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が10点出土



第53号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多量に含む
 2 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む ロームブロック (1~3cm) 多く含む
 3 褐色土 コーム粒子 (3~5cm) 含む ロームブロック (3~5cm) 多く含む

第54号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む
 2 褐色土 コーム粒子 (2~4cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
 3 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む ロームブロック (3~5cm) 多く含む
 4 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 少量含む
 5 褐色土 コーム粒子 (2~4cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む
 6 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む ロームブロック (3~5cm) 多く含む
 7 粘質砂土 コーム粒子 (3~5cm) 多く含む ロームブロック (3~5cm) 大量に含む

第55号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む
 2 褐色土 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
 3 褐色土 コーム粒子 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

第56号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む ロームブロック (3~5cm) 多く含む
 2 褐色土 コーム粒子 (1~3cm) 少量含む ロームブロック (3~5cm) 含む

第57号土壌
 1 褐色土 コーム粒子 (1~3cm) 含む ロームブロック (3~5cm) 多く含む
 2 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 多く含む ロームブロック (3~5cm) 大量に含む

第58号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 多く含む
 ロームブロック (3~5cm) 含む
 2 褐色土 コーム粒子 (1~3cm) 多く含む
 ロームブロック (3~5cm) 大量に含む

第59号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
 2 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 多く含む
 3 褐色土 コーム粒子 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

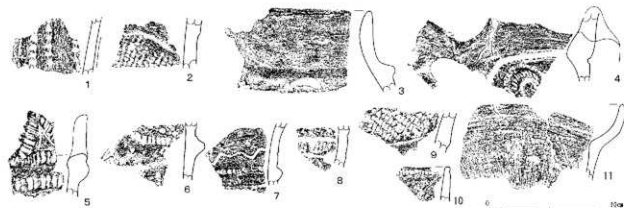
第60号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (1~3cm) 含む
 コーム粒子 (1~3cm) ・ブロック (1~3cm) 含む
 2 褐色土 コーム粒子 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

第61号土壌
 1 褐色土 コーム粒子 (3~5cm) ・ブロック (3~5cm) 多く含む

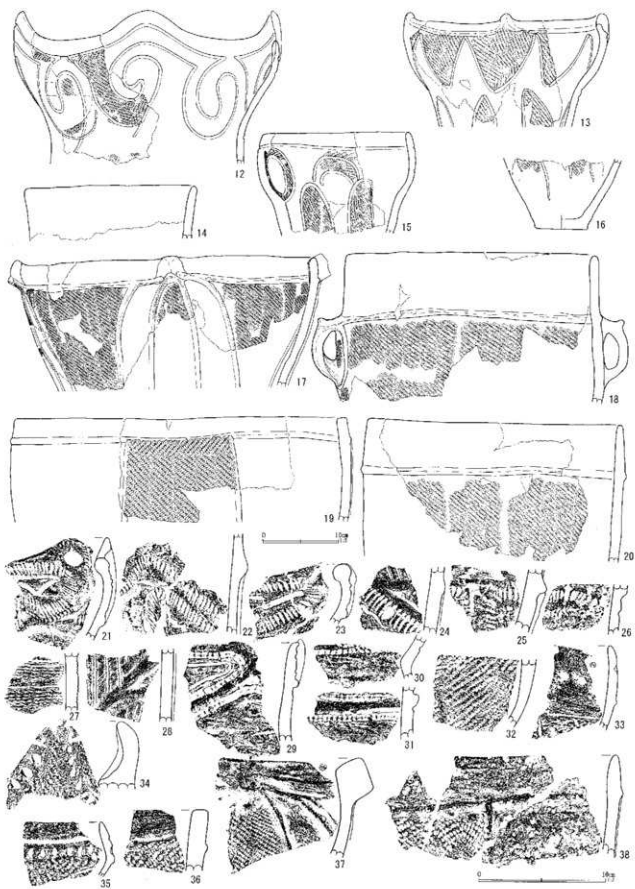
第62号土壌
 1 粘質砂土 コーム粒子 (2~4cm) ・ブロック (3~5cm) 含む



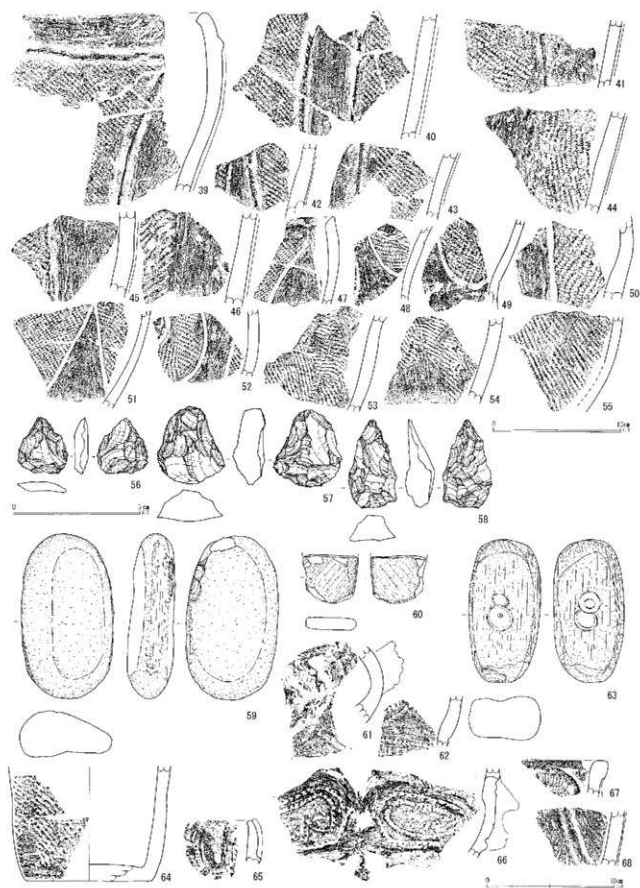
第30図 縄文時代の土壌 (4)



第31図 縄文時代の土壌出土遺物 (1)



第32図 縄文時代の土壙出土遺物（2）



第33図 縄文時代の土壇出土遺物（3）

した。第33図66は4単位大波状緑土器の波頂直下で、隆帯筋を単独施文の連続刺突列で加飾している。また、67は勝坂系土器の口縁部で、楕円区画が連続する構図となるだろう。

第53号土墳 (第30図)

K-7グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、暗褐色系土が主体で、西側の一部に褐色土が堆積する。

遺物は、出土しなかった。

第54号土墳 (第30図)

L-7グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形だが、断面形は3段の段差が見てとれた。覆土もこの段差に見合った状況を示しており、褐色を基調に、中央に黒味の強い土、そして外周には黄色味の強い土が堆積していた。往時における表土の自然流入と壁面の崩落が交互に繰り返された結果と考えられる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が6点出土したが、図示できるものはなかった。

第55号土墳 (第30図)

K・L-7グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状である。覆土は、上層中央のみに暗褐色土が分布し、他はロームブロック含む褐色土が主体であった。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点出土したが、採掘可能なものではなかった。

第56号土墳 (第30図)

K-7グリッドで検出した。開口部の平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状である。覆土は、上層の西寄りに暗褐色土、東側の下層には褐色土が堆積し、その間漸移的に変化する。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が6点出土したが、すべて小片であり、示せなかった。

第57号土墳 (第30・33図)

K-8グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形、断面形は緩やかな傾斜の椀状となる。覆土は、ロームブロック多く含む褐色土から黄褐色

土で占められる。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が1点、加曾利E系土器の破片が3点出土した。68は斜行する隆帯のみが観察できる勝坂系土器である。

第58号土墳 (第30図)

K-8グリッドで検出した。開口部の平面形態は円形、断面形は椀状となる。覆土の基調は暗褐色から褐色で、ローム粒子やロームブロックを多く含んでいた。

遺物は、勝坂・阿玉台系土器の破片が2点出土したものの、小片であった。

第59号土墳 (第30図)

L-6グリッドで検出した。規模は小さいが椀状の断面形や覆土の状態から、縄文時代の土墳として扱った。平面形はほぼ円形で、三分できた覆土は、下層ほどに黄色味やロームブロックの大きさを増していく。

遺物は、出土しなかった。

第60号土墳 (第30図)

J-8グリッドで検出した。平面形態は円形、断面形は鍋底状であった。覆土は上層中央に黒褐色土が堆積し、以下、暗褐色から褐色へと漸移的に黄色味を増すとともに、ロームブロックの混入が多くなる。

遺物は、出土しなかった。

第61号土墳 (第30図)

I-12グリッドで検出した。第7号集石土墳と重複するが、先後の判定はできなかった。開口部の形状はほぼ円形、断面形はおおよそ鍋底状である。覆土は、褐色土の単一層であった。

遺物は、出土しなかった。

第62号土墳 (第30図)

J-7グリッドで検出した。楕円形の小規模な穴だが、椀状の断面形と黒褐色を呈する覆土の特徴から、縄文時代の土墳と判断した。

遺物は、出土しなかった。

(5) 遺構外

遺構外および他時期遺構の埋没時に混入した遺物は、1,726点が出土している。主体となるのは縄文時代遺物で、土器が1,709点を占めている。また、石器類は、石鏃3点、削器1点、打製石斧8点、磨製石斧1点、礫器1点、磨石1点が出土した。さらに、H-12グリッドでは第36図122に示した耳飾1点も確認している。

これらの分布は、勝坂期の遺構が巡る環状帯に沿って集中する傾向があり、遺構数が多い東側がより数値が高く、1グリッドあたりの出土土器点数が50点を超すグリッドが連続する。

とくに、J-11グリッドでは、330点という突出した量の縄文土器が出土した。遺物の集中は表土掘削時から認識できており、竪穴住居跡の存在を想定しつつ調査を進めたが、竪穴のみならず、炉跡や柱穴も検出できず、周辺の出土遺物は一括して取り上げた。

ちなみに、他の時代に製作された遺物の出土は極端に少なく、須恵器1点、中世の陶磁器・かわらけ類11点を検出したのみで、こちらは散漫な分布傾向を示す。

出土土器 (第34・35図)

図示し得た資料は中期中葉勝坂系および阿玉台系と、加曾利E系のなかでも後期初頭に降ると考えられるものがすべてである。

第34図は勝坂系の土器で、1は楕円状隆帯区画の中に8字状の貼付を加える大型舌状突起部の破片である。この1を含め、38までは深鉢形土器の一部と推定される破片である。工具による文様施文を行うものは、すべてが隆帯脇を爪形・角押・三角押などの点列系手法で加飾しており、竹管による平行沈線や一本引きの沈線でこれを処理したものは見あたらない。

破片が小さいため、器種系統が確定できるものはない。そのなかで、3・5・8などは連続三角区画を基調とした口縁部文様帯部の破片と思われる。

他には、10・24などの横位楕円区画や15・16などの曲線構図もあるものの、主区画線が充填文かも特定できない。

これに対し、39～57は、同系ながらも隆帯区画を施さないものや、鉢もしくは浅鉢になる特殊な器種・器形をまとめている。39から41は口縁屈曲部にのみ狭い文様帯を設けるもので、幅の狭い点列で施文が行われる共通性がある。おそらく、鉢形土器となるだろう。

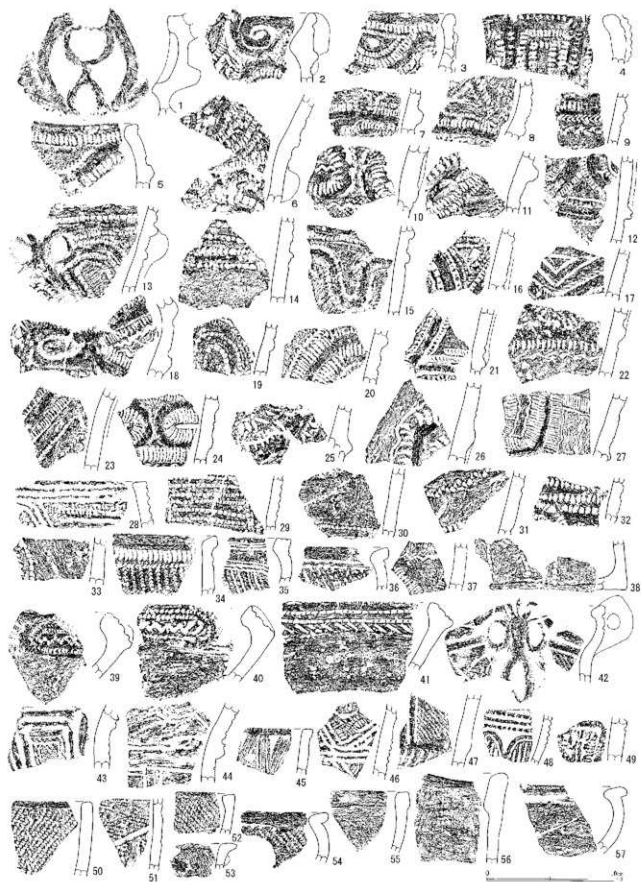
また、42～49は縄文を抱く区画文をパネル状に配したり、45・48のようなスリットや陰刻を施すものである。具体的な器種は想像できないが、42・43などは円筒器形に縦位パネル文が埋まる気配がある。これらでは、のちに点列施文に代わって隆帯脇の圧着施文を担う半載竹管による平行沈線施文が多く用いられており、隆帯貼付土器との対照が見られる。

50～54は縄文のみが観察できる破片であるが、50～52は縄文地に爪形や指ナデによる小区画文を配する円筒形の粗製抽象土器の一部だろう。53は特異な口唇部形態と突瘤が残され、54は浅鉢のような器形曲線の上に縄文が施文されている。前者は小型円筒の素文土器、後者は筒形の無文土器、あるいは胴部に幅広の文様帯をもつ深鉢の口縁部素文帯部にあたるのだろうか。

さらに、55～57は無文の破片であるが、55・56は、口縁が角筒状に肥厚しているものの、下位が直線的であり、57のような浅鉢ではないらしい。胴部に狭い文様帯を設け、口縁部に幅広の無文帯を配する深鉢となるのかも知れない。

これらは、隆帯脇の施文手法や垣間見られる全体構図、抽象文らしき器種の存在から、勝坂II期、あるいは藤内期などと称される時期に製作されたと判断できる。

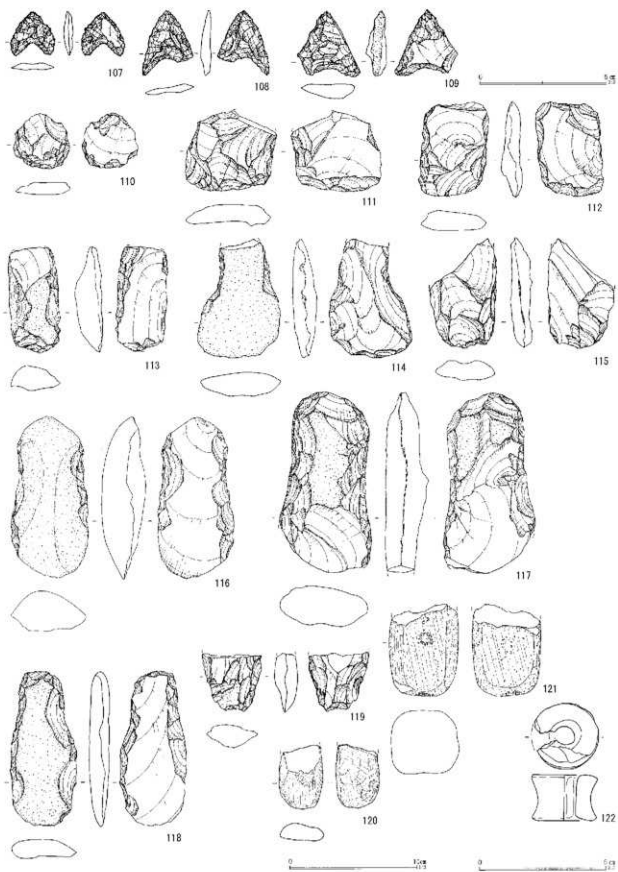
勝坂系に対峙する阿玉台系は、第35図58～80に示した。隆帯脇の施文は、勝坂系と同じく点列であり、竹管は使用されていない。口縁部やその近



第34图 道構外出土物(1)



第35圖 遺構外出土遺物(2)



第36図 遺構外出土遺物（3）

くの破片では、58・59のように、波頂下の垂線を目安とする大三角区画や、67のような平線下に逆U字文を展開させる基本的な構成も見られるが、多くはその全体構図が想定できない。

さらに、70～75は降帯のみで口縁部の区画文を描画したり、縦位蛇行線を表現するものである。また、76は波状沈線、77～80は刺突系の施文が単独で横位に展開する破片である。

これら阿玉台系の土器は、点列施文がはっきりしており、反面、平行線による二線一括施文が未発達であることから、いわゆる阿玉台 I b 期に焼成されたと考えられる。

一方、81～106は加曾利 E 系の土器片である。その出土量は、検出遺構数に比例するがごとく、勝坂・阿玉台系土器に遠く及ばない。基本構成に大区画が多いことより、破片から全体を推し量れるものはほとんどない。

81～86は微隆起で口縁下の横位区画や縦位方向の無文帯を区画するものであるが、81は無文帯幅からして鉢あるいは両耳壺の口縁部片と考えられる。また、83は前代の名残である口縁下の縄文横位施文がかろうじて遺存している。

87～101は、沈線によって文様帯を区画するものである。87・88のような曲線区画もわずかに見られるが、大半は縦位方向に長い区画文の一部である。幅広い無文帯から、単純な縦位区画や大単位の連続波状文などの構成が主体を占めると想定できるが、92は狭い無文帯から、渦巻き区画を成すと思われる。

102～105は集合条線による縦方向の直線文や蛇行文で器面を埋める構成である。少なくとも器形が内屈気味の102・103は鉢形土器の破片だろう。しかし、より直線的な104・105が同形か、深鉢となるかは、判断がつかない。また、106は肉彫状の沈線による渦巻文や、要所に突出させることから、把手付壺の胴部片と考えられる。

出土石器 (第36図)

本項の冒頭で紹介したとおり、遺構外より出土した石器製品は15点であった。この他、通常なら剥片類が大量に出土するはずであるが、石材に縁遠い入間台地内部の小谷を拠り所としている遺跡のためか、黒曜石24点、チャート1点、ホルンフェルス4点を発見したのみであった。

各石器個別の製作期は特定できないが、ほとんどが遺跡の主体期である中期中葉か後期初頭に帰属するものと想定している。

第36図には出土した石器製品のすべてを示した。107～109は石鏃で、すべて凹基である。側縁がやや膨らむ特徴は、時期に限らず本遺跡の縄文遺構に共通している。また、110はホルンフェルス製の削器、111は同じ石材による礮器である。後者はさして厚くないことから、打製石斧の一部ともとれるが、L字に刃部加工が及んでいることから礮器と判定した。

これに対し、112～119は打製石斧と判断したものである。石材は、ホルンフェルスと砂岩が各4と、比率を折半する。長さ10cm強の略菱形がもつとも多いが、112・113のような小型の短冊形も一定比を占めていたようである。さらに、116～118は、偏りがちの刃部にほとんど加工が施されず、丸みがあった外形に整えられるなど、共通しており、中型品として定型化し、同じ時期に使用されたものと考えられる。

一方、120は変斑珪岩製の磨製石斧、121は安山岩製の磨石であるが、加えて後者の腹部には凹痕が、端部には敲打痕が観察できる。

出土土製品 (第36図)

土器製品を通じ、今回の調査で出土したものは、122の耳飾1点のみである。径3.3cm、幅2.5cmの滑車形で、一部分が欠損する。両面の径が等しい上に装着面の湾曲率が縁部称となるため、表裏を特定することができない。

第4表 牛原遺跡出土石器計測表 (cm/g)

棟号	番号	出土地	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版	カット
13	29	1住	石鎌	1.5	1.1	0.3	0.4	黒曜石		85	1
13	30	1住	石匙	7.6	10.7	1.8	118.7	ホルンフェルス		85	2
13	31	1住	磨石	(6.1)	(9.5)	4.8	353.7	砂岩		85	2
13	32	1住	凹石	(6.0)	5.4	3.7	162.4	安山岩		85	2
13	33	1住	敲石	(10.5)	5.5	2.6	222.5	砂岩		85	2
19	10	4住	石鎌	2.3	2.5	0.4	2.4	チャート	P11内	85	1
19	11	4住	石鎌	2.1	1.7	0.7	1.6	チャート	炉内	85	1
19	12	4住	石鎌	2.6	2.3	0.5	2.7	チャート	P37内	85	1
19	13	4住	石鎌	2.9	2.4	0.7	4.8	チャート	埋戻し12層内	85	1
19	14	4住	石鎌未製品	3.4	3.1	1.0	8.8	チャート		85	1
19	15	4住	打製石斧	(8.6)	(5.5)	2.1	149.2	ホルンフェルス		85	2
19	16	4住	打製石斧	(15.3)	(9.0)	2.7	511.6	蛇紋岩	数石に転用、第3表21	85	2
19	17	4住	打製石斧	(17.7)	(11.7)	2.1	496.8	緑泥石片岩	数石に転用、第3表36	85	2
19	18	4住	打製石斧	(7.8)	(6.7)	2.3	133.7	砂岩		85	2
20	19	4住	磨製石斧	16.7	4.5	3.3	459.2	変斑閃岩	数石に転用、第3表30	86	1
20	20	4住	磨製石斧	(7.9)	5.3	3.1	242.6	緑色凝灰岩		86	1
20	21	4住	磨石	(7.1)	(7.0)	3.6	243.1	閃緑岩	数石に転用、第3表24	86	1
20	22	4住	磨石	(7.4)	(6.8)	4.8	249.5	砂岩	数石に転用、第3表59	86	1
20	23	4住	磨石	(6.8)	(9.2)	3.7	264.8	安山岩		86	1
20	24	4住	軽石	(8.2)	(5.3)	1.6	8.4	軽石		86	1
20	25	4住	石皿	(19.0)	(12.8)	4.8	1255.4	緑泥石片岩	数石に転用、第3表28	86	1
20	26	4住	石皿	(27.9)	(19.2)	2.3	1523.2	緑泥石片岩	数石に転用、第3表60	86	2
20	27	4住	凹石	(17.9)	25.3	5.0	3284.0	砂岩	数石に転用、第3表40	87	1
20	28	4住	台石	28.5	22.0	5.1	5115.1	安山岩	数石に転用、第3表25	86	2
20	29	4住	凹石	22.6	20.9	5.0	3739.4	安山岩	数石に転用、第3表33	87	1
24	5	4集	打製石斧	(7.4)	7.3	3.2	234.9	砂岩		87	2
24	14	19集	礫器	(6.0)	(5.8)	1.6	57.2	ホルンフェルス		87	2
24	20	3土	打製石斧	(5.4)	(5.1)	1.5	68.1	砂岩		87	2
24	21	3土	礫器	(10.0)	(8.0)	4.0	254.1	ホルンフェルス		87	2
24	31	5土	打製石斧	(6.7)	(4.3)	1.6	55.5	砂岩		87	2
33	56	34土	石鎌	2.2	2.0	0.6	2.6	チャート		85	1
33	57	34土	石鎌未製品	3.0	2.7	1.3	8.5	チャート		85	1
33	58	34土	石鎌未製品	3.5	1.9	1.2	5.2	黒曜石		85	1
33	59	34土	磨石	(13.0)	(7.3)	3.6	535.3	閃緑岩		87	2
33	60	34土	砥石	(3.9)	(4.4)	1.0	23.9	砂岩		87	2
33	63	40土	磨石・凹石	(11.4)	(5.7)	3.5	413.5	閃緑岩		87	2
36	107	J-11	石鎌	1.7	1.8	0.4	0.8	チャート		85	1
36	108	H-10	石鎌	2.6	2.0	0.4	1.5	チャート		85	1
36	109	L-5	石鎌	2.6	2.4	0.8	3.7	チャート		85	1
36	110	K-6	石器	(4.4)	(4.5)	1.0	20.0	ホルンフェルス		88	1
36	111	L-8	礫器	(6.4)	(7.3)	1.7	81.4	ホルンフェルス		88	1
36	112	H-11	打製石斧	(7.6)	(5.5)	1.6	72.6	ホルンフェルス		88	1
36	113	I-11	打製石斧	(8.4)	(4.1)	2.0	81.7	ホルンフェルス		88	1
36	114	F-12	打製石斧	(9.4)	(6.6)	1.9	112.7	砂岩		88	1
36	115	K-6	打製石斧	(8.8)	(5.2)	1.5	70.2	ホルンフェルス		88	1
36	116	H-13	打製石斧	(12.8)	(6.1)	3.1	306.4	砂岩		88	1
36	117	K-10	打製石斧	(14.3)	(7.3)	3.2	423.6	ホルンフェルス		88	1
36	118	I-11	打製石斧	(12.3)	(5.3)	1.4	133.6	砂岩		88	1
36	119	G-11	打製石斧	(4.7)	(4.7)	1.8	36.8	砂岩		88	1
36	120	I-14	磨製石斧	(6.2)	(3.5)	1.4	34.5	変斑閃岩		88	1
36	121	H-12	磨石	(7.3)	(5.4)	4.9	275.7	安山岩		88	1

2. 中近世の遺構と遺物

(1) 道路跡

第2号・第3号溝跡 (第37図)

G～J-12グリッドで検出した。第2号と第3号の2条の溝が併走する。路面や路盤、その養生痕など、道路跡に直接結びつく根拠はないが、2条の溝が併走する長さやその指し示す方向、また、周囲における歴史的な環境、そして近年の調査動向などを考えあわせ、この2条を道路跡を画する側溝と認め、一括して報告する。

両溝が併走する距離はおおよそ30m、その間分岐や合流の気配は一切ない。南は調査区外へとそのままのびるが、西溝は一旦途切れている。これに対し、北側は谷部に向かう傾斜面に至り両溝ともに自然消滅している。溝幅は、両溝とも0.5から0.6m、両溝の心間間は4m、溝間の中軸線が指し示す方位はN-7°-Wである。

それぞれの溝は浅く、断面形を推し量るにはいささか心許ないが、往時は台形であったと推察される。覆土は、ローム粒子・ブロックを大量に含む暗褐色土が主体だが、これは、埋戻されたようでもなく、周囲の成形土が崩落・埋没したものとも考えられる。

溝間に関連する痕跡は認められなかった。しかし、両溝が南側の調査区外に隠れる付近の確認面は、現地表から0.3m程度でしかない。その間すべてが表土で、自然形成の漸移層などの気配は皆無であった。両溝の浅さから察しても、構築後に相当な地形加工や表土化を促す生業行為がこの周囲で行われたと推測できる。したがって、溝間の関連施設について、その有無を判断する状況にはなかったといえる。

第2号溝よりは、縄文土器25点、須恵器甕片1点、焙烙片2点、黒曜石砕片2点が出土し、第3号からは、縄文土器23点、黒曜石砕片3点が出土した。しかし、いずれも小片で、遺物を抛り所に詳しい構築期を決定することは困難である。

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第37図)

H・I-14～16グリッドで検出した。直角に曲がる区画溝である。溝幅は0.6から0.7m、南北方向の部分か指し示す方位はN-8°-W、さらに東西方向はN-86°-Eとなり、前者は道路跡とほぼ平行する。

溝の断面形はU字形だが、台形を意識したと見てとれる部分もある。覆土は、黒褐色土の単一層で、大きな変化はない。

遺物は、縄文土器6点と、かわかけ片が1点出土したが、時期判定に至らなかった。

第4号溝跡 (第37図)

K・L-8～11グリッドで検出した。攪乱によって分断され、東西の末端が断片的に検出できたのみである。

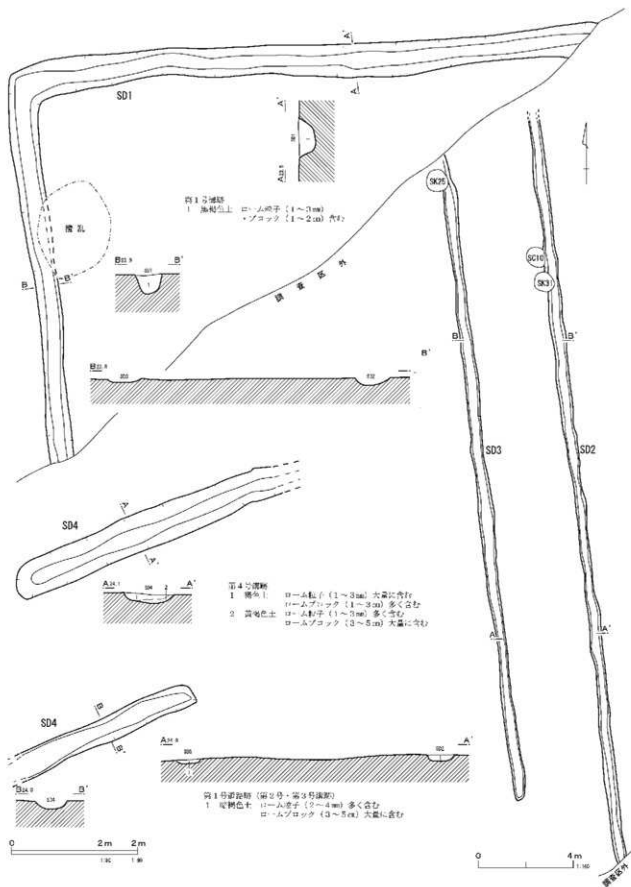
溝幅はおおよそ0.8m。褐色から黄褐色を基調とするローム粒子・ブロックを多く含む土が埋没している。その中軸が指し示す方位はN-66°-Eで、道路跡や区画溝との連携はうかがえない。

遺物は、縄文土器24点と、かわかけ片が1点出土したが、覆土の特徴から近世以降に掘削されたものと判断した。

(3) 柱穴跡

今回の調査では、多数の単柱穴跡を発見・調査した。調査区の中ではより北側に集中して分布しており、何らかの建物や柵などの一部となると考えられるが、明確な組み合わせや方位軸を見て取ることができなかった。

褐色土を基調としてローム粒子やロームブロックを多く含む覆土の共通した特徴より、これらは近世期に掘削・利用されたものと判断している。しかし、詳しい時期の目安となるような遺物は出土しなかった。



第37図 道路跡・溝跡

V 御新田遺跡の遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 概要

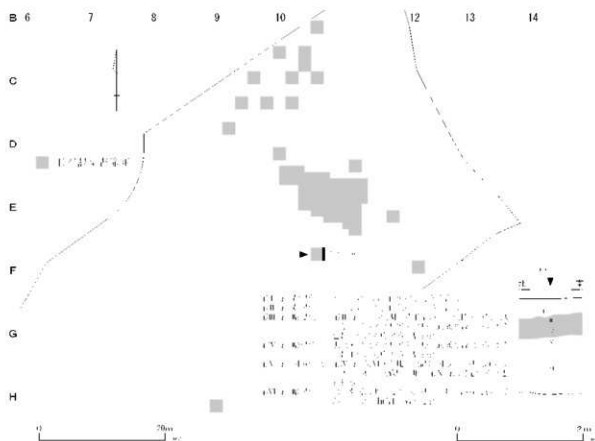
調査当初の遺構確認段階より、D・E-10・11グリッド付近で黒曜石の剥片やチャートの礫が散布する状況が把握されていた。これを受け、縄文時代までの遺構調査を完了した後、調査区の北東側の谷に面する肩部を中心に1辺2mの小グリッドを設定し、立川ローム層から武蔵野ローム層の上半部まで、約1.5mを掘り下げた。だが、下位の武蔵野ロームは地下水に影響され粘土化しており、確信のもてる層位区分はできなかった。

この地域は旧石器時代の調査事例が少ない上にローム層の堆積が薄いため、各遺跡間の層位対比が確立していない。南西約700mに位置する在家

遺跡では、武蔵野台地の標準層位と整合しているが、本遺跡では立川ローム層の堆積が約0.8mしかなく、一致した分層は困難であった。

そのため、独自に層位番号を振り、武蔵野台地の標準に対応する層位を示している。第III・IV層の暗色帯は武蔵野台地第2暗色帯に対応すると思われるが、第III層の色調は明確でない。また、第V層と第VI層の漸移部より下位は地下水の影響が大きく断じかたいが、おおよそ立川ロームと武蔵野ロームの境界に相当すると思われる。

調査の結果、石器集中1箇所と礫群1基が重複した形で発見された。また、他所で出土した4点をこの時代の所産と認定し、あわせて扱った。



第38図 旧石器調査区

(2) 石器集中

D・E-10・11グリッドで発見した。第39図に見るように、石器や礫は、南北約10m、東西約14mの範囲で、北西から南東方向に長く短径約7mの楕円形を形づくりに分布している。石器類は、後述する礫の分布とほぼ重複するが、重心は微妙にずれており、大略礫の密集部を囲むように広がっている。

出土した石器類の総数は92点で、細かい器種の内訳は、槍先形尖頭器2点、彫器4点（うち1点は第21号土壌より出土）、削片4点、搔器3点と、総数に占める製品の比率が高い。

また、石器の石材別分布を第40図に示したが、黒曜石が66点（71%）、玉髄の15点（16%）となる。このほか、黒色頁岩やチャート製の石器類も発見されているが、この地域で多く用いられる石材であるものの、その比率は比較的小さい。

黒曜石と玉髄は、石器石材の主体を占めるだけではない。第40図では、黒曜石が搔器、玉髄が彫器と密接な関係をもっていることが見てとれる。加えて、槍先形尖頭器は、それぞれで1点ずつが製作されている。

このような石材と器種の間係がみられる遺跡としては、入間市西武蔵野遺跡（西井1996）があげられる。同遺跡では、樹状の剝離を加える槍先形尖頭器と搔器に黒曜石が用いられ、ナイフ形石器や彫器には非黒曜石が用いられるなど、明確な使い分けがされている。

器種別の分布

再び第39図により各器種の分布をみると、槍先形尖頭器は2点と少ないものの、集中の西側に寄って発見されていることがわかる。さらに、第40図では玉髄製の1は他の玉髄の分布に、黒曜石製の2も同材の分布に近い位置に出土しているとも見られる。

これに対し、彫器は中央の石器類が稀な一帯から出土している。逆に、搔器・削器類の分布は、

石器集中の周辺域から多くが出土しており、さらに、搔器と削器との組み合わせにより幾つかのグループに分かれる気配もある。

一方、敲石と、後述する特徴的な礫は、そろって石器集中の北東域から出土している。13・14・17などの搔器・削器グループと重なる位置にあり、礫群の分布からずれて存在している。

黒曜石の分布

第40図上段にその分布を示したが、黒曜石は65点が出土し、石器類全体に占める割合は71%となる。細かい器種の組成は、槍先形尖頭器が1点、削片が3点、搔・削器が7点、剥片が12点、砕片が41点、石核が1点である。

これらの分布は北西側にまとまっており、発見石器類全体の分布傾向と合致する。

器種別に細かくみると、槍先形尖頭器は石器集中の北西から出土している。また、搔器は集中の東側の外周に位置し、12の搔器と15の削器が、そして、13の搔器と14・17の削器がそれぞれ近接して出土している。

一方、削片は集中を横断するように3点が直線的に並んで出土しており、この配置は彫器の分布に類似する。また、剥片は集中の中央にまとまるようだが、顕著な傾向ではない。砕片は16の削器周辺と4の削片周辺に密集している。

玉髄の分布

玉髄製品の出土は15点と、黒曜石に比べると少ないものの、全体に占める割合は16%で第2位の石材となる。細かな内訳は、槍先形尖頭器が1点、彫器が3点、削片が1点、剥片が7点、砕片が3点となる。石器集中内部での剥片剝離行為の痕跡は認められない。

玉髄の分布は、黒曜石の分布重心とは少しずれて、集中の南東側にまとまっている。とくに彫器は、出土した3点が直線的に並ぶように検出されている。また、31の大形削片が彫器（8）と槍先形尖頭器の中間から発見されている。

(3) 礫群

第41図に示したように、礫の分布範囲は石器の分布とほぼ重複するが、その分布は均一ではなくa～cの3箇所の密集クラスが認定できた。

礫の総数は350点である。肉眼での観察であるが、石材は、節理の多いチャートが218点(62%)と主体を占め、他に安山岩67点(19%)、砂岩58点(17%)を加え全体の99%を構成する。

礫の重さは、10g以下が194点(55%)と半数以上を占め、続いて20gまでが71点(20%)である。50gまでは各クラスとも数十点(約5%)あり、それより重い礫は各クラスとも若干数である。また、100gを超える礫が9点あり、最大のものは157gであった。

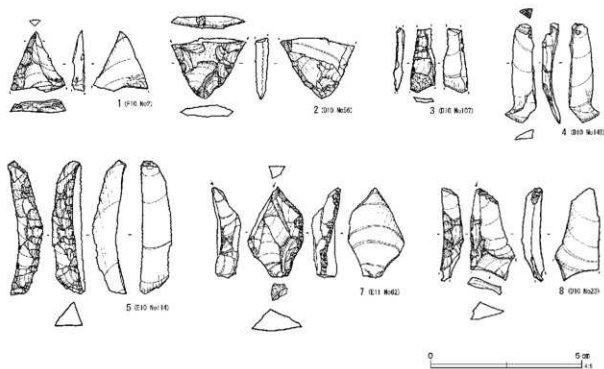
礫の接合は19例あったが、それぞれの接合個数は2～3点と少ない。また、その距離をみると、0.8m以内と2.2～3.0mの2グループが認められる。前者は0.5m以内に18例がまとまる密集部内での接合である。これに対し、後者は密集bとそ

の周辺、密集cとの間での接合である。

この二者の違いは、礫群使用と何らかの関連性が想定できる。前者は使用位置および廃棄場所において、使用時に入った亀裂が埋没過程で割れたもので、後者は割れた礫を廃棄(かき出し)したものと推測できる。この仮定に基づいて、各密集部をみると、密集bが礫群使用空間、密集cはその廃棄空間にあたるとも考えられる。

本礫群の礫は多くが小破片と化している。これらの原型を推定するため、60%以上遺存していると思われる18点を抽出して大きさを計測した。結果、長さ5～8cm、幅4～6cmにほとんどが分布し、長幅比は1/1～1/2の間に収まっていた。また、重さは90～130gにまとまり、それより軽いものが周囲に点在する。

この数値は遺存率の差によるため、必ずしも実数を表していないが、拳大からそれより一回り小さな礫が多く、武蔵野台地の岩屑II期の礫より、小形である傾向が見てとれる。



第42図 出土旧石器(1)

(4) 出土石器

槍先形尖頭器 (第42図1・2)

1は、裏面方向からの力によって下半部を大きく欠いた先端の破片であり、全体の形状は不明である。調整加工は正面左側縁に浅い剝離が規則的に施され、右側縁に上位方向からの槌状剝離が観察できる。裏面は、主要剝離面を残し、調整加工はみられない。横断面は薄手の台形状を呈している。素材は下位方向からの力が及んだ縦長剝片が用いられており、いわゆる片面加工の槌状剝離を有する槍先形尖頭器である。

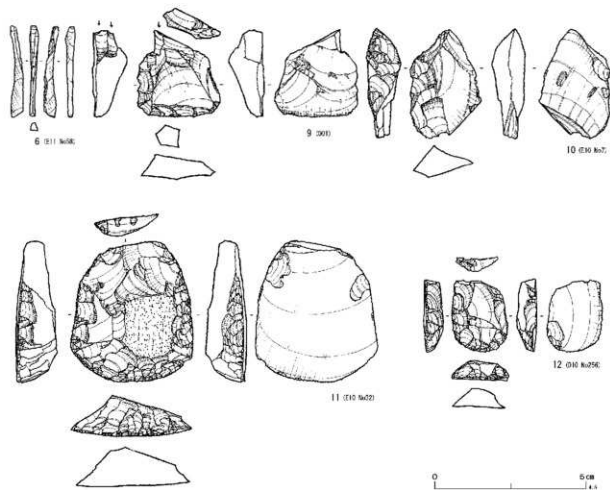
2は、上半を裏面からの力によって大きく欠いており、現況は基部の約1/3程度と思われる。調整加工は表裏とも周縁から施され、正面に節理面、

裏面に主要剝離面を残している。素材剝片は下位方向からの加撃による縦長剝片と思われるが、裏面の加工頻度が高く、打撃方向の詳細は不明である。また、表面は風化によるためか、磨りガラス状になっている。

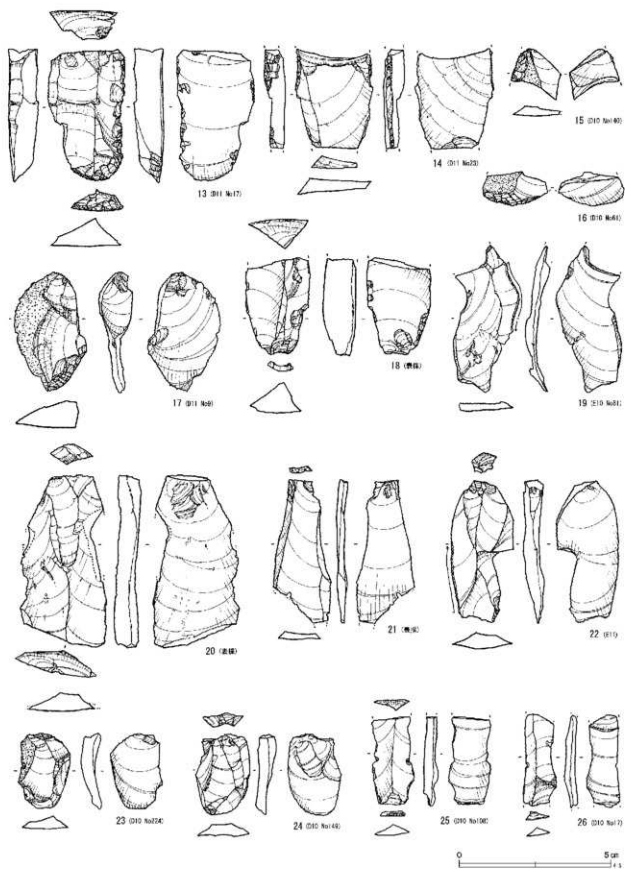
削片 (第42図3～5・第43図6)

3は上半部を欠損する。槌状剝離を有する槍先形尖頭器の削片と考えられる。左側縁に調整加工の一部が取り込まれており、交差する面は単剝離面であることから、片面加工の槍先形尖頭器であったと想定できる。

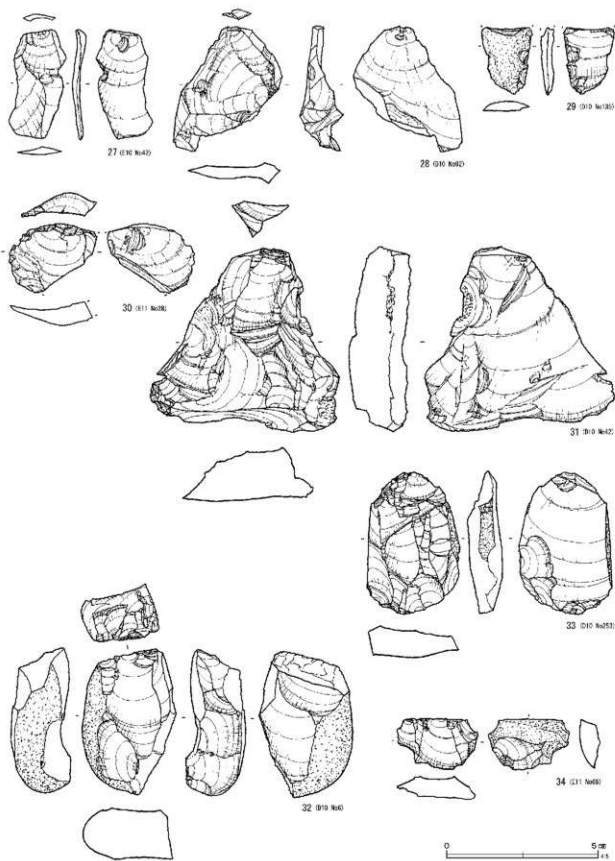
4と6は彫器に伴う削片と思われるが、本遺跡から出土している彫器はすべて玉髓製であり、これらとは石材が異なっている。横断面は幅狭の台



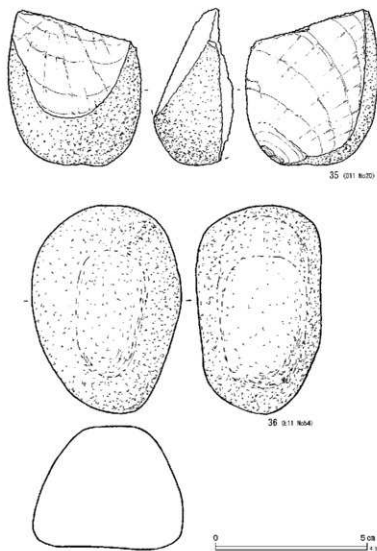
第43図 出土旧石器(2)



第44图 出土旧石器(3)



第45図 出土旧石器(4)



第46図 出土石器 (5)

形状を呈しており、連続して複数の削片が剥離されたと思われる。

5は、彫器と関連づけるにはやや大振りではあるが、横断面が三角形である点など、彫器製作に関連するものと考えられる。

彫器 (第42図7・8・第43図9・10)

7は、厚手の剥片素材を整形加工し、上半を丸く、基部が窄まるよう仕上げられている。彫刀部は左側縁斜め上方向から作出されている。

8は厚手の縦長剥片を素材とし、先端部と左側縁に調整加工が施されている。彫刀部は上位から

ほぼ垂直に施されている。

9は外形が台形に近く、下縁は搔器の刃部として仕上げられており、上半部の折面から複数の櫛状剥離が加えられている。

10は、櫛状剥離による彫刀面はないが、上半部が厚く搔器の刃部調整としては角度が急すぎる点や、玉髓が用いられていることから、彫器の原型と考えられる。

搔器 (第43図11・12・第44図13)

11は、大形の縦長剥片を素材とした搔器である。現状では長幅比に差がないが、下縁刃部は使用によるためと思われる階段状剥離が進んでおり、製作時は現況より縦長であったと思われる。

12は、11と比べると小形である。刃縁は円刃である。

13は、縦長剥片の端部を刃部とする刃器状搔器である。上半を折断し外形をへら状に整形している。

削器 (第44図14~17)

14は、上下両端を欠損する。両側縁に刃部加工が施される。

15と16は、剥片の一端に刃部加工が施される。細片のため全体は不明である。

17は、剥片端部の片縁に調整加工を施し、尖らせている。尖頭器の未製品である可能性も想定したが、大きさなどから、削器に分類した。

18は、横断面が三角形になる縦長剥片の側縁に微細な剥離が観察できる。削器、または使用痕を有する剥片である。

剥片 (第44図19~26・第45図27~31)

20~22は黒曜石製の比較的大形な剥片である。20・21は、採集品であるが、形態から旧石器時代の所産と考えられる。22は左側縁に微細な剥離が

あり、使用痕を有する剥片に分類できる。

23・26は、黒曜石の小形剥片である。23・24は幅広厚手、25・26・29は幅狭薄手で端部が欠損している。25・29は微細な剝離が観察できる。

27・28・30・31は非黒曜石の剥片である。27は風化が進んでおり、細部の剝離面は観察できなかった。このうち、31は玉髓の厚手大形剥片で、彫器製作との関連が想定できる。

石核 (第45図32～34)

32は、拳大の扁平楕円礫を用い、正面を作業面としている。打面調整が入念に加えられ、石核調整剝離は右側面から正面方向から、裏面は上位方向から施されている。

33は、正面上下から規則的に剝離された厚手剥片で、作業面再生剥片と思われる。剥片作出後に

打面除去等の調整加工が追加されており、削器等に加工する意図があったのかもわからない。

34は、打面及び裏面に自然面を大きく残す小形石核である。作業面の痕跡から、幅広の小形剥片を獲得したものと想定できる。

敲石 (第46図35)

35は、敲打面から大きく欠損している。現況から、拳大の円礫であったと思われる。

礫 (第46図36)

36は、敲打などの痕跡は観察できなかったが、35の敲石とほぼ同じ大きさの円礫であり、礫群の礫とは異なっているため、分離して示した。また、図示していないが、第6表No67の棒状礫は、大きさや石材が礫群の構成礫と異なるため、石器類として扱った。

第5表 御新田遺跡出土旧石器計測表(1)

No	グリッド	注記No	器種	石材	挿図	分析	北-南 (m)	東-西 (m)	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	D-10	6	石核	黒色頁岩	32		9.26	4.65	21.489	4.85	3.10	2.00	37.3	
2	D-10	7	碎片	黒曜石		1	6.54	5.30	21.401	1.30	1.10	0.10	0.1	
3	D-10	9	碎片	頁岩			6.70	5.50	21.402	0.55	0.95	0.15	0.0	
4	D-10	17	剥片	黒曜石	26	2	8.97	6.14	21.475	(3.05)	1.10	0.50	1.0	
5	D-10	23	碎片	黒曜石		3	8.98	7.78	21.461	1.40	1.45	0.25	0.4	
6	D-10	22	碎片	黒曜石			8.98	7.78	21.461	1.30	1.40	0.30	0.4	
7	D-10	23	彫器	玉髓	8		8.97	7.87	21.460	(3.10)	1.50	0.80	2.4	
8	D-10	26	碎片	黒曜石		4	9.70	7.10	21.490	1.00	1.50	0.30	0.3	
9	D-10	31	剥片	黒曜石		5	7.78	9.08	21.364	(2.90)	2.00	0.30	1.1	
10	D-10	42	剥片	玉髓	31		9.63	6.24	21.451	6.10	6.25	2.00	58.6	
11	D-10	46	碎片	黒曜石		6	6.06	1.76	21.390	(1.75)	2.05	0.60	0.9	
12	D-10	49	碎片	黒曜石		7	6.79	2.62	21.382	0.80	0.95	0.10	0.0	
13	D-10	56	尖頭器	黒曜石	2	8	7.90	2.64	21.335	(2.00)	(2.45)	(0.45)	2.0	
14	D-10	57	剥片	黒曜石		9	6.16	3.50	21.330	(2.20)	(1.50)	0.15	0.5	
15	D-10	58	碎片	黒曜石		10	6.18	3.84	21.400	(1.00)	(0.55)	0.15	0.1	
16	D-10	59	剥片	黒曜石		11	6.42	3.54	21.285	2.25	(2.15)	0.40	1.4	
17	D-10	61	槌・削器	黒曜石	16	12	6.60	3.48	21.340	(1.10)	(2.20)	0.40	0.8	
18	D-10	62	碎片	黒曜石		13	6.56	3.55	21.310	0.95	1.35	0.15	0.2	
19	D-10	63	碎片	黒色頁岩			6.72	3.00	21.425	1.90	(1.15)	0.10	0.3	
20	D-10	70	碎片	黒曜石		14	6.38	3.16	21.286	0.30	0.50	0.05	0.0	
21	D-10	72	碎片	黒曜石		15	6.90	3.46	21.420	1.25	1.60	0.25	0.3	
22	D-10	76	碎片	黒曜石		16	6.70	3.77	21.410	0.45	0.50	0.15	0.0	
23	D-10	77	碎片	黒曜石		17	7.40	3.00	21.422	(1.05)	1.25	0.10	0.1	
24	D-10	80	碎片	黒曜石		18	7.64	3.82	21.365	(1.00)	(1.05)	0.25	0.2	
25	D-10	81	碎片	黒曜石		19	7.32	3.10	21.358	1.65	0.70	0.15	0.1	
26	D-10	84	剥片	玉髓			7.30	3.30	21.385	1.60	2.00	0.40	0.9	
27	D-10	85	碎片	黒曜石		20	7.13	3.56	21.300	0.60	0.40	0.10	0.0	
28	D-10	86	碎片	黒曜石		21	7.27	3.64	21.386	(1.10)	(1.00)	0.15	0.1	
29	D-10	90	碎片	黒曜石		22	6.38	4.70	21.362	(1.25)	1.35	0.15	0.3	
30	D-10	92	剥片	玉髓			6.52	4.40	21.410	4.15	3.65	1.50	9.9	
31	D-10	93	碎片	黒曜石	28	23	6.74	4.54	21.380	(0.50)	0.80	0.10	0.0	
32	D-10	98	碎片	黒曜石		24	6.95	4.28	21.360	1.25	1.30	0.40	0.4	
33	D-10	103	剥片	黒色頁岩			7.64	4.07	21.388	3.20	0.95	0.30	0.9	
34	D-10	104	碎片	黒曜石		25	7.88	4.15	21.356	0.70	0.90	0.10	0.0	

第6表 御新田遺跡出土旧石器計測表(2)

No.	グリップ	注記No.	石器	石材	採掘地	分析	北-南 (m)	東-西 (m)	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考	
35	D-10	107	削片	黒曜石	3	26	6.50	5.24	21.376	(2.10)	0.30	0.85	0.4		
36	D-10	108	削片	黒曜石	25	27	6.82	5.48	21.390	(2.90)	1.40	0.50	1.5		
37	D-10	111	削片	黒曜石	28	7.68	5.57	21.415	0.80	0.55	0.10	0.0	0.0		
38	D-10	118	削片	黒曜石	29	8.30	4.15	21.410	0.65	0.70	0.30	0.1	0.0		
39	D-10	120	削片	黒曜石	30	8.72	4.82	21.446	0.30	0.60	0.10	0.0	0.0		
40	D-10	121	削片	玉髄			8.30	8.22	21.405	0.50	0.70	0.10	0.0	0.0	
41	D-10	122	削片	黒曜石			31	8.72	5.20	21.380	(1.00)	0.50	0.15	0.0	
42	D-10	124	削片	黒曜石			32	8.30	5.80	21.366	1.50	0.95	0.20	0.2	
43	D-10	135	削片	黒曜石			33	8.95	6.32	21.380	(2.20)	1.70	0.40	1.4	
44	D-10	140	掻・削器	黒曜石	15	34	7.47	7.60	21.305	(1.70)	(1.65)	(0.40)	0.7		
45	D-10	145	削片	黒曜石	35	8.35	9.42	21.320	(2.05)	1.30	0.40	0.9	0.5		
46	D-10	146	削片	玉髄			8.47	9.92	21.280	(1.00)	1.45	0.35	0.5		
47	D-10	147	削片	黒曜石			36	9.02	8.06	21.280	(1.15)	0.40	0.05	0.0	
48	D-10	148	削片	黒曜石	4	37	9.22	8.02	21.310	3.30	1.00	0.60	0.8		
49	D-10	149	削片	黒曜石	24	38	9.30	8.28	21.365	2.70	1.80	0.70	2.7		
50	D-10	150	削片	黒曜石	39	9.36	8.47	21.405	(1.60)	2.10	0.20	0.6	0.0		
51	D-10	154	削片	黒曜石	40	9.73	8.20	21.402	0.95	0.50	0.10	0.0	0.0		
52	D-10	156	削片	黒曜石	41	9.47	8.57	21.402	1.30	0.65	0.20	0.1	0.1		
53	D-10	157	削片	黒曜石	42	9.70	8.48	21.390	0.95	0.45	0.10	0.0	0.0		
54	D-10	158	削片	黒曜石	43	9.80	8.48	21.330	2.05	1.25	0.30	0.6	0.6		
55	D-10	160	削片	玉髄			9.72	8.72	21.408	1.30	1.20	0.30	0.4		
56	D-10	179	削片	黒曜石	44	9.66	9.90	21.375	0.90	1.00	0.20	0.0	0.0		
57	D-10	224	削片	黒曜石	23	45	9.96	7.50	21.402	2.50	1.70	0.70	1.9		
58	D-10	227	削片	黒曜石	46	6.88	3.24	21.275	1.65	1.10	0.30	0.2	0.2		
59	D-10	232	削片	黒曜石	47	8.72	4.85	21.415	0.90	1.60	0.30	0.4	0.4		
60	D-10	253	石核	黒色頁岩	33	9.20	6.70	21.322	4.70	3.10	1.20	20.1	20.1		
61	D-10	255	削片	黒曜石	48	6.85	4.40	21.294	1.10	0.65	0.15	0.0	0.0		
62	D-10	256	掻・削器	黒曜石	12	49	7.33	7.12	21.291	2.40	1.90	0.65	3.2		
63	D-10	259	削片	黒曜石	50	9.88	7.22	21.326	(1.40)	1.85	0.15	0.2	0.2		
64	D-11	7	削片	チャート			8.56	1.02	21.346	(0.70)	1.40	6.35	0.2		
65	D-11	9	掻・削器	黒曜石	17	51	8.46	2.00	21.335	4.00	2.45	1.10	7.4		
66	D-11	10	削片	黒曜石	52	8.70	1.85	21.338	1.40	0.90	0.15	0.1	0.1		
67	D-11	11	鏝	チャート			8.64	4.04	21.350	23.20	6.10	3.50	693.8		
68	D-11	17	掻・削器	黒曜石	13	53	9.73	2.04	21.266	4.40	(2.10)	1.00	10.8		
69	D-11	20	敲石	黒色頁岩	35	8.40	3.25	21.196	(5.20)	(4.40)	(2.70)	67.3	67.3		
70	D-11	21	削片	黒曜石	54	8.77	3.52	21.308	3.15	2.10	0.55	1.8	1.8		
71	D-11	23	掻・削器	黒曜石	14	55	9.11	4.13	21.296	(3.30)	2.60	0.70	(4.5)		
72	D-11	24	削片	黒曜石	56	8.31	4.76	21.242	(1.30)	(1.10)	(0.60)	0.9	0.9		
73	E-10	2	尖頭器	玉髄	1	0.36	4.30	21.513	(1.95)	(1.80)	(0.40)	1.2	1.2		
74	E-10	4	削片	黒曜石	57	0.33	6.87	21.500	(1.10)	1.30	0.20	0.2	0.2		
75	E-10	7	彫器素材	玉髄	10	0.48	9.16	21.492	(3.60)	2.40	1.10	6.7	6.7		
76	E-10	13	削片	黒曜石	58	1.50	9.80	21.505	0.65	0.70	0.10	0.0	0.0		
77	E-10	32	掻・削器	黒曜石	11	59	0.50	6.90	21.438	4.70	4.05	1.35	24.2		
78	E-10	42	削片	黒色頁岩	27	0.60	7.14	21.354	3.60	1.90	0.45	1.8	1.8		
79	E-10	60	削片	黒曜石	60	0.92	8.40	21.358	(0.80)	0.80	0.15	0.0	0.0		
80	E-10	68	削片	玉髄		0.08	9.84	21.340	2.35	1.40	0.25	0.9	0.9		
81	E-10	69	削片	玉髄		0.04	9.85	21.346	2.20	2.55	0.70	2.9	2.9		
82	E-10	81	削片	玉髄	19	1.38	8.96	21.432	(4.90)	2.20	0.80	3.0	3.0		
83	E-10	114	削片	玉髄	5	2.34	9.56	21.510	4.40	1.10	1.10	3.5	3.5		
84	E-10	121	削片	黒曜石	61	0.70	9.72	21.230	(1.40)	1.70	0.20	0.4	0.4		
85	E-11	28	削片	玉髄	30	1.40	0.80	21.455	2.30	2.85	0.75	4.5	4.5		
86	E-11	35	削片	黒曜石	62	4.68	2.78	21.515	(1.80)	2.30	0.30	0.8	0.8		
87	E-11	46	削片	黒色頁岩		1.72	0.42	21.396	(2.30)	3.20	1.45	10.7	10.7		
88	E-11	54	鏝	砂岩	36	0.60	4.26	21.224	6.90	5.00	4.20	213.4	213.4		
89	E-11	58	削片	黒曜石	6	63	2.22	0.58	21.440	3.00	0.30	0.40	0.3		
90	E-11	62	彫器	玉髄	7	2.72	1.75	21.345	3.00	1.85	0.90	3.3	3.3		
91	E-11	66	削片	黒曜石	64	4.16	1.60	21.430	1.35	1.20	0.40	0.4	0.4		
92	E-11	68	残核・石核	黒曜石	34	65	4.42	2.44	21.353	1.70	2.70	0.80	3.5	3.5	
93	E-11		削片	玉髄	22				4.75	2.10	0.70	5.1	5.1		
94	SK21	001	彫器	玉髄	9				2.90	2.80	1.10	8.4	8.4		
95	表採	002	掻・削器	黒曜石	18				(3.20)	2.15	1.20	6.5	6.5		
96	表採	003	削片	黒曜石	20				(5.70)	2.90	0.90	12.3	12.3		
97	表採	004	削片	黒曜石	21				(4.75)	1.90	0.40	2.5	2.5		

第7表 御新田遺跡出土標計列表(1)

No	グリッド	注記No.	北・南 (m)	東・西 (m)	標高 (m)	石材	重さ (g)	接合	備考
1	D-10	1	6.68	2.93	21.422	チャート	11.7		
2	D-10	2	7.54	3.34	21.420	砂岩	25.9		
3	D-10	4	7.40	3.99	21.436	砂岩	13.9		
4	D-10	5	7.16	4.08	21.436	チャート	4.5		
5	D-10	8	6.50	5.60	21.402	砂岩	2.4		
6	D-10	10	8.12	5.80	21.438	チャート	3.6		
7	D-10	11	9.03	5.92	21.481	砂岩	4.2		
8	D-10	13	9.00	5.55	21.457	砂岩	7.7		
9	D-10	15	7.54	6.10	21.410	チャート	5.6		
10	D-10	16	8.84	6.40	21.460	チャート	1.0		
11	D-10	18	9.33	6.34	21.482	砂岩	9.9		
12	D-10	19	9.37	6.66	21.469	安山岩	42.7		
13	D-10	20	9.46	6.70	21.470	安山岩	62.5	H	
14	D-10	21	9.75	6.52	21.481	チャート	45.9		
15	D-10	24	9.06	7.36	21.465	チャート	5.9		
16	D-10	25	9.24	7.50	21.483	チャート	3.5		
17	D-10	27	9.76	7.40	21.484	チャート	1.1		
18	D-10	28	7.06	8.18	21.334	チャート	8.6		
19	D-10	29	9.26	8.13	21.434	チャート	2.8		
20	D-10	30	9.87	8.64	21.478	砂岩	12.4		
21	D-10	32	8.46	9.80	21.369	チャート	2.7		
22	D-10	33	9.26	9.26	21.425	チャート	2.6		
23	D-10	34	9.60	9.36	21.450	チャート	2.9	S	
24	D-10	35	9.76	9.36	21.445	チャート	0.6		
25	D-10	36	9.96	9.16	21.451	チャート	2.4		
26	D-10	38	9.45	9.85	21.421	チャート	9.7	Q	
27	D-10	39	9.72	9.94	21.421	チャート	0.1		
28	D-10	40	9.80	9.90	21.433	チャート	7.0		
29	D-10	41	9.82	6.08	21.479	チャート	10.5		
30	D-10	43	9.75	6.60	21.482	チャート	41.7	K	
31	D-10	44	9.40	5.78	21.468	砂岩	29.3		
32	D-10	45	9.42	5.82	21.468	チャート	43.1	B	
33	D-10	47	6.48	1.94	21.400	チャート	0.8		
34	D-10	50	6.82	2.78	21.302	チャート	2.2		
35	D-10	51	6.95	2.77	21.420	チャート	6.4		
36	D-10	52	7.03	2.45	21.350	チャート	2.6		
37	D-10	53	7.17	2.20	21.400	チャート	5.2		
38	D-10	54	7.30	2.80	21.352	砂岩	3.4		
39	D-10	55	7.40	2.32	21.402	チャート	1.6		
40	D-10	60	6.58	3.36	21.385	砂岩	45.4	O	
41	D-10	64	6.78	3.10	21.388	チャート	2.7		
42	D-10	65	6.88	3.12	21.408	砂岩	79.1	O	
43	D-10	66	6.83	3.22	21.400	安山岩	127.0		
44	D-10	67	6.86	3.22	21.398	安山岩	67.5		
45	D-10	68	6.70	3.35	21.386	砂岩	43.0		
46	D-10	69	6.76	3.46	21.424	安山岩	67.5		
47	D-10	71	6.95	3.39	21.408	砂岩	22.3		
48	D-10	73	6.87	3.55	21.415	チャート	17.5	R	
49	D-10	74	6.91	3.60	21.390	頁岩	12.2		
50	D-10	75	6.81	3.54	21.372	チャート	14.9		
51	D-10	78	7.14	3.21	21.290	安山岩	10.1		
52	D-10	79	7.22	3.10	21.318	砂岩	9.1		
53	D-10	82	7.44	3.14	21.285	チャート	2.7		
54	D-10	83	7.40	3.26	21.395	安山岩	16.2		
55	D-10	87	7.22	3.70	21.386	安山岩	5.6		
56	D-10	88	6.40	4.22	21.392	チャート	11.3		
57	D-10	89	6.48	4.22	21.350	安山岩	4.5		
58	D-10	91	6.37	4.70	21.360	チャート	8.6		
59	D-10	94	6.82	4.16	21.375	チャート	10.1		
60	D-10	95	6.90	4.08	21.325	チャート	9.5		
61	D-10	96	6.90	4.20	21.355	砂岩	10.5		
62	D-10	97	6.85	4.30	21.400	チャート	5.3		
63	D-10	99	7.01	4.28	21.355	チャート	10.7		
64	D-10	100	7.24	4.03	21.370	安山岩	4.0		
65	D-10	101	7.20	4.30	21.388	砂岩	27.6		
66	D-10	102	7.20	4.32	21.400	片岩	3.9		
67	D-10	105	6.66	5.02	21.382	安山岩	16.4		
68	D-10	106	6.64	5.05	21.375	チャート	4.6		
69	D-10	109	6.42	5.72	21.325	砂岩	5.9		
70	D-10	110	7.60	5.40	21.325	チャート	8.5		

第8表 御新田遺跡出土燼計測表(2)

No	グリッド	注記No	北南 (m)	東西 (m)	標高 (m)	石材	重さ (g)	接合	備考
71	D-10	119	8.80	4.28	21.370	安山岩	3.0		
72	D-10	125	9.15	5.05	21.380	チャート	11.6		
73	D-10	127	9.23	5.56	21.438	チャート	2.4		
74	D-10	128	9.10	5.74	21.382	チャート	0.3		
75	D-10	129	9.73	5.19	21.388	チャート	3.1		
76	D-10	132	9.78	5.78	21.326	チャート	9.3		
77	D-10	133	8.62	6.34	21.454	チャート	9.7	M	
78	D-10	134	8.36	6.98	21.345	チャート	7.1	K	
79	D-10	136	9.96	6.04	21.470	安山岩	12.6		
80	D-10	137	9.98	6.06	21.472	チャート	2.9		
81	D-10	139	7.27	7.88	21.308	チャート	17.7		
82	D-10	141	7.88	7.72	21.270	チャート	2.1		
83	D-10	142	7.95	7.75	21.315	チャート	7.2		
84	D-10	144	8.18	9.46	21.300	チャート	5.7		
85	D-10	151	9.45	8.30	21.390	安山岩	80.7		
86	D-10	152	9.60	8.18	21.315	安山岩	3.7		
87	D-10	153	9.56	8.20	21.320	チャート	5.1		
88	D-10	155	9.80	8.08	21.350	チャート	5.0		
89	D-10	159	9.54	8.70	21.380	チャート	2.5	M	
90	D-10	161	9.90	8.56	21.395	チャート	6.4		
91	D-10	162	9.64	8.84	21.370	チャート	10.8		
92	D-10	164	9.42	9.22	21.325	チャート	7.2		
93	D-10	165	9.50	9.35	21.380	チャート	7.7		
94	D-10	166	9.58	9.30	21.392	チャート	3.8		
95	D-10	167	9.43	9.35	21.412	チャート	4.1	S	
96	D-10	168	9.53	9.56	21.292	安山岩	4.8		
97	D-10	169	9.48	9.28	21.400	チャート	2.6		
98	D-10	170	9.83	9.40	21.390	チャート	11.1		
99	D-10	171	9.86	9.50	21.400	チャート	19.7		
100	D-10	172	9.95	9.50	21.355	チャート	1.7		
101	D-10	173	9.90	9.88	21.378	チャート	4.9	Q	
102	D-10	174	9.80	9.79	21.380	チャート	3.1		
103	D-10	175	9.78	9.72	21.415	チャート	21.6		
104	D-10	176	9.76	9.70	21.385	安山岩	9.4		
105	D-10	177	9.60	9.80	21.385	チャート	11.0		
106	D-10	178	9.66	9.78	21.325	チャート	7.2		
107	D-10	181	9.45	6.48	21.434	安山岩	14.8	N	
108	D-10	182	9.28	6.60	21.426	砂岩	35.5		
109	D-10	183	9.48	6.52	21.460	安山岩	25.2	I	
110	D-10	184	9.42	6.60	21.464	安山岩	49.6		
111	D-10	185	9.47	6.65	21.442	チャート	37.7	P	
112	D-10	186	9.48	6.68	21.438	安山岩	57.8	P	
113	D-10	187	9.50	6.60	21.470	安山岩	23.5	P	
114	D-10	188	9.54	6.52	21.444	砂岩	44.9	A	
115	D-10	189	9.60	6.54	21.438	安山岩	124.1		
116	D-10	190	9.73	6.56	21.470	ホルンフェルス	44.7	I	
117	D-10	191	9.58	6.70	21.448	砂岩	105.9	C	
118	D-10	192	6.55	6.74	21.438	安山岩	73.3	N	
119	D-10	193	9.48	6.78	21.432	安山岩	21.4		
120	D-10	194	9.25	6.34	21.350	チャート	20.3		
121	D-10	195	9.42	6.95	21.430	安山岩	16.5	N	
122	D-10	196	9.32	6.70	21.436	安山岩	128.3		
123	D-10	197	9.25	6.82	21.418	砂岩	92.7		
124	D-10	198	9.20	6.95	21.426	ホルンフェルス	40.4	G	
125	D-10	199	9.42	6.79	21.432	チャート	5.8	G	
126	D-10	200	9.42	6.88	21.416	ホルンフェルス	47.8	G	
127	D-10	201	9.44	6.90	21.410	ホルンフェルス	54.9	G	
128	D-10	202	9.55	6.89	21.412	安山岩	102.1		
129	D-10	203	9.72	6.90	21.414	チャート	12.2		
130	D-10	204	9.82	6.90	21.434	砂岩	37.7	J	
131	D-10	205	9.87	6.50	21.420	チャート	10.4		
132	D-10	206	9.84	6.55	21.446	チャート	39.3		
133	D-10	207	9.90	6.60	21.418	砂岩	66.7		
134	D-10	208	9.96	6.54	21.480	砂岩	9.1	J	
135	D-10	209	9.98	6.45	21.458	砂岩	22.5		
136	D-10	210	9.16	7.18	21.400	安山岩	46.1		
137	D-10	211	9.35	7.06	21.408	砂岩	106.6		
138	D-10	212	9.35	7.12	21.446	チャート	4.7		
139	D-10	213	9.32	7.18	21.452	砂岩	16.5		
140	D-10	214	9.31	7.20	21.436	チャート	28.3		

第9表 御新田遺跡出土標計表(3)

No	グリッド	注記No.	北・南 (m)	東・西 (m)	標高 (m)	石材	重さ (g)	接合	備考
141	D-10	215	9.35	7.28	21.466	砂岩	12.4		
142	D-10	216	9.48	7.22	21.444	チャート	6.3		
143	D-10	217	9.44	7.38	21.472	チャート	8.4		
144	D-10	218	9.74	7.20	21.430	安山岩	31.5	H	
145	D-10	219	9.80	7.18	21.466	チャート	19.0		
146	D-10	220	9.84	7.16	21.480	砂岩	26.9	C	
147	D-10	221	9.87	7.06	21.454	砂岩	47.6		
148	D-10	222	9.96	7.23	21.410	安山岩	22.9		
149	D-10	223	9.98	7.43	21.400	チャート	11.0		
150	D-10	225	9.46	7.20	21.410	チャート	10.3		
151	D-10	226	9.62	7.40	21.390	安山岩	19.7		
152	D-10	228	6.82	3.33	21.385	砂岩	81.3	R	
153	D-10	229	6.98	3.38	21.386	チャート	1.3		
154	D-10	230	7.38	3.20	21.353	安山岩	6.3		
155	D-10	231	6.75	4.59	21.308	安山岩	28.2		
156	D-10	233	9.54	7.94	21.383	チャート	50.6		
157	D-10	234	9.76	7.94	21.366	チャート	18.7		
158	D-10	235	9.44	8.30	21.360	チャート	5.7		
159	D-10	236	9.87	6.60	21.438	安山岩	40.3		
160	D-10	237	9.73	6.60	21.440	チャート	8.5	K	
161	D-10	238	9.49	6.58	21.436	安山岩	10.0		
162	D-10	239	9.49	6.67	21.418	砂岩	13.6	L	
163	D-10	240	9.33	6.66	21.400	ホルンフェルス	1.8		
164	D-10	241	9.50	6.82	21.372	チャート	6.7		
165	D-10	242	9.34	6.73	21.402	砂岩	1.7		
166	D-10	243	9.36	6.78	21.394	砂岩	8.7		
167	D-10	244	9.30	6.86	21.400	チャート	33.1		
168	D-10	245	9.45	7.30	21.402	チャート	2.0		
169	D-10	246	9.82	7.60	21.366	安山岩	2.7		
170	D-10	247	9.76	6.70	21.350	チャート	10.5		
171	D-10	248	9.77	7.77	21.350	砂岩	10.1		
172	D-10	249	9.38	7.16	21.364	安山岩	14.2		
173	D-10	250	9.42	7.68	21.368	安山岩	12.4		
174	D-10	251	8.80	6.78	21.332	安山岩	2.6		
175	D-10	254	6.93	4.33	21.284	チャート	5.7	L	
176	D-10	257	9.76	6.97	21.330	安山岩	14.2		
177	D-10	258	9.90	7.24	21.320	安山岩	15.3		
178	D-10	260	9.88	7.37	21.331	チャート	3.8		
179	D-10	261	9.83	7.58	21.343	チャート	2.9		
180	D-10	262	9.92	7.68	21.328	チャート	3.8		
181	D-10	263	9.87	7.35	21.316	チャート	2.3		
182	D-10	264	9.91	7.66	21.325	チャート	0.2		
183	D-10	265	9.73	6.52	21.260	チャート	11.7		
184	D-10	266	9.80	7.41	21.293	チャート	2.2		
185	D-10	268	6.42	4.66	21.233	チャート	3.0		
186	D-11	6	8.13	0.70	21.332	チャート	0.5		
187	D-11	8	8.86	0.82	21.350	チャート	0.4		
188	D-11	13	9.50	0.55	21.358	チャート	25.3		
189	D-11	14	9.76	0.22	21.415	チャート	0.6		
190	D-11	15	9.82	0.50	21.391	チャート	3.8		
191	D-11	18	8.99	2.38	21.303	チャート	6.8		
192	D-11	19	8.18	2.69	21.274	チャート	1.7		
193	D-11	25	9.94	4.28	21.233	砂岩	157.0		
194	E-10	3	0.20	6.20	21.503	チャート	5.8		
195	E-10	5	0.21	7.05	21.486	チャート	4.0		
196	E-10	6	0.93	8.80	21.497	安山岩	9.7		
197	E-10	8	0.32	9.55	21.467	チャート	2.6		
198	E-10	9	0.50	9.88	21.455	チャート	0.0		
199	E-10	10	0.71	9.60	21.505	チャート	2.7		
200	E-10	11	0.88	9.52	21.505	安山岩	4.2		
201	E-10	12	1.32	9.20	21.510	チャート	2.0		
202	E-10	14	1.90	9.80	21.526	チャート	6.2		
203	E-10	16	2.59	8.15	21.550	チャート	1.0		
204	E-10	22	0.50	4.92	21.396	チャート	14.8		
205	E-10	23	0.20	5.20	21.400	チャート	1.0		
206	E-10	24	0.55	5.78	21.466	チャート	7.8		
207	E-10	25	0.60	5.78	21.410	チャート	9.5		
208	E-10	26	0.10	5.94	21.440	チャート	3.5		
209	E-10	27	0.08	6.24	21.490	チャート	4.0		
210	E-10	27	0.08	6.24	21.490	砂岩	2.9		

第10表 御新田遺跡出土隕計測表(4)

No	グリッド	注記No	北南 (m)	東西 (m)	標高 (m)	石材	重さ (g)	接合	備考
211	E-10	28	0.24	6.20	21.436	チャート	15.3		
212	E-10	29	0.14	6.34	21.474	チャート	3.7		
213	E-10	30	0.50	6.38	21.406	チャート	9.3		
214	E-10	31	0.82	6.70	21.388	チャート	5.2		
215	E-10	33	0.65	6.93	21.480	チャート	36.7		
216	E-10	34	0.10	6.84	21.436	チャート	11.8		
217	E-10	35	0.13	6.70	21.354	砂岩	29.5	A	
218	E-10	36	0.27	6.85	21.424	チャート	4.4		
219	E-10	37	0.06	7.00	21.408	安山岩	9.4		
220	E-10	38	0.08	7.04	21.400	安山岩	117.5		
221	E-10	39	0.08	7.10	21.390	砂岩	35.4		
222	E-10	40	0.12	7.26	21.366	安山岩	21.2	E	
223	E-10	41	0.30	7.10	21.348	チャート	5.9		
224	E-10	43	0.59	7.18	21.356	チャート	13.5		
225	E-10	44	0.95	7.05	21.400	チャート	7.9	F	
226	E-10	45	0.40	7.32	21.386	安山岩	33.3	E	
227	E-10	46	0.55	7.25	21.300	安山岩	77.2		
228	E-10	47	0.48	7.40	21.360	安山岩	42.7		
229	E-10	48	0.42	7.56	21.430	チャート	1.6		
230	E-10	49	0.02	7.62	21.458	チャート	7.9		
231	E-10	50	0.02	7.87	21.454	チャート	12.3		
232	E-10	51	0.30	7.90	21.338	安山岩	10.8		
233	E-10	52	0.25	7.96	21.376	チャート	23.5	B	
234	E-10	53	0.52	7.92	21.390	安山岩	8.3		
235	E-10	54	0.37	8.02	21.442	砂岩	16.8		
236	E-10	55	0.34	8.22	21.400	チャート	5.3		
237	E-10	56	0.85	8.05	21.446	チャート	3.8		
238	E-10	57	0.60	8.34	21.390	チャート	20.4		
239	E-10	58	0.02	8.50	21.410	砂岩	8.2		
240	E-10	59	0.38	8.50	21.450	チャート	6.9		
241	E-10	61	0.44	8.72	21.452	チャート	4.2		
242	E-10	62	0.08	8.94	21.376	チャート	2.2		
243	E-10	63	0.32	9.22	21.444	安山岩	5.8		
244	E-10	64	0.26	9.48	21.422	チャート	3.0		
245	E-10	65	0.30	9.55	21.392	チャート	33.3		
246	E-10	66	0.46	9.57	21.390	チャート	11.4		
247	E-10	67	0.06	9.46	21.444	チャート	6.1		
248	E-10	70	0.60	9.72	21.396	チャート	14.3		
249	E-10	71	0.98	9.96	21.460	チャート	25.7		
250	E-10	72	1.58	5.56	21.444	チャート	2.4		
251	E-10	74	1.06	8.16	21.440	チャート	7.2		
252	E-10	75	1.02	8.38	21.388	チャート	35.5		
253	E-10	76	1.16	8.70	21.456	安山岩	49.5		
254	E-10	77	1.46	8.58	21.436	安山岩	5.3		
255	E-10	78	1.82	8.02	21.496	チャート	8.4		
256	E-10	79	1.38	8.76	21.452	チャート	11.1		
257	E-10	80	1.48	8.82	21.480	チャート	5.3		
258	E-10	82	1.35	9.06	21.430	チャート	40.4		
259	E-10	83	1.30	9.16	21.464	安山岩	42.3		
260	E-10	84	1.56	9.52	21.410	チャート	20.5		
261	E-10	85	1.02	9.95	21.446	チャート	61.1	F	
262	E-10	86	1.37	9.80	21.450	安山岩	37.4		
263	E-10	87	1.64	9.70	21.428	砂岩	21.0		
264	E-10	88	1.66	9.92	21.408	砂岩	33.5		
265	E-10	89	0.08	6.70	21.360	チャート	1.9		
266	E-10	90	0.07	6.95	21.344	安山岩	14.2	C	
267	E-10	91	0.05	7.15	21.364	安山岩	130.1		
268	E-10	92	0.01	7.28	21.372	チャート	4.6		
269	E-10	93	0.00	7.58	21.364	安山岩	15.9		
270	E-10	94	0.10	8.08	21.320	チャート	13.3		
271	E-10	95	0.10	8.34	21.320	チャート	6.2		
272	E-10	96	0.04	8.42	21.330	安山岩	9.0		
273	E-10	97	0.26	8.02	21.334	チャート	3.1		
274	E-10	98	0.09	6.60	21.335	チャート	16.2	D	
275	E-10	99	0.13	6.62	21.320	チャート	8.0	D	
276	E-10	100	0.23	6.83	21.300	チャート	2.7		
277	E-10	101	0.17	7.14	21.300	安山岩	14.2		
278	E-10	102	0.07	7.35	21.320	チャート	9.4		
279	E-10	104	0.04	8.57	21.300	チャート	4.2		
280	E-10	105	0.58	7.01	21.290	チャート	4.0		

第11表 御新田遺跡出土標計表(5)

No	グリッド	注記No	北・南 (m)	東・西 (m)	標高 (m)	石材	重さ (g)	接合	備考
281	E-10	106	0.61	7.01	21.302	チャート	11.6		
282	E-10	108	2.15	8.27	21.550	チャート	3.7		
283	E-10	109	2.23	8.31	21.455	チャート	11.3		
284	E-10	110	2.17	8.78	21.362	チャート	2.9		
285	E-10	111	2.57	8.82	21.475	安山岩	48.9		
286	E-10	112	2.88	8.77	21.525	チャート	11.7		
287	E-10	113	2.79	8.93	21.528	安山岩	10.4		
288	E-10	115	0.11	6.61	21.326	チャート	7.0		
289	E-10	116	0.26	6.56	21.307	安山岩	16.7		
290	E-10	117	0.65	6.65	21.230	チャート	19.9		
291	E-10	118	0.33	6.99	21.311	チャート	0.8		
292	E-10	119	0.42	7.87	21.285	チャート	2.4		
293	E-10	120	0.53	7.83	21.290	チャート	3.1		
294	E-11	1	0.12	0.06	21.425	チャート	4.9		
295	E-11	2	0.11	0.30	21.421	チャート	5.3		
296	E-11	3	0.38	0.14	21.435	チャート	6.6		
297	E-11	4	0.42	0.23	21.431	砂岩	0.8		
298	E-11	5	0.46	0.34	21.425	チャート	38.7		
299	E-11	6	0.34	0.40	21.410	砂岩	1.0		
300	E-11	7	0.39	0.52	21.410	チャート	11.2		
301	E-11	8	0.60	0.56	21.430	チャート	41.8		
302	E-11	9	0.52	0.58	21.416	チャート	5.0		
303	E-11	10	0.67	0.70	21.421	チャート	7.8		
304	E-11	11	0.54	0.84	21.431	砂岩	1.1		
305	E-11	12	0.38	0.95	21.420	チャート	1.1		
306	E-11	13	0.48	0.92	21.418	砂岩	0.3		
307	E-11	14	0.86	0.05	21.470	チャート	1.0		
308	E-11	15	0.94	0.18	21.456	チャート	4.2		
309	E-11	16	0.96	0.40	21.451	砂岩	3.5		
310	E-11	17	1.08	0.17	21.477	チャート	19.4		
311	E-11	18	1.04	0.64	21.448	チャート	5.8		
312	E-11	19	1.15	0.74	21.442	砂岩	23.8		
313	E-11	20	1.24	0.20	21.489	チャート	2.1		
314	E-11	21	0.32	1.62	21.400	砂岩	6.9		
315	E-11	22	0.86	2.16	21.408	チャート	7.3		
316	E-11	23	0.80	3.20	21.430	チャート	2.3		
317	E-11	24	1.35	0.14	21.484	チャート	1.0		
318	E-11	25	1.46	0.16	21.488	チャート	14.0		
319	E-11	26	1.62	0.04	21.498	チャート	11.0		
320	E-11	29	1.68	0.99	21.442	チャート	9.3		
321	E-11	30	1.10	1.48	21.412	チャート	1.2		
322	E-11	31	1.45	0.50	21.480	砂岩	9.2		
323	E-11	32	2.10	0.48	21.470	チャート	1.1		
324	E-11	34	4.60	2.64	21.513	砂岩	38.2		
325	E-11	37	6.08	3.78	21.545	チャート	37.4		
326	E-11	38	0.64	0.92	21.386	砂岩	5.8		
327	E-11	39	0.86	0.50	21.400	チャート	6.9		
328	E-11	40	0.90	0.66	21.350	チャート	9.5		
329	E-11	41	0.32	0.45	21.308	砂岩	5.1		
330	E-11	42	0.16	1.48	21.368	チャート	26.2		
331	E-11	43	1.40	0.18	21.408	安山岩	13.4		
332	E-11	44	1.44	0.64	21.380	チャート	16.7		
333	E-11	45	1.58	0.55	21.380	チャート	6.3		
334	E-11	47	1.27	0.47	21.440	砂岩	6.1		
335	E-11	48	1.34	0.18	21.412	砂岩	23.6		
336	E-11	49	1.22	0.48	21.364	チャート	12.6		
337	E-11	50	1.36	1.20	21.364	チャート	13.2		
338	E-11	51	1.32	1.42	21.368	チャート	6.8		
339	E-11	52	1.70	1.24	21.374	チャート	8.0		
340	E-11	53	0.70	0.90	21.285	チャート	2.4		
341	E-11	55	2.20	0.20	21.140	チャート	2.9		
342	E-11	56	2.20	0.44	21.418	チャート	4.1		
343	E-11	57	2.24	0.36	21.378	砂岩	3.1		
344	E-11	59	2.06	0.92	21.430	チャート	10.5		
345	E-11	60	2.04	1.75	21.452	安山岩	42.8		
346	E-11	61	2.23	1.63	21.416	チャート	4.4		
347	E-11	64	3.30	1.12	21.464	砂岩	5.3		
348	E-11	65	3.44	1.88	21.426	チャート	2.3		
349	E-11	67	3.50	2.12	21.418	チャート	19.7		
350	E-11	69	2.08	1.72	21.292	チャート	3.0		

(5) 黒曜石の産地分析

御新田遺跡からは、旧石器時代の調査区から65点の黒曜石が出土した。これら全点を観察の対象とし、分析番号を割りあて、さらに42点(65%)を選択して蛍光X線による産地推定を行った。その結果は第12表に示したとおりである。

分析では、42点中22点(52%)の産地が推定でき、20点(48%)が不明であった。内訳は、和田峠群が21点(95%)、男女倉群が1点(5%)と、和田峠群がほとんどを占める結果となった。

ところで、本遺跡の分析では、産地不明に帰結した試料の割合が他の遺跡より高かった。その原因は改めて検討する必要があるが、現状では0.3g以下の小形石器が多く含まれる点や、第42図2の槍先形尖頭器のように、表面が磨りガラス状になっている点などが分析に支障をきたした原因と考えられる。

本遺跡出土黒曜石分析の詳細や、試料の状態による分析誤差などについては、当事業団「研究紀要」にてあらためてふれるつもりである。

第12表 御新田遺跡出土黒曜石産地推定表

No	グリッド	注記No	師図	番号	器種	重量(g)	分析番号	誤差の目安	推定した産地
1	D-10	17	第44図	26	剥片	1.0	御新田-002	m-m±4σ	和田峠群
2	D-10	26			剥片	0.3	御新田-004		不明
3	D-10	31			剥片	1.1	御新田-005	m-m±1σ	和田峠群
4	D-10	46			剥片	0.9	御新田-006	m-m±4σ	和田峠群
5	D-10	56	第42図	2	槍先形尖頭器	2.0	御新田-008		不明
6	D-10	57			剥片	0.5	御新田-009	m-m±3σ	和田峠群
7	D-10	59			剥片	1.4	御新田-011	m-m±0σ	和田峠群
8	D-10	61	第44図	16	撚・削器	0.8	御新田-012		不明
9	D-10	72			剥片	0.3	御新田-015		不明
10	D-10	77			剥片	0.1	御新田-017		不明
11	D-10	80			剥片	0.2	御新田-018		不明
12	D-10	81			剥片	0.1	御新田-019		不明
13	D-10	86			剥片	0.1	御新田-021		不明
14	D-10	90			剥片	0.3	御新田-022	m-m±3σ	和田峠群
15	D-10	98			剥片	0.4	御新田-024		不明
16	D-10	107	第42図	3	削片	0.4	御新田-026		不明
17	D-10	108	第44図	25	剥片	1.5	御新田-027		不明
18	D-10	124			剥片	0.2	御新田-032		不明
19	D-10	135	第45図	29	剥片	1.4	御新田-033		不明
20	D-10	140	第44図	15	撚・削器	0.7	御新田-034	m-m±4σ	和田峠群
21	D-10	145			剥片	0.9	御新田-035	m-m±1σ	和田峠群
22	D-10	148	第42図	4	削片	0.8	御新田-037		不明
23	D-10	149	第44図	24	剥片	2.7	御新田-038	m-m±0σ	和田峠群
24	D-10	150			剥片	0.6	御新田-039	m-m±0σ	和田峠群
25	D-10	158			剥片	0.6	御新田-043	m-m±2σ	和田峠群
26	D-10	224	第44図	23	剥片	1.9	御新田-045	m-m±0σ	和田峠群
27	D-10	227			剥片	0.2	御新田-046		不明
28	D-10	232			剥片	0.4	御新田-047		不明
29	D-10	256	第43図	12	撚・削器	3.2	御新田-049	m-m±1σ	和田峠群
30	D-10	259			剥片	0.2	御新田-050	m-m±3σ	和田峠群
31	D-11	9	第44図	17	撚・削器	7.4	御新田-051	m-m±0σ	和田峠群
32	D-11	17	第44図	13	撚・削器	10.8	御新田-053	m-m±3σ	和田峠群
33	D-11	21			剥片	1.8	御新田-054	m-m±2σ	和田峠群
34	D-11	23	第44図	14	撚・削器	4.5	御新田-055	m-m±2σ	和田峠群
35	D-11	24			剥片	0.9	御新田-056	m-m±4σ	男女倉群
36	E-10	4			剥片	0.2	御新田-057		不明
37	E-10	32	第43図	11	撚・削器	24.0	御新田-059	m-m±0σ	和田峠群
38	E-10	121			剥片	0.4	御新田-061	m-m±3σ	和田峠群
39	E-11	35			剥片	0.8	御新田-062		不明
40	E-11	58	第43図	6	削片	0.3	御新田-063		不明
41	E-11	66			剥片	0.4	御新田-064		不明
42	E-11	68	第45図	34	石核	3.5	御新田-065	m-m±0σ	和田峠群

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第47・48図)

G・H-7・8グリッドで検出した。確認面においては地山と褐色の外周部覆土の識別が困難で、検出当初は中世の小平形土壇として調査を開始した。しかし、掘り進むにつれ白色バミスを多く含む硬い暗褐色から黒褐色土が確認され、縄文の遺構ではないかとの疑いが強くなった。床面近くで燃糸文系土器を検出するに及び、同期の住居跡としての認識を初めもった。

開口部の形状は4m規模の隅丸方形だが、北西壁が少し短い。確認面から床面までの深さは0.4から0.5mと、他の住居跡に比べて深い。

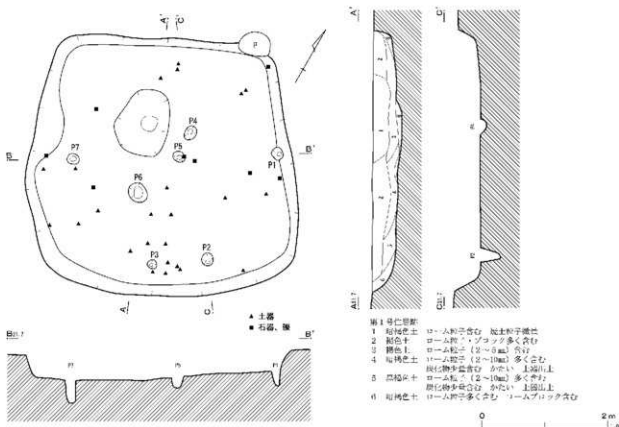
床面は北西方に若干傾斜しており、中央北寄りには深さ0.1mほどの皿状の窪みが発見できた。灰跡かとも考えたが、焼土など、根拠になるもの

は見あたらなかった。竪穴の外形と中央の窪みから算定した長軸方位はN-33°-Wである。

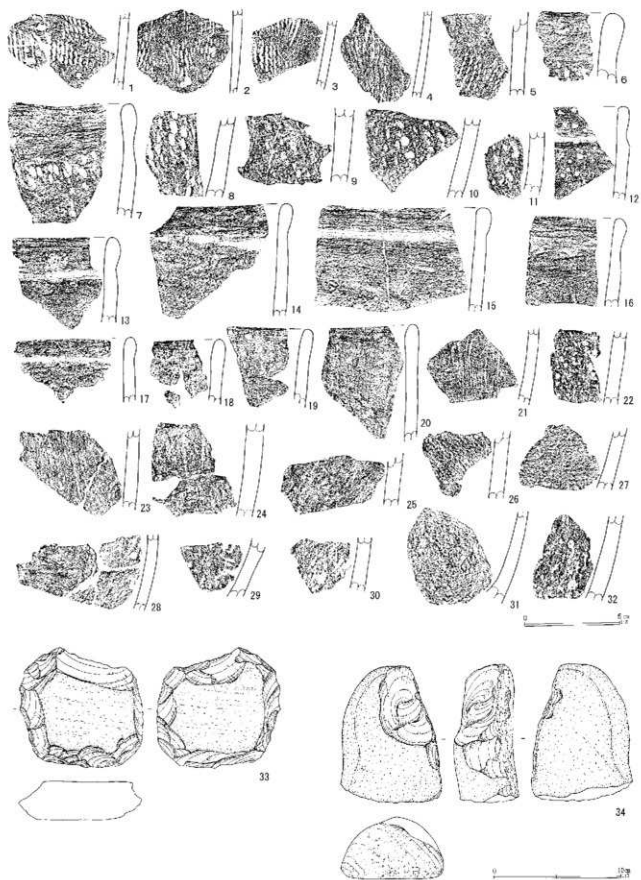
覆土は、前述したとおり、確認面では地山と見分けにくい褐色土が外周に堆積しているが、下層では、かたいブロック状の暗褐色から黒褐色土が広がっており、この土の分布を目安に住居跡の規模・形態を確定できた。

このような覆土色の堆積順は、通常と順序を逆にするが、出土土器の時期を考慮すると、むしろ上層の方が順当な埋没土と考えられる。下層の4層・5層と同じような堆積土を深谷市白草遺跡の縄文早前期遺構(川口1993)で視認したことがあるが、形成の事情はわからない。

このほか、床面では、7箇所に小穴を確認したが、いずれも径が小さく浅い。覆土の特徴を含め、これらが柱穴類となるかは判断がつかない。



第47図 第1号住居跡



第48图 第1号住居跡出土遺物

遺物は、主として4層・5層の床面近くから出土しており、竪穴の深さと相まって時期的なまとまりを保証できる。また、住居跡中央で東西に列をなしたように礫が分布していたが、作法的な根拠は見取れなかった。

土器は、40点が出土した。すべて燃糸文系後葉期の破片で混在はない。調査時は、床面に口縁部片が多く出土していたため、同個体が破片化し散乱したものかと考えたが、接合作業の結果、口縁部だけでも8個体あることが判明した。

図示できなかったものを含め、これらは燃糸文の特徴などで3種に大別できる。すなわち、細い燃糸文が観察できるもの8点(第48図1~5)、粗大な燃糸文が残るもの6点(同図6~11)、無文のもの26点(同図12~32)である。

前者で図示した5点のうち、1~4は燃糸R、5はLが縦位施文されている。施文は転々となされ、一回あたりの範囲は小さい。また、粗大な燃糸文が施文された6~11は、節が大きい上に施文が浅くまばらで原体すらわからない。口縁部は6・7があるが、6は器厚に変化なく最上部で外反し、7は全体で内彎するものの、口縁下で凹部を作り出しているため、肥厚外反するかに見える。いずれも口縁下がナデ込まれている。

これに対し、無文口縁部の12~20のうち、12~17は7と同じ口縁部製作手法を用いている。18~20の直立するものを含め、すべての口縁部片は口唇断面が丸頭状となる。また、胴部も含め、無文片はほとんどが全面をナデ込んでおり、良好な焼成と相まって黒光りする14や15などは中世の土鍋のようにも見える。

一方、石器は、中央床面に分布していた礫群のうち2点が石器製品であった。33は緑泥石片岩製の礫器で、四周が加工されている、刃部は急斜で粉碎加工工具並の重量がある。また、34は砂岩製のスタンプ形石器だが、頭部加工は一部で行われているのみである。

第2号住居跡(第49・50図)

G・H-2・3グリッドで検出した。第1次調査の表土掘削段階から黒褐色の覆土がはっきりと認められ、遺物も散乱していた。

竪穴開口部の平面形状は梯子形に近い長方形で、1.8倍近い長短軸比は、通常見られるこの期の住居跡のなかでは長径の比率が大きい部類に属する。竪穴の外形と方碕跡との位置関係から見た主軸方位はN-19°-Wである。

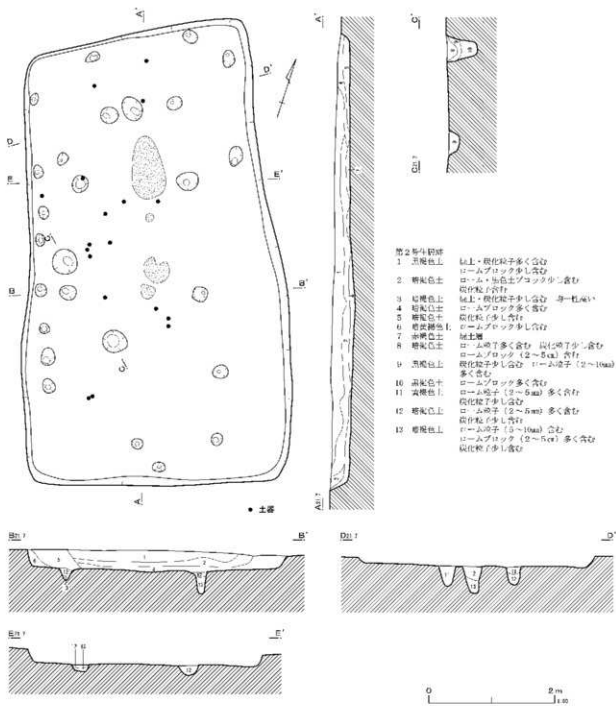
竪穴の覆土は、上層の黒褐色から、下層ほどに黄色味を増す自然堆積である。床面は、中央東部にあった大木の根株などの影響でやや荒れており、主軸線上に3箇所認められた焼土跡は、いずれも掘り込みを把握できなかった。

主柱穴及び壁際の施設は、確たるものが発見できず、また、この期に多い拡張の痕跡もない。主軸を線対称軸とする6本の主柱穴を念頭に確認を重ねたが、いくつか見られた柱穴らしき痕跡はどれも柱筋が通らない。また、西壁際に小穴が並ぶが、いずれも浅いものである。このうちいくつかを断ち割り、立柱の痕跡を探したが、確定できるものはなかった。

遺物は、いずれも覆土中から発見されたものである。土器は151点が出土しているが、周囲からの混入も多く、早期燃糸文系が24点、同条痕文系は38点出土している。だが、近隣に遺構が分布する中期勝坂系の土器は1点も出土していない。本住居跡の構築期にあたる前期黒浜期の破片は、89点を検出した。

これに対し、石器は、石鏃1点、磨製石斧1点、磨石類1点のほか、黒曜石とチャートの剥片類が、それぞれ4点と5点出土している。

第50図1~6は、燃糸文系後葉期の所産で、すべて無文である。2点認められた口縁部は、いずれも沈線こそないものの、相当部位が若干窪み口唇部が外傾するよう整えられている。また、7は同時期の土器片を転用した土製円盤である。

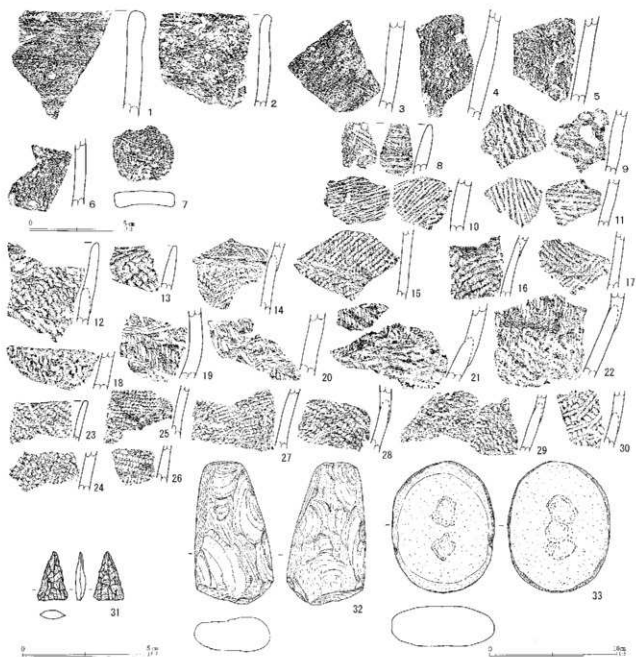


第49図 第2号住居跡

8~11は条痕文系の破片だが、8の口縁直下に刺突らしき痕跡がある他は、文様らしきものは見あたらない。だが、条痕の深さ、胎土の乾いた質感からすると、条痕文系でも前半期に帰属するものと思われる。

12~30は、本住居跡の構築期にあたる黒浜式土器である。このうち、12~22は無節斜縄文が施文されるものだが、18~22の同一個体片のみならず、原体の作り方がずさんである。

このような土器作りの気風は、23~29の単節斜



第50図 第2号住居跡出土遺物

縄文原体やその施文方向にも通じており、15・17が整った羽状となる他は、単方向施文か斜位施文で原体を押捺している。また、30は1段の軸縄に0段の縄2本を逆方向に附加した原体を回転している。関山期の正反の合回転痕と類似する圧痕であるが、正反縄とも1段ずつ低い。

一方、石器は3点の製品を図示した。31はチャート製の三角鏃で、石鏃一般のなかでは長軸比が大

きい。また、32は変斑劔岩製の磨製石斧で、黒浜期の乳棒状磨製石斧にしては横幅が広い。自然面・剝離面・敲打面が多く残る粗製のものだが、刃部の傾斜からすると何度かの再生を経ているようである。そして、33は表裏・左右側面に磨痕が残る閃緑岩製の磨石で、腹部阿面には複数の凹痕も加えられている。自然転石の原型をとどめないほどに使い込まれている。

第3号住居跡 (第51・52図)

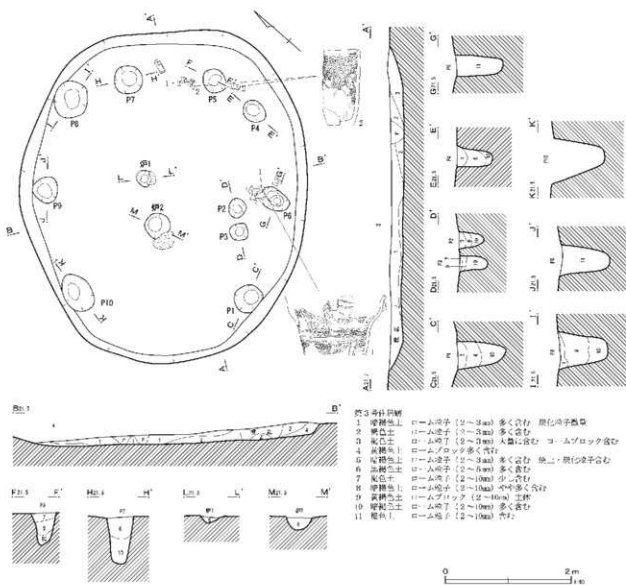
I・J—1グリッドで検出した。開口部の外形は楕円形、柱穴と炉跡の関係から見た主軸方位はN—53°—Eである。壁はなだらかで崩落なども考えられるが、牛原遺跡の同期住居跡とも共通していることから、大幅な修正は必要ないと思われる。床面はやや起伏があり、中央に2箇所の地床炉跡を発見した。

柱穴及び類似の小穴は10本を確認したが、牛原遺跡で認められたような入口部の施設は発見できなかった。このうち、規模と深さに劣る内側のP

2・P3を除く8本が上屋を支える主柱穴と認めることができる。

炉跡の数や竪穴の形態を考えあわせると、P1・P4・P8・P10の4本から、P1・P6・P5・P7・P9・P10の6本主柱穴への改築が想定される。ただし、柱穴断面の観察では、最終立柱の痕跡は見いだせなかった。

柱の掘えかえとともに、竪穴外形の拡張も行われたようで、竪穴外形はこの6本柱穴配置に見合う形態となっている。また、長軸の伸張に伴い、南がから北がへの移動も行われたのだろう。



第51図 第3号住居跡

133点の遺物はおもっぱら土器で、多くが覆土下層より出土した。その内訳は、早期燃糸文系8点、同条痕文系5点、前期黒浜式13点、同諸磯b式1点、中期勝坂系107点であった。

第52図に出土土器を示したが、3は条痕文系、4～6は無節斜縄文を施す黒浜式で、7が諸磯b式キャリパー系平行沈線文土器である。

これに対し、1・2・8～16は勝坂系で、1は風化著しく詳しい構成が把握しづらいが、口縁下に垂下隆帯を加える他は横位線列で文様を描く個体のようである。また、2は、小型円筒形の抽象文土器で、縄文地文の胴上位に円文を配置するが、1箇所のみこれが変形文となっている。

さらに、8～11は連続三角文を基調とした列点施文横帯構成の系列で、12・14は平行沈線描画で縦位パネル文を描く同一個体片である。また、13は0段多条RLの回転痕が残る深鉢下位で、15・16は浅鉢となるだろう。

(2)集石土壌

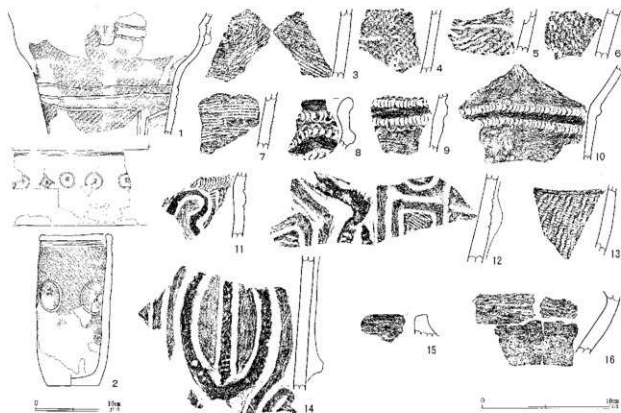
第1号集石土壌 (第53図)

H-4グリッドで検出した。土壌の平面形態は略楕円形、断面形は傾斜の緩い楕状となり、中央部がやや盛り上がる。覆土は、中央南寄り上層に礫を大量に含む黒褐色土、北寄りと下層には黄褐色土が堆積していた。

覆土中に含まれていた礫は、総計で30.6kgであった。礫大別にみた重量比だと、径2cm以下が8.6%、4cmまでが34.9%(959個)、6cmまでが32.3%(188個)、8cmまでが21.1%(58個)、10cmまでが3.1%(4個)と、拳半分程度の礫を中心に構成されていた。

礫種は流紋岩、チャート、砂岩などが主体で、被熱赤化したものは一部であるものの、煤の付着により黒化したものが半数近くあった。また、3割程度が受熱により破砕化している。

遺物は、中期勝坂式土器が1点出土した。



第52図 第3号住居跡出土遺物

第2号集石土壌 (第53図)

H-4グリッドで検出した。土壌掘り方の平面形態は円形、断面形はほぼ鍋底状である。覆土は中央上層に黒褐色土、さらに外周と下層には暗褐色土が堆積していた。出土した礫は、中央の上層に大半が分布していた。

覆土中に含まれていた礫は、総計0.8kgであった。礫の大きさ別の重量比だと、径2cm以下が23.7%、4cmまでが53.9%(47個)、6cmまでが22.4%(8個)で、小礫が大半を占める。

これらは、ほぼすべてが破砕化されたものである。だが、被熱赤化したものは見あたらない。ただし、破砕面が煤により黒化したものが多いことから、破砕の原因は被熱と見て大過ないだろう。

遺存した礫の種類は、流紋岩と砂岩が主体となっている。他の集石土壌で多く含まれているチャートは、比較的少ない。

遺物は、図示できなかった前期の黒浜式土器が1点出土したのみであるが、これをもって構築期にあてることができない。

第3号集石土壌 (第53図)

G・H-4グリッドで検出した。土壌の平面形態は楕円形、断面形は壁面の傾斜が緩い皿状である。覆土は三分したが、上位の1層・2層はほぼ同質である。礫はこの両者の中に多く含まれていた。これに対し、下層には、礫をあまり含まない黄褐色土が堆積していた。

覆土中に含まれていた礫は、総計0.8kgであった。礫大別の重量比だと、径2cm以下が27.5%、4cmまでが36.3%(33個)、6cmまでが16.3%(3個)、8cmまでが20%(1個)であった。

これらは、大半が破砕化されたものだが、被熱による赤化や煤による黒化は少数でしか観察できない。礫種は、流紋岩と頁岩、チャートで構成され、砂岩は少ない。

遺物は、出土しなかった。

第4号集石土壌 (第53図)

G-4グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は皿状である。覆土は、上層中央に礫の大半を含む黒褐色土が、下層には暗褐色土が堆積していた。

覆土中に含まれていた礫は、総計3.6kgであった。礫大別の重量比だと、径2cm以下が5.8%、4cmまでが46%(160個)、6cmまでが33.7%(33個)、8cmまでが14.5%(5個)であった。

これらのうち、半数が破砕化しているが、煤による黒化や受熱赤化は限られた一部にとどまっている。礫種は、チャート、流紋岩、砂岩などで構成されている。

遺物は、出土しなかった。

第5号集石土壌 (第53・54図)

H-3グリッドで検出した。土壌掘り方の平面形態は円形、断面形は壁面の傾斜が緩やかな椀状である。覆土は、上層の中央に黒褐色土、下層には黄褐色土が堆積し、礫のほとんどは前者の層中に分布していた。

覆土中に含まれていた礫は、総計で7.0kgであった。礫大別の重量比だと、径2cm以下が3.3%、4cmまでが27%(153個)、6cmまでが39.9%(80個)、8cmまでが27.6%(24個)、10cmまでが2.2%(2個)と、6cm内外の礫大が中心である。

礫種は流紋岩、チャート、砂岩などが主体で、被熱赤化や煤の付着により黒化したものは少ないものの、破砕率はほぼ100%であった。

遺物は、早期の条痕文系土器1点と、第54図1に示した爪形文で鋸歯文を描く前期黒浜式土器1点が出土したものの、構築期を指し示す遺物とは考えられない。

第6号集石土壌 (第53図)

G-4グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は壙底が小さい皿状となる。覆土は、上層中央に黒褐色土が、壙底と同形態で堆積し、外周、さらに下層に向かって黄色味を増す反面、

礫の出土は減少する。

覆土中に含まれていた礫は、総計2.4kgであった。礫大別の重量比だと、径2cm以下が12.7%、4cmまでが58.9% (130個)、6cmまでが22.5% (18個)、8cmまでが5.9% (3個)であった。

礫種は、チャート、流紋岩、砂岩などで構成されている。ほぼすべてが破砕化しているものの、受熱赤化や煤による黒化はわずかな破片で観察できるとどまる。

遺物は、中期勝坂式土器が1点出土した。

第7号集石土壌 (第53・54図)

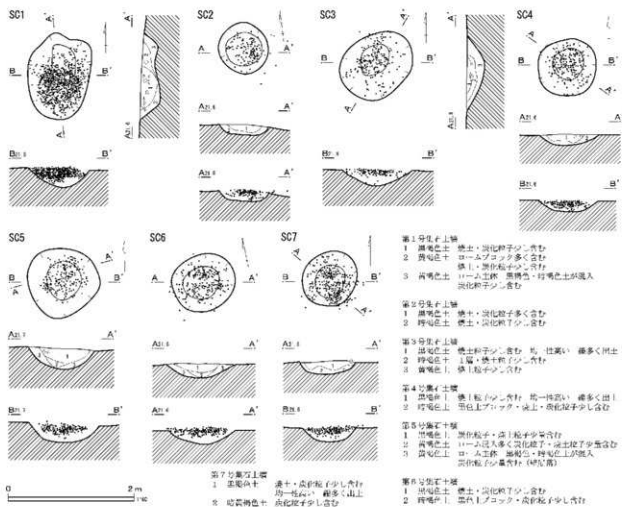
G-4グリッドで検出した。土壌の平面形態は円形、断面形は傾斜の緩い鍋底状である。覆土は、上層に黒褐色土、下層に暗黄褐色土が堆積してお

り、礫の大半は上層から出土した。

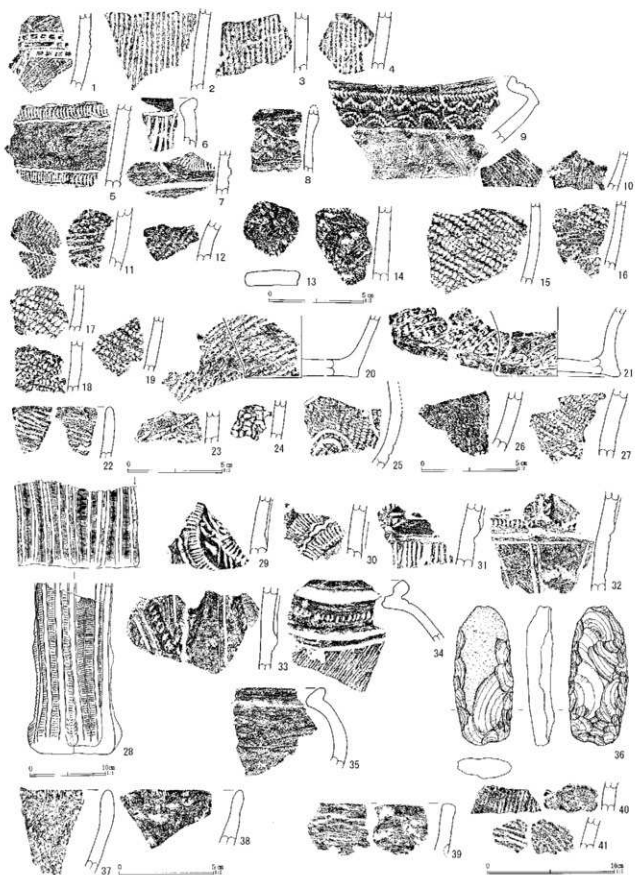
覆土中に含まれていた礫は、総計7.6kgであった。礫大別の重量比だと、径2cm以下が3.4%、4cmまでが40% (220個)、6cmまでが51% (80個)、8cmまでが5.6% (3個)であった。

礫の種類は、チャートに加え、流紋岩、砂岩などで構成されている。被熱による破砕化や赤化は比較的少ないが、煤による黒化は半数以上の礫に及んでいる。

遺物は、中期勝坂式土器が17点出土した。第54図2～4にこのうちの3点を示したが、施文された燃糸文の特徴からすると、大部分が同一個体と思われるものの、接合かかわなかった。



第53図 集石土壌



第54図 集石・土壇・炉穴出土遺物

(3) 落し穴状遺構

第1号土壇 (第55図)

F-10グリッドで検出した。壇底の長軸方位はN-81°Eで、本号を含め、第2号・第3号・第4号の4基が等間隔で並列して分布しており、その最南に位置している。機能効率の面から考えると、これらは同時期に、かつ4者の距離を意識しながら構築されたものと考えられる。

開口部の平面形は楕円形だが、掘り込みが深まるとともに長短軸に沿った直線がはつきりとし、壇底に至ると略長方形に変化するともに、東方は隅部が磨だった換形となる。

確認面での覆土は、落し穴状遺構特有の、焼土粒子や炭化物粒子を少量含む黒褐色土である。これは、今回発見できた落し穴状遺構に共通し、規模や形態とあわせ、確認段階で容易に同種の遺構と判断できた。

覆土は、6層に分層したが、黒褐色が強い上層と、暗褐色と褐色が交互に繰り返される下層とに大別できる。このうち、下層の互層は、壁面崩落の多少が繰り返された結果形成されたもので、すべて自然堆積と考えられる。

遺物は、覆土中より早期燃余文系土器の図示できない小片が4点出土したが、構築期を特定できるものではないと考える。

第2号土壇 (第55図)

E-9グリッドで検出した。壇底の長軸方位はN-45°Eで、4基並列の落し穴群のうちの南から2番目を占める。

開口部の規模は両横に並ぶ同種土壇より小規模で、北に一つとばした第4号や、1基のみが離れて見つかった第5号と同規模である。

開口部の平面形は楕円形だが、壇底は隅部が整った長方形となる。覆土は、5層・7層に明確な壁面崩落層を認めるほか、自然に形成された明暗の互層で成立している。

遺物は、出土しなかった。

第3号土壇 (第55図)

D・E-9グリッドで検出した。壇底の長軸方位はN-54°Eで4基並列の北から2番目を占める。開口部の規模は両並びの土壇より大規模で、南に一つとばした第1号と同規模である。

開口部の平面形は長楕円形だが、壇底は隅部が整った長方形となる。覆土には大量の崩落土が流れ込み、1層・2層、5層・6層などはさみ互層を形成している。このことより、上位の平面形は、壁面の大量崩落によって楕円と化したものと考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第4号土壇 (第55図)

D-8グリッドで検出した。壇底の長軸方位はN-62°Eで、4基並列の最北を占める。開口部の規模は小規模で、南に一つとばした第2号と同規模である。

平面形は長楕円形だが、壇底は整った長方形となる。覆土は、壁面崩落土の5層・7層をはさんだ自然流入土の互層となる。

遺物は、出土しなかった。

第5号土壇 (第55図)

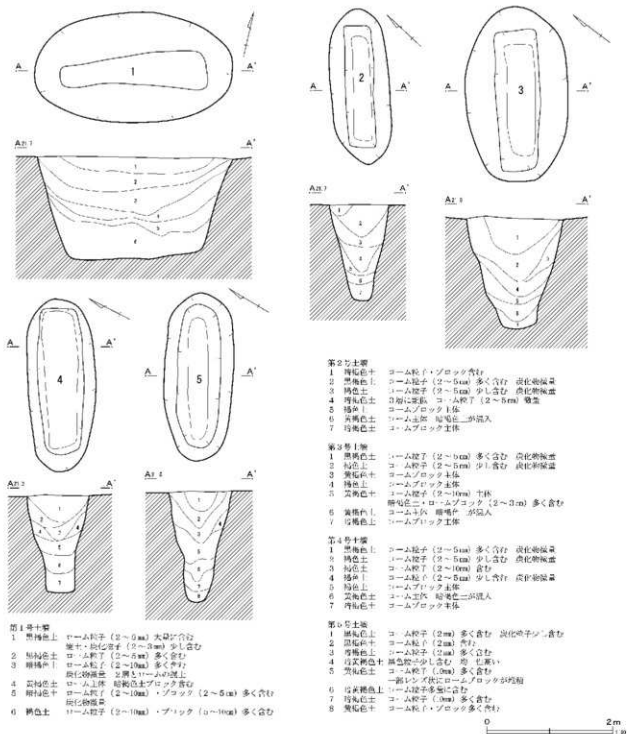
G-6グリッドで検出した。壇底の長軸方位はN-63°Eで、他の落し穴状遺構とほぼ一致するが、1基のみ離れた場所に分布している。

開口部の規模は小規模で、傾向としては第2号・第4号らと一致する。確信はもてないが、両土壇とともに小規模な落し穴が三角形を形成するとも考えられ、配置を意識し、同時期に構築された可能性も残されている。

平面形は長楕円形。壇底の形態は、他の落し穴状遺構と異なり、開口部とほぼ同じ形で、その隅部は曲線となっている。

覆土は、壁面が崩落したと考えられる6層・8層などと、周囲からの流入土との互層を重ねながら堆積している。

遺物は、出土しなかった。



第55図 落とし穴遺構

(4) 土壌

第6号土壙 (第54・56図)

H-8グリッドで検出した。平面形楕円の浅い土壌である。断面形は皿形で、覆土は炭化物を含み、下層ほどに黄色味を増す。

遺物は、土壌の浅さを反映して、確認段階より散乱しており、早期撚糸文系土器4点、前期黒浜式土器1点、中期撚坂式土器8点が出土した。

第54図5~9に出土土器を示したが、すべて撚坂系土器である。隆帯部に爪形文を配するのが一

般的で、9は三角印文による鋸歯文を口縁部文様帯に配する浅鉢形土器である。

本土壌は、出土土器より、勝飯期に構築されたものと判断できる。

第7号土壌 (第56図)

I-5グリッドで検出した。楕円の平面形を呈する小土壌である。断面形は椀状で、覆土は下層ほどにローム含有物と明度を増す。

遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から縄文時代の土壌と判断した。

第8号土壌 (第56図)

H-5グリッドで検出した。第9号土壌と重複しているが、平面確認段階で本壌が古くに構築されていたことが識別できた。

平面形はゆがんだ円形だが、北東方に円形の主体があり、南東方は壁面が崩落したものと考えられる。断面形の基調は椀形で、覆土は自然堆積の暗褐色系土で占められている。

遺物は、出土しなかった。

第9号土壌 (第54・56図)

H-5グリッドで検出した。第8号土壌と重複するが、確認時に本壌の後出る識別できた。

形態は第8号に通じており、円形・椀状の形態を呈する。覆土は、黒褐色系土が主体で、上層から下層への明度変化が第8号より著しい。

遺物は、第54図10の早期条痕文系土器が出土したものの、埋没時の流入と考えられる。

第10号土壌 (第54・56図)

I-4グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は緩い傾斜の鍋底状である。覆土は、上層の黒褐色土から、下層ほどに黄色味を増す。

遺物は、第54図11の条痕ある無節縄文土器を含め、前期黒浜式土器3点、中期勝飯式土器1点が出土したが、構築期は特定できない。

第11号土壌 (第54・56図)

J-3グリッドで検出した。平面形は楕円、断面形は緩やかな椀状となる。覆土は暗褐色土主体

で、下層でローム混入物と明度が増す。

遺物は、前期黒浜式土器2点、弥生土器の土製円盤1点(第54図13)が出土している。

本土壌は、出土遺物と覆土の特徴より、黒浜期に構築されたものと判断できる。

第12号土壌 (第56図)

K-3・4グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形の基調は椀状だが、南北で傾斜率が異なる。覆土は、炭化物含む黒褐色系土が基調で、下層ほどに明度を増す。

遺物は、出土しなかった。

第13号土壌 (第56図)

J-3グリッドで検出した。近世と考えられる小穴が重複している。平面形は楕円形で、断面は鍋底状である。覆土は、ローム混入物含む褐色系土で、下層はローム主体の埋土となる。

遺物は、中期勝飯式土器が1点出土したが、構築期に関わるかは判断できなかった。

第14号土壌 (第56図)

J-4グリッドで検出した。平面形は楕円だが、一部変形しており、不整形にみえる。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第15号土壌 (第56図)

J-4グリッドで検出した。平面形は小規模な楕円で、東方に一段深い掘り込みを加える。この部分の覆土は周辺の小穴と特徴を異にしており、本壌に伴うものと判断した。覆土は、ローム混入物含む黒褐色から暗褐色系土で占められる。

遺物は、出土しなかった。

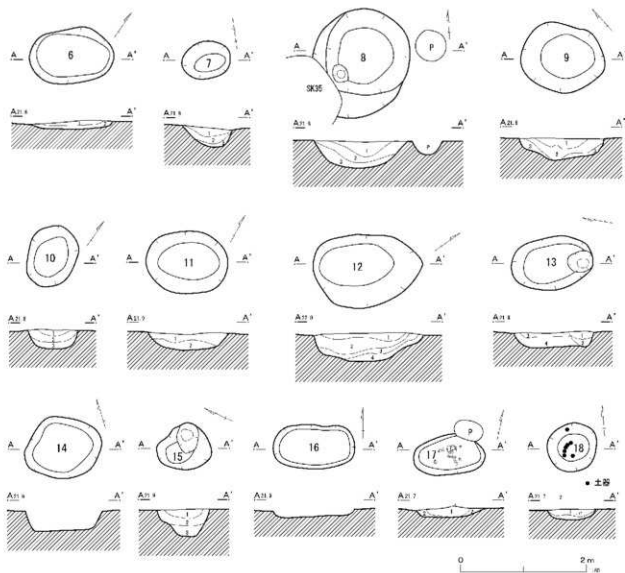
第16号土壌 (第56図)

K-4グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第17号土壌 (第54・56図)

I-2・3グリッドで検出した。平面形は楕円



第6号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~5mm) 含む 炭化物 (2~3mm) 少し含む
- 2 黄褐色土 コーム粒子全体 1層が侵入 炭化物 (2~3mm) 微量

第7号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~5mm) 微量
- 2 暗褐色土 1層が侵入 コームブロック多く含む
- 3 黄褐色土 コーム土塊 暗褐色土が侵入

第8号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒子多く含む 炭化物少し含む
- 2 暗褐色土 コーム塊も多く含む
- 3 暗褐色土 コーム塊少し含む コームブロック含む

第9号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒が多く含む
- 2 暗褐色土 暗褐色土・ロームブロック少し含む
- 3 黄褐色土 コーム粒子全体

第10号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒子 (2~3mm) 少し含む
- 2 暗褐色土 コーム粒子 (2~5mm) 含む 炭化物少し含む
- 3 黄褐色土 コーム粒子全体 暗褐色土を含む

第11号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~10mm) ・炭化物少し含む
- 2 黄褐色土 コーム土塊 暗褐色土含む

第12号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~3mm) 含む
- 2 暗褐色土 1層が侵入 コームブロック多く含む 炭化物微量
- 3 黄褐色土 コーム粒子 (2~5mm) を含む 炭化物微量
- 4 黄褐色土 コーム土塊

第13号土壌

- 1 暗褐色土 コームブロック少し含む
- 2 黄褐色土 コーム土塊 暗褐色土多く含む
- 3 暗褐色土 コーム粒子 (2~3mm) 多く含む
- 4 黄褐色土 コーム土塊

第14号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~3mm) 含む
- 2 暗褐色土 コーム粒子・ブロック多く含む
- 3 暗褐色土 2層が侵入 ブロックが大きく黒が多い

第15号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~3mm) 含む 炭化物微量
- 2 黄褐色土 コームブロック多く含む

第16号土壌

- 1 暗褐色土 コーム粒 (2~3mm) 含む 炭化物少量
- 2 黄褐色土 コーム土塊 暗褐色土含む 炭化物少量

第56図 縄文時代の土壌 (1)

形、断面形は壁面がなだらかな皿状となる。覆土は、中央に暗褐色土が堆積し、壁面に近づくほどに明度を増す。

遺物は、本来の掘り込みでは中層あたりに相当する確認面近くの中央に散乱しており、早期燃糸文系土器2点、同条痕文系土器1点、前期黒浜式土器31点が出土した。

第54図14～20に出土土器を示したが、14は燃糸文系の無文片である。また、15～20は単方向施文の単筋斜縄文が観察できる黒浜式土器である。

本土壇は、出土土器より、黒浜期に構築されたものと判断できる。

第18号土壇 (第54・56図)

J-2グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は緩い傾斜の鍋底状になる。覆土は、炭化物を含む暗褐色土主体で、下層は明度を増すものの、炭化物の含有は維持される。

遺物は主として1層中より発見できた。計33点の土器が出土したが、その内訳は早期燃糸文系土器3点、前期黒浜式土器30点である。

第54図21は、逆方向2本附加条により正反の合に類似する丘痕を作り出す。単方向のみの施文で、底部はやや上げ底気味となる。

本土壇は、出土土器より、黒浜期に構築されたものと判断できる。

第19号土壇 (第54・57図)

I-2グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状である。覆土は、炭化物含む黒褐色土が上層に堆積し、下層ほどにローム混入物と黄色味を増す。

遺物は、早期条痕文系土器1点と、第54図22に示した裏面に条痕ある無筋施文破片を含め、前期黒浜式土器が2点出土しているものの、遺物から構築期を判断することはできない。

第20号土壇 (第57図)

K-2グリッドで検出した。平面形は楕円の一端がすぼまる洋梨形、断面形は傾斜の緩い鍋底状

である。覆土は、黒褐色土が主体を占め、壇底近くに若干の暗褐色土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第21号土壇 (第57図)

K-2グリッドで検出した。平面は楕円形、断面は大略鍋底状となる。覆土は、ローム粒子多く含む黒褐色土が主体で、下層では明度を増す。

遺物は、出土しなかった。

第22号土壇 (第57図)

L-2グリッドで検出した。平面形は橢形、断面形は椀状である。覆土は、上層に黒褐色土が堆積し、下層ほど明度を増す。

遺物は、前期黒浜式土器が2点出土しているが、構築期を指し示すものかは確定できない。

第23号土壇 (第54・57図)

L-2グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は緩い鍋底状を呈する。覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、第54図に示した早期燃糸文系土器と前期黒浜式土器がそれぞれ1点ずつ出土しているが、本土壇の構築期にあてることができない。

第24号土壇 (第54・57図)

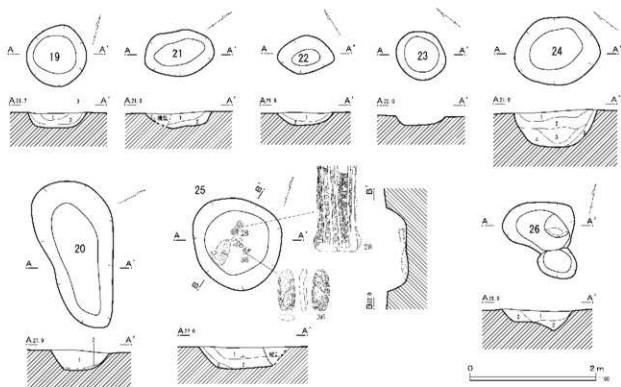
L-1グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は椀状である。覆土は、ローム混入物含む黒褐色系土が上層に堆積し、以下、明度と混入率を増していき、最下層に堆積した4層が再び黒褐色土に戻る。

遺物は、覆土中より前期黒浜式土器4点と、第54図25の抽象文系の破片を含む中期勝坂式土器4点が出土している。

本土壇は、覆土の特徴や出土土器より、勝坂期に構築されたものと判断できる。

第25号土壇 (第54・57図)

L-2・3グリッドで検出した。東方の一部を攪乱されているが、円形の平面形は観察可能であった。断面形は緩い鍋底形、覆土は、焼土・炭化粒子含む黒褐色から暗褐色系土が主体だが、最



- 第19号土壌
- 1 黄褐色土 ローム粒子 (2~5mm) 含む 炭化種子微量
 - 2 褐色土 ローム粒子・炭化焼了多く含む
 - 3 黄褐色土 ローム土塊
- 第20号土壌
- 1 黄褐色土 ローム・炭化種子 (2~5mm) 多く含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 多く含む
- 第21号土壌
- 1 黄褐色土 ローム土 (2~5mm) 多く含む
 - 2 褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 多く含む
- 第22号土壌
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 含む
 - 2 黄褐色土 ローム粒子土塊 暗褐色土が混入
 - 3 ロムブロック (2cm) 多く含む

- 第23号土壌
- 1 黄褐色土 ローム粒子 (2~3mm) 含む
 - 2 暗褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 多く含む 炭化焼了少し含む
 - 3 暗褐色土 ローム粒子・ブロック (2~10cm) 含む
 - 4 黄褐色土 ローム粒子 (2~10mm)・ブロック (2~5cm) 含む
 - 5 黄褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 含む
- 第24号土壌
- 1 黄褐色土 炭化種子少し含む
 - 2 暗褐色土 ロムブロック少し含む 煎土・炭化焼了多く含む
 - 3 暗褐色土 ロムブロック多く含む
- 第25号土壌
- 1 暗褐色土 ローム粒子 (2~3mm) 含む
 - 2 褐色土 ローム粒子 (2~10mm) 多く含む
 - 3 黄褐色土 ローム粒子 (2~10mm)・ブロック (2~5cm) 含む

第57図 縄文時代の土壌 (2)

上層の1層には黄褐色土が堆積しており、埋没途上の窪みが埋戻された可能性もある。

遺物は主に下層で出土しており、焼土の投棄も伴っていることから、意識的に土器がとりまとめられ、焼土とともに廃棄されたと考えられる。

出土土器は、早期黒浜式土器2点、同条痕文系土器2点、前期黒浜式土器2点、中期勝坂式土器34点、打製石斧1点も出土している。

第54図26~36に出土土器の一部を示したが、26は条痕文系の無文胴部片で、27は単節斜縄文施文の黒浜式土器である。以下はすべて勝坂系で、28は素文部を欠く小柄なバネル文系の器種である。

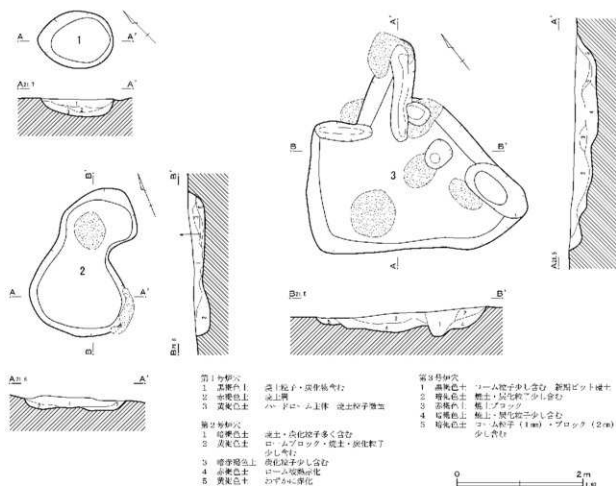
この他、隆帯筋を刺突系施文で貯う深鉢片が多いが、34は竹管施文による条線で器面を飾る短頭壺形の鉢となる。さらに、36はホルンフェルス製の撥形打製石斧である。

出土土器の傾向から、本土壤は勝坂期に構築されたものと判断できる。

第26号土壌 (第57図)

K-2グリッドで検出した。形状は洋梨形に近く、壙底東部に播針状の窪みを追加する。覆土は、上位に暗褐色系土、下位に褐色土が堆積する。

遺物は、早期条痕文系土器が2点出土したが、詳しい構築期の判断はできない。



第58図 炉穴

(5) 炉穴

第1号炉穴 (第54・58図)

I-2グリッドで検出した。楕円鍋底の形状で、単独の燃烧痕をもつ。掘り込みのほぼ中層に焼土層が形成されており、下層の黄褐色土は掘り方埋土と考えられる。

遺物は、第54図37に示した内屈する早期燃糸文系土器口縁部と前期黑斑式土器が1点ずつ出土したが、構築期を示すものはないだろう。

第2号炉穴 (第54・58図)

G-2グリッドで検出した。平面形は瓢形、壁面はなだらかで、北東城底と南東壁面に燃烧部痕が認められたが、先後は不明である。覆土は、1層・2層が廃棄後の埋土、赤褐色系土の3層・4

層が燃烧部、最下はその掘り方と考えられる。

遺物は、第54図38の小型土器口縁部を含め、早期燃糸文系土器が4点、中期勝坂系土器が2点出土した。いずれも混入と思われる。

第3号炉穴 (第54・58図)

H-1・2グリッドで検出した。不整形の北東方に突出部が存在する。城底に3箇所と壁面・掘り方外部に3箇所の被熱箇所を発見したが、先後は不明である。覆土は、2層が廃棄後の埋土、3層が燃烧部、下部の暗褐色土が構築時の掘り方埋土と考えられる。

遺物は、早期燃糸文系1点と同条痕文系土器7点(第54図39~41)が出土した。後者が本炉穴の構築期に関わるものと考えられる。

(6) 遺構外

御新田遺跡の遺構外よりは、縄文土器414点をはじめとして、縄文時代に製作されたと思われる石器類25点、かわらけ1点、銭貨(寛永通寶)1点、鉄片1点などが出土した。

主体を占める縄文土器には、早期の撚糸文系、同条痕文系、前期の羽状縄文系、同竹管文系、中期の勝坂系、同阿玉台系、後期の堀之内内系などがあるが、それらの中で半数近くを占めるのが、前期羽状縄文系である。

これに対し、石器類は、石鏃が2点、打製石斧が1点、スタンプ形石器が2点、磨石が2点、凹石が1点、黒曜石の剝片類が2点、チャートの剝片類が10点、ホルンフェルスの剝片類が4点、頁岩の剝片が1点出土している。

このうち、黒曜石やチャートの剝片類は、一部に旧石器時代のものも含まれているとも考えられるが、とくに明確な根拠がないものは、縄文時代の遺物として算定した。

早期撚糸文系土器は、遺構外から55点が発見できた。第59図1～36にこれを示したが、同期に構築された第1号住居跡で出土した粗大な撚糸文が施文されたものは見つかっていない。押捺は、基本的に縦位だが、2や5のように斜位に施文されているものもある。

撚糸文が施された口縁部片は1のみだが、口縁下に凹部をめぐらしており、口唇部が肥厚しているように見せかけている。この破片を見る限り、無文土器や粗大な撚糸文施文個体と明確な形態差はなさそうである。

これに対し、7～36は無文土器で、口縁部片の7～19は口縁部の断面形によりいくつかの種に分類できる。7～16は口縁下に沈線あるいは凹線帯をめぐらすもので、7・8は明確な沈線が写かれている。8はこれを境に肥厚するものの、7に器形変化はない。また、両点とも口唇部の形状は丸頭状である。

曖昧な凹線をめぐらす9～16は、13のように外反するもの、11などのように器形変化のないもの、12のように口縁外面に丸をもたせて肥厚するように見せかけているものなどがある。これらも7・8のように、口唇部形状が角筒状になるものではなく、丸頭状を意識して整えられている。

口縁部一般を見る限り、著しく内彎したり尖頭状の口唇部形態を示すものがないことから、この中に小型土器は含まれていないと思われる。

20以下の脚部では、器面の荒れが目立つ破片もあるが、口縁部片に見るような滑沢をもつまでにナデ込まれたものは少ない。また、36は今回の調査で唯一発見された丸底部である。

37～42は条痕文系の破片であるが、37の口唇部に刻みらしき痕跡が見られるのみで、明確な文様がない。前期初頭花積下層式と認識した43の矢羽状刺突文土器が、あるいはこれら条痕施文土器に伴い、早期後葉に帰属するかも知れない。

44～第60図59が今回の調査でもっとも多くが出土した黒浜式土器である。工具による文様を施文するものは極端に少なく、44の爪形文、45の短施文沈線による格子目文、46・47の竹管による刺突文の3種が示せたのみである。

44は3回施文一組の文様描線で菱形文を描くようだが、その単位が波状口縁にあわせた4となるか、あるいは多単位となるかは判断できない。また、中央の施文線に爪形が充填されていないことは、この構成が奥東京湾的に改変されていることを示している。

48～59は残された器面上で縄文だけが観察できるものである。48～52は無節斜縄文を施文しているが、施文原体は一律に太く、51などは硬く粗い纖維束を原材としているため、纖維痕の凹凸著しい。なお、同番は第2号住居跡出土第50図18～22と同一個体であるかも知れない。

一方、53～58は単節斜縄文を施文するものだが、53の羽状構成を除き、いずれも0段2条の粗

雑な原体を使用し、施文も乱雑である。

また、59は附加珠縄文を施文した破片である。太い軸縄RLに0段r2本を軸縄の最終撚りと逆方向に絡げているが、その螺旋が密であるため、軸縄の節方向と合致せず、いわゆる正反の合のような整然とした圧痕を得られていない。

60～65は竹管文系の破片で、60～63は杵状文系列の諸磯a式土器である。また、64は平行沈線で横位のレンズ状文を描くが、施工工具とした竹管の太さから、朝顔形に開口するb式平行沈線文系列と考えられる。さらに、65はc式集合沈線土器で、細かな菱形短沈線上にミミズ腫れ状貼付や刺突が加えられている。

66～70は勝坂系の破片で、隆帯の脇は爪形文などの点状刺突列か竹管で施文された平行沈線で加飾されている。みな小さな破片であるため具体的な器種や詳しい文様構成は不明だが、少なくとも67は縦位区画のパネル文が取り合わされた構成になると考えられる。

71は唯一出土した阿玉台系土器で、突起の形状や交互に施された刺突などから、阿玉台Ib式と思われる。また、72・73は無文地に3本一組の単施文沈線で縦位に展開する蛇行曲線文を描く堀之内I式土器である。

前述のとおり、石器類は25点が出土したが、このうち10点を第60図に示した。74～76は石鏃で、74・75はチャート製、76は黒曜石製である。3点とも凹基鏃だが、早期の所産だろうか、75はとくに挟りか深い。側縁は直線的で、75・76は非常に薄く仕上げられている。

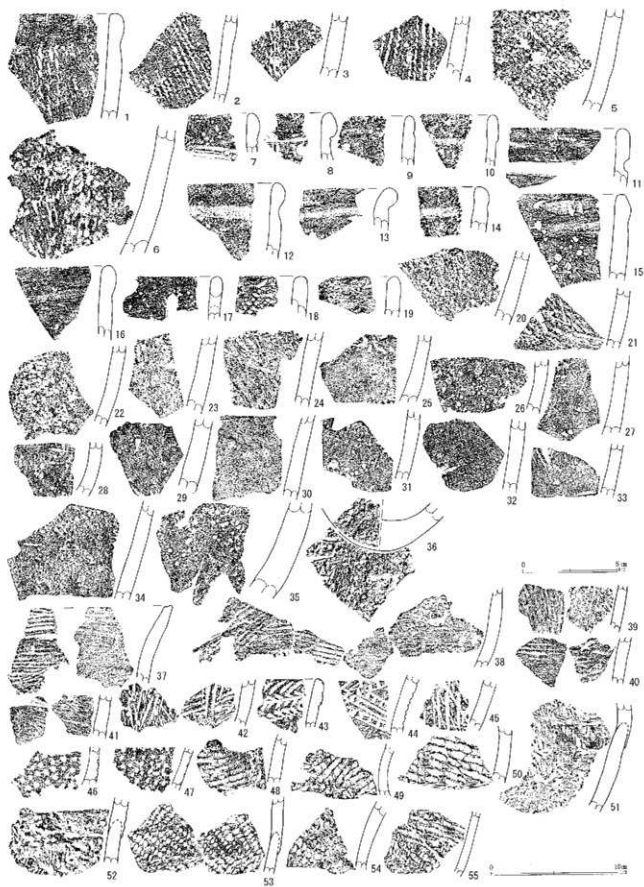
77・78はともに撥形を呈するホルンフェルス製の打製石斧だが、前者は長さ6.4cmと小型である。早期に製作され、鑿的な用途に供されたものと考えられる。また、79は砂岩製のスタンプ形石器で、こちらは燃糸文期に盛行する同種の石器のなかでも大型の部類となるだろう。石器化をめざした加工は最小限で、頭部の側縁を打割るものの、分断面に大きな磨耗痕は見られない。

80～82は磨石で、いずれも安山岩鑿を利用したものの断片である。磨耗はさほどではなく、原鑿の形態が彷彿できる。このうち81は、分断面方向からの打撃が加えられており、破損後にその平坦面が着目されてスタンプ形石器と同種の機能を果たしていたとも考えられる。

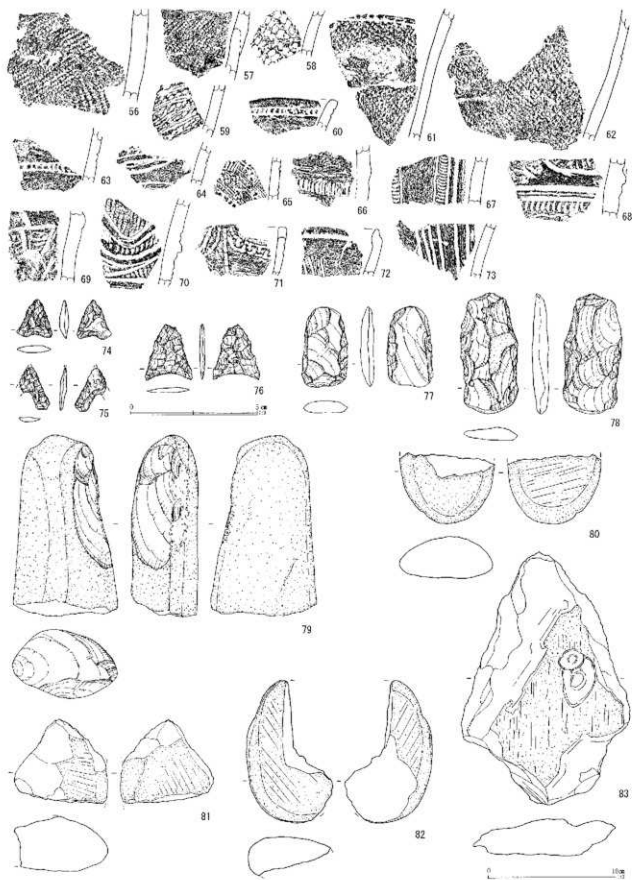
また、83は絹雲母片岩製の凹石であるが、一部原石面に残るものの、他は破断面で、石皿が転用されたものではなさそうである。

第13表 御新田遺跡出土石器計測表(cm/g)

挿図	番号	出土地	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版	カット
48	33	1住	礮器	9.5	9.8	3.1	474.9	緑泥石片岩		90	2
48	34	1住	スタンプ形石器	10.9	8.0	4.7	540.3	砂岩		90	2
50	31	2住	石鏃	1.9	1.2	0.4	0.8	チャート		90	1
50	32	2住	磨製石斧	11.4	6.1	2.7	298.4	変斑岩		90	2
50	33	2住	磨石	10.2	8.0	3.2	405.2	閃緑岩		90	2
54	36	25土	打製石斧	11.1	4.7	2.1	129.2	ホルンフェルス		90	2
60	74	(6溝)	石鏃	1.5	1.4	0.4	0.6	チャート	中近世調練に混入	90	1
60	75	E-10	石鏃	(1.6)	(1.3)	0.3	0.5	チャート		90	1
60	76	D-12	石鏃	2.2	1.8	0.2	0.7	黒曜石		90	1
60	77	K-2	打製石斧	6.4	3.6	1.1	35.0	ホルンフェルス		91	1
60	78	試掘	打製石斧	9.5	4.5	1.3	71.0	ホルンフェルス		91	1
60	79	I-4	スタンプ形石器	14.4	8.3	5.3	824.3	砂岩		91	1
60	80	D-9	磨石	5.4	7.3	3.6	142.7	安山岩		91	1
60	81	G-3	磨石	6.5	7.2	4.3	225.1	安山岩		91	1
60	82	L-2	磨石	11.0	6.5	3.8	241.1	安山岩		91	1
60	83	J-2	凹石	20.0	13.2	3.0	777.9	絹雲母片岩		91	1



第59圖 遺構外出土遺物(1)



第60圖 遺構外出土遺物(2)

3. 中近世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第61図)

E・F-8・9グリッドで検出した。2間×6間の総柱建物である。桁方向の平均からみた主軸方位はN-88°-Eで、方位を正確に把握し、南面を意識していると考えられる。規模の大きさから、内部に追加されたさらなる施設や外部に接続する建物の存在も意識して確認を重ねたが、特定できるものはなかった。

桁行の総計値は16.2m、柱間は各2.7mの等間となり、各列に異動はない。これに対し、梁行の総計値は7.2m、やはり柱間は等間で、その長さは各3.6mとなる。

柱穴は、建物の規模や柱間の長さと比較して一様に細く、掘り込みは浅い。地山の削平や表土化の進行を考慮しても、重厚な上屋構造に備えたものとは思えない。

柱穴の覆土は、すべてにわたってほぼ共通している。上層の黒褐色から下層の暗褐色に移行する類型が大勢で、例外なくロームブロックが混じり込んでいる。立柱の痕跡は、取り除き痕が一部で見られたのみで、立ち腐れを示唆するような形跡は見つからなかった。

遺物が一切出土せず、はっきりとした時期判定に窮するが、覆土の特徴から近世期に構築されたものと推定できる。

本掘立柱建物跡は、近世期のものとしては、かなり規模が大きい。だが、柱穴の規模や深さから考えると、近隣に象徴的な上部構造が存在したとは考えにくい。例えば、同じ用途を担う空間が並列するような小屋組みなどが想定できる。

また、建物の東側で発見された第1号溝跡は、本掘立柱と軸を同じくしている。両者の距離が近すぎるくらいもあるが、建物空間の区画として掘削されたものと思われる。

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第62図)

B~G-9グリッドで検出した。第1号掘立柱建物跡の妻筋に接するようにのびており、その主軸方位はN-1°-Eをさし、同掘立柱建物跡と軸があっている。

幅0.2mの細い溝だが、途切れながらも23mあまり連続しており、はっきりとした区画意識のもとに設定されたと考えられる。掘立柱建物跡を挟んだ西側にも平行するような第2号溝跡が発見できたが、こちらは若干方位軸を異にする。

覆土は、ローム混入物を多く含む暗褐色系土で、断面はU字形である。途中消滅するのは表土化の進行のためと考えられ、調査区内で屈曲するのか、外部にのびるのかは確定できなかった。

遺物は出土しなかったが、近世期、さらに軸方位より、第1号掘立柱建物跡と同じ時期に構築されたものと判断できる。

第2号溝跡 (第62図)

F~H-6グリッドで検出した。第1号溝跡と第1号掘立柱建物跡との関係から、本溝跡も建物の西側を画するとも考えたが、N-4°-Wという軸方位は、これを確定するのにいさか心配ない。しかし、両溝間は、建物跡を反転し、若干のゆとりをもたせた幅に合致しており、この点からしてみると、三者の有機的関連も捨てがたい。

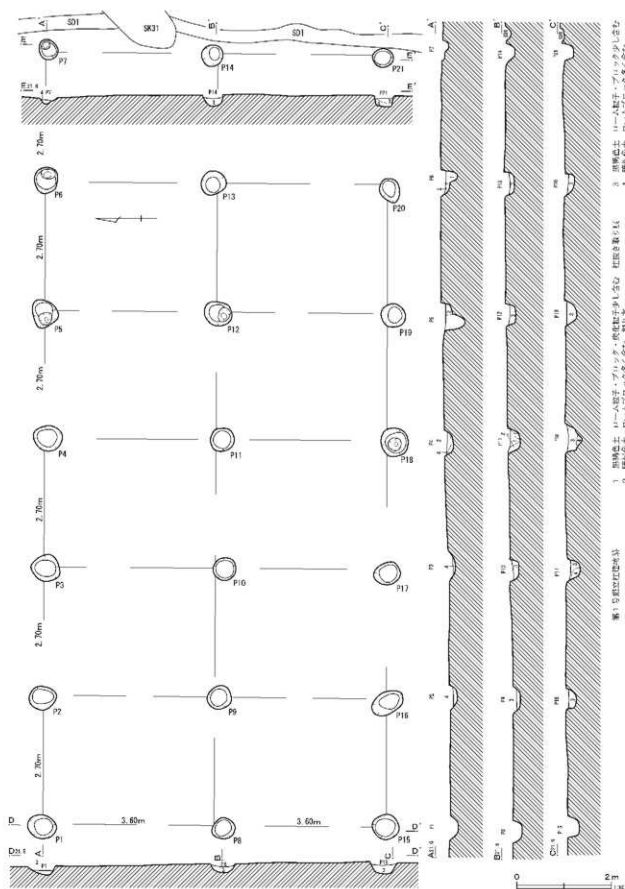
確認された溝長は9mだが、さらに南にのびていた可能性も考えられる。幅0.2~0.3mで、覆土は第1号とほぼ共通する。

遺物は、出土しなかった。

第3号溝跡 (第62図)

H・I-3グリッドで検出した。覆土の特徴は共通するものの、第1号・第2号より幅広い溝跡である。これらと類似する南北方向N-12°-Wを指すが、西側への傾きがきつい。

遺物は、出土しなかった。



第61図 第1号掘立柱建物跡

第4号溝跡 (第62図)

J-4・5グリッドで検出した。主軸方位がN-84°-Eと、ほぼ東西を指す幅広い溝跡である。調査できたのは、わずか2mほどであるが、これで収束するのか、溝底の深い部分がかるうじて残されたのかは、判断できなかった。覆土は第1号から第3号までとは異なり、下層にロームの崩落層が認められる。

遺物は、出土しなかった。

第5号溝跡 (第62図)

J-1・2グリッドで検出した。半弧を描くように掘削されており、縄文中期住居跡の壁溝かとも思ったが、断面形から、近接する第6号・第7号と同じ目的で設定されたものと考えられる。しかし、確認できた覆土はより明度が強く、共に機能していたかは判断できない。

遺物は、出土しなかった。

第6号溝跡 (第62図)

J・K-1グリッドで検出した。第7号溝跡が本溝と連結しており、両者が共存していたのは確実である。断面形は第5号とも共通し、弧状、あるいは鉤状になることが目的の一つかと思われるが、それを特定するには至らなかった。

断面形は深いU字形で、各所で形状変化の揺らぎが著しい。覆土は、ローム粒子を多く含む暗褐色系土が主体となっているが、断面形と同様に場所により明暗の差がある。

遺物は、出土しなかった。

第7号溝跡 (第62図)

J・K-1・2グリッドで検出した。一方は調査区外にのびるが、もう一方は確実に第6号溝跡と連結している。若干覆土の暗度が増すものの、平面・断面の形態ともに第6号と同一で、同じ目的で共存していたものと考えられる。

遺物は出土しなかったが、覆土の特徴から、近世期に掘削されたものと推定できる。

(3)土壌**第27号土壌 (第63図)**

E-13グリッドで検出した。開口部の平面形は楕円形、断面形は片流れて、南方の方が深くなる。覆土は五分したが、上層の褐色から壙底に向かって黄色味とロームブロックの含有量が増す均質な自然堆積である。

遺物は、出土しなかった。

第28号土壌 (第63図)

E-13グリッドで検出した。開口部の平面形は略楕円形、浅く緩やかな壁面を経て東方に片寄る壙底に至る。覆土は、壙底に向かい黄色味とローム含有率を増す自然堆積であった。

遺物は、出土しなかった。

第29号土壌 (第63図)

E-12・13グリッドで検出した。開口部の平面形は滴形、断面形は壁面が緩やかな椀状になる。壙底に1本小穴が見つかったが、本壙と共存するか否かは特定できなかった。覆土は、中から下層が顕著な自然堆積であるが、上層にロームブロックを多く含む黄褐色土が堆積しており、埋設過程の最終で埋戻された可能性もある。

遺物は、出土しなかった。

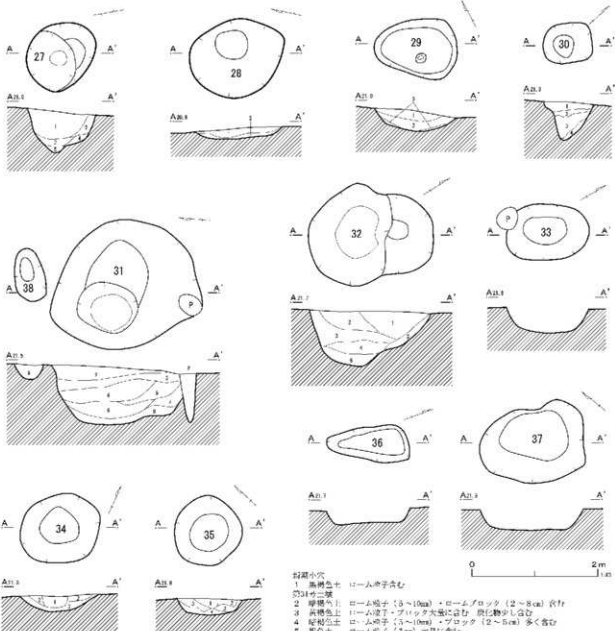
第30号土壌 (第63図)

E-12グリッドで検出した。平面形は、やや隅がある楕円形、断面形は不均等なV字形である。覆土は、1層から3層までが暗褐色土、最下層が黄褐色土となる自然堆積である。

遺物は、出土しなかった。

第31号土壌 (第63図)

E-12グリッドで検出した。より新期の小穴に一部を破壊されているが、大勢の把握に支障はない。開口部の形状は楕円形、掘り込みは深く、断面形は緩い鍋底状となる。覆土は、3層から6層が明度強く、全体では明暗の互層となる。互層の成因が壁面の崩落が埋戻しであるかについては判断がつかなかった。



- 第27号土層
- 1 褐色土 コーム砂子混じり
 - 2 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) 含む
 - 4 赤褐色土 腐葉土
 - 5 赤褐色土 コームブロック (2~3cm) 上部 4層上含む
- 第28号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~3cm) 含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~3cm) 多く含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~3cm) 多く含む
- 第29号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~3cm) 多く含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~3cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) 含む
 - 4 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) 含む
- 第30号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) 含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) 含む
 - 4 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~3cm) 多く含む

- 第31号土層
- 1 褐色土 コーム砂子含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・コームブロック (2~3cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子・ブロック大量に含む
 - 4 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~5cm) 多く含む
 - 5 褐色土 コーム砂子 (5cm) 大量に含む
 - 6 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) 大量に含む
 - 7 褐色土 コーム砂子 (3~5cm) 腐葉土
 - 8 褐色土 赤褐色土
 - 9 褐色土 コーム砂子含む
- 第32号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
 - 4 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~8cm) 大量に含む
 - 5 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
 - 6 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~3cm) 多く含む
- 第33号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (2~5cm) シロを含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (2~5cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~5cm) 多く含む
- 第34号土層
- 1 褐色土 コーム砂子 (5~8cm) 含む
 - 2 褐色土 コーム砂子 (2~5cm) 含む
 - 3 褐色土 コーム砂子 (2~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む
 - 4 褐色土 コーム砂子 (5~10cm) ・ブロック (2~4cm) 多く含む

第63図 近世の土層 (1)

遺物は、覆土中より小さい鉄片が1点出土したのみである。

第32号土壌 (第63図)

E・F-11グリッドで検出した。開口部の平面形は略楕円形、掘り込みの基調は南西方に深い片流れの椀状だが、中央で若干の段差がある。覆土は、全般にローム起源の混入物が多く、上層には炭化物を含む。下層の5層では土色が再び暗くなるが、全体的にしまりのない褐色から黄褐色土で覆われている。

遺物は、出土しなかった。

第33号土壌 (第63図)

F-11グリッドで発見・調査した。一部が単独の小穴と重複するが、両者の先後は確認できなかった。開口部の平面形は楕円形、断面形は壁面がやや緩い傾斜の鍋底状である。覆土は褐色土の単一層であった。

遺物は、出土しなかった。

第34号土壌 (第63図)

F-11グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、断面形はやや平な椀状である。覆土は、最終堆積の境界線に小穴重複の疑問が残るが、自然堆積と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第35号土壌 (第63図)

F-11グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状である。覆土は、上層の東部に違和感のある黄褐色土が認められたが、掘り方規模と他層の状況から、自然堆積と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第36号土壌 (第63図)

F-10グリッドで検出した。平面形は滴形、断面形は鍋底状である。覆土は、暗褐色土の単一層であった。

遺物は、出土しなかった。

第37号土壌 (第63図)

D・E-11グリッドで検出した。平面形の基調

は楕円形だが、一部くびれて洋梨状にみえる。断面形は鍋底状で、覆土はロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第38号土壌 (第63図)

E-12グリッドで検出した。楕円で椀状の断面形となる小規模な掘り込みである。覆土は、ローム粒子を含む暗褐色土の単一層であった。

遺物は、瓦片が1点出土したにすぎない。

第39号土壌 (第64図)

D-11グリッドで検出した。開口部の平面形は滴形、断面形は緩い傾斜の鍋底状となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第40号土壌 (第64図)

D-11グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、断面形は東西非対称で、西側が緩傾斜となる。壙底に小穴が存在するが、その深さから、本壙に伴う可能性が高い。この遺構全体が、柱穴と、その抜き取り痕とも解釈できる。

遺物は、出土しなかった。

第41号土壌 (第64図)

D-10グリッドで検出した。平面形は長方形、断面形は鍋底状である。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

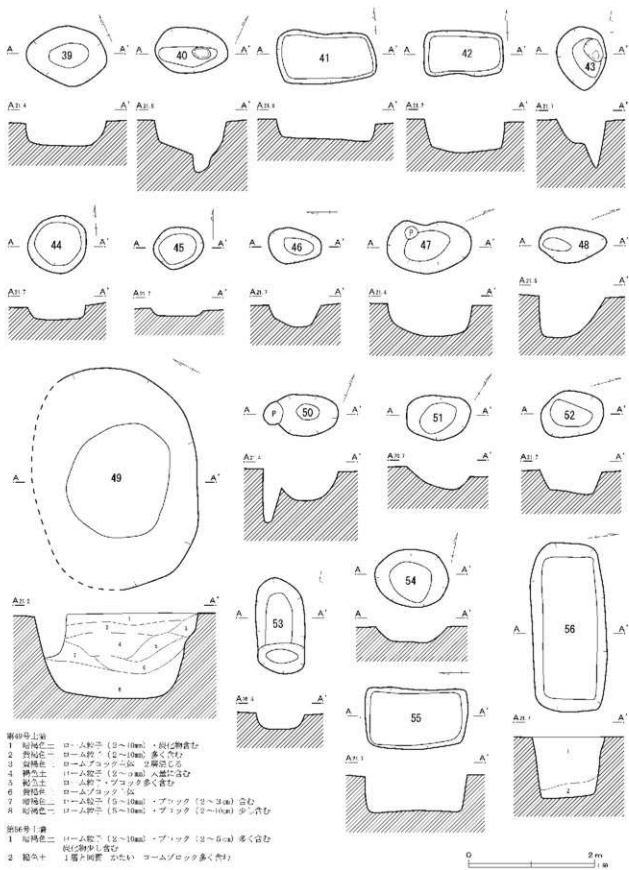
第42号土壌 (第64図)

E-10グリッドで検出した。開口部の形態は長方形、鍋底状の断面形を呈する。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第43号土壌 (第64図)

E-10グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、椀状を呈する壙底では小穴を発見したが、本壙に伴うものか否かは判断できなかった。覆土は、小穴の部分も含め、ロームブロックが混入する褐色土であった。



第64図 近世の土窟 (2)

遺物は、出土しなかった。

第44号土壌 (第64図)

E-10グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は鍋底状となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第45号土壌 (第64図)

E-10グリッドで検出した。開口部の形状は、ややひしゃげた円形を呈し、鍋底状の壙底が設けられる小土壌である。覆土は、ロームブロックが混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第46号土壌 (第64図)

E-10グリッドで検出した。平面形楕円の小さい土壌である。断面形は椀状で、覆土はロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第47号土壌 (第64図)

D-10グリッドで検出した。平面形の基調は楕円形だが、西側がひしゃげている。椀状の南西壁面に小穴を発見したが、位置的に本壙に伴うとは思えない。覆土は、ロームブロックが混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第48号土壌 (第64図)

D-10グリッドで検出した。平面形長楕円の小さい土壌である。断面形は南に向かう片流れで、南壁は垂直に立ち上がる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第49号土壌 (第64図)

C・D-10グリッドで検出した。開口部楕円形、鍋底状の断面形となる大型の土壌である。北西方で広範囲に攪乱を受けるが、破壊された範囲は壁面に沿った一部であった。覆土は、全般にやわらかく、堆積層の土色の反転もある。埋戻されたと考えられる。

遺物は、縄文時代早期前葉の燃糸文系土器が1点出土しているが、覆土や形態の特徴から、近世期に構築されたものと判断できる。

第50号土壌 (第64図)

D-11グリッドで検出した。同時期の小穴と重複するが、先後は確認できなかった。平面形は楕円形、断面形は椀形となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第51号土壌 (第64図)

D-12グリッドで検出した。開口部楕円を呈する小型の土壌である。断面形は、北東に向かう片流れで、覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第52号土壌 (第64図)

F-9グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は鍋底状である。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第53号土壌 (第64図)

C-11グリッドで検出した。平面形は長楕円で断面形は鍋底状となる。南端の壙底には浅い窪みが存在するが、長楕円形に合致しており、本土壙に伴う掘り込みと考えられる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土で、これは南端の窪み部分でも変化ない。

遺物は、出土しなかった。

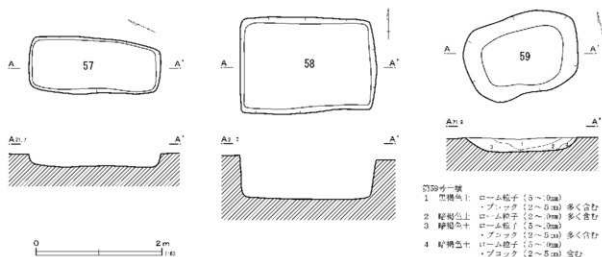
第54号土壌 (第64図)

G-9・10グリッドで検出した。開口部の形状は円形に近い楕円形、断面形は壁面がやや緩い傾斜の皿状となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第55号土壌 (第64図)

G-9グリッドで検出した。平面形は整った長方形、断面形は深い箱状となる。覆土は、ローム



第65図 近世の土壇 (3)

ブロックを混入する褐色土が主体であり、埋戻された可能性もある。

遺物は、出土しなかった。

第56号土壇 (第64図)

E-9・10グリッドで検出した。整った長方形の平面形と深い箱形の断面形は第55号土壇と共通するが、こちらの方が長い。覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色系土で、廃棄後に埋戻されたと考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第57号土壇 (第65図)

H-7グリッドで検出した。平面形は整った長方形、断面形は箱形となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土であった。

遺物は、縄文早期の土器1点が出土したものの、覆土の特徴から、本土壇は近世期に構築されたものと判断した。

第58号土壇 (第65図)

I-6グリッドで検出した。平面形は短軸幅がやや広い整った長方形、断面形は深い箱形となる。覆土は、ロームブロックを混入する褐色土の単一層であった。

遺物は、出土しなかった。

第59号土壇 (第65図)

J・K-4グリッドで検出した。平面形は楕円を基調としているようだが、意識したものかどうか、南北にくびれがあり、瓢形にもみえる。断面形は皿状で、覆土は上層の黒褐色土から、ローム混入物多く含む下層の暗褐色土へと移行する。他の近世土壇に比して覆土の特徴が縄文に近いが、ローム混入物の量や前境状況などは近世期のそれに近い。

遺物は、縄文前期・中期の土器各2点が出土しているが、混入だろう。

(4) 柱穴跡

今調査では、すでに紹介した建物跡や土壇とともに、多数の柱穴跡を発見した。これらは調査区の東方に集中して分布しており、何らかの建物や柵などの一部となると考えられるが、第1号掘立柱建物跡を除き、明確な組み合わせや方位軸を見取ることができなかった。

褐色土を基調としてローム粒子やブロックを含む覆土の特徴より、第1号掘立柱建物跡と同期に掘られたものと判断している。詳しい時期の目安となるような遺物は出土しなかった。

VI 番匠・下道遺跡の遺構と遺物

1. 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 石器集中

番匠・下道遺跡の調査では、とくに第8次調査において、縄文早期の燃糸文系土器や条痕文系土器などが出土したことから、旧石器時代に関しても人間活動に適した環境に通じると予測し、旧石器の確認調査を実施した。

2×2mの確認グリッドを調査区内で均等を保つよう設定を試みた。しかし、第8図に示したように、中近世の溝や近年の擾乱が多く、そもそも純粋な堆積状況を保つローム層が少なく、十分な調査が果たせなかった。

このうち、Z-29・30グリッドにおいて、小規模なものであるが石器集中を発見できた。

なお、基本土層は、第III層がソフトローム、第IV層がハードローム、第V層が黒色帯となる。

第1号石器集中 (第66図)

遺物の出土は、おおよそ径1.2mの範囲に黒曜石の破片が7点まとまり、東側に少し離れて黒曜石の破片と、硬質頁岩の破片が各1点出土した。

両者の間や周囲は近年の擾乱が場所に残ることから、さらに多くの石器類が存在したのと考えられる。遺物の出土層位は、黒曜石が第III層、硬質頁岩はやや深く、第IV層中から検出された。

第1号石器集中出土石器 (第66図)

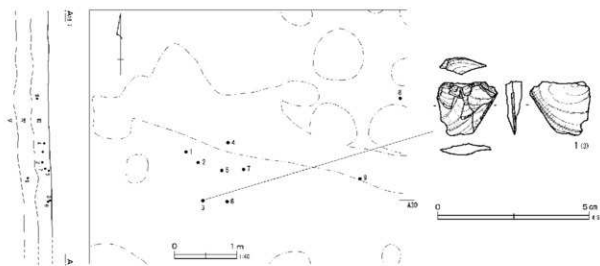
比較的大きなNa.3を図示した。長さ1.75cm、幅2.0cmと方形に近く、打面は大きい。右側縁の自然面をわずかに残している。破片のため製作時期の判断は難しい。他の破片も正面に複数の細かい剝離面を有しており、調整加工の際の破片と思われる。

(2) 集中外出土旧石器

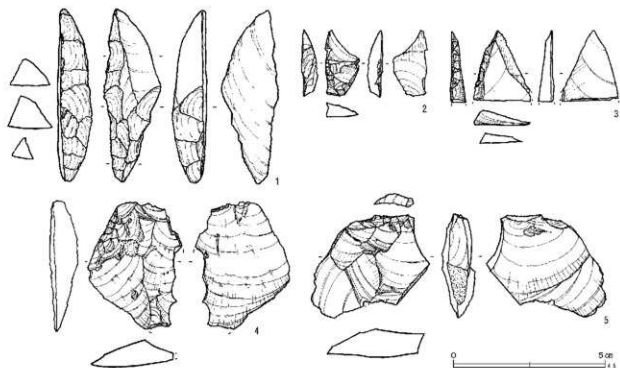
ナイフ形石器 (第67図1～3)

1は、上位からの厚手の縦長剥片を素材とした、二側縁加工のナイフ形石器である。刃部は右刃で、基端部は尖っている。表面の風化が進んでおり、細部は不明である。

2は、小形の剥片を下位に用いている。調整加



第66図 旧石器調査区および出土石器



第67図 集中外出土石器

第14表 番匠・下道遺跡出土旧石器計測表

No	出土地	器種	石材	北南 (m)	東西 (m)	標高 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	9.24	6.54	18.945	0.70	0.95	0.30	0.1	第66図1
2	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	9.40	6.72	18.935	1.35	1.60	0.20	0.3	
3	Sb-1(Z-30)	砕片	黒曜石	0.00	6.80	19.063	1.75	2.00	0.55	1.2	
4	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	9.10	7.20	18.966	1.45	0.60	0.20	0.1	
5	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	9.54	7.10	19.033	0.95	1.00	0.15	0.1	
6	Sb-1(Z-30)	砕片	黒曜石	0.00	7.18	19.026	0.70	0.85	0.20	0.1	
7	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	9.54	7.44	18.955	0.95	0.90	0.10	0.1	
8	Sb-1(Z-29)	砕片	黒曜石	8.40	9.90	18.870	1.00	0.90	0.20	0.1	
9	Sb-1(Z-29)	砕片	硬質頁岩	9.66	9.28	18.712	(1.00)	1.45	0.85	1.1	
1	G-26	ナイフ形石器	安山岩				5.70	1.90	1.15	10.2	第67図1
2	G-26	ナイフ形石器	黒曜石				2.20	1.15	0.50	0.9	第67図2
3	G-21	ナイフ形石器	黒曜石				(2.30)	(1.90)	(0.55)	1.4	第67図3
4	A-29	剝片	黒曜石				4.20	3.15	0.95	9.5	第67図4
5	A-30	剝片	黒曜石				3.40	3.90	1.10	9.5	第67図5

工はあまり明確でなく、右側縁に細かい剝離が施されており、左の側縁は欠損している。刃部は右刃である。

3は、下半部が欠損している。刃部は右刃で、左側縁に調整加工が施されている。

剝片(第67図4・5)

4は、左側縁に調整加工が施されており、削器として用いられた可能性が高い。

5は、両側面に自然面を残す厚手の幅広剝片である。

2. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第68・69図)

D・E-24・25グリッドで検出した。北西部で第31号溝跡と重複し、同方の隅は木の根のため調査不能であった。また、周辺には小穴が多く分布しているが、本住居跡に帰属する柱穴類はほぼ遺漏なく把握できたと考えている。

竪穴は、覆土や、検出できた壁溝の巡り方などから察するに、2回の拡張を経て最終的な形態に達したものと想定できる。断面観察の限りでは、その逆にあたる縮小や、埋まりかけの竪穴住居跡を再利用する反復の痕跡は見いだせなかった。

竪穴の形状変化を後追いつくと、当初小規模な台形であったものが、東方に拡張され梯形になり、さらに、南方を除く三方にわずがずつ拡張され、最終的に横幅の広い梯形の竪穴となる。この間主軸の移動はなく、一貫してN-71°-W前後を軸方位としている。

覆土は黒褐色から暗褐色土が主体で、炉の直上は焼土粒子が多く混入する。床面は各所がほぼ同じ水準で、各期の壁際には壁溝と、付属する壁柱穴がめぐる。

炉跡は、初期住居跡のほぼ中央に設けられ、拡張後には梯形上方中央に位置するように配慮されている。埋甕や炉辺石などの付属施設はないが、脇のP11とP12は炉を挟んで対応関係にあるようにも見える。

床面では20本近くの柱穴類を発見した。初期の主柱穴4本と6本の2種類が考えられる。6本であった場合はP1~P3・P4・P5・P9となり、4本であった場合はP1・P3・P8・P9が想定できるだろう。また、6本では、P3・P9ではなく、P17・P9東の2穴をあてたことも考えられる。

これに対し、第1回目の拡張後は、P1・P3・P7・P4・P6・P10の6本が想定でき、さら

に、最終次の拡張に際して南列をP8~P10の線にずらしたとも憶測できる。同じように、拡張初期にP3とP9を中央柱としたものが、最終次の東方への拡張に伴いP2・P5に遷移したとも考えられる。

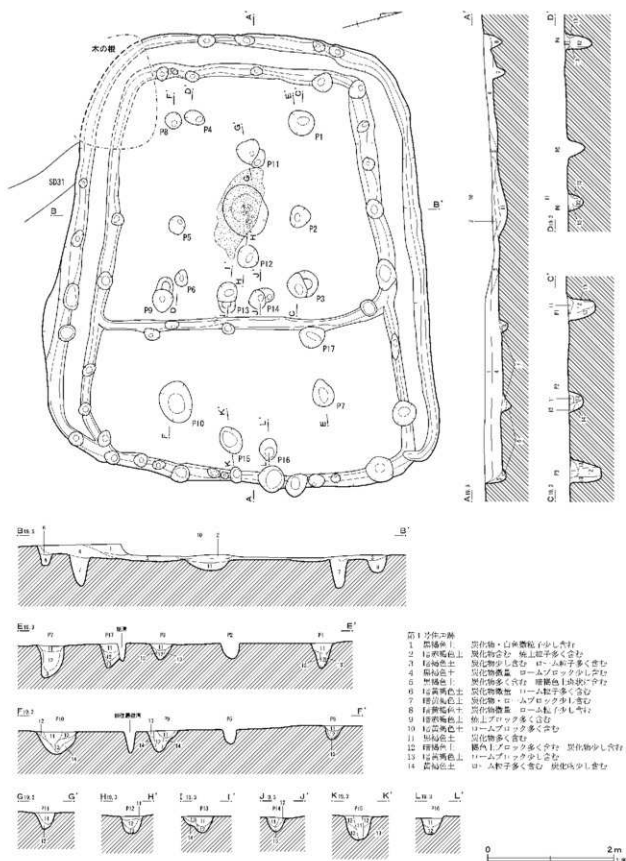
この他、P13~P16は入り口施設と思われ、初期の台形と拡張後の梯形双方の東壁下に2本ずつが発見できている。また、最終次北壁下の壁溝に壁柱穴が設けられていないが、その理由については不明である。

遺物は、前期黒浜式土器の初期が主体だが、まとまった資料は出土しなかった。第69図に拓影18点を示したが、1~7は工具による文様が残されているものである。

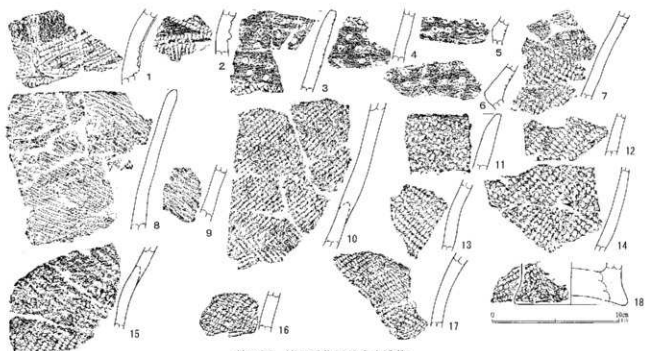
このうち1・2は、6節1単位の櫛状工具の小口を横並びに押しあてる、いわゆる列点状刺突文が施文されている。縦横の微隆起線文を目安に4単位波状口縁に合わせた菱形文を描くと考えられる。列点にガイドラインはなく、文様帯下は同工具による縦線列がめぐるされている。

また、3~7は、緩い単頭波状口縁の口縁部に円形竹管を不規則に押し付けるものである。下位は単節の羽状縄文を施文するが、0段2条の原体を使用している。1・2、および3~7は、それぞれ同一個体であるが、これ以上の接合は、かなわなかった。

8~10は無節斜縄文が施文されている。平縁の8では用意した0段縄の太さが一定しておらず、圧痕は附加条縄文のような深淺を繰り返す。また、11~18は単節斜縄文が印されており、このうち11は、ループ文らしき末端変化と直下に他陣痕のような痕跡が見られるが、押捺が浅いため、判然としない。その他の破片は単節縄文のみのものであるが、一部は前述の1~7の副部片になるものと考えられる。



第68図 第1号住居跡



第69図 第1号住居跡出土遺物

(2) 土壌

第1号土壌 (第70図)

I-21グリッドで検出した。開口部の形状は円形だが、中央に小穴が追加され、柱痕が確認された。この部分の覆土は暗褐色を呈しており、平安から近世の柱痕とは区別できることから、縄文時代の痕跡と判断した。竪穴が削平された住居跡や建物跡を想定し、周辺の精査を繰り返したが、対となる同時期の柱穴らしき痕跡を見いだせなかったため、土壌として扱った。

遺物は出土していないが、縄文時代遺構・遺物の分布から、前期黒浜期の所産と推定できる。

第2号土壌 (第70図)

I-21グリッドで検出した。楕円の浅い土壌で、一部を近世の小穴に破壊されている。遺物は出土していないが、覆土の特徴から縄文時代に構築されたものと判断した。周辺における縄文遺構の分布状況から、前期黒浜期の所産と推定できる。

第3号土壌 (第70図)

J-20・21グリッドで検出した。小規模な楕円土壌で、東側は倒木に破壊されているものの、皿

状の断面形は推定可能である。

覆土は暗褐色土が主体で、下層ほど明度を増す。遺物は、前期黒浜式土器が5点出土し、他の混じり込みはない。このことから、本土壌は黒浜期に構築されたと判断した。

第4号土壌 (第70・71図)

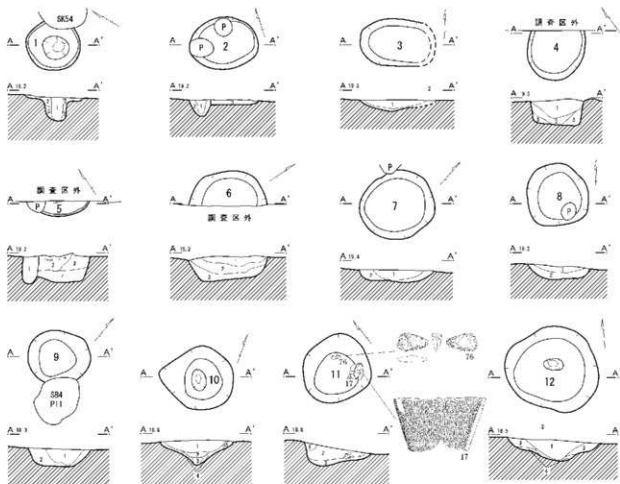
J-21グリッドで検出した。一部が調査区外へとかかってしまっているが、平面形はおおよそ楕円になると考えられる。断面形は箱形に近く、覆土には焼土・炭化粒子が含まれている。

遺物は、前期黒浜式土器が5点出土し、他の混じり込みはない。このことから、本土壌は黒浜期に構築されたと判断した。

第71図には出土土器のうち2点の拓影を示したが、1は無節、2は単節の埴痕が認められる。双方ともに最終燃りRの単方向施文である。

第5号土壌 (第70・71図)

J-21グリッドで検出した。多くが調査区外にかり、加えて新期の小穴にも破壊されるなど、全形が想定できない。調査区壁の断面に現れた断面形態は傾斜の緩い椀形で、焼土・炭化粒含む暗



第1号土層

- 1 砂褐色土 ローム粒子・炭化物少し含む
- 2 砂褐色土 炭化物豊富 炭粒子少し含む
- 3 砂黄褐色土 ロームブロック少し含む

第2号土層

- 1 砂褐色土 炭化物少し含む
- 2 砂黄褐色土 ロームブロック少し含む

第3号土層

- 1 砂褐色土 炭化物少し含む ローム粒子豊富
- 2 砂黄褐色土 ローム粒子多く含む

第4号土層

- 1 砂褐色土 炭化物・炭土粒少し含む
- 2 砂褐色土 炭化物少し含む 褐色土ブロック含む
- 3 砂褐色土 炭化物豊富 ロームブロック含む

第5号土層

- 1 砂褐色土 炭化物・炭土粒少し含む
- 2 砂褐色土 炭化物・炭土粒少し含む
- 3 砂褐色土 炭化物豊富 炭土粒少し含む

第6号土層

- 1 砂褐色土 炭化物・炭土粒少し含む
- 2 砂褐色土 ローム粒子・炭化物豊富
- 3 砂黄褐色土 ローム粒子多く含む

第7号土層

- 1 砂褐色土 ローム粒子・ブロック多く含む
- 2 砂褐色土 ローム粒子少し含む

第8号土層

- 1 砂褐色土 ローム粒少し含む
- 2 砂褐色土 ローム粒子多く含む

第9号土層

- 1 砂褐色土 ローム粒子・炭化物少し含む
- 2 砂黄褐色土 ロームブロック (3cm) 含む

第10号土層

- 1 黄褐色土 ローム粒子主 褐色土塊状に含む
- 2 黄褐色土 ローム粒子主 (5cm以下) 含む
- 3 黄褐色土 ローム粒子主 褐色土多く含む
- 4 黄褐色土 ローム粒子主
- 5 黄褐色土 ローム粒子 (10mm以下) 含む
- 6 黄褐色土 ロームブロック主

第11号土層

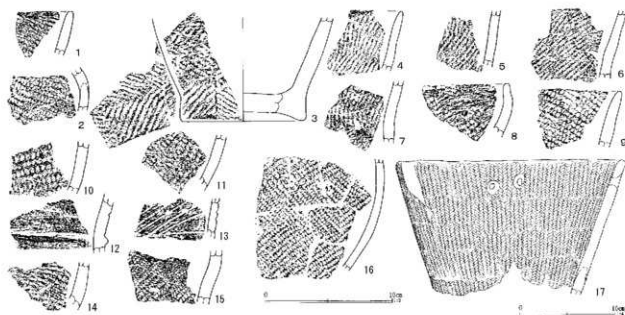
- 1 黄褐色土 ローム粒子・ブロック主
- 2 黄褐色土 ローム粒子・ブロック (2cm) 少し含む
- 3 黄褐色土 黄褐色土ブロック主 砂褐色土含む

第12号土層

- 1 黄褐色土 ローム粒子少し含む
- 2 黄褐色土 ローム粒子多く含む
- 3 黄褐色土 ローム粒子・ブロック多く含む
- 4 黄褐色土 ローム土主 褐色土含む



第70図 縄文時代の土層



第71図 縄文時代の土壇出土遺物

褐色土が覆土の主体であった。

遺物は、第71図3に示した無節羽状施文の底部が1点出土したのみであるが、遺物の遺存度、覆土の特徴や縄文土壇の分布状況より、前期黒浜式期の所産と判断した。

第6号土壇 (第70図)

K-20グリッドで検出した。円形土壇のほぼ半分が調査区外にあると想定できる。断面形はやや片流れの鍋底状、覆土は炭化粒子を含む暗褐色土が主体である。

遺物は出土していないが、覆土の特徴から縄文時代に構築されたものと判断した。縄文時代遺構や遺物の分布状況から、前期黒浜期に構築されたものと推定できる。

第7号土壇 (第70・71図)

F-22グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形はおおよそ鍋底状を呈する。覆土は暗褐色系土が主体で、ローム混入物を少量含む。

遺物は、前期黒浜式土器が24点出土した。このことから、本土壇は黒浜期に構築されたものと判断した。第71図に示した6点の拓影のうち、4～7は無節斜縄文が施文されるものである。また、8・

9は無節斜縄文が認められ、無節・単節ともに単方向施文に終始している。

第8号土壇 (第70・71図)

F-23グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、断面形は鍋底状を呈する。覆土は黒褐色から暗褐色系土で、下層ほど明度を増す。

遺物は、前期の黒浜式土器が11点出土し、混在した他時期の土器はない。このことから、本土壇は黒浜期に構築されたものと判断した。

拓影を示した第71図10・11は、いずれも0段2条原体を回転押捺した単方向単節斜縄文が残されている。色調は異なるが、原体の特徴から同一個体片と考えられる。

第9号土壇 (第70・71図)

F-22グリッドで発見した。平安期の第4号掘立柱建物跡の柱穴に一部を破壊されている。開口部の平面形は円形で、断面形は鍋底状となる。覆土は、暗褐色系土が主体で、下層ほどローム混入物の粒大が大きくなる。

遺物は、前期黒浜式土器が13点出土し、他の時期の土器は混在していない。このことより、本土壇は黒浜期に構築されたものと推定できる。

第71図12～16に出土土器の一部を示したが、12・13は6～8節を一組とする櫛状工具の小口を器面に連続して押しあてて、いわゆる列点状刺突文で描画している。描出に際しての列点脇のガイドラインはない。

13は文様帯横位区画と大菱形あるいは鋸歯状文の構図が想定できるが、12は隆帯区画線の上位に列点列と粗く浅い縦文が併存しており、どのような構図となるのか推定できない。12には繊維痕が残るものの、13は、肉眼観察の限りでは、これが認められない。

一方、14～16は縦文のみを施すもので、3点とも単節斜線文が印されている。このうち、比較的整った菱形の羽状構成となる16は、器壁の薄さで13と共通するとともに、繊維痕もほとんど認められない。雲母など、生産地域を直接に示唆する特徴的な混和物は認められないが、他の土器とは異なる粗粒が際立つ胎土からすると、外部地域からの搬入品と考えられる。

第10号土壙 (第70図)

X-34グリッドで検出した。西方で小さく張り

出すが、平面形は円形が基調で、断面形は漏斗状になる。城底は小穴から自加されたようになるが、覆土も、2・3層の垂直分布が立柱の痕跡に近い堆積状況を示す。

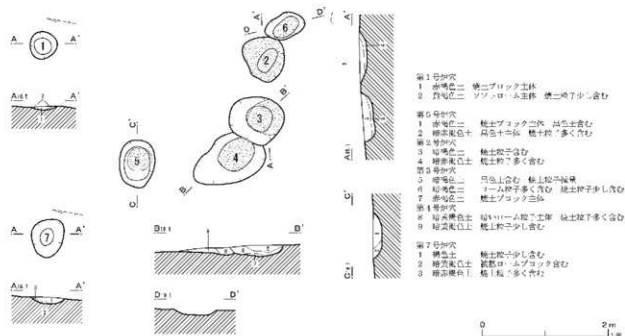
遺物は出土していないが、覆土の特徴から縄文時代に構築されたものと判断した。周辺の縄文遺構や遺物の分布状況から、前期蜀山期に構築されたものと推定できる。

第11号土壙 (第70・71図)

B-33グリッドで検出した。断面形が鍋底状となる円形の土壙で、覆土は、最上層の一部に黄褐色土が見られるものの、全体としては暗褐色土が基調となる。

遺物は埋没途上に廃棄されており、第71図17に示した深鉢上半が横倒しの状態で出土した。同番を含め、前期蜀山III式土器6点と緑泥石片製岩の礫器1点が出土したが、これらの出土状況より、本土壙は蜀山期に利用されたと判断できる。

第71図17は全面に組紐RRLGが施文されている。補修孔が穿たれた上半が全周することから、胴下半は意図的に分離されたと考えられる。



第12号土壇 (第70図)

A・B-34グリッドで検出した。開口部円形の土壇で、断面形は椀状となる。壇底に小穴があるが、これが本壇に伴うものかは判断し兼ねる。

遺物は出土しておらず、覆土にはローム混入物を多く含むものの、基調となる埋土の特徴から、縄文時代に構築されたものと判断した。周辺の縄文遺構や遺物の分布状況から、前期晩山期の所産と推定できる。

(3) 炉穴

番匠・下道遺跡の調査では、7基の炉穴を発見した。これらは第8次調査区に集中して分布しており、調査区南方の傾斜面を意識して構築されたと推定できる。遺存状況はきわめて悪く、7基ともに出土遺物はない。しかし、埼玉県内における屋外炉の限定的な隆盛と、周辺での出土遺物の傾向から、これらは早期後葉、条痕文系期に使用されたと考えて大過ないだろう。

第1号炉穴 (第72図)

調査区最南端のV-36グリッドで検出した。掘り込みは浅く、埋土中に焼土ブロックを多く含むものの、炉床は形成されていない。周囲には同種遺構を発見できなかったが、第2号周辺に見るように、往時は群化しており、表土化の進行とともに消滅した可能性も十分に考えられる。

第2号～第6号炉穴 (第72図)

調査区南部の谷に面したY-34グリッドで検出した。5基が隣接しているため、一括する。重複は2箇所であるが、深度が浅いことから、往時はすべてが連結し、重複は燃焼部の移動の次元とも推定できる。埋土中には焼土ブロックを多く含む、しっかりした炉床も形成されている。

第7号炉穴 (第72図)

Z-34グリッドで検出した。楕円椀状の形態を示し、覆土の大半は焼土の気配が少ない褐色土で占められ、明確な炉床は形成されていない。

(4) 遺構外

遺構外よりは、331点の縄文土器、7点の石器製品、縄文期の所産と思われる剥片類9点が出土した。これらは、調査区でも南端にあたる第8次調査X～Z-35グリッド付近、とくにA-35グリッドに集中する傾向がみられた。出土総量は決して多いとはいえないが、調査区南端の斜面部分が土器を廃棄する際の掘り所になっていたことをものかたする。

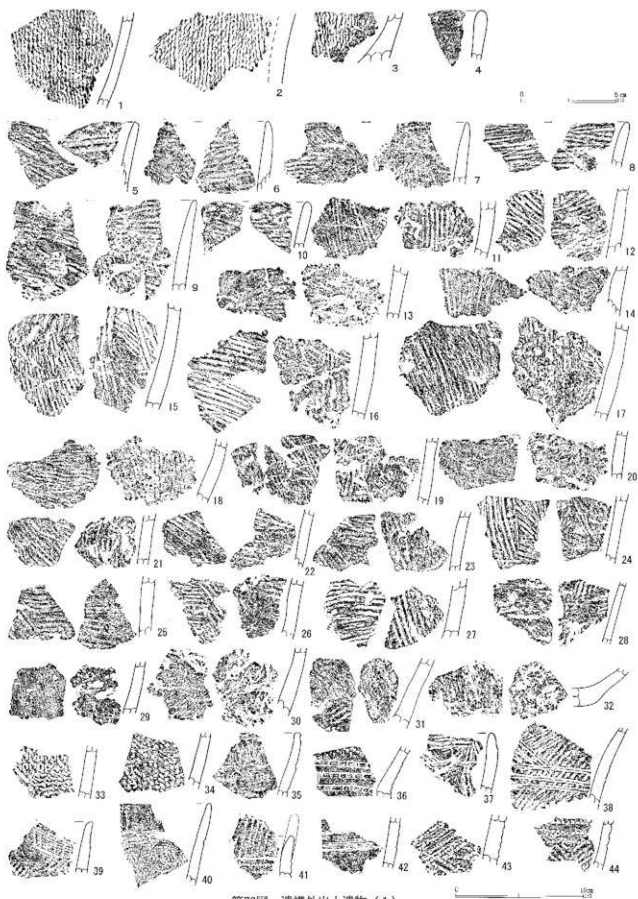
これに対し、第7次で調査したE・F-23～25グリッド付近にも50点ほどの前期土器が集中して出土した。ここは、調査区中央の東側に広がる浅い谷に面した緩斜面となっており、黒浜期の住居跡や土壇が集中する。こちらは生活域での散乱と見なすことができる。

さらに、量的・個体的にはわずかだが、前期末から中期初頭の個体(第74図65～69)は、すべて南方斜面部のA-35グリッドで集中的に出土した。そして、4点のみであるが、燃糸文系土器(第73図1～4)も同様に南方斜面部で出土したことから、遠く時期を隔ててなお、この斜面が縄文人の暮らし向きに適した何らかの利点があったことを確認できる。

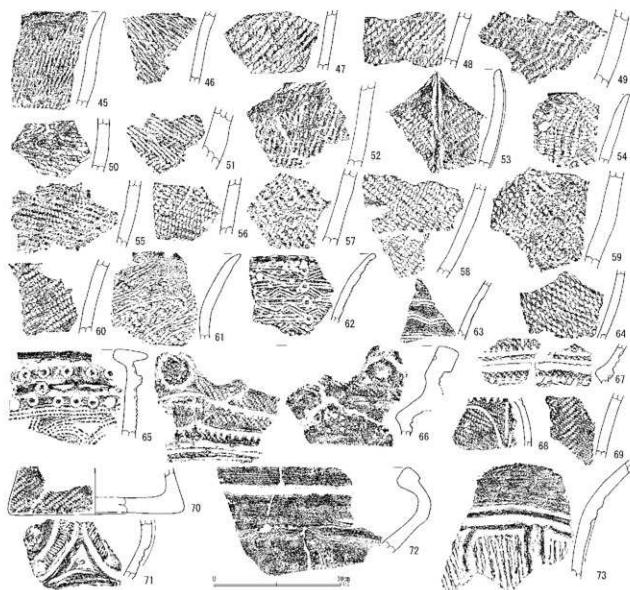
ちなみに、縄文時代を除く時期の遺構外出土遺物は、前節で紹介したナイフ形石器の他に、平安時代の土器類141点、中世から近代の陶磁器・瓦類510点、同砥石7点、同金属器類4点、同土製品1点などがある。

前述のとおり、第73図1～4は早期燃糸文系の破片である。1は燃糸R、2・3は燃糸Lが密に施文されており、中葉の稲荷台式に相当すると考えられる。また、無文の4も、円頭の口唇部形態やナデ込まない器面調整の手法から、同時期と見なして大過ないだろう。

5～32は、早期後葉条痕文系の土器であるが、沈線文や微隆起線文あるいは刺突文などが加えられた有文土器はない。印された条痕は比較的深く



第73図 遺構外出土遺物(1)



第74図 遺構外出土遺物(2)

はっきりとしているものの、やや粘質がかった胎土の質感、さらに、32に見る平底に近い底部の特徴から、茅山下層、もしくは上層式あたりの所産と思われる。

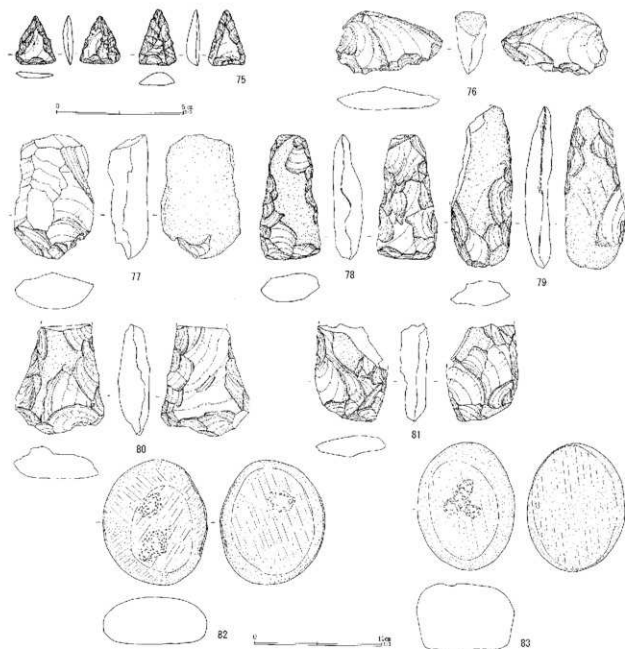
33～第74図61は前期羽状縄文系の破片だが、33・34はそれぞれ鋸歯状多段ループ文、組紐RRLLが施文された関山II式土器である。

これに対し、35～61は黒浜式、もしくはこれに近い系統を有するものである。35・37・38は多載竹管による平行沈線、36は粗い充填爪形文で鋸歯文や横位の波状文などを描くもので、36～38は地

文縄文も認められる。それぞれ奥東京湾域で培われた施文手法を用いており、北西関東の大型菱形文系土器の系列とはいかない。

39～44は、繊維が混入された痕跡が残されているものの、信州系の櫛状工具による施文で器面が装飾されている。39は押引に類似する手法を用い、神ノ木式に近い縦位の刺突列と櫛描条線を波状口縁下にめぐらせる。

また、40～44はいわゆる列点状刺突文で主要線を描出するが、列点を施文する目安となる竹管平行沈線のガイドラインは43の一部に見られるの



第75図 道橋外出土遺物（3）

みで、42などはむしろ列点が楕による条線の縁取り線となっている。

45～61は縄文のみが観察できるものであり、45～52は無節斜縄文、53～60は単節斜縄文、61は附加条縄文を施文している。このうち、53は縄文施文の前に波頂下を目安とした垂下微隆起を加えている。また、61はRLを軸縄としてL 2本を逆方向に附加した原体を回転している。

62～64は前期竹管文系の破片で、62・63は朝顔形開口の波状・山形文系列、64はRL縄文のみのものである。3点とも諸磯a式に相当する。また、65は前期末十三普提系の破片で、1点のみが出土した。口縁部がややすぼまる深鉢器形の上端に突帯や円形竹管文をめぐらし、胴上位文様帯内に結節沈線文による渦巻文基調の曲線文を描くとともに余白を陰刻している。

66～70は中期初頭五領ヶ台系の土器で、砂質感が強い上に細かな雲母を大量に含む胎土の特徴から、すべて同一個体と考えられる。しかし、発見できた破片数が少なく、復元はかなわなかった。受口状に外反する緩い波状口縁の頂部や脇に造形的なアクセントを配し、刺突を添えた沈線で口縁部の横位区画帯を飾る。胴部には単節RLが意識的に間隔をあけて縦位施文され、上端では連続弧状文を追加している。

71・72は中期前半勝坂系、73は同後半加曾利E系の土器である。71は隆帯脇を単沈線でなぞる口縁部片で、井戸尻期の口縁部加飾土器と考えられる。また、72は同時期の無文浅鉢である。さらに、73は加曾利E I式後半のキャリバー系土器頸部無文帯付近の破片で、下位の胴部文様帯には懸垂と蛇行の両隆帯が交互に配されている。地文は太い撚糸Lの原体を縦位に回転させている。

一方、第75図には出土石器の製品類を示した。74・75は平基の三角鎌で、双方ともチャート素材として製作されている。75は使用剥片の打縮部を除去しきれずに身厚のまま完品とされているのに対し、より小型の74は、剥片の末端を利用したため、肉薄に仕上げられている。

また、76はホルンフェルス製の横刃式礫器である。握り背は自然面ではないものの、打割を加えてより平坦になるよう整えられている。厚い断面形からして、早期後半から前期前半に製作されたものと考えられる。

77～81は打製石斧で、77・78が砂岩製、79～81がホルンフェルス製である。このうち77は棒状河原石の側面を打割したもので、礫器的な要素が強い。また、79には複数の局所的な磨痕が残されている。前期の黒石期に乳棒状磨製石斧が普遍化する以前の局部磨製石斧ともとれ、関山期以前に使用されたと思われる。さらに、78・80は撚形形態が整っており、前期中葉以降に製作されたものと推定できる。

82は砂岩製の磨石で、側縁に藪打痕、腹部に凹痕が残るものの、腹部のそれは痕跡程度で、明確な穴にまで成長していない。これに対し、83は角閃石安山岩製の磨石で、腹部に浅い凹痕を残す面と側面は自然面をそのままに磨り込まれている。しかし、その背面は、原礫の分割面を再三使用しており、打割時の剝離稜線が見えなくなるほどに平坦化している。

第15表 番匠・下道遺跡出土石器計測表 (cm/g)

標号	番号	出土地	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	図版	カット
75	74	I-20	石鎌	1.9	1.5	0.4	1.0	チャート		90	1
75	75	A-35	石鎌	2.2	1.5	0.6	1.6	チャート		90	1
75	76	X-35	礫器	5.0	8.5	2.4	88.4	ホルンフェルス		92	1
75	77	G-22	打製石斧	9.8	6.2	3.1	214.4	砂岩	被熱	92	1
75	78	(126土)	打製石斧	9.8	4.7	2.3	126.9	砂岩	中近世土壌に混入	92	1
75	79	A-30	打製石斧	12.6	4.7	2.0	155.5	ホルンフェルス	全体に磨痕	92	1
75	80	D-29	打製石斧	8.7	6.9	2.5	164.2	ホルンフェルス		92	1
75	81	X-35	打製石斧	7.7	5.5	2.2	110.0	ホルンフェルス		92	1
75	82	Z-35	磨石	9.8	8.2	3.7	455.1	砂岩		92	1
75	83	X-33	磨石	10.1	7.6	5.2	551.8	安山岩		92	1
107	3	55溝	砥石	15.3	3.0	2.9	196.1	凝灰岩	中近世	92	2
107	9	80溝	砥石	5.9	3.3	3.6	71.6	凝灰岩	中近世	92	2
124	12	164土	砥石	7.7	3.4	1.8	82.1	凝灰岩	中近世	92	2
124	13	164土	砥石	7.1	3.5	2.6	72.2	凝灰岩	中近世	92	2
124	14	164土	砥石	7.2	3.4	2.3	75.1	凝灰岩	中近世	92	2
124	15	164土	砥石	6.5	3.2	2.4	78.0	凝灰岩	中近世	92	2
125	3	192土	砥石	10.9	2.2	1.8	76.2	凝灰岩	中近世	92	2

3. 平安時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡 (第76・77図)

E-18・19グリッドで検出した。N-10'-Eに最終的な主軸をとる住居跡であるが、新旧2軒が重複している。しかし、旧住居跡が東側に設けたカマド、そして竪穴開口部の方向軸は新住居にも通じることから、重複は偶然ではなく、建て替えと推定できる。

新住居跡の覆土は、黒褐色が基調となり、下層ほどに明度とローム混入物を増す。床面には施設構造に直接関与した柱穴類や壁溝こそ発見できなかったが、西方で土壇状の掘り込みを3基検出した。それらの覆土は共通しており、ロームと暗褐色土が混合されたものであることから、貼床時の、いわゆる床下土壇と考えられる。

新住居跡のカマドは北方壁に設けられている。地山を掘り残さず、灰白色粘土と黄褐色粘質土で構築されたソデにはさまれた燃焼部・煙道部の覆土は、全般に焼土を含んでおり、上部構造の崩落痕を特定しがたい。

これに対し、旧住居跡は、新住居跡と床面をほぼ同じくしていたようで、貼床時の掘り方とカマド燃焼部の残骸、そして、新住居跡の外壁からはみ出す煙道の一部しか発見できなかった。しかし、外周を一段と深く掘削する掘り方の形態から、主軸を東方に向けた小規模な長方形住居跡であったことが察せられる。

この住居跡に伴う遺物は、すべて新住居跡に帰属すべきものである。平安時代の土器片は88点が出土したが、その内訳は、須恵器の坏蓋類が28点、同壺瓶類が6点、土師器の甕類が61点であった。また、埋没時や旧住居跡の埋戻し時に紛れ込んだ縄文土器5点、覆土中に投棄された凝灰岩製の砥石片1点が出土した。第77図にはこのうち須恵器坏3点を示している。

第3号住居跡 (第77・78図)

C・D-21・22グリッドで検出した。N-79'-Eに主軸をとり、第17号溝跡と並列するように構築されている。周辺は近世の小穴が多く穿たれており、住居内にも多くの小穴が発見できた。もちろん、本住居跡に帰属する柱穴と見なせるものはなかった。

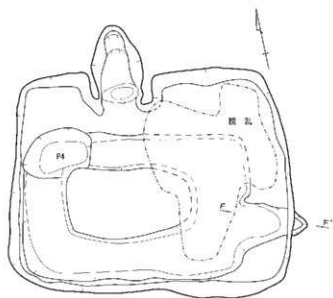
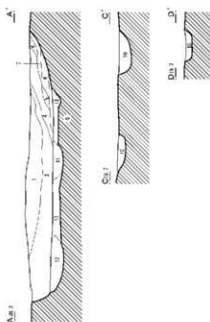
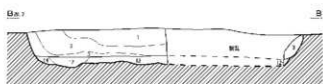
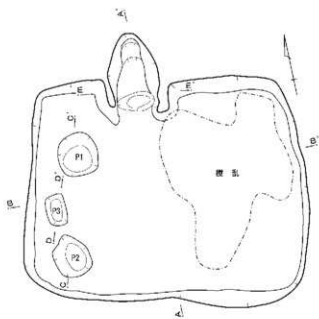
これに対し、東南と北西の隅部には、張出状の浅い方形土壇を発見できた。覆土に共通性があり、方形の軸方向も合致することから、こちらは本住居跡の入り口施設や厨房空間に付属する棚状部となることも想定し、一括して扱った。

覆土は、黒褐色土と暗褐色土が交互に堆積しており、大略水平を保っている。風成堆積が主で、埋没にかなりの時間を要したと考えられる。だが、3層にはロームブロックが混入しており、人為的な所作が一切なかったとは言いきれない。

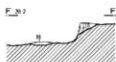
貼床は、ほとんどできておらず、壁溝は三方を囲むが、カマド周辺を避けるように消滅する。また、方形が張り出す北東隅部下に貯蔵穴は発見できなかった。

カマドは、崩落を免れた天井の一部や、しっかりとしたソデも残存していた。赤褐色の9層が洞部天井内面の被熱部分が崩落したものと考えられ、上位の暗灰色粘土層が構築土の外面となるだろう。また、9層が一旦途切れる箇所が器設部の穴を反映し、10層がカマド使用時の形成堆積土と解釈できる。さらに、11層は除湿を目的とした構築時の埋戻し土だろう。

遺物は、縄文土器40点、平安時代の陶器・土器片240点が出土した。平安時代陶器・土器類の内訳は、緑釉陶器片4点、須恵器坏蓋類が14点、同壺瓶類が10点、土師器甕類が212点であった。緑釉陶器片は風化した小片ばかりで、図示することができなかった。第77図には須恵器坏1点、土師器甕2点を示した。

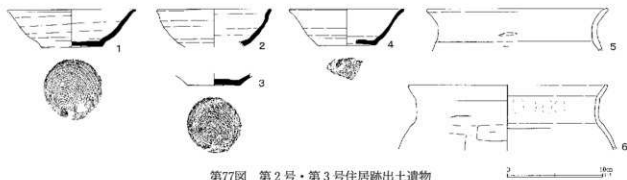


- 第2号住居跡
- 1 埋藏土 rome土 (少し含む)
 - 2 埋藏土上 rome土・焼土粒子含む
 - 3 埋藏褐色土 rome土粒子・ブロック (2~3cm) 多く含む
 - 4 埋藏土 焼土粒子多く含む。rome土少し含む
 - 5 埋藏土 焼土粒子多く含む。9層より時
 - 6 rome褐色土 焼土粒子・赤土ブロック状に含む
 - 7 埋藏土 焼土粒子・灰化物多く含む
 - 8 埋藏土 焼土粒子多く含む。灰化物少し含む
 - 9 埋藏褐色土 (カマド埋藏土) 焼土粒子含む
 - 10 埋藏土 rome土・ブロック埋藏土の混合
 - 11 埋藏土上 rome土・ブロック・焼土粒子多く含む
 - 12 埋藏褐色土 rome土・ブロック多く含む
 - 13 埋藏土 rome土粒子多く含む。rome土・ブロック少し含む
 - 14 埋藏土上 rome土
 - 15 埋藏褐色土 カマド土
 - 16 rome褐色土 焼土・ブロック多く含む
 - 17 埋藏土 灰化物少し含む
 - 18 埋藏土 焼土粒子・灰化物多く含む



0 2m

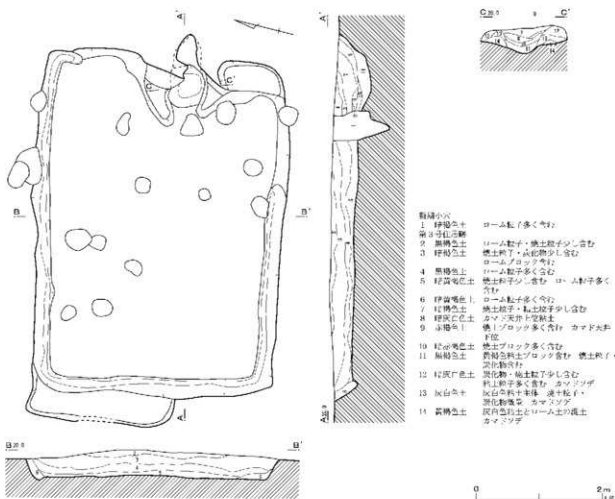
第76図 第2号住居跡



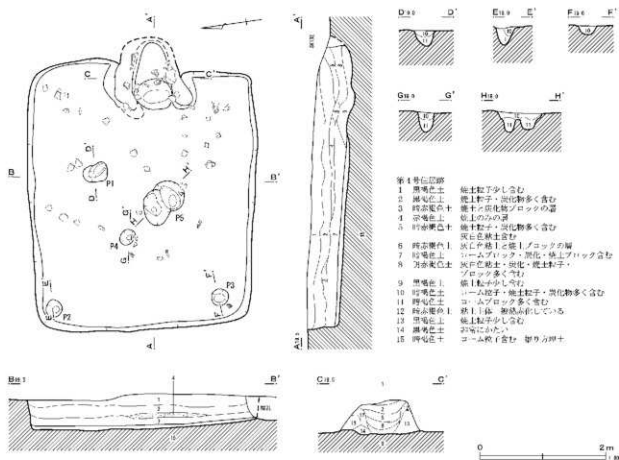
第77図 第2号・第3号住居跡出土遺物

第16表 第2号・第3号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

棟号	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
77	1	2住	須恵器	坏	13.2	4.0	6.3	60	長石 赤白黒	不良	10YR6/4に多い黄橙	大半還元してない、東金子?
77	2	2住	須恵器	坏	(11.9)	[4.0]		10	白針	普通	10Y5/1灰	南北企
77	3	2住	須恵器	坏		[1.3]	5.6	80	長石 白針	普通	7.5Y5/1灰	南北企
77	4	3住	須恵器	坏	(12.0)	[3.8]	(6.0)	10	長白	良好	5Y5/1灰	東金子?
77	5	3住	土師器	甕	(18.9)	[4.5]		20	角長白	普通	7.5YR4/4褐	
77	6	3住	土師器	甕	(20.6)	[7.0]		10	黄角石白	普通	7.5YR5/4に多い褐	



第78図 第3号住居跡



第79図 第4号住居跡

第4号住居跡 (第79・80図)

E・F-25グリッドで検出した。軸方位はS-81°-Eをさしており、第11号住居跡と連動したような位置にある。東にカマドを設けるが、一部を第135号土壌によって破壊されている。

覆土は黒褐色が基調だが、中央に焼土ブロックや炭化物を多く含む。とくに4層の焼土層は水平・広範囲に及んでいる。このことから、この住居跡は焼失ではなく、4層は埋設途上に燃焼行為が繰り返された結果とみるのが妥当だろう。

床面は貼床で、掘り方は一定している。壁溝はなかったが、5箇所で見つかった。西側隅部にある2穴は、その位置関係から、中央の3本は覆土の共通から、本住居跡に属すると考えた。

遺物は、カマド付近を中心に、まとめて出土した。その内訳は、縄文土器38点、平安時代の陶

器・土器片1034点、また、中近世の陶磁器類3点、同瓦2点、鉄鎌1点、鉄片4点である。

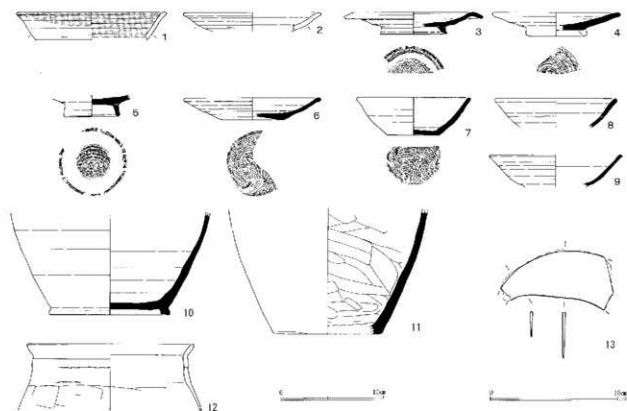
平安時代陶器・土器類の内訳は、須恵器蓋類が224点、同壺瓶類が11点、同甕類が126点、土師器甕類が673点であった。とくに、須恵器甕類は、カマド構築材をはじめとして、大片が多く出土したが、図化に適した部位に恵まれなかった。

第80図1・2はそれぞれ灰釉・緑釉陶器で、3～9は須恵器片器類である。また、13は薄刃の鉄鎌先端部である。

第5号住居跡 (第81～83図)

C・D-22グリッドで検出した。第10号・第11号住居跡と矩形を作るかのように並列している。竪穴形態とカマドからみた主軸方位もS-85°-Eと、非常に近い。

竪穴は東西に広い長方形で、カマド左脇が一段



第80図 第4号住居跡出土遺物

第17表 第4号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

棟号	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
80	1	4住	灰土陶器	埴	(16.0)	[3.0]		20	白黒	良好	5Y8/2灰白	
80	2	4住	緑釉陶器	皿	(14.3)	[1.5]		10	白黒	普通	5Y8/2灰白	
80	3	4住	須恵器	高台付皿	(14.6)	2.3	(7.0)	30	長白	良好	5Y6/1灰	内外面施釉
80	4	4住	須恵器	高台付皿		[1.8]		10	長白	普通	2.5Y5/1黄灰	東金子?
80	5	4住	須恵器	高台付埴		[2.3]	5.4	70	長石白	良好	10Y5/1灰	東金子?
80	6	4住	須恵器	皿	(14.0)	2.3	(6.5)	30	長白	普通	2.5Y5/1黄灰	東金子?
80	7	4住	須恵器	坏	(11.6)	4.0	5.6	30	長砂白	不良	10Y4/1灰	歪み大、東金子
80	8	4住	須恵器	坏	(12.6)	[3.1]		20	長白	不良	7.5YR5/1灰	接合痕、東金子?
80	9	4住	須恵器	坏	(13.2)	[3.4]		20	長白	良好	7.5YR5/1灰	東金子?
80	10	4住	須恵器	長頸壺		[10.9]	(12.6)	30	長白	良好	10YR5/2灰黄褐	内外面自然釉、東金子?
80	11	4住	須恵器	壺		[13.3]	(11.4)	30	長石白針	普通	2.5Y5/1黄灰	南北企
80	12	4住	土師器	壺	(17.3)	[7.1]		20	角石白	良好	7.5YR5/4(に)白褐	
80	13	4住	鉄製品	鎌	長さ8.8	幅3.7	背幅0.2					

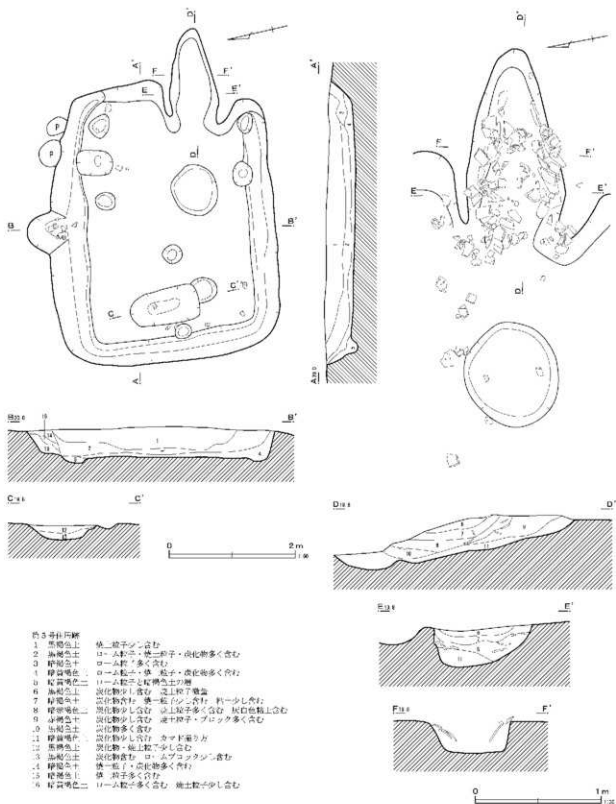
と張り出すことは、他の長方形住居跡とも共通する。覆土は黒褐色土が主体で、外周や下層へと移行するに従い、明度が増す。

内部構造に拡張の痕跡はないが、二箇所でもカマドが検出されており、北側の旧カマドは煙道の端部を残すのみであった。旧カマドはそれ自身の破壊土で埋戻され、東側の新カマドが機能している

段階には壁面になっていたと考えられる。

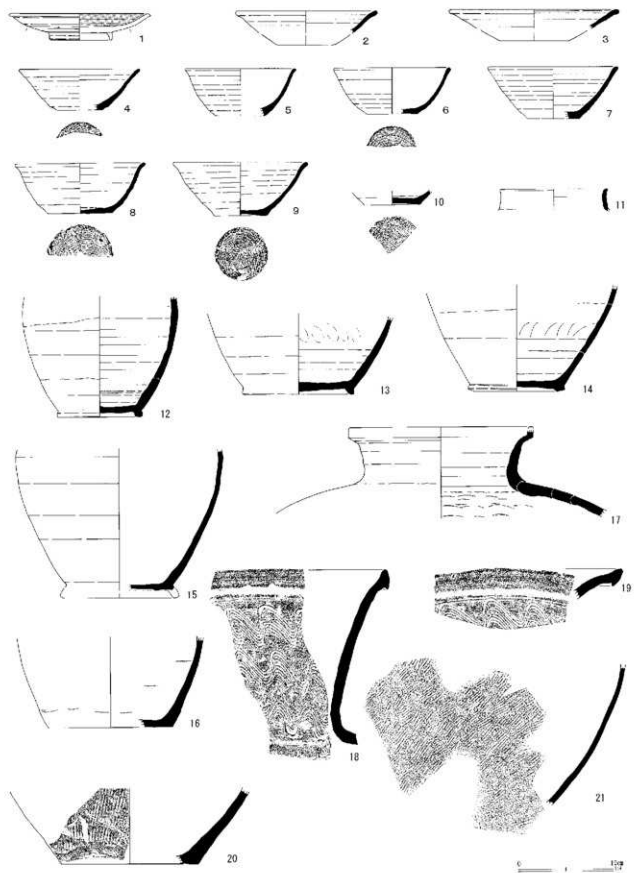
床面には全周する壁溝の他に、数本の小穴が発見できた。だが、周囲にも多くの近世小穴があり、これらが本住居跡に伴うかどうかは確定できない。このうち、西と南の壁溝に接する小穴は、その位置関係から入り口施設の可能性が高い。

新期カマドには、ソデが残り、構築材の芯にさ

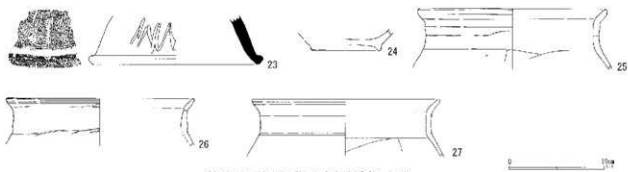
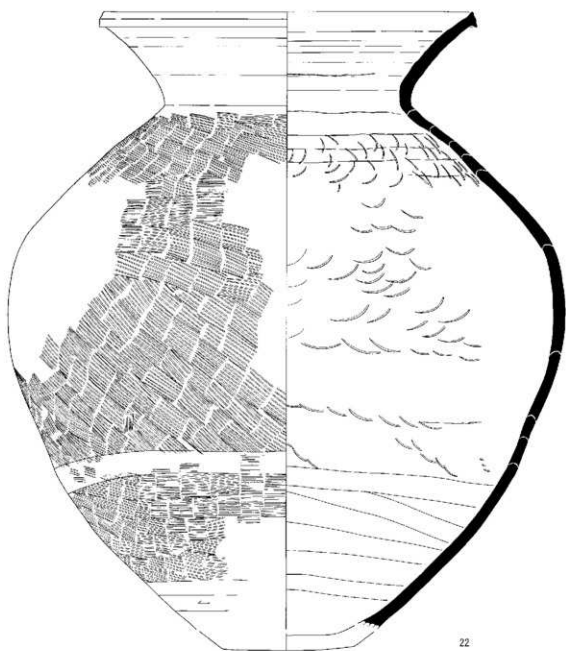


- 第5号住居跡
- 1 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 2 黒褐色土 ローム粒多し含む
 - 3 黒褐色土 ローム粒多し含む
 - 4 黒褐色土 ローム粒多し含む
 - 5 黒褐色土 ローム粒多し含む
 - 6 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 7 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 8 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 9 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 10 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 11 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 12 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 13 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 14 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 15 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む
 - 16 黒褐色土 灰・磁子・土粒多し含む

第81図 第5号住居跡



第82图 第5号住居跡出土遺物(1)



第83図 第5号住居跡出土遺物(2)

第18表 第5号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

棟号	番号	遺物	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
82	1	5住	灰胎陶器	皿	(15.0)	2.8	6.7	60	白黒	良好	2.5Y8/1灰白	重む焼き痕あり、淡黄釉
82	2	5住	須恵器	皿	(14.4)	[2.4]		10	長白黒	普通	5Y6/1灰	東金子
82	3	5住	須恵器	皿	(17.3)	[2.0]		20	長白	普通	7.5Y5/1灰	東金子
82	4	5住	須恵器	環	(12.6)	4.4	(5.0)	20	長白	良好	10Y5/1灰	東金子
82	5	5住	須恵器	環	(11.6)	5.0	(5.4)	20	長白	普通	5Y6/1灰	東金子
82	6	5住	須恵器	環	(12.1)	4.9	(5.4)	10	長白	普通	N5/0灰	東金子
82	7	5住	須恵器	環	(13.4)	5.5	(5.5)	10	長白黒	普通	2.5Y6/2灰黄	東金子?
82	8	5住	須恵器	塊	(13.4)	5.3	6.6	50	長白	良好	5Y7/1灰白	南比企?
82	9	5住	須恵器	塊	13.9	5.7	5.7	60	長石赤白	不良	10YR7/6明黄褐	還元してない、東金子
82	10	5住	須恵器	塊		[1.5]	(6.0)	20	白	良好	7.5Y5/1灰	東金子か
82	11	5住	須恵器	短頸壺	(11.3)			5	白黒	良好	2.5Y6/1黄灰	内外面自然釉、東金子
82	12	5住	須恵器	長頸瓶		[7.8]	8.8	40	長白黒針	良好	10Y5/1灰	南比企
82	13	5住	須恵器	長頸瓶		[8.6]	11.3	50	長砂白	良好	7.5Y5/1灰	南比企
82	14	5住	須恵器	長頸瓶		[11.3]	10.2	70	長白針	普通	N5/0灰	南比企
82	15	5住	須恵器	壺		[9.9]		60	長白針	普通	10YR5/2灰黄褐	南比企
82	16	5住	須恵器	壺		[9.6]	(13.2)	20	長白針	普通	7.5Y6/1灰	南比企
82	17	5住	須恵器	壺				20	潔白	良好	2.5Y5/1黄灰	内面輪痕、外面自然釉、東金子
82	18	5住	須恵器	甕				—	長石白針	良好	N5/0灰	南比企
82	19	5住	須恵器	甕				—	長白針	普通	N4/0灰	南比企
82	20	5住	須恵器	甕		[8.0]	(14.6)	10	長白黒	良好	10YR5/2灰黄褐	外面タキ目、東金子
82	21	5住	須恵器	甕				—	長白	普通	10Y5/1灰	南比企?
82	22	5住	須恵器	甕	38.8	[65.3]	(58.7)	20	石砂白	良好	5YR6/2灰褐	東金子
82	23	5住	須恵器	円面碗		[5.2]	(17.4)	10	長石白	普通	5Y6/1灰	東金子?
82	24	5住	テラコッタ	高台檜		1.3	7.0	80	角長石砂赤白	普通	5YR6/8橙	磨耗著しい
82	25	5住	土師器	甕	(19.5)	[6.4]		30	角長石赤白	普通	7.5YR6/6橙	
82	26	5住	土師器	甕	(19.7)	[5.0]		20	長石白	普通	7.5YR6/6橙	
82	27	5住	土師器	甕	(19.5)	[6.0]		10	角長石白	普通	2.5YR5/6明赤褐	胎土緻密

れた大量の須恵器大甕片が出土した。上位の覆土は手前天井から徐々に崩落した状況が見て取れ、芯材の大甕片は8層を中心に分布していた。

遺物は、縄文土器3点、平安時代の陶器・土器片1157点が出土した。陶器・土器類の内訳は、灰釉皿が1点、須恵器甕片が1点、同環蓋類が88点、同壺瓶類が39点、同甕類が28点、土師器環類(口クロ土師器)1点、同甕類が999点であった。

須恵器の器種ごとにみた産地の推定では、碗が南比企産、環蓋類が南比企12点、東金子62点、壺瓶類が南比企14点、東金子22点、甕類が南比企23点、東金子5点、他は識別不能であった。

第82図1の灰胎陶器皿をはじめ、本住居跡からは多種の遺物器種が出土した。11~17は壺瓶類だが、その率は高い。また、第83図22は東金子産の大甕で、カマドの構築材にされた個体である。さらに、23は線刻を加える円面碗脚部である。

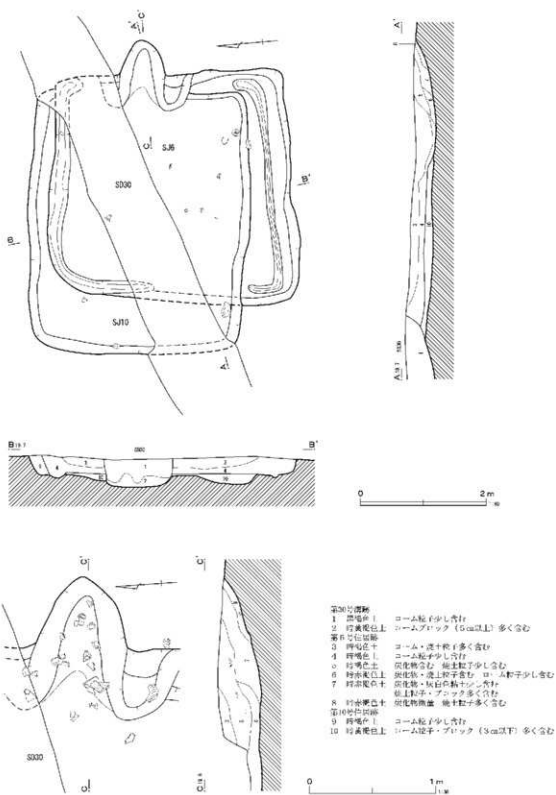
第6号・第10号住居跡 (第84・85図)

E-22グリッドで検出した。2軒が重複しており、さらに中央を第30号溝跡に貫かれている。だが、隅部や重複部の大部分は破壊を免れており、両者の規模形態や先後の関係などの情報は漏れなく把握できる。

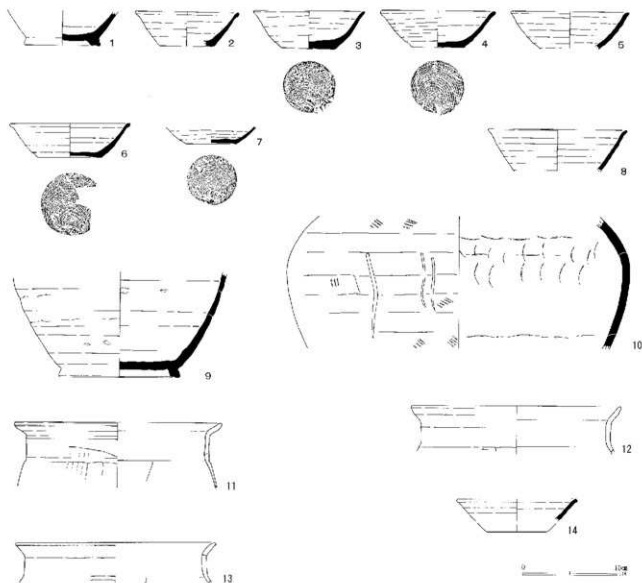
後に構築された第6号は方形の竪穴を掘り、遺存するカマドを加味した主軸方位はS-86°-Eとなる。覆土は暗褐色土が主体で、ローム・焼土粒子などを含む。

壁溝は、南北の壁下で全通するが、東西の壁下では途切れてしまう。だが、カマドを囲む東壁はともかく、西壁では第10号や第30号溝跡との重複などにより、壁溝の有無を誤認してしまった可能性もある。また、この住居の構築にあたっては竪穴の荒掘削を行っていない。

カマドは灰白色粘土を貼り込んだソデ下部が遺



第84図 第6号・第10号住居跡



第85図 第6号・第10号住居跡出土遺物

第19表 第6号・第10号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

師団	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
85	1	6住	須恵器	坏		[3.7]	(8.0)	20	長石赤白	良好	10YR5/1褐灰	南比企?
85	2	6住	須恵器	坏	(10.8)	3.6	(5.8)	20	長白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
85	3	6住	須恵器	坏	11.6	4.0	5.6	100	長白針	良好	5Y6/1灰	火押直、南比企
85	4	6住	須恵器	坏	11.8	3.9	5.6	100	長白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
85	5	6住	須恵器	坏	(12.1)	[3.9]		20	長砂白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
85	6	6住	須恵器	坏	(12.5)	4.6	6.6	50	長白針	普通	5Y6/1灰	火押直、南比企
85	7	6住	須恵器	坏		[1.9]	5.4	70	長白	良好	7.5YR5/4にぶい褐	東金子
85	8	6住	須恵器	坏	(14.4)	[4.5]		10	長砂白	良好	2.5Y7/2灰黄	東金子?
85	9	6住	須恵器	甕		11.2	12.7	70	長白	普通	5Y7/1灰白	東金子
85	10	6住	須恵器	甕				30	石砂針	普通	N4/0灰	南比企
85	11	6住	土師器	甕	(21.7)	[6.9]		20	長石赤白	普通	7.5YR5/4にぶい褐	
85	12	6住	土師器	甕	(21.8)	[5.1]		10	角長石赤白	普通	5YR5/4にぶい赤褐	
85	13	6住	土師器	甕	(20.8)	[4.4]		20	角長石白	普通	7.5YR5/4にぶい褐	
85	14	10住	須恵器	坏	(12.5)	[2.4]		10	長白	良好	5Y5/1灰	東金子?

存しており、短い煙道部は緩やかに傾斜している。固有の覆土に相当する5層～8層は傾斜堆積しており、急激な崩落流入か意図的な破壊か想定できる。このうち、焼土ブロックを多く含む7層が構築材の崩落土と考えられる。

これに対し、第10号は東西に長い竪穴形状で、第6号と同位置にカマドが構築されていたと思われる。覆土は暗褐色が主体で、貼床に伴う埋戻し土である10層を観察するかぎり、床面は第6号と同レベルだったようである。壁溝などの床面構造物は検出できなかった。

両住居跡の重複は、竪穴の形態が異なるものの、軸方位と、カマドや北東隅部の位置におおよその共通を見いだせる。このことから、重複は、偶然の結果ではなく、埋没初期の反復、もしくは建て替えによって生じたことがわかる。

また、双方の覆土は暗褐色系土が主体であり、確信のいく識別はしづらい。ここでは主要な覆土のうち9層を第10号に帰属させたが、間隔をあげて掘削されている第6号の南側壁溝の様相を加味

すると、北側でも同じように壁と壁溝に間隔があられていた可能性も考えられる。その場合、両竪穴の長軸が約4.2mで合致するなど、看過できない要素も存在する。

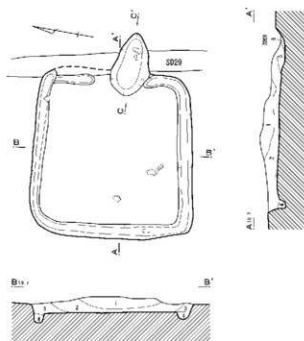
第6号住居跡からの遺物は、縄文土器1点と、平安時代の土師器須恵器306点が出土した。平安時代土器類の内訳は、須恵器の坏蓋類が70点、同壺瓶類が5点、同甕類が17点、土師器の甕類が214点であった。

また、須恵器の器種ごとにみた産地の推定では、坏蓋類が南比企産4点、東金子産66点、壺瓶類が南比企産4点、東金子産1点、甕類がすべて南比企産であった。

一方、第10号住居跡の覆土中から出土した遺物は、平安時代の須恵器坏の破片が2点のみであった。双方とも東金子産と推定できる。

第7号住居跡 (第86・87図)

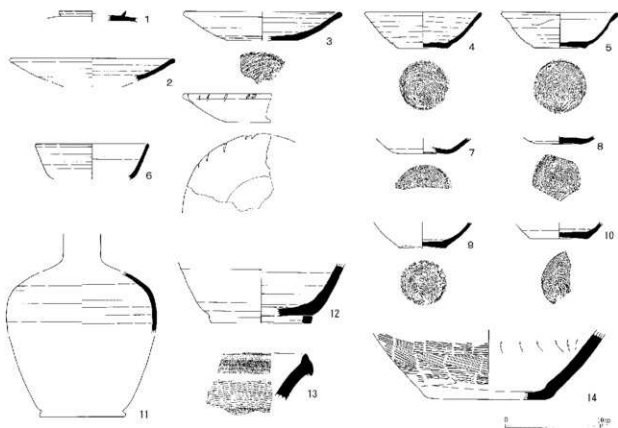
E・F-22グリッドで検出した。第8号住居跡下層で見つかった旧住居跡と並ぶ規模の小型住居跡である。カマドやその周囲を第29号溝跡に破壊



- 第7号住居跡
- | | | |
|---|------|--------------------------|
| 1 | 褐色土 | ローム層下・ブイック (3cm以下) 少し含む |
| 2 | 赤褐色土 | 焼土粒子・炭化物少し含む・ローム粒子多く含む |
| 3 | 埋戻し土 | ロームブロック (5cm) 多く含む |
| 4 | 赤褐色土 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物多く含む |
| 5 | 赤褐色土 | ローム層下・ブイック (3cm以下) 少し含む |
| 6 | 赤褐色土 | 焼土粒子・炭化物多く含む・ロームブロック少し含む |

0 2m

第86図 第7号住居跡



第87図 第7号住居跡出土遺物

されているため北東壁を失っているが、形状把握に困難はない。

竪穴とカマドの向きから算定した主軸方位はN-85°-Eを指し、第1号住居跡下層の旧住居跡と共通するもの、至近の第6号・第8号・第10号とは一致しない。また、第6号・第10号とは上屋架構の関係上、共存は困難である。

覆土は黒褐色系土が主体で、外周下位のみには暗褐色土が堆積する。壁溝が全周するほかは床面に構造施設はない。また、住居構築にあたり、貼床も施していない。

カマドのソデは流出し、遺存していなかった。第29号溝跡との重複もあり、覆土も細かな分層が不可能で、おおよそ焼土・炭化物を多く含む6層が構築部の痕跡、そして5層はカマド崩壊後の堆積土と考えられる。

遺物は、小規模な住居跡のわりには多く出土し

ている。その内訳は、埋没時に流入した縄文土器が7点、平安時代の土器片301点、さらに鉄片1点が出土した。平安時代土器類の内訳は、須恵器坏蓋類が74点、同壺瓶類が20点、同甕類が25点、土師器甕類が182点であった。

須恵器の器種分類ごとに推定した焼成窯は、坏蓋類が南比企産47点、東金子産27点、壺瓶類がすべて東金子産、甕類が南比企産24点、東金子産1点であった。

第87図に出土遺物を示したが、土師器の甕類は胴部の小破片が多く、図化できるものを復元できなかった。同図はすべて須恵器で、什器類が中心である。このなかで、3の口縁部には5箇所において鋭い斜位の切れ込みが加えられている。おそらく破損後の破片を刃物などの砥石として転用したのだろう。

第20表 第7号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

挿図番号	遺構	種類	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
87	1	7住	須恵器	蓋	[0.9]	(7.0)	20	白	良好	灰	
87	2	7住	須恵器	皿	(16.9)	[2.4]	10	長白	良好	5Y5/1灰	東金子
87	3	7住	須恵器	皿	(16.1)	3.1	(7.5)	20	長白	普通 10Y5/1灰	東金子
87	4	7住	須恵器	環	12.0	4.9	5.2	80	長白	普通 5Y1/5灰	東金子
87	5	7住	須恵器	環	(12.1)	3.8	5.6	50	長白	普通 7.5YR5/1灰	接合痕、南比企
87	6	7住	須恵器	環	(11.7)	[3.8]	20	長白	良好	7.5Y4/1灰	南比企
87	7	7住	須恵器	環	[1.7]	(5.2)	30	長白	良好	5Y5/3灰	南比企
87	8	7住	須恵器	環	[0.9]	5.2	60	長白	良好	2.5Y7/2灰黄	南比企
87	9	7住	須恵器	環	[2.8]	4.8	50	白	良好	2.5Y6/2灰黄	胎土緻密、東金子
87	10	7住	須恵器	環	[1.7]	(6.0)	30	長白	普通	7.5YR5/4にぶい褐	東金子
87	11	7住	須恵器	長頸壺			20	石白	良好	5YR6/1褐灰	東金子
87	12	7住	須恵器	長頸瓶	[6.4]	(10.6)	20	長白	良好	5Y5/1灰	東金子
87	13	7住	須恵器	甕			—	長白	良好	10Y5/1灰	東金子
87	14	7住	須恵器	甕			20	石針	普通	5YR6/1褐灰	南比企

第8号住居跡 (第88・89図)

E・F-23グリッドで検出した。カマド部分は第29号溝跡と重複するが、同溝が浅く、形状の把握に影響はなかった。新旧2期の住居跡が発見されているが、新期のカマドを目安とした軸方位はS-85°-Eで、第6号住居跡と連携した気配もうかがえる。

竪穴の外形は、北東隅が張り出しているが、これに見合う位置の床面には、貯蔵穴などの施設は見つからなかった。また、壁溝や大きな掘り方も掘削されていない。覆土は黒褐色土が大勢で、灰白色粘土を貼り込んで構築されたカマドのソダが大きく残されていた。

カマド上の覆土では焼土や炭化物、構築材となった灰白色粘土が多く混じるが、とくにその傾向が強い7層が、かつて天井であった部分が崩落した層と考えられる。また、唯一灰を含む8層は本カマドが機能していたころ洞部に流入・形成された土にあたるだろう。

さらに、床面下にはもう一軒の掘り方が確認できた。竪穴は上位住居と同軸で、南東隅の一部が合致する他は新竪穴をそのまま縮小した形である。新住居のような張り出しは設けず、遺存していたカマドも小振りである。

旧竪穴はロームブロックを含む9層・11層・12

層などの暗褐色系土で埋戻されており、新住居へ直接拡張された際の掘削土や周境土の一部があられた可能性が強い。こちらも掘り方や壁溝は設けていないが、下位のカマドソダはそのままに遺存していた。

遺物は、新住居跡のカマドと、北方の両隅部でまとまって出土した。その内訳は、混入した縄文土器31点、主として埋戻時に投棄された平安時代の土器片283点が出土した。平安時代土器類の内訳は、須恵器坏蓋類が74点、同壺瓶類が1点、土師器坏類が1点、同甕類が10点、土師器甕類が197点であった。

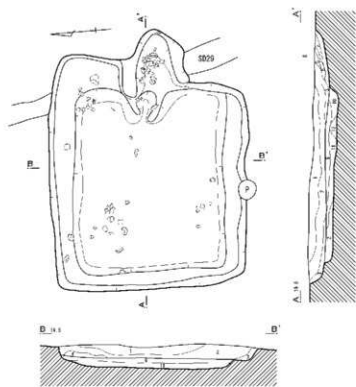
須恵器の器種ごとにみた産地の推定では、坏蓋類が南比企64点、東金子9点、壺瓶類が南比企、甕類が南比企、他は識別不能であった。

第89図に示した出土遺物の主体は、須恵器什器類と土師器煮沸具類である。土師器甕類は大量に出土したものの、胴部片が多く復元率は低い。また、19のクロコ土師器が1点出土している。

第9号住居跡 (第90・91図)

E-23グリッドで検出した。第2号住居跡とともに、N-5°-Wの北方に軸方位を設定する本遺跡では数少ない平安時代住居跡である。

覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積で、外周下層ほどに明度を増していく。床面は掘削時のま

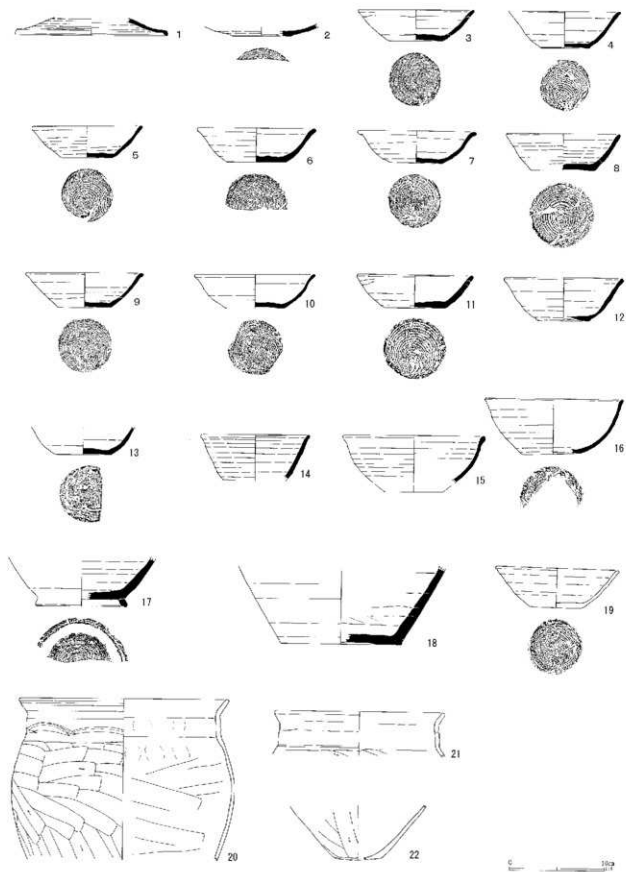


- 遺跡と地層部
- 1 黒褐色土 ロームブロック多く含む 粘土粒子多し含む
 - 2 赤褐色土 ロームブロック・粘土粒子少し含む 炭化物多く含む
 - 3 赤褐色土 粉塵褐色土・ロームブロック多く含む
 - 4 赤褐色土 粘土ブロック多く含む
 - 5 赤褐色土 炭化物・粘土粒子多し含む 灰白色粘土含む
 - 6 赤褐色土 炭化物・粘土粒子多し含む 灰白色粘土多く含む
 - 7 赤褐色土 炭化物少し含む 粘土粒子多し含む
 - 8 赤褐色土 炭化物多く含む 粘土粒子少し含む 灰を含む
 - 9 赤褐色土 ロームブロック多く含む
 - 10 赤褐色土 粘土粒子・炭化物多し含む
 - 11 赤褐色土 ロームブロック・粘土粒子・炭化物多く含む
 - 12 赤褐色土 ロームブロック多く含む

第88図 第8号住居跡

第21表 第8号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

種別	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
89	1	8住	須恵器	蓋	(16.0)	[1.8]		30	長石赤白針	不良	10YR6/4にぶい黄橙	
89	2	8住	須恵器	皿		[1.0]	(6.2)	30	長白黒針	普通	2.5YR8/2灰白	南比企
89	3	8住	須恵器	坏	(12.1)	3.0	5.6	40	長白針	普通	5Y6/1灰	南比企
89	4	8住	須恵器	坏	(11.5)	3.8	5.4	40	長白	良好	5Y5/1灰	南比企?
89	5	8住	須恵器	坏	11.5	3.4	5.5	80	長白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
89	6	8住	須恵器	坏	(12.1)	3.6	(6.3)	40	長白	普通	7.5Y5/1灰	東金子?
89	7	8住	須恵器	坏	12.2	3.5	5.6	80	長白針	良好	5Y5/1灰	南比企
89	8	8住	須恵器	坏	11.8	3.9	6.6	70	長白	普通	5Y5/1灰	東金子
89	9	8住	須恵器	坏	12.1	3.7	5.7	70	長石赤白	不良	2.5Y5/1黄灰	東金子
89	10	8住	須恵器	坏	(12.5)	3.1	5.9	40	長白針	不良	2.5Y6/2灰黄	南比企
89	11	8住	須恵器	坏	(12.0)	3.5	6.6	40	長白黒針	普通	7.5Y5/1灰	南比企
89	12	8住	須恵器	坏	12.4			70	角赤白	不良	2.5Y4/2暗灰黄	内外面一部剝落
89	13	8住	須恵器	坏		[2.9]	6.0	50	長石赤白針	不良	7.5YR7/6橙	南比企
89	14	8住	須恵器	埴	(11.2)	[4.9]		50	長白	普通	10Y5/1灰	東金子?
89	15	8住	須恵器	埴	(14.6)	5.0		20	長石白針	普通	5Y5/1灰	南比企
89	16	8住	須恵器	埴	14.3	5.9	6.2	70	長白針	不良	7.5Y4/1灰	南比企
89	17	8住	須恵器	長頸瓶				30	長白針	良好	7.5R5/3紫灰色	南比企
89	18	8住	須恵器	甕		[8.4]	(12.8)	20	長白針	良好	5Y6/1灰	南比企
89	19	8住	ロクロ土器	甕			5.6	40	長石赤白	不良	7.5YR6/6橙	内外面一部剝落、やや歪む
89	20	8住	土師器	甕	(21.8)	[17.0]		30	長石赤白	普通	7.5YR5/4にぶい褐	
89	21	8住	土師器	甕	(17.6)	[4.7]		30	角長赤白	不良	7.5YR6/4にぶい橙	
89	22	8住	土師器	甕		[4.8]	5.0	50	長石赤白黒	普通	10YR6/3にぶい黄橙	内外面磨耗・剝落



第89図 第8号住居跡出土遺物

まで、掘り方は設けていない。壁溝が全周するとともに、南方壁下では入口部の施設らしき傾斜した柱穴を発見している。

一方、カマドのソデは識別できる状態では遺存していなかった。だが、10層が稼働時の燃焼部灰、9層が焼絶初期流入土と天井崩落の混合、8層は燃焼部上で急に層が消滅することから、器設穴の一端を残しつつ一気に落ちた残りの天井部と見なすことができる。

遺物は、埋没時に流入した縄文土器33点、平安時代の土器片68点が出土した。平安時代土器類の内訳は、須恵器坏蓋類が12点、同甕類が6点、土師器甕類が50点であった。

須恵器の器種ごとにみた産地の推定では、坏蓋類が南比企9点、東金子3点、甕類がすべて南比企産であった。

第91図1～4にその一部を示したが、4点とも須恵器什器類である。このうち2の須恵器坏側面には墨書が加えられているが、記号なのか文字なのか半断できなかった。

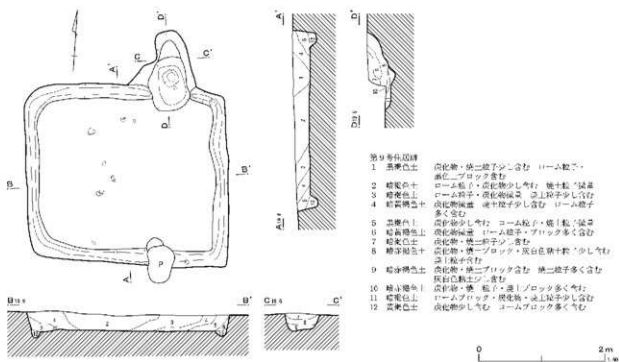
第11号住居跡 (第91・92図)

D-24・25グリッドで検出した。軸方位はS-82°-Eで第4号住居跡と連携して構築された可能性が強い。中央を第13号土壌に破壊されているが、カマドでは左ソデの構築材に使用されたとと思われる石材や土器が遺存していた。

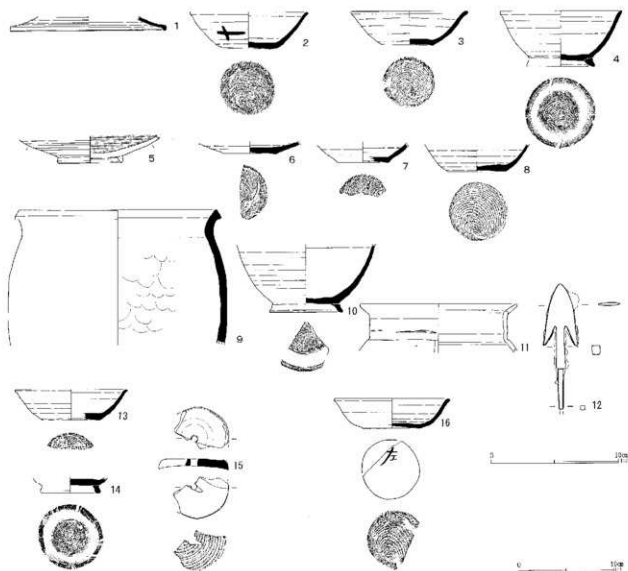
壁溝は北西方を優先して3方にめぐっているが、南壁際は床面が傾斜部に流出しており、確認できていない。また、北東隅には方形の小穴を発見したが、浅く、カマドの備在側とは逆にあることから、貯蔵穴とはいえない。

遺物は平安時代の陶器・土器片65点、鉄鏝1点が出土した。平安時代の陶器・土器の内訳は、灰釉皿1点、須恵器坏蓋類が19点、土師器甕類が45点であった。須恵器坏蓋類の産地は、南比企16点、東金子3点と推定される。

第91図5～12にこれらを示したが、5は淡黄色釉を施した灰釉陶器皿である。また、12はカマド燃焼部床近くから出土した鉄鏝である。



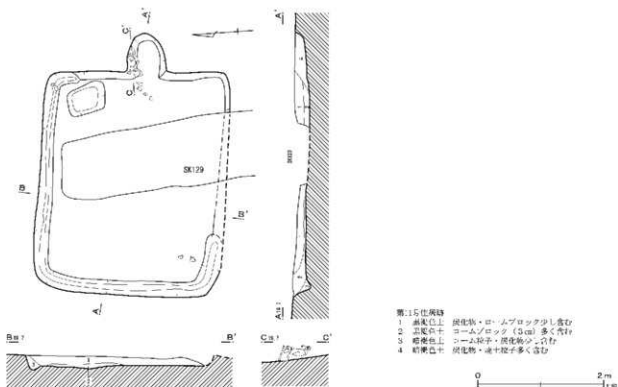
第90図 第9号住居跡



第91図 第9号・第11号住居跡・第1号掘立柱建物跡・単独柱穴出土遺物

第22表 第9号・第11号住居跡・第1号掘立柱建物跡・単独柱穴出土遺物観察表 (cm/%)

採回番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
91	1	9住	須恵器 蓋	16.2	1.5		10	長白黒針	普通	5Y6/1灰	南比企
91	2	9住	須恵器 杯	12.2	3.9	5.8	90	長白	良好	5Y6/1灰	東金子?、墨書不明
91	3	9住	須恵器 杯	12.0	3.6	5.4	90	長赤白黒針	普通	5Y6/1灰	南比企
91	4	9住	須恵器 高台付瓿	(12.8)	5.9	7.0	40	白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
91	5	11住	瓦物 唾壺		2.9	6.9	30	白黒	良好	2.5Y8/1灰白	淡黄釉
91	6	11住	須恵器 皿		[1.3]	(5.8)	30	長白針	良好	5Y6/2灰オリブ	南比企
91	7	11住	須恵器 杯		[2.2]	(5.4)	30	長白	普通	7.5Y5/1灰	東金子
91	8	11住	須恵器 杯		[2.9]	6.2	60	長白針	不良	2.5Y8/2灰白	南比企
91	9	11住	須恵器 鉢	(20.8)	[14.3]		10	長白針	普通	10Y4/1灰	南比企
91	10	11住	須恵器 高台付瓿		[7.2]	(7.6)	30	長白	良好	7.5Y5/1灰	東金子
91	11	11住	土師器 甕	(16.2)	[5.2]		20	角長石白	普通	7.5YR5/4にぶい梅	
91	12	11住	鉄製品 鉄鏃	長さ[9.8]	鏃身長4.4	幅2.6	厚さ[0.3]				脇袂、関笠被
91	13	1掘立	須恵器 鉄鏃	(11.6)	3.2	(5.9)	50	長白針	普通	10YR5/2灰黄褐	南比企
91	14	1掘立	須恵器 高台付瓿		[1.7]	5.8	80	長白	良好	2.5Y5/1黄灰	東金子?
91	15	1掘立	須恵器 転用環	径(7.3)	孔径0.6	厚さ0.7		砂白	普通	2.5Y6/2黄灰	須恵器環を転用
91	16	柱穴	須恵器 杯	(11.8)	3.2	6.0	40	長石赤白黒	不良	10YR7/4にぶい黄橙	墨書「左」、末野?



第92図 第11号住居跡

(2) 掘立柱建物跡

番匠・下道遺跡における今回の調査では、第7次調査の東側斜面地より、5棟の掘立柱建物跡を発見した。これらはすべて平安時代に構築されたものであり、軸方位がほとんど共通するに加えて、総体で南に開くコの字状を形成している。その配置関係から、5棟は同一指揮者のもと、計画的に設置されたと考えられる。

第1号掘立柱建物跡 (第91・93図)

G・H-21グリッドで検出した。2間×3間の北面する東西棟で、梁間の中央線がコの字配置の中心軸と合致しており、これら掘立柱群のなかでも中心的な建物であると考えられる。

第20号・第22号・第23号溝跡、さらに第49号土壇らと5箇所重複し、うち3箇所掘り方が破壊され、消滅していた。だが、遺存した掘り方を反転することにより、全体の位置や規模の復元は可能である。

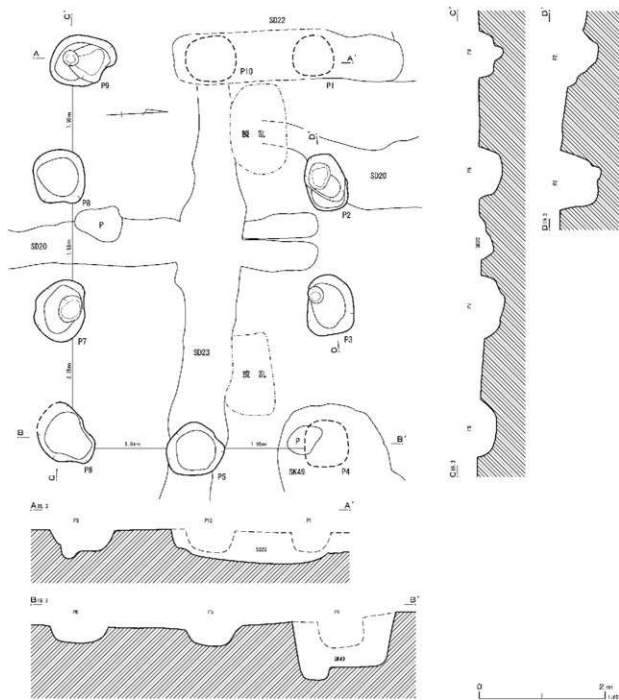
桁方向の中軸方位はN-87°-Wとなり、東西棟

である建物の指向方向を加味して90°展開すると、N-3°-Eとなる。

建物の西半は、梁桁とともに等間となる。これに対し、東の1間分は他より柱間が確保されているが、これがどのような意図で行われたかは不明である。また、各隅部の柱穴が内側に設けられる傾向がありそうだが、これも、3穴を失っているため確定はできない。

覆土の土層観察では、多くで柱が抜き取られた痕跡が認められたが、これに伴う大規模な掘り方の破壊は行われていない。立柱時の補填土は、主として暗黄褐色土で脩われ、抜き取り後には黒褐色土が流入していた。

遺物は、柱穴内から須恵器坯蓋類7点、同壺類3点、同甕類1点、土師器甕類8点が出土している。第91図にこのうち3点を示したが、14は須恵器高台付坏の底部、15は須恵器坏底部を転用し紡錘車として加工したものである。



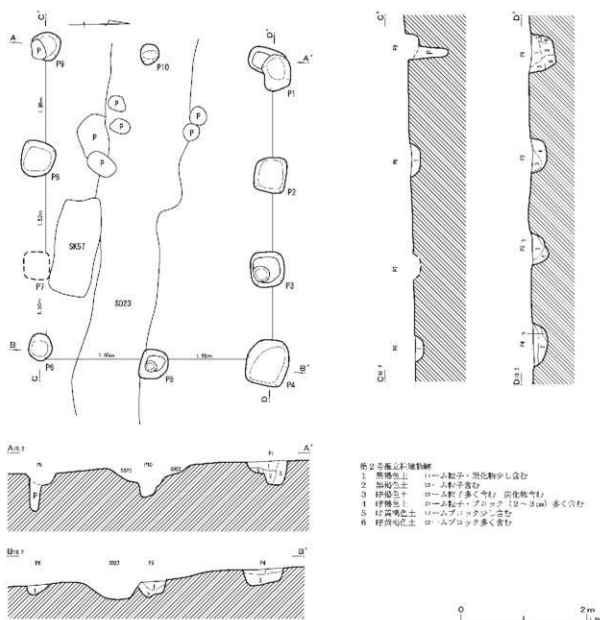
第93図 第1号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡 (第94図)

H・I-21グリッドで検出した。第1号と並列する北面の東西棟であるが、同じ2間×3間の柱間規格ながら、規模に劣る。南桁・中心軸・北桁の延長線のいずれをとっても第1号のそれとは合致しない。逆に、東側柱列の南延長線が後述する

第3号の桁中心軸と一致しており、配置規格は第3号と組で決定されたものと想像できる。

桁方向の中軸方位はN-89°-Wとなり、東西棟である建物の指向方向を加味して90°展開すると、N-1°-Eとなる。第1号と並びながらも東に片寄る位置、そして設定軸の組み合わせ関係からし



第94図 第2号掘立柱建物跡

でも、第1号には及ばぬ副次的な建物と考えられる。

掘り方も同号に比して小型で、掘り込みも浅いため、1穴はそもそも確認ができなかった。柱間は、第1号とは逆に西側1列と北側が広く設定されている。

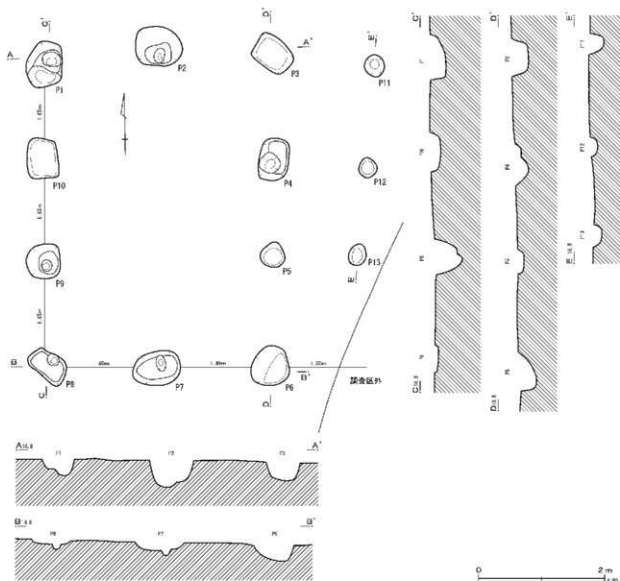
柱はすべて抜き取られており、その際の破壊により5・6層の版築土は一部の掘り方でしか観察できなかった。1・2層は抜き取り後の自然堆積

土で、3・4層はその場で埋戻されたと考えられる土層である。

遺物は、P1・P9内より、陶磁器の小片が出土しているが、後世の混入だろう。

第3号掘立柱建物跡 (第95図)

I-22グリッドで検出した。コの字配置の東列に唯一構築された南北棟である。他時期遺構との重複はないが、南東隅の1穴が調査区外にさしかかるため、調査が不能であった。



第95図 第3号掘立柱建物跡

建物は、2間×3間の側柱で身舎の東方に1間幅の庇が付属する。身舎の桁中心軸はN-2°-Eをさしているが、庇列の方位線はやや東に傾いている。身舎部分は梁・桁方向それぞれで等間が図られ、梁中間柱は外部に張り出す気遣いがある。また、四隅の掘り方は身舎を囲い込むように軸を傾けて掘削されており、柱受は10穴のうち6穴に設けられている。

柱は、大方が抜き取られており、一部では、そのための破壊も加えられている。破壊後の余白に

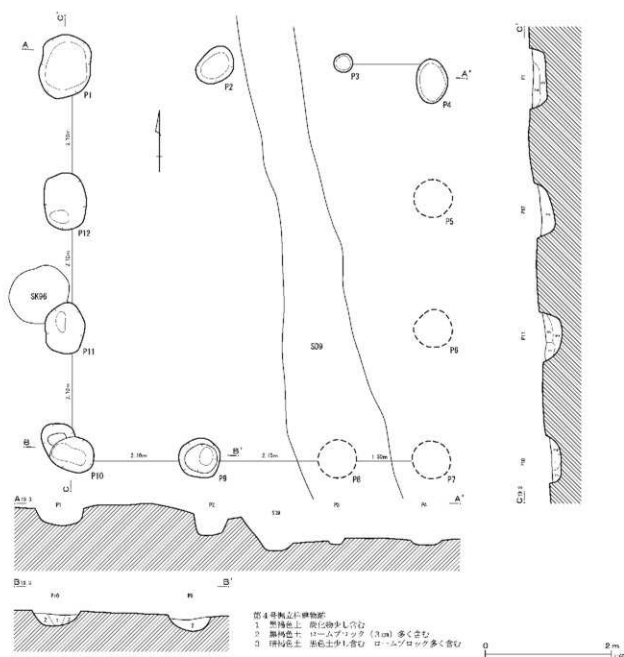
は、多くの場合、暗褐色土が流入していた。

遺物は、平安時代の須恵器坏1点、土師器甕3点が柱穴から出土しているが、いずれも小片のため、図示できなかった。

第4号掘立柱建物跡 (第96図)

F・G-22・23グリッドで検出した。コの字配置の西方に位置する南北棟である。第19号溝跡が重複する上に地山が東方に傾斜することから、想定される東側の4穴が発見できなかった。

西方の柱列から算定した主軸方位はNで、建物



第96図 第4号掘立柱建物跡

規格は、3間×3間と考えたが、西側の柱間が東に比べて広い上に等間となることから、さらに2穴が不足すると考え、東側を底部と見なすこともできる。また、浅いP4が確認で、2間×3間の側柱建物であった可能性も残されている。

発見できた掘り方で見る限り、柱は抜き取られており、1層の黒褐色土に立柱の名残をとどめる

程度である。

遺物は出土しなかった。

第5号掘立柱建物跡 (第97図)

F・G-23グリッドで検出した。古代掘立柱建物跡が成するコの字配置のうち、西南の隅に位置する棟である。

2間×3間の建物はN-5°-Eをさすが、南方

4. 中世以降の遺構と遺物

(1) 溝跡

番匠・下道遺跡の調査では、92条の溝跡を発見した。これらは、建物と連動し区画を成するものから、大規模な掘削工事を施している堀、かろうじて数mほどの浅い痕跡が発見できた頼りないものまで、様々な規模形態がある。

出土遺物の大半は近代の陶磁器類であり、これに近世の遺物が混入することが多い。大方は近世から近代にかけて養生を施されながら掘削・利用されたと推定できる。しかし、調査区中央付近では、中世だけ、あるいは中近世、近世の遺物のみが出土するものもあり、これらは当該期に養生が放棄され、埋没したものと考えられる。

掘削期の判定は、困難なものも多いが、とくにそれを明示してない溝跡は、覆土の特徴から、近世から近代にかけて機能したものと考えた。

第1号溝跡 (第98図)

E-17・18グリッドで検出した幅広で溝底が平坦な溝跡だが、調査区隅である上に土壌層と重複し、全容がつかみにくい。

遺物は、土師器1点と近世の陶磁器類3点が出土しており、近世に掘削された可能性が強い。

第2号～第4号・第6号・第7号溝跡 (第98図)

調査区の北方、E～F-17～20グリッドで検出した。ほぼ北を向くように併走する溝群で、第2～4号の南は第9号を目安に途切れる。一部は同じ溝となると考えられるが、接続部が攪乱されており、確定できない。

また、3条の溝跡は北方でクランク、あるいは弧を描くように西側に屈曲するが、意図は不明である。断面形は、緩急の差はあるものの、葉研形で、覆土は暗褐色土が基調となり、ロームブロックの混入が目立った。

第7号では遺物が出土しなかったが、第2号では平安の土器類4点と、中近世の陶磁器類2点、かわらけ1点、瓦1点が、第3号で平安の土器類

3点と、近世のかわらけ1点が、第4号で平安の土器類4点と、捏鉢らしき破片2点が、第6号で縄文土器1点、平安の土器類4点、近世から近代の陶磁器類2点、瓦類1点が出土した。

中近世遺物の様相から、これらは近世に掘削されたものと考えられる。

第5号溝跡 (第98図)

E-18グリッドで検出した。断面箱形の短溝で、第17号土壇との重複部で終結している。第3号と併走し、補助的な機能があったと思われる。遺物は、近世の陶磁器1点が出土した。

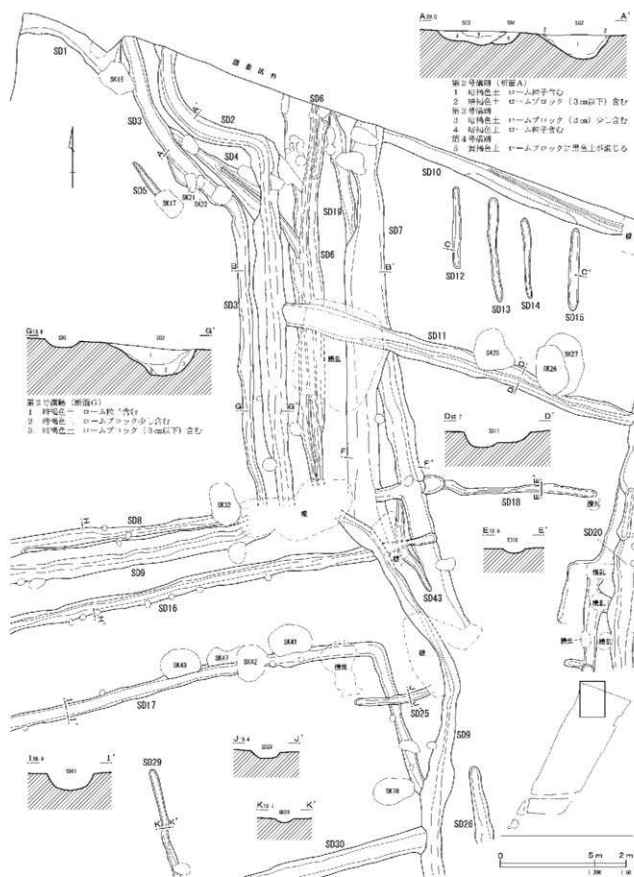
第8号・第9号・第16号・第17号・第30号・第40号溝跡 (第98・99・101・107図)

調査区北西方のB～G-20～23グリッドで検出した。軸方位がN-79°-E前後を指す溝の一群である。東側は、鉤形になる第17号を除き、第19号などの南北溝を目安に途切れており、連動すると考えられる。さらに、後述する第37号は、第30号から直角に派生しており、より南側での区画に対する目安ともなっていたようである。

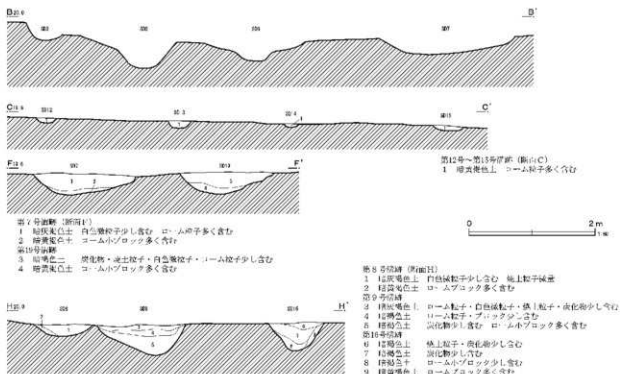
これらの断面形はU字形が多く、覆土は暗褐色を基調とするものの、第8号では暗灰褐色土なども観察できた。

遺物の出土は、北側の溝では低調であったが、南で多く出土した。北側の第8号では縄文土器2点、平安の土器類2点、陶磁器類1点が、第9号は時期不明の陶磁器類1点が、第16号では平安の土器片1点と、第107図1に示した推定口径11.3cmのかわらけ片1点が出土し、第40号からは遺物が出土しなかった。

これに対し、第30号では、縄文土器29点のほか、須恵器坏類48点、同壺類14点、同甕類42点、土師器甕類157点と、平安時代の遺物が集中しており、以降の所産が見あたらない。方位性や断面形、覆土の特徴からは見分け難かったが、あるいは、古代に掘削されたものかも知れない。



第98図 溝跡 (1)



第99図 溝跡(2)

また、第17号からは、平安時代の土器片12点と、近代の陶磁器1点が出土した。近代の遺物が出土しているものの、古代と疑われる第30号溝跡と並行し、連携している気配もある。

第10号・第11号・第23号溝跡 (第98・100図)

F～J-18-21グリッドで検出した。3溝とも軸方位をN-75-W前後にとり、西側が第7号や第22号など南北溝との重複部を目安に途切れる。このことから、南北溝とともに主要な区画を成したものと考えられる。

断面形は、おおよそ箱形から葉研で、覆土はロームブロックを含む暗褐色土が基調である。

遺物は、第10号より平安の土器類2点、近世から近代の陶磁器類2点、焙烙1点が、第11号から平安の土器類2点、陶磁器1点、かわらけ2点、焙烙1点が、第23号より縄文土器2点、平安の土器類7点、中近世の陶磁器類18点が出土しており、第23号は、中近世に埋没したと推定できる。

第12号～第15号溝跡 (第98～100図)

G・H-18-19グリッドで検出した。4条の短溝がほぼ北を指しつつ並列している。覆土は暗黄褐色の単層で共通しており、遺物は出土していないが、配置から近世の畝跡と考えられる。

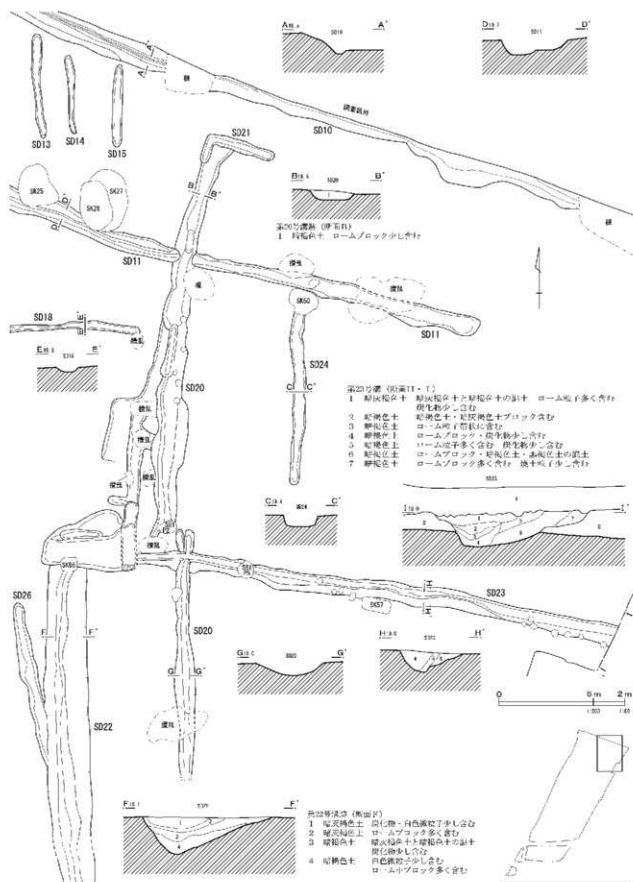
第18号・第25号溝跡 (第98・100図)

F～H-20・21グリッドで検出した。おおよそ軸方位はN-86-W前後を指す小溝で、第18号は第8号や第19号の屈折交換地点より、第25号は第19号の屈曲部を目安とするかのように掘削されている。断面形はおおよそ箱形で、双方ともに遺物は出土していない。

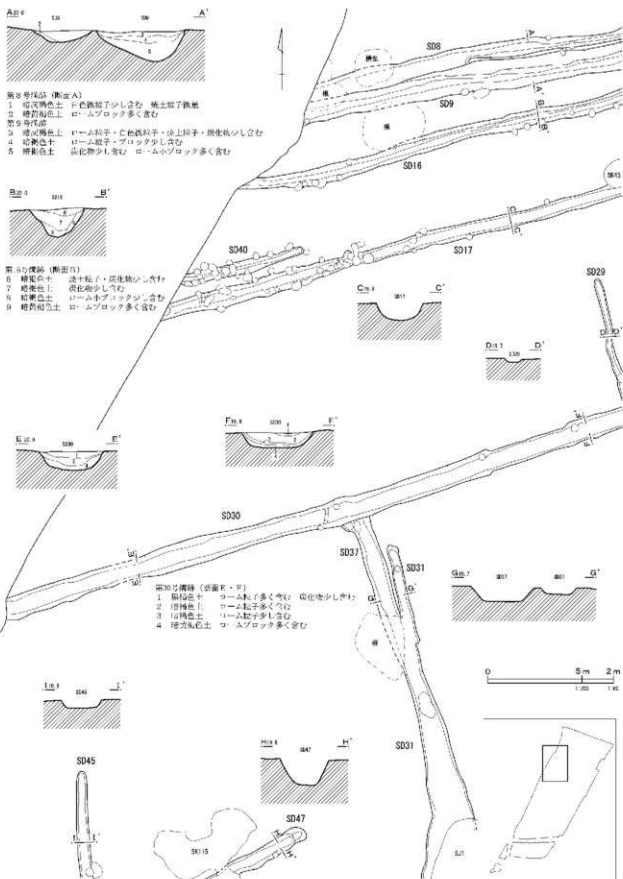
第19号・第26号・第43号溝跡 (第98・99・102図)

G・H-19-26グリッドで検出した。第7号などの南北溝を継ぐように南延する溝群である。

第19号は第7号をまたいで調査区北壁よりみられ、第22号に屈曲・合流する形で途切れている。また、第26号は第19号と第43号の交差部を目安に



第100図 溝跡 (3)



第101図 溝跡(4)

現れ直線的に東調査区外へと延びている。

断面形は逆台形が基本で、覆土はロームブロックを混じえる暗褐色系土が主体である。

第43号からは遺物が出土しなかったが、第19号からは縄文土器1点と、平安の土器類41点、近世から近代の陶磁器類8点、焙烙2点、凝灰岩製の砥石1点が出土した。また、第26号よりは縄文土器3点、平安の土器類22点、素焼甕・捏鉢4点、瓦類2点などが出土した。後者は、遺物の様相から、中近世のうちに埋没したと考えられる。

第20号～第22号・第24号・第32号溝跡

(第98・100・102図)

G・H-19～25グリッドで検出した。調査区北東端でほぼ北を指す溝群で、第21号は鉤状、第22号はクランク状の変化がある。また、第20号・第24号は長さ10m強の短溝やその連続で、前者は第21号と第22号の接続部脇で、後者は第11号との重複部で途切れる。

さらに、第22号とこれから派生しつつ併走する第32号の南端は東方に屈曲する気配があることから、これら溝群は、第19号・第26号などの溝群と並列・反復されつつ、東側の区画を成していたものと考えられる。

覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土だが、第22号の上層は暗灰褐色土が堆積していた。これらの断面形はV字あるいは箱形が基調である。

第21号と第24号では遺物が出土しなかったが、第20号では、縄文土器1点、平安の土器類8点、近世・近代の陶磁器類18点、瓦3点が、第22号では、縄文土器2点、平安時代の土器類47点、中世から近代の陶磁器類40点、瓦類4点、焙烙6点、捏鉢2点などが、また、第32号では縄文土器1点、平安の土器1点、素焼甕片1点が出土した。

第27号・第28号・第83～第86号溝跡 (第102図)

G・H-23～25グリッドで発見した。基本的な区画を成すと考えられる第26号の南半西側に接して分布する小溝の一群である。

細かなばらつきがあるものの、基本的な方位性は第26号と合っており、これを目安に補助的に掘削されたものと推定できる。概して浅く、断面は逆台形で共通する。

第83～第86号は遺物がなかったが、第27号より縄文土器3点、同石器2点、平安の土器類37点、近世から近代にかけての陶磁器類24点、焙烙・捏鉢6点、瓦類4点、凝灰岩製砥石1点と、また、第28号からは須恵器が1点出土した。

第29号溝跡 (第98・101・102図)

E・F-21～23グリッドで発見した。軸方位はN-11°Wで第30号と直交するが、これを目安に途切れるなど、連動する気配はない。また、周囲に同種の溝も掘削されていない。

暗褐色土が堆積していた溝底は逆台形を呈しており、遺物は縄文土器2点、平安時代の土器類5点が出土した。

第31号・第37号・第48号溝跡 (第101・103図)

D・E-22～26グリッドで検出した。おおよそ軸方位はN-10°W。前後を指す南北溝の一群で、第30号から直角に派生する第37号、そして第31号、さらに第48号と、それぞれ掘削形の構造が異なるものの、方位性が引き継がれていく。

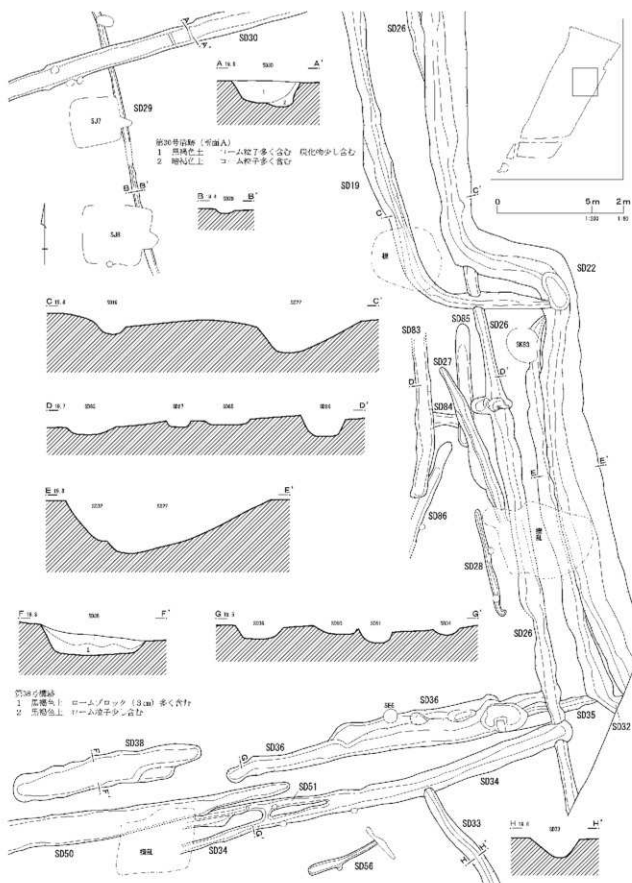
断面形は逆台形、覆土はロームブロック混じる暗褐色土が主体であった。

遺物は、第31号で縄文土器1点、平安の土器類1点、捏鉢片が1点、第37号で縄文土器8点、平安時代の須恵器坏類9点、甕類26点、土師器甕類18点、第48号で平安の土器類5点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類72点、凝灰岩製砥石3点、同安山岩製1点出土した。

とくに第37号は、平安時代土器類の出土量の多さと、第30号と直交しつつ派生する方位性の特徴から、同号と同じく古代に掘削された可能性も考えられる。

第33号・第70号・第87号溝跡 (第102・106図)

E～H-26・27グリッドで検出した。調査区中



央東寄りで密集する小溝群のなかで、おおよそ南北を指す3条を一括した。

第33号は第34号から、第70号と第87号は第55号から直交するように派生してほとんど消滅しており、これら大区画に連動する小区画の目安となったものと考えられる。

断面形は、第33号の逆台形、第70号の狭い箱形、第87号の広い箱形など、さまざまだが、覆土はロームブロックが混じる暗褐色系土が基調となることで一致している。

第33号と第87号からの遺物出土はなかったが、第70号からは置物と思われる中空の土製品破片が1点出土した。

第34号～第36号・第38号・第50号・第51号溝跡 (第102・103図)

E～H-25・26グリッドで発見した軸方位N-80°E前後を指す東西溝群である。東方は第22号、西方は第48号を掘削限界の目安としており、大区画を成する溝の一部を担うと考えられるものの、その設計順位は低い。

6条が4m幅内に密集しているが、連続して拡大や移動を繰り返したというよりは、別個に掘削された状況である。唯一第34号と第51号は、両者を結ぶ短溝が掘削されていることより、共存連動していることがわかる。

断面形はU字形から逆台形、覆土はロームブロックが混じる暗褐色土が大勢だが、第38号では黒褐色土が堆積していた。

遺物は、第34号より縄文土器4点、同スタンブ形石器1点、近世・近代の陶磁器片8点、瓦片2点が、第35号から須恵器片が1点、第36号よりは縄文土器1点、須恵器15点、焙烙や捏鉢片12点、その他の陶磁器・瓦類30点が出土した。

また、第38号では縄文土器1点と、捏鉢片1点、寛永通寶1点が、そして、第50号よりは平安の土器類1点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類24点が、さらに、第51号では縄文土器1点、須恵

器1点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類80点が出土した。

このうち、第51号での遺物出土が覆土の容量に比して多い。これらは何らかの事情で集められたものが一括廃棄されたと推定される。

第107図2に示したかわかけ片は第50号より出土したもので、口縁部にはタールが付着しており、灯明具として供されたものと考えられる。

第39号・第53号溝跡 (第103・104図)

A～E-25～27グリッドで検出された。他の溝とは規格が異なり、一部では確認面より1.8mもの深度に達する逆台形の堀である。

主要な溝となる第39号の基本軸方位はN-72°Eとなり、第9号や第50号などの東西区画溝と類似するかに見える。しかし、その後南東に屈曲する角度はN-45°Wと、他にみられない方位性を示す。東南の端は地山の傾斜とともに自然消滅し、これに匹敵する延長部は、調査区内では発見することができなかった。

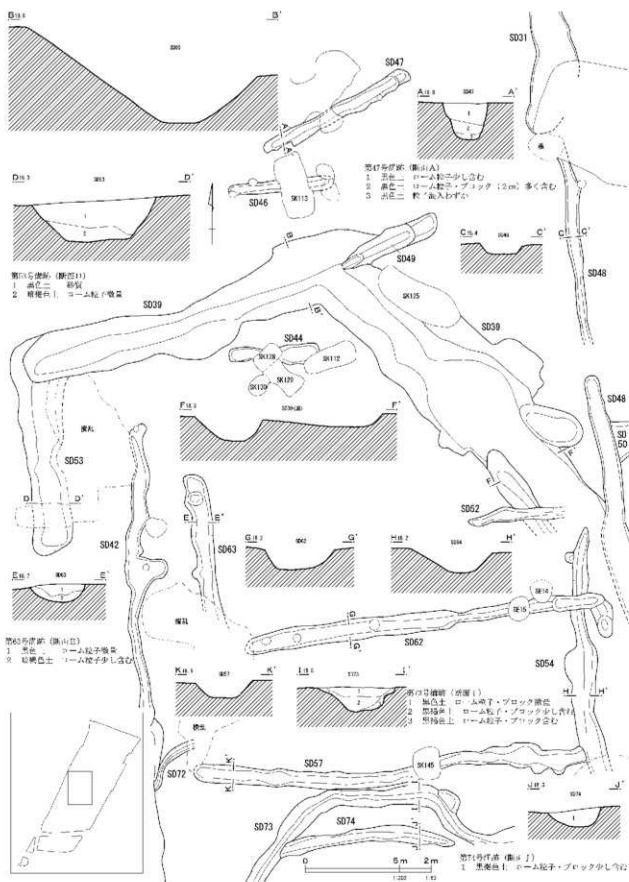
これに対し、西方では明らかに掘り残された土橋状の部分があり、さらにその西方も掘り方が続くものの、格段に規模が小さくなる。

一方、この土橋部を目安として南方に掘削された第53号も、規模が著しく縮小され、10mほどで立ち上がり、同じくその延長の行方を見失う。

いずれにせよ、南に解放された堀形状から、主郭は調査区の南西方にあることは確かだろう。また、今調査で遺構分布のなかで、第80号溝とその西側消滅部を境に遺構分布が極端に稀薄になるのもこの堀区画に関係するのかもしれない。

第39号・第53号ともに、覆土は上層に黒褐色土、下層には暗褐色土が堆積しており、ロームブロックの混入は少ない。断面形は葉研から逆台形で、堀底は平坦な掘り上がりか意識されている。雑な養生は受けておらず、斜面部は掘削時の形態をそのままに残していると考えられる。

遺物は、第39号より、縄文土器2点、須恵器1



第103図 溝跡 (6)

点、焙烙片36点、捏鉢片37点、摺鉢片4点、その他の陶磁器・瓦類13点が出土した。また、第53号からは近世の陶磁器・瓦類6点が出土した。

遺物の時期的統一性から、本溝は近世期に埋没したと考えられるが、掘削期が近いのか、はたまた大きく遡るのかはわからなかった。

第41号溝跡 (第104図)

A-26グリッドで検出したN-40-Eを指す短溝で、中央は土塊状に膨らむ。覆土は暗灰褐色土が主体で、遺物は出土しなかった。

第42号・第63号・第66号・第81号溝跡

(第103・105図)

B-26~32グリッドでほぼ南北をめざす直線的な溝の一群である。これらの列は、東側の第54号などと対になり、調査区南側における大区画を成する基幹溝である。

中心を貫く第42号と第66号は、同じ線上にあるものの、その構造はまったく異なる。また、第42号に併走する第63号は、東に屈曲して構造が類似する第62号と同一溝となるかも知れない。

また、南方西側に掘削された第81号は、北方の端で西に折れ、第80号西側と合流する可能性もある。しかしながら、双方の屈曲部は攪乱されており、当否は確認できない。

さらに、南で併走する第66号、第73号、第81号の三者は、現道をはさんだ第8次調査南区には延びておらず、第73号の緩斜面部にみるように、屈曲して現道下を東進し、第54号などの東側南北列に接続すると考えられる。

だが、現道部の調査区壁では、中央の第66号が最新と観察できた。もし、古期の第73号、第81号が通路をあけて併存したとするならば、西側の第81号は現道下を西進することも考えられる。

浅い箱形となる第42号を除く各溝の断面形は、当初菜研から箱菜研であったが、養生や再掘削を重ねるうちにその形態を失ったと考えられる。覆土は、上層に黒色土が堆積し、下層ほどに明度を

増すとともにローム混入物が多くなる。

遺物は、第42号で平安の土器類2点、陶磁器類1点が、第63号では須恵器1点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類が10点、第66号よりは縄文土器1点、須恵器片1点、近世から近代の陶磁器・瓦類69点、緑泥石片岩製磁石1点が、そして、第81号からは近世から近代にかけての陶磁器類3点と鉄滓1点が出土した。

第44号・第52号溝跡 (第103図)

C-D-26・27グリッドで発見した。第39号の堀に重複する不整小溝であるが、その方位性などを加味すると、東方の第56号などと同様な用途を担っていたものと考えられる。

遺物は出土していない。

第45号~第47号・第49号溝跡 (第101・103図)

C-D-24・25グリッドで検出した。第30号・第31号によって区画された調査区中央西部地区に掘削された小溝だが、そのめざす方位軸によって2種に分けられる。

このうち、第45号・第46号は、相互の連続はないものの、前者が指し示す方位N-5°-Wを基軸として直角に配置されている。その方位性は、南東方の第50号や南方の第62号に通じ、北方に展開する東西溝とは異なっている。

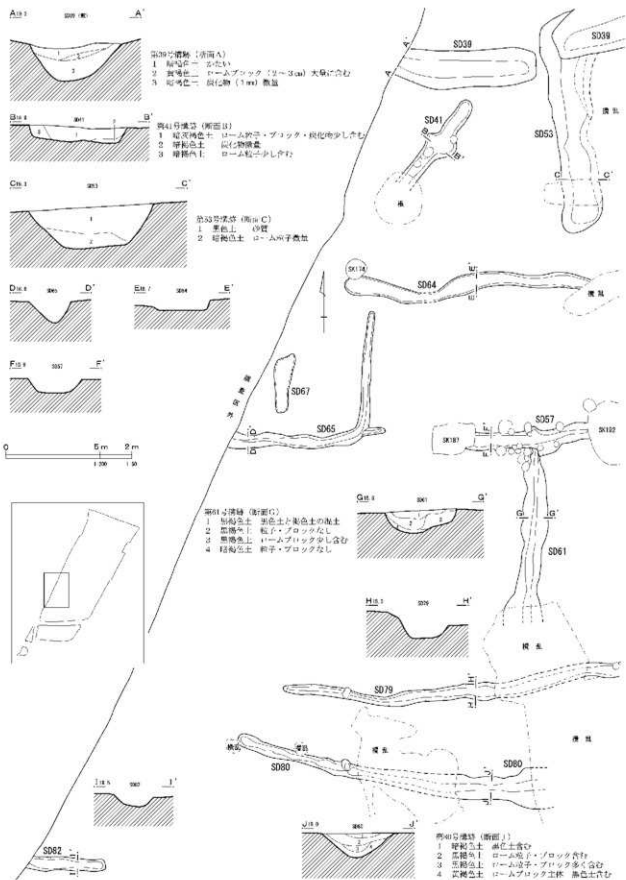
もう一方の第47号・第49号は、6mほどの間隔をあけて併走している。N-64°-Eを指す両者の方位性は、第39号とした跡跡に近く、他の溝跡には見られないものである。

掘削技法についてもそれぞれ共通が見られ、前者は断面逆台形で暗褐色土が主体となる覆土であった。また、後者は、ロームブロックを含むことは共通するものの、主に黒色土が堆積しており、第39号に近い。

4条とも、遺物は出土していない。

第54号・第55号溝跡 (第103・105~107図)

E~G-26~31グリッドに展開する東南を区画する主要溝群である。第55号は東側調査区外か



第104図 溝跡 (7)

ら東西に延び、南北を貫く第48号の直前で南に屈曲する。また、第54号は第55号の屈曲部分を目安とするように現れ、南調査区外まで併走する。

南北方向の長い溝を中心に屈折あるいは中途で途切れる溝が両側に併走する三者の関係は、後述する第66号・第73号・第81号の関係と一致し、調査区南方で堅固な方形区画を形成している。

断面形は、本来は逆台形であったろうが、たび重なる養生のためか、溝底が丸みをもち皿形に変形されてしまっている。また、覆土は、第55号の東西部分で黒色味が強い範囲があるもの、およびロームブロックが混じる暗褐色から茶褐色土が主体であった。

遺物は、第54号より中世から近世にかけての土鍋片21点、その他陶磁器類28点、凝灰岩製砥石1点が、また、第55号からは須恵器片1点、焙烙片12点、その他陶磁器類25点、凝灰岩製砥石1点が出土した。遺物の様相から、両溝は中世から近世のいずれかで掘削され、近世期にほぼ埋没しきつたものと考えられる。

第107図3は第55号で出土した凝灰岩製砥石である。側面三角形に整えられており、腹部中央には被研磨物の端部を潰すためと思われる凹部が付属している。

第56号・第58号～第60号・第69号・第71号溝跡 (第102・106図)

B・C-28グリッド、およびE-G-26-28グリッドで検出した、主として調査区の中央東半に掘削された不整の小溝群である。

これらのめざす方位の基本は、おおそ東西方向であるが、軽い屈曲や蛇行するものが多い。区画を担っていたとは思われず、特定の目的に応じてその都度掘削されたものと考えられる。

断面形は逆台形を基本とするものが多く、覆土は暗褐色系土が主体である。

遺物は、唯一第56号より中世のかわらけ片9点と播鉢片1点が出土した。

第57号・第62号溝跡 (第103～106図)

A～F-27・28グリッドで検出した。調査区南部で区画を東西に区切る2本の溝跡を一括した。第62号はN-82°-Eとやや北東に振れるが、第57号は第80号などの南部東西区画溝と併走する。第62号は南部南北主要溝の2列間を結ぶように完結している。また、第57号も、南北溝部分では一旦途切れている。南北溝を軸として東西溝をはめ込むことで区画を確定する本遺跡での溝区画手法からすると、それぞれ別個の溝跡として認識した方が良かったのかも知れない。

双方とも、断面形は逆台形を基本とし、ロームブロックを多く含む黒褐色から暗褐色土が覆土の主体となっている。

遺物は、第57号より須恵器1点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類34点、鉄片1点が出土しているが、第62号からは出土しなかった。

第61号溝跡 (第104図)

A・B-28・29グリッドで検出した。主軸方位はN-4°-Eと、第66号などと平行するが、および第57号と第79号、あるいは第80号間を連結する小区画溝になると考えられる。断面形はU字形、覆土は黒褐色が中心で、他の溝で多いロームブロックは少量しか含まれていない。

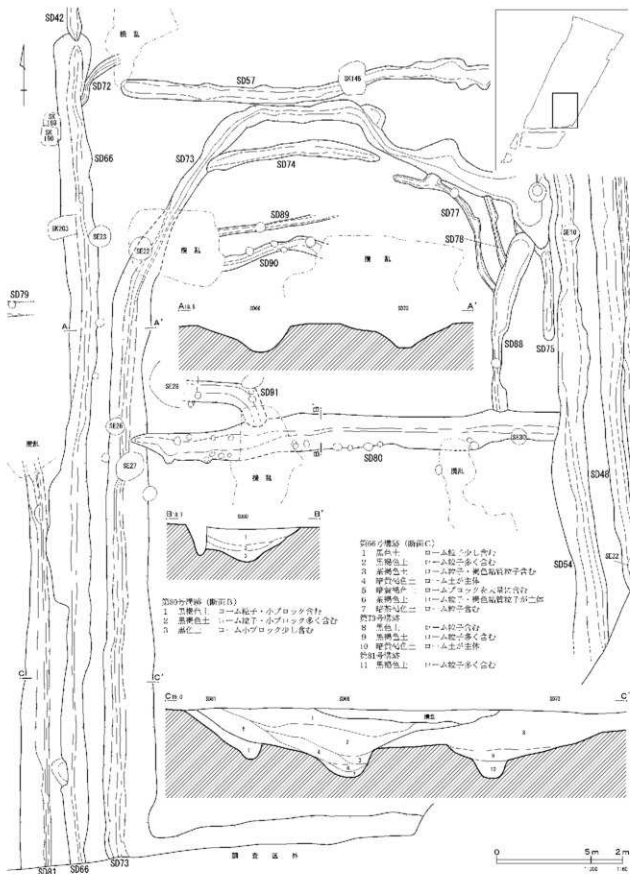
遺物は、平安の須恵器1点、近世から近代の陶磁器・瓦類50点、鉄片4点が出土した。

第64号・第65号・第67号溝跡 (第104図)

調査区南西のZ～B-27・28グリッドで検出した小区画溝群である。方位軸は第64号のN-88°-Eなど、第57号・第66号などの大区画を踏襲しており、第65号は鉤形に屈曲する。

断面形は第64号・第67号が浅い箱形で、第65号がV字形となる。覆土はロームブロックが混じる暗褐色土が主体であった。

遺物は、第64号より陶磁器片1点が、第65号では陶磁器類2点が、第67号よりは陶磁器片が3点出土したのみである。



- SD66の溝跡 (断面C)
 1 灰白土 ローム粒が少し含む
 2 黒褐色土 ローム粒が多く含む
 3 黒褐色土 ローム粒が少し含む
 4 層状褐色土 ローム土が主体
 5 層状褐色土 ローム土が主体
 6 層状褐色土 ローム土が主体
 7 層状褐色土 ローム土が主体
 8 層状褐色土 ローム土が主体
 9 層状褐色土 ローム土が主体
 10 層状褐色土 ローム土が主体
 11 層状褐色土 ローム土が主体
- SD89の溝跡 (断面B)
 1 黒褐色土 ローム粒が少し含む
 2 黒褐色土 ローム粒が少し含む
 3 黒褐色土 ローム粒が少し含む

第105図 溝跡(8)

第68号溝跡 (第7図)

I-22・23グリッドで1条のみ他と離れて掘削されている。方位性は西側の区画と関連なく、谷傾斜に面して単独で掘削されたと考えられる。

遺物は、土鍋片が2点出土したのみである。

第73号・第75号溝跡 (第103・105・106図)

第73号は、C-E-28-32グリッドに展開する主要南北溝であるが、北側では東に弧を描き、第75号に連結する。曲線は、区画からみて線対称となっており、この路線が計画的に設定されたことを彷彿させる。だが、弧状区画にどのような用途が付託されたかについては見当がつかない。

第73号の断面形は、当初箱菜研のようだが、養生が重なり皿状に変形している。上位には黒色土が堆積し、下層ほどその明度を増す。断面観察では、併走する第66号より古いと判定した。

第73号では縄文土器片1点、陶磁器2点、平安の土器類2点、近世から近代の陶磁器・瓦片42点、泥面子1点、凝灰岩製砥石5点、安山岩製砥石1点、鉄片1点が、第75号では須恵器1点、近世から近代の陶磁器・瓦類16点、砂岩製砥石1点、軽石1点、鉄片6点が出土した。

第72号・第74号・第77号・第78号・第89号・第90号溝跡 (第103・105・106図)

第57号・第80号・第66号・第54号の4溝跡で囲まれた区画に分布する不定小溝を一括した。グリッドではC-E-28・29に相当する。

各溝跡がめざす方位は、第74号・第89号・第90号の3溝のように、はっきりと東西を指す場合もあるが、第77号・第78号のように、むしろ区画溝に従っていると考えるのが妥当であろう。

割付図における余白の関係で、断面形を示せなかったが、おおよそ箱形となり、暗褐色から褐色土が単調に堆積するものが多い。

遺物は、唯一第74号より縄文時代の礫器1点、近世から近代にかけての陶磁器類3点、凝灰岩製砥石1点が出土した。

第76号溝跡 (第106図)

E・F-29グリッドで検出し、一部は調査区外に延びる。断面皿状の太い溝だが、N-44-Wの方位性は周囲の溝との関連を見いだせない。

遺物は、中世から近世にかけての陶磁器類4点が出土した。

第79号・第80号溝跡 (第104・105・107図)

Z-E-29・30グリッドで検出した。調査区南方に掘削された東西溝である。このうち第80号は、第66号をまたいで東西に展開するものとしたが、一旦途切れる気配もあり、別個に掘削されたものとも考えられる。

また、第79号は、方向軸が南北軸溝と連動しておらず、北側の第64号溝跡などと共通する。その間隔は第80号と第57号のそれに近いことから、両溝が成していた既存の区画を北方にずらした際に掘削された可能性がある。

断面形はU字形から逆台形、覆土はロームブロックが混じる暗褐色土が主体となっていた。

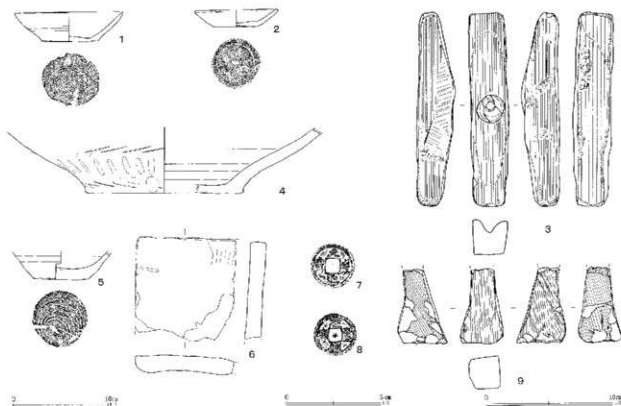
遺物は、第79号より陶磁器片1点が、第80号よりは中世の土鍋片14点、その他陶磁器類8点、渡来北宋銭2枚、凝灰岩製の砥石1点が出土した。遺物の様相から、少なくとも第80号は、中世期に掘削されたと推定できる。

第107図4は第79号溝跡から出土した常滑甕底部である。また、第80号から出土した同図5~9のうち、5は在地陶器の鉢底部片、6は熨斗瓦片である。さらに、7・8は元豊通寶で、前者は行書、後者は篆書体で印されている。そして、9は方台形の凝灰岩製砥石である。

第82号溝跡 (第104図)

Y-30グリッドで検出した。調査区南西部で1条のみ掘削されているが、その方位軸はN-87-Wと、区画溝群と共通しており、その位置も第80号東部の延長上にある。

断面形は逆台形で、暗褐色の覆土から解読不能の銭貨が1点出土した。



第107図 溝跡出土遺物

第88号・第91号溝跡 (第105・106図)

C-E-29・30グリッドで検出した。第80号と第57号にはさまれた区画に分布する小溝群のうち、幅広い断面形を呈し、第80号から派生するものを一括した。

両者のめざす方位は一定してない。溝そのものに機能があつたとも考えられるが、第80号から派生する位置が区画のなかで線対称となっていることから、やはり小区画を成したと思われる。

両溝跡とも、遺物は出土していない。

第92号溝跡 (第7図)

第8次調査南側調査区のB-33グリッドで検出した細い短溝である。第8次北側調査区にある第66号などの太い南北溝群の延長に存在するが、これらとはまったく異なる方位性で掘削されている。断面形は箱形で、覆土は、ローム混じりの暗褐色土が主体で、遺物は出土しなかった。

(2) 土壌

第13号・第14号土壌 (第108図)

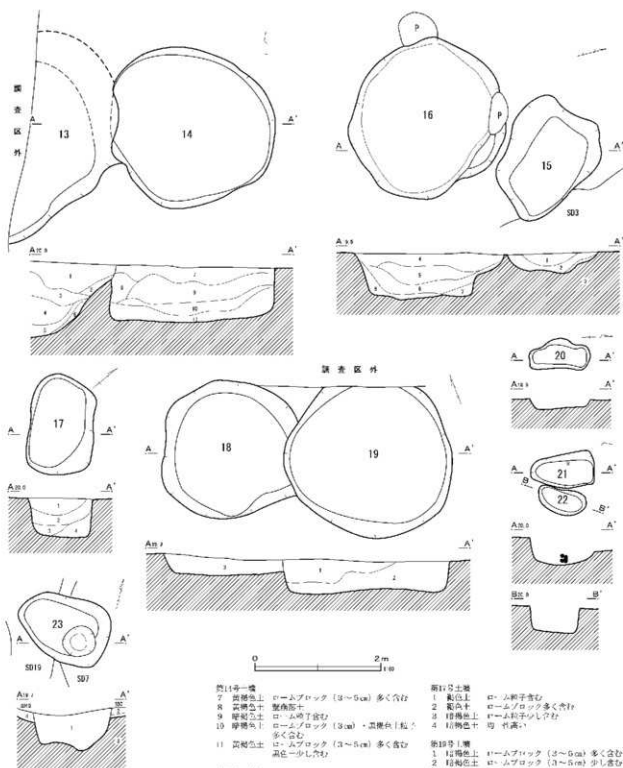
E-17・18グリッドで検出したが、第13号の北半は攪乱されていた。第13号は楕円で断面碗形、第14号は円形鍋底の大型土壌である。双方とも覆土にロームブロックが多く混じり、埋戻された可能性もある。第13号が後出すると判断した。

遺物は、第13号から平安朝時代の土器類2点と陶磁器1点が出土したのみである。

第15号・第16号土壌 (第108図)

E-18グリッドで検出した。第16号は第14号に共通する円形鍋底の大型土壌である。これに対し、第15号は、第1号溝跡と重複しており、これが同所で終結する。長方形を基調とした平面形だが壙底が定まらないことも考え合わせると、第1号溝跡の付属施設であることも否定できない。

遺物は、第16号より陶磁器片2点が出土したのみである。



第13号土溝

- 1 黄褐色土 コームブロック (5cm以上) 多く含む
- 2 暗褐色土 コームブロック (3cm) 多く含む
- 3 黄褐色土 炭化材料含む コーム粒子少し含む
- 4 暗褐色土 コームブロック (3cm) 含む
- 5 暗褐色土 コームブロック (3cm) 多く含む
- 6 暗褐色土 コームブロック (3cm) 少し含む

第14号土溝

- 7 黄褐色土 コームブロック (3~5cm) 多く含む
- 8 黄褐色土 蟹角形土
- 9 暗褐色土 コーム粒子含む
- 10 暗褐色土 コームブロック (3cm) + 黄褐色土粒 多く含む
- 11 黄褐色土 コームブロック (3~5cm) 多く含む 黒色少し含む

第15号土溝

- 1 暗褐色土 コーム粒少し含む
- 2 暗褐色土 コームブロック (3cm) 少し含む
- 3 暗褐色土 コームブロック (3cm) 多く含む
- 4 暗褐色土 コーム粒少し含む 炭化物微塵
- 5 暗褐色土 コームブロック (3cm) 少し含む
- 6 暗褐色土 コームブロック (3cm) 含む
- 7 暗褐色土 コームブロック (3~5cm) 多く含む
- 8 暗褐色土 コームブロック (3~5cm) 多く含む

第16号土溝

- 1 黄褐色土 コーム粒子含む
- 2 暗褐色土 コームブロック多く含む
- 3 暗褐色土 コーム粒子少し含む
- 4 暗褐色土 均一性高い

第17号土溝

- 1 暗褐色土 コームブロック (3~5cm) 多く含む
- 2 暗褐色土 コームブロック (3~5cm) 少し含む
- 3 暗褐色土 均一性高い

第18号土溝

- 1 暗褐色土 コームブロック多く含む

第19号土溝

- 1 暗褐色土 炭 土深い
- 2 暗褐色土 コームブロック多く含む
- 3 暗褐色土 コーム粒少し含む
- 4 暗褐色土 コーム粒少し含む

第108図 中世以降の土溝 (1)

第17号土壌 (第108図)

E-18グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ長方形、掘り込みは箱形で、覆土は上層の方が明度が強い。

遺物は、平安時代の須恵器片が1点出土したのみだが、これは混入と思われる。

第18号・第19号土壌 (第108図)

E・F-18グリッドで検出した。2m級の大規模な円形鍋底土壌の重複である。両者の先後は第19号が後出すると判断した。また、第2号溝跡が両壙を避けるように屈曲しており、連携を保つものかも知れない。

遺物は、第19号より平安時代の須恵器1点と陶磁器類1点が出土したのみである。

第20号土壌 (第108図)

E-17・18グリッドの溝間で発見した小規模楕円土壌である。断面は鍋底状で掘り込みは浅い。

遺物は、出土していない。

第21号・第22号土壌 (第108・124図)

E・F-18グリッドで検出した。第3号溝跡と重複するが、同溝掘削中に発見した経緯もあり、先後は不明である。

開口部は双方とも楕円形で、掘り込みも深く、断面形は鍋底状となる。形態に通じる点もあるが規模が違い、同じ用途かは不明である。

第21号は、第124図1に示した永楽通寶1点と、銭種の判定が不可能な銭貨4枚が出土したことから、中世期に構築されたと想定できる。また、第22号は遺物が出土せず、そこまで遡るかどうかは判断がつかない。

第23号土壌 (第108図)

F-18グリッドで検出した。第7号溝跡および第19号溝跡と重複するが、本壙がもともと新期に構築されている。開口部は洋梨状で、壙底は平坦であるが、一部に窪みをもつ。覆土は黄色味が強く、埋戻しを経たものかも知れない。

遺物は、出土していない。

第24号・第28号・第34号・第35号土壌 (第109図)

E-19・20グリッドで検出した。第24号と第28号が、さらに第34号と第35号が別個に重複するが、その先後は把握できなかった。第24号と第35号が溝に近い長方形、第28号と第34号が楕円形を基調としてそれぞれ並列関係にある。

第24号は一部が北方に張り出すが、この部分の壙底に変化はなく、同遺構と考えられる。また、同じ長方形が並列することから、第24号などは溝とはいいかたない。

遺物は、第24号より陶磁器片が1点出土した。

第25号～第27号土壌 (第109図)

G・H-19グリッドで検出した。それぞれ第11号溝跡と重複するが、いずれも後出することが確認できた。また、第26号が第27号より後出することも同様である。平面形はそれぞれ短軸幅の大きい楕円形で、第25号脇には浅い掘り込みが東に絡む。軸方向が違ふことから、これも別土壌である可能性が強い。壙底はみな平坦で、表土に類似する灰褐色気味の覆土が共通する。

遺物は、第25号よりかわらけと常滑甕の破片が1点ずつ、第26号より平安時代の土器類3点と、焙烙片が1点出土した。

第29号土壌 (第109図)

E-19グリッドで検出した。長方形で断面箱形の小型土壌である。覆土は暗褐色土が主体で、下層ほど明度を増す。

遺物は、陶磁器類2点が出土した。

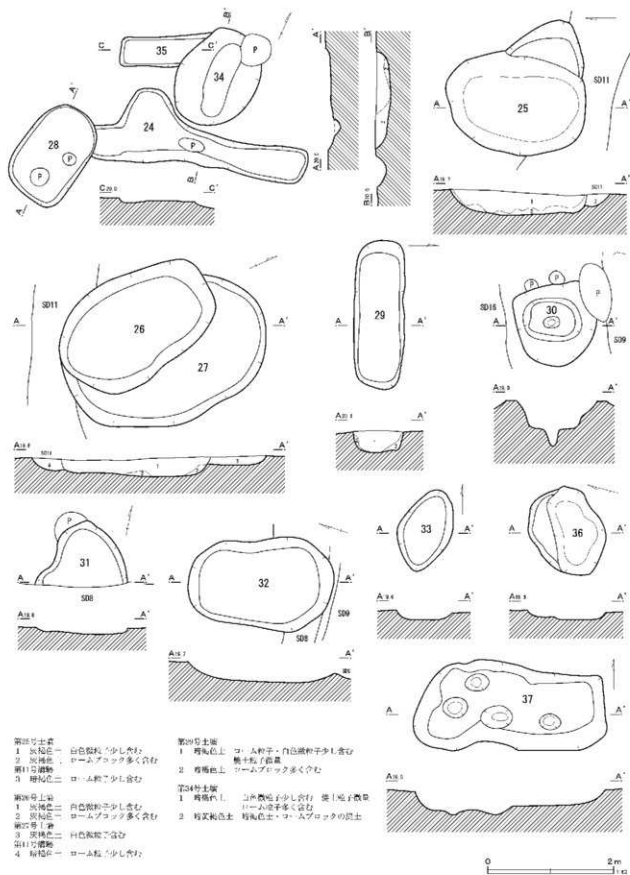
第30号土壌 (第109図)

E-20グリッドで検出した。平面円形で、断面は複数の鍋底状となり、さらに壙底中央に小穴が加わる。これは、周辺の小穴が重複したとも考えられるが、壙底における位置関係と、周囲に比して一際深いことから、本壙に伴うと考えた。

遺物は、出土していない。

第31号土壌 (第109図)

E-20グリッドで検出した。第8号溝跡と重複



第109図 中世以降の土壌(2)

関係にあるが、その先後は確認できなかった。想定規模のおおよそ半分を調査したと考えられ、平面形は楕円形と推定されるが、その一部がゆがんでいる。掘り込みは浅く、墳底は平坦である。

遺物は、出土していない。

第32号土墳 (第109図)

F-20グリッドで検出した。第8号溝跡と重複するが、先後関係を確認しそびれてしまった。平面形は楕円形で、断面形は鍋底状となる。

遺物は、縄文土器1点と凝灰岩製の砥石1点が出土した。

第33号土墳 (第109図)

H-19グリッドで検出した。やや不整の楕円形土墳で、断面形は緩い鍋底状となる。

遺物は、出土していない。

第36号土墳 (第109図)

G-20グリッドで検出した。平面略円形の浅い土墳である。墳底の反面に段差が認められたが、大きなものではなく、当初の掘り方は鍋底状を意図したものと考えられる。

遺物は、かわらけ片が1点のみ出土した。

第37号土墳 (第109図)

H-20グリッドで検出した。開口部の形状は略長方形、軸はほぼ東西を示す。なだらかな傾斜で墳底に至り、複数の窪みを追加する。主として暗褐色の覆土に変化はなく、窪みも本墳に付属するものと考えた。

遺物は、陶磁器片が1点出土した。

第38号土墳 (第110図)

H-20・21グリッドで検出した。設定軸がほぼ南北を指す長方形土墳である。掘り込みは浅いが、往時は断面箱形を意図したと考えられる。

遺物は、出土していない。

第39号土墳 (第110図)

H-21グリッドで検出した。略円形の小土墳で断面形は椀状、暗褐色土が埋土となっていた。

遺物は、青銅製の錐が1点出土した。

第40号土墳 (第110図)

F・G-20グリッドで検出した。大型の楕円土墳であるが、掘り込みは浅く、墳底は平坦であるものの、若干傾斜している。

遺物は、寛永通寶が1点出土した。

第41号土墳 (第110図)

F-20・21グリッドで検出した。第17号溝跡と重複しており、本墳が後出すると判定した。墳底にわずかな段差をもっているが、構築時には一般的な鍋底状の断面形を意図したと考えられる。

遺物は、出土していない。

第42号・第47号土墳 (第110図)

F-21グリッドで検出した。2基の重複であり、さらに第17号溝跡とも重複する。土層観察では両墳が後出し、第47号が第42号を破壊していると思われる。第42号は円形、第47号は弧形を意図したと思われ、双方とも壁面はなだらかである。

遺物は、前者より縄文土器10点と平安の土器類9点、近世・近代の陶磁器片1点が出土した。

第43号土墳 (第110図)

E・F-21グリッドで検出した。第17号溝跡と重複し本墳が後出する。円形の大型土墳で、並びの同種土墳と連携するととれる。覆土は、暗灰褐色土が主体で、墳底は平坦である。

遺物は、出土していない。

第44号・第45号土墳 (第110図)

E・F-21グリッドで検出した。大小の円形土墳が重複している。当初、2基の重複と見分けられず、両墳の先後確認を逸している。第45号は断面鍋底状で、覆土の上位と下位で違和感がある。第44号の規模がより大きいともとれるが、東壁が一致するという偶然も考えにくい。

遺物は、後者より陶磁器片が1点出土した。

第46号土墳 (第110図)

E-21グリッドで検出した。平面楕円を意図したようだが、墳底にいくつかの段差があり、確定できない。おおよその断面形は箱形、埋没順は東

に片寄っており、埋戻された可能性もある。

遺物は、平安時代の須恵器が1点出土した。

第48号土壌 (第110図)

F-20グリッドで検出し、第9号溝跡と重複するが、先後を確認していない。平面略円、断面形は緩い鍋底状となるが、堀底が南方に片寄る。

遺物は、出土していない。

第49号土壌 (第110図)

H-21グリッドで検出した。第1号掘立柱建物跡と重複するが、堀底が新しい。

北に崩落痕をもつが、開口部形状の主体は隅丸方形である。箱形の掘り込みは深く、暗褐色土が上位の大半を埋めていたが、最下層は灰らしき粒子が混じる黒褐色の薄層が形成されていた。

遺物は、平安時代の土器類4点と、近世から近代の陶磁器類25点、寛永通寶1点が出土した。

第50号土壌 (第111図)

H・I-20グリッドで検出した。第24号溝跡の末端施設のような位置に構築されているが、その関係は確認できなかった。開口部形状や断面形も不整であり、その可能性は十分にあり得る。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類6点と瓦1点が出土した。

第51号土壌 (第111図)

I-19グリッドで検出した。楕円の開口部に皿状の断面形をもつ土壌である。隣接する第52号土壌と同種と考えられるが、軸方向がちがう。

遺物は、出土していない。

第52号土壌 (第111図)

I-19グリッドで検出した。長方形で断面箱形となる土壌だが、他の同種土壌が軸を方位にあわせて構築されているのに対し、本壌はこれを無視している。覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土の単一層で、埋戻しの可能性もある。

遺物は、平安時代の土器類2点が出土した。

第53号土壌 (第111図)

I-19グリッドで検出した。主体部の形状は円

形をめざしたと考えられるが、東方に張り出しをもつ。別遺構の重複ともとれるが、堀底に段差がない。覆土は埋戻されているようにもみえるが、出土遺物の構成からみると否定される。

遺物は、須恵器1点と近世から近代にかけての陶磁器類17点、瓦5点、鉄片2点が出土した。

第54号土壌 (第111図)

I-21グリッドで検出した。縄文時代に構築されたと考えられる第1号土壌と重複しているが、全形の把握に支障はない。開口部の形状は円形で断面形は傾斜の緩い碗形となる。

遺物は、平安時代の須恵器1点とかわらけ1点のみが出土した。

第55号土壌 (第111図)

I-21グリッドで検出した小型円形土壌で、断面は椀状となり、覆土は第54号と共通する。

遺物は、出土していない。

第56号土壌 (第111図)

I・J-20グリッドで検出した。円形かつ浅い土壌で、覆土は第54号に共通する。

遺物は、出土していない。

第57号土壌 (第111図)

I-21グリッドで検出した。東西に長い長方形土壌で、断面形は箱形である。覆土はロームブロック混じりの黒褐色土の単層であった。

遺物は、出土していない。

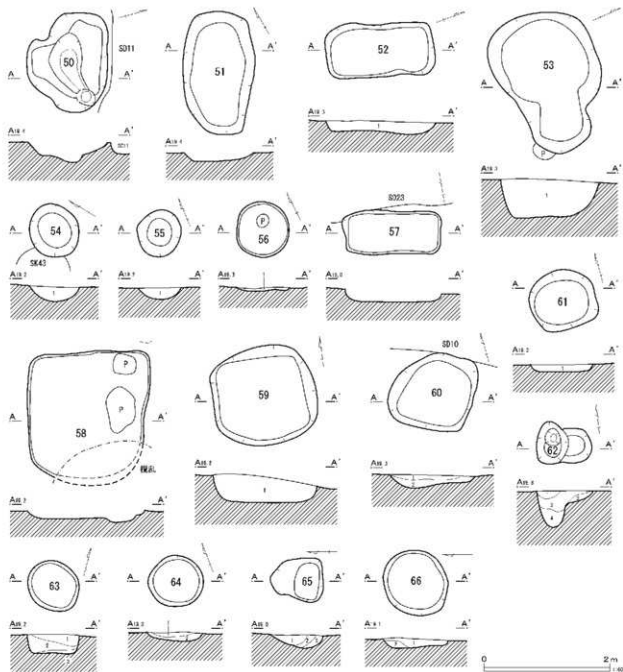
第58号土壌 (第111図)

J-20・21グリッドで検出した。西側を倒木によって破壊されているが、平面形が正方形であることはおよそ察しがつく。掘り込みは浅く堀底は平坦である。

遺物は、かわらけ片2点が出土した。

第59号土壌 (第111図)

J-21グリッドで検出した。開口部の形状は隅丸方形、断面形は鍋底状である。覆土は3種の土が混合された状態となっており、人為的な埋戻しがなされたと考えられる。



- 第50号二層
1 凝結土 romeブロック多く含む
- 第53号二層
1 凝結土 romeブロック (3cm以上) 多く含む
- 第54号二層
1 凝結土 rome硝子・炭化物少し含む 炭十粒子数多
- 第55号一層
1 凝結土 rome硝子・炭化物少し含む 炭十粒子数多
- 第56号二層
1 凝結土 rome硝子・炭化物少し含む

第59号土層

- 1 凝結土 灰色土上・黄褐色土上・粘褐色の
灰二

第60号土層

- 1 凝結土 rome硝子少し含む
2 白濁土 rome硝子・ブロック (3cm以下) 多く含む

第61号土層

- 1 凝結土 rome硝子・ブロック (3cm以下) 多く含む

第62号土層

- 1 凝結土 romeブロック (2cm以上) 含む
2 凝結土 romeブロック・炭化物少し含む
3 凝結土 romeを主体
4 凝結土 rome硝子少し含む

第63号土層

- 1 凝結土 炭化物・炭硝子多く含む
2 凝結土 炭化物・炭硝子少し含む
3 凝結土 rome硝子少し含む

第64号土層

- 1 凝結土 romeブロック・灰色土上ブロック含む
2 凝結土 romeブロック多く含む

第65号土層

- 1 凝結土 rome硝子多く含む
2 凝結土 rome硝子少し含む
3 凝結土 romeブロック (3cm) 多く含む

第66号土層

- 1 凝結土 rome硝子少し含む
2 凝結土 rome硝子多く含む

第111図 中世以降の土壌 (4)

遺物は、平安時代の土器類4点と、近世から近代の陶磁器類3点、鉄片1点が出土した。

第60号土壌 (第111図)

I・J-19グリッドで検出した。開口部の形状は不整形であるが、おおそ円形をめざしたものと考えられる。断面形は緩い椀形で、壙底は西側に若干傾斜する。

遺物は、縄文土器2点と平安時代の須恵器3点、近世から近代にかけての陶磁器類3点、凝灰岩製の砥石1点が出土した。

第61号土壌 (第111図)

J-19グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状を呈する。覆土は暗褐色系土の単層で、埋戻された可能性もある。

遺物は、陶磁器類2点と瓦1点が出土した。

第62号土壌 (第111図)

J-19・20グリッドで検出した。掘り上がりの形状からすると二穴の複合のように見えるが、覆土の観察では分離できなかった。小穴部を主体とするのだろうが、柱痕は発見できなかった。

遺物は、陶磁器類2点が出土した。

第63号土壌 (第111図)

J-19グリッドで検出した。平面円形、断面箱形の小土壌である。黒褐色土が主体で、焼土・炭化粒子を含む覆土色は中世以前に思えるが、焙烙小片が1点出土したのみで、判断できない。

第64号土壌 (第111図)

I・J-20グリッドで検出した。円形鍋底状を呈する小型土壌である。覆土はロームブロックを多く含む暗褐色土が主体であった。

遺物は、近世から近代の陶磁器類4点と瓦1点、泥面子3点、寛永通寶1点が出土した。

第65号土壌 (第111図)

H-21・22グリッドで検出した。平面形は不整形、断面形は椀状だが、南の壙底が深くなる。覆土は、上層に灰色味が強い土が堆積していた。

遺物は、出土していない。

第66号土壌 (第111図)

H-22グリッドで検出した。開口部の形状は円形で、断面形は鍋底状となる。遺物は、出土していないものの、埋土の上位は黒褐色で占められており、ローム混入物の比率も少ないことから、構築期は中世に遡るかも知れない。

第67号土壌 (第112図)

H-22グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、断面形は椀状で、壙底中央に小穴を追加する。覆土は黒褐色土が上層に、下層ほどに黄色味を増し、ローム粒子の含有量が多くなる。

遺物は、出土していない。

第68号土壌 (第112図)

I-19グリッドで検出した。東西の方向軸を意識した長方形の土壌で、壙底はやや西側に傾斜する。覆土は、ロームブロックを含む暗褐色土が主体であった。

遺物は、縄文土器1点と、近世から近代にかけての陶磁器・かわらけ片3点が出土した。

第69号土壌 (第112図)

I-22グリッドで検出した。略楕円の土壌で、第3号掘立柱建物跡と重複するが、直接の関係にはない。断面形は椀状で、南側が窪む。

遺物は、出土していない。

第70号土壌 (第112図)

G-21グリッドで検出した。ほぼ東西を指し示す長方形土壌である。断面形は鍋底状で壙底は平坦だが若干西側に傾斜している。

遺物は、出土していない。

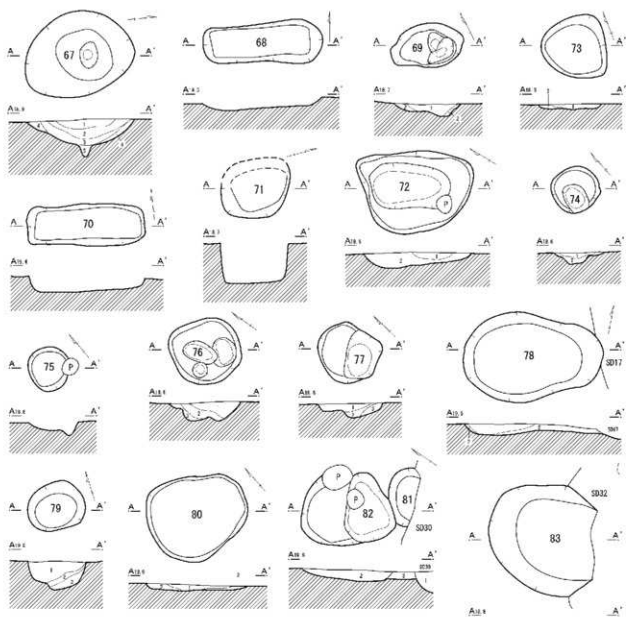
第71号土壌 (第112図)

C-26グリッドで検出した。西半を攪乱されていたが、楕円の平面形が想定できる。掘り込みは深く、暗褐色土主体の埋土であった。

遺物は、出土していない。

第72号土壌 (第112図)

I-23グリッドで検出した。平面形は略楕円形、断面形は皿状となるが、中央部が若干窪む。覆土



- 第67号土層
 1 黒褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒・粗土粒子少し含む
 3 暗褐色土 コーム粒多く含む
 4 暗褐色土 コーム粒多く含む 炭化物少し含む
 5 暗褐色土 コーム粒少し含む
- 第68号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コームブロック多く含む
- 第69号土層
 1 暗褐色土 コームブロック・炭土粒子少し含む
 2 暗褐色土 炭化物少し含む
- 第70号土層
 1 暗褐色土 炭褐色土を含む
 2 暗褐色土 コームブロック少し含む
- 第71号土層
 1 暗褐色土 炭褐色土を含む
 2 暗褐色土 コームブロック少し含む
- 第72号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒子少し含む
- 第73号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒子少し含む
- 第74号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒子少し含む
- 第75号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒子少し含む
- 第76号土層
 1 暗褐色土 コームブロック少し含む
 暗褐色土
 2 暗褐色土 コームブロック多く含む
 暗褐色土
 3 暗褐色土 コームブロック・炭土粒子少し含む
- 第77号土層
 1 暗褐色土 炭褐色土少し含む
 2 暗褐色土 コーム粒・炭化物少し含む
 3 暗褐色土 コーム粒子多く含む
- 第78号土層
 1 暗褐色土 コーム粒を含む
 2 暗褐色土 黒色土粒子含む
- 第79号土層
 1 暗褐色土 コームブロック多く含む
 2 暗褐色土 暗褐色土粒子少し含む
 3 暗褐色土 コームブロック多く含む 炭土・腐葉土
- 第80号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 2 暗褐色土 コームブロック多く含む
- 第81号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子多く含む
 2 暗褐色土 炭褐色土少し含む
 3 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 4 暗褐色土 炭化物・炭化物少し含む
 5 暗褐色土 コーム粒子多く含む
- 第82号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子多く含む
 2 暗褐色土 炭褐色土少し含む
 3 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 4 暗褐色土 炭化物・炭化物少し含む
 5 暗褐色土 コーム粒子多く含む
- 第83号土層
 1 暗褐色土 コーム粒子多く含む
 2 暗褐色土 炭褐色土少し含む
 3 暗褐色土 コーム粒子少し含む
 4 暗褐色土 炭化物・炭化物少し含む
 5 暗褐色土 コーム粒子多く含む

第112図 中世以降の土壌 (5)

は暗褐色土が主体である。

遺物は、出土していない。

第73号土壌 (第112図)

H-23・24グリッドで検出した。開口部の平面形状は略円形、断面形は鍋底状である。覆土は、暗褐色土が上層に分布し、西側の下層には黄褐色土が堆積していた。

遺物は、出土していない。

第74号土壌 (第112図)

I-24グリッドで検出した。平面形は円形で鍋底状の断面形が基調だが、堀底南部に段差を設ける。覆土は第73号土壌と共通する。

遺物は、出土していない。

第75号土壌 (第112図)

I-24グリッドで検出した。円形の小型土壌で、より古い小穴と重複していた。覆土は焼土・炭化粒子を含む褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第76号土壌 (第112図)

I-24グリッドで検出した。開口部の平面形は円形だが、堀底が一定しない。覆土は、一連の堆積を示しており、数箇所ある窪みも本竈に伴うものと考えられる。

遺物は、平安時代の須恵器片2点と近世から近代にかけての陶磁器片1点が出土した。

第77号土壌 (第112図)

I-24グリッドで検出した。平面形は円形だが、南東方に段差を設ける。断面観察では連続した堆積状況を示しており、同じ遺構と判断した。

遺物は、出土していない。

第78号土壌 (第112図)

F・G-21グリッドで検出した。第17号溝跡との重複はわずかで、先後はわからなかった。平面形は東西に長い楕円形で、壁面は緩やかである。堀底は中央がややあがるが、ほぼ平坦で、覆土は黒褐色から暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第79号土壌 (第112図)

D・E-21グリッドで検出した。平面形は略円形で、断面形は楕状となる。覆土は、地山の崩落を示す暗黄褐色土が下層に、上層では極端に変わって黒褐色土が流入していた。

遺物は、混入した縄文土器が1点出土した。

第80号土壌 (第112図)

E-21グリッドで検出した。開口部の形状は楕円形、掘り込みは浅いが、鍋底状の断面形を呈するものと考えられる。形状が異なるが、覆土は隣接する第79号と共通する。

遺物は、縄文土器2点と須恵器2点が紛れ込んでいたにすぎない。

第81号・第82号土壌 (第112図)

F-22グリッドで検出した。第82号・第81号・第30号溝跡と連続して重複している。後者がもっとも新期で、第82号・第81号と遡る。

第81号の平面形は、大半が第30号に破壊されているために全形がわかりにくい。おおよそ円形から楕円形を呈すると思われる。また、第82号の開口部は楕円形で断面形は鍋底状だが、南側の半分に段差を設ける。

遺物は、第81号で須恵器1点、第82号で混入した縄文土器1点が出土した。

第83号土壌 (第112図)

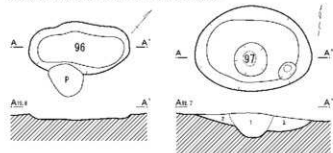
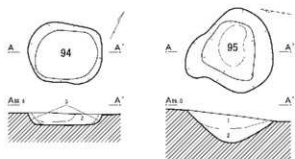
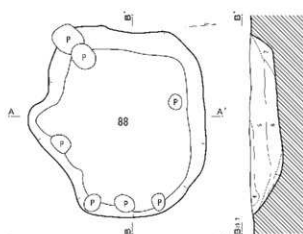
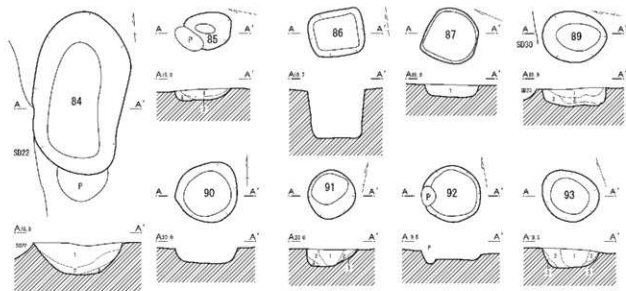
H-23・24グリッドで検出した。第22号溝跡と重複していたが、先後を確認せぬままに溝の掘削を優先してしまった。

断面形の共通と位置関係などから共通する用途が見込まれる第84号土壌を参考にすると、平面形は楕円を呈すると考えられる。断面形は楕状で、溝側からの堆積が優先していることから、溝とともに埋没したともとれる。

遺物は、平安の土器類17点と、近世から近代の陶磁器類2点、銭貨1点、鉄片4点が出土した。

第84号土壌 (第113図)

H-23グリッドで検出した。第83号土壌に類す



- 図84ウニ層
 1 灰褐色土 腐葉土(多)多く含む
 2 灰褐色土 炭化物多く含む
 3 灰褐色土 ロームブロック少し含む
- 図85ウニ層
 1 灰褐色土 ローム粒子含む
 2 厚砂色土 灰心土粒少し含む
 3 灰褐色土 ローム粒子・ブロック含む

図97ウニ層
 1 灰褐色土 ローム粒子・炭化物少し含む

図86ウニ層

- 1 灰褐色土
 2 灰褐色土 ロームブロック少し含む
 3 灰褐色土 ロームブロック多く含む
 4 灰褐色土 ロームブロック・炭化物少し含む
 5 灰褐色土 ロームブロック・炭化物少し含む
 6 灰褐色土 炭化物多く含む
 7 灰褐色土 ローム粒子多く含む

図89ウニ層

- 1 灰褐色土 炭化物多く含む
 2 灰褐色土 ローム粒子・炭化物少し含む
 3 灰褐色土 ローム粒子・ブロック多く含む

図91ウニ層

- 1 灰褐色土 灰心土とローム土の混土
 2 灰褐色土 腐葉土とロームブロック含む
 3 灰褐色土 ロームブロック多く含む

図92ウニ層

- 1 灰褐色土 腐葉土少し含む
 2 灰褐色土 炭化物多く含む
 3 灰褐色土 ローム粒子多く含む

図94ウニ層

- 1 灰褐色土 ローム小ブロック・炭化物少し含む
 2 灰褐色土 炭化物多く含む
 3 灰褐色土 ローム粒子多く含む

図95ウニ層

- 1 灰褐色土 ローム粒子・ブロック(3cm以下)少し含む
 2 灰褐色土 ローム粒子多く含む

図96ウニ層

- 1 灰褐色土 ローム粒子・炭化物少し含む
 2 灰褐色土 ローム粒子・ブロック少し含む

第113図 中世以降の土壌(6)

る楕円土壇だが、こちらは軸が90°振れる。断面形は椀状で、覆土は黒褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第85号土壇 (第113図)

C-22グリッドで検出した。小穴と重複するが、本壇が後出する。小規模な楕円土壇で、断面は椀状となる。覆土は黒褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第86号土壇 (第113図)

G-21グリッドの第22号溝跡の掘削途上に検出した。そのため両者の先後は確定できなかった。開口部方形の土壇で、断面は箱形となる。

遺物は、出土していない。

第87号土壇 (第113図)

E-23グリッドで検出した。一部が突出するものの、基調は円形鍋底状である。覆土は黒褐色土がもっぱらで、遺物は出土しなかった。

第88号土壇 (第113図)

D-24グリッドで検出した。小竪穴状の遺構だが、壁面や壇底が一定しない。重複する小穴が壁面に集中する傾向があるが、中央部での重複は壇底ほどの深度がなかったものと想定される。

平面形は隅丸方形、掘り込みはしっかりしており、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、平安時代の土器類18点と、素焼鍋片1点、鉄片1点が出土した。

第89号土壇 (第113図)

C・D-23グリッドで検出した。楕円形を呈する小型土壇で、断面形は鍋底状となる。覆土は黄褐色系土が主体であることから、人為的な所作によって埋没した可能性が大きい。

遺物は、出土していない。

第90号土壇 (第113図)

B-23グリッドで検出した。円形鍋底の小土壇で、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第91号土壇 (第113図)

B-23グリッドで検出した。平面形は円形で、壇底は北側に片寄っている。覆土の堆積は急傾斜で、柱穴を認識したのかも知れない。

遺物は、出土していない。

第92号土壇 (第113図)

E-24グリッドで検出した円形土壇で、重複する小穴との先後は不明である。断面は鍋底状で、覆土は炭化粒子含む黒褐色土が主体であった。

遺物は、縄文土器1点と平安時代の土器類3点が混入していたのみである。

第93号土壇 (第113図)

E-24グリッドで検出した。ひしゃげた円形の土壇で、断面は椀状となる。覆土は黒褐色から暗褐色系土が主体で、下層ほどに黄色味を増す。

遺物は、混入した縄文土器3点が出土した。

第94号土壇 (第113図)

E-24グリッドで検出した。平面形は隅丸方形、断面形は鍋底状である。覆土は、暗褐色が主体で、下層ほど明度を増す。

遺物は、縄文土器2点と平安時代の土器類3点のみであった。

第95号土壇 (第113図)

F-23グリッドで検出した。平面形は北に狭い洋梨状で、断面形は椀形となる。覆土はロームブロックを含む黒褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

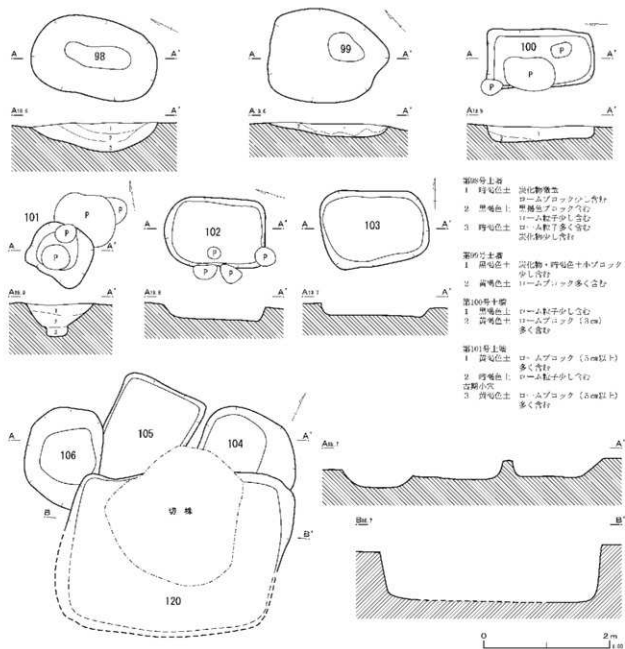
第96号土壇 (第113図)

D-23グリッドで検出した。平面形長楕円の土壇であるが、掘り込みが浅く、断面形は定かではない。覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第97号土壇 (第113図)

G・H-25グリッドで検出した。東西に長い楕円土壇である。中央は後世の小穴に破壊されているが、やや片流れの壇底は見えてとれる。覆土は暗黄褐色土の単一層で、遺物は出土していない。



- 第98号土壌
- 1 暗褐色土 炭化物層 romeブロック(少)含む
 - 2 黒褐色土 黒褐色ブロック含む rome粒子少し含む
 - 3 暗褐色土 rome粒子多く含む 炭化物少し含む
- 第99号土壌
- 1 暗褐色土 炭化物・暗褐色土ブロック 少含む
 - 2 黄褐色土 romeブロック多く含む
- 第100号土壌
- 1 黒褐色土 rome粒子少し含む romeブロック (3cm) 多く含む
 - 2 黄褐色土
- 第101号土壌
- 1 romeブロック (5cm以下) 多く含む
 - 2 暗褐色土 rome粒子少し含む
 - 3 暗褐色土 romeブロック (5cm以下) 多く含む

第114図 中世以降の土壌 (7)

第98号土壌 (第114図)

G-25グリッドで検出した。楕円の大型土壌で、断面は桶状となる。形状は第83号土壌などに通じ、分布位置も共通する。覆土は、暗褐色土と黒褐色土の互層となっていた。

遺物は、出土していない。

第99号土壌 (第114図)

F-25グリッドで検出した楕円の大型土壌で、

断面は皿状、坩底は東南に片流れとなる。覆土は黒褐色が上層に、黄褐色が下層に堆積していた。

遺物は、出土していない。

第100号土壌 (第114図)

B-25グリッドで検出した。3基の小穴と重複するが、先後関係は確認できなかった。だが、中央の2穴は、土層断面に現れなかったことから、本墳より古期に設けられたと推定できる。

開口部の形状は長方形、断面形は鍋底状となる。
遺物は、陶磁器類2点が出土した。

第101号土壌 (第114図)

B-24グリッドの小穴群の中にあり、3本の小穴と重複している。断面観察の結果、このうち1本は本墳より古期に設けられていることが判断できた。開口部の形状はおおよそ隅丸方形で、断面形は台形状となる。覆土は最上層に黄褐色土が遺存しており、人為的な埋戻しの可能性が強い。

遺物は、出土していない。

第102号土壌 (第114図)

B-25グリッドで検出した。開口部の形状は、多少異なるが、第100号と同様な長方形が意図されていると考えられる。墳底は平坦だが若干北方に傾斜している。

遺物は、出土していない。

第103号土壌 (第114図)

B-25グリッドで検出した。東西軸を意識した長方形土壌で、断面形は鍋底状となる。

遺物は、出土していない。

第104号～第106号・第120号土壌 (第114図)

B・C-25グリッドでは、撤去困難な大木の切り株を中心に4基の土壌の重複を検出した。切り株からのびた根の除去とともに掘削を進めたため、それぞれの先後は把握できなかった。

第104号と第106号は平面円形で鍋底状の断面形となる。また、第105号は南北に軸をとる長方形土壌と考えられる。これに対し、第120号は略長方形の地下式墳で出入り施設が想定される南方は溝や試掘坑などの関係で発見できなかった。

遺物は、第104号より縄文土器1点と須恵器片2点、近世から近代の陶磁器片3点、また、第106号より須恵器1点、近世から近代の陶磁器類2点が出土した。

第107号・第108号・第121号土壌 (第115・124図)

B-25グリッドで検出した。3基が重複しているが、その先後は把握しきれなかった。第107号は、

第121号との一括調査で大半を失ったが、円形で台形状の断面形をもつ土壌である。

これに対し、第108号は、平面形が方形に近く、台形状の断面形も一際深い。さらに、第121号は大型の室状遺構で、第108号側に入り口施設と思われる段差を付属させている。

遺物は、第108号より平安時代の土器類2点と中世の陶磁器片3点、在地系の素焼甕7点が出土した。また、第121号からは、中世の甕・捏鉢類5点と銭貨3枚が出土した。

第124図2は第108号の中層より出土した渥美の甕である。肩部には山に縦三の窪溝と巴文などによる叩き痕を残している。また、3・4は在地産の甕と鉢である。さらに、5～7の銭貨は、それぞれ皇宋通寶、札元重寶、嘉泰通寶である。

第108号・第121号の両墳は、遺物の出土相から、中世期に構築されたものと判断できる。

第109号・第110号土壌 (第115図)

B・C-26グリッドで検出した。おおよそ方位に軸をあわせ、直交しつつ一部が重複する。先後関係は、重複部が少なく確認できなかった。

形態は、両者とも長方形で、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色土が主体で、第109号の墳底には炭化物が層状に堆積していた。

双方ともに、遺物は出土していない。

第111号土壌 (第115図)

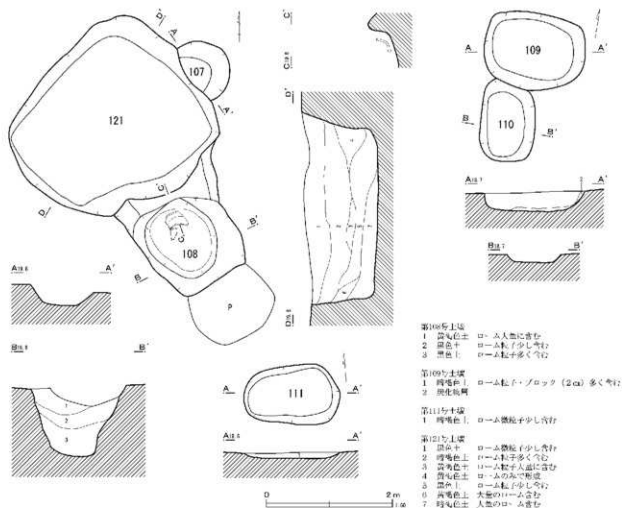
C-26グリッドで検出した。ほぼ東西を指し示す楕円土壌である。覆土は暗褐色土の単層で、断面形は緩い鍋底状となる。

遺物は、出土していない。

第112号土壌 (第116図)

C-26グリッドで検出した。第44号溝跡と重複するが、断面観察の結果、本墳が後出すると判断した。略長方形の土壌だが、方位軸から傾いて構築されている。覆土は暗灰褐色土が主体で、墳底に炭化物を大量に含む層が形成されていた。

遺物は、素焼の捏鉢片が出土した。



第115図 中世以降の土坑（8）

第113号・第119号土坑（第116図）

A・B-25グリッドで発見、精査した。大小の円形土坑の重複である。重複を把握しきれず、はじめに第113号を掘りきってしまったため、両者の先後は不明である。

第113号は断面鍋底状だが、西方に微妙な段差をもっている。また、第119号は断面鉢形で、地山崩落層が最下層と中層に残されている。

遺物は、第119号から中世の素焼瓦片が出土した。遺物の出土状況から、第119号は中世期に構築されたものと想定できる。

第114号土坑（第117図）

A-25・26グリッドで検出した。平面形は楕円で、断面は椀状となる。覆土は黒色土から暗灰褐

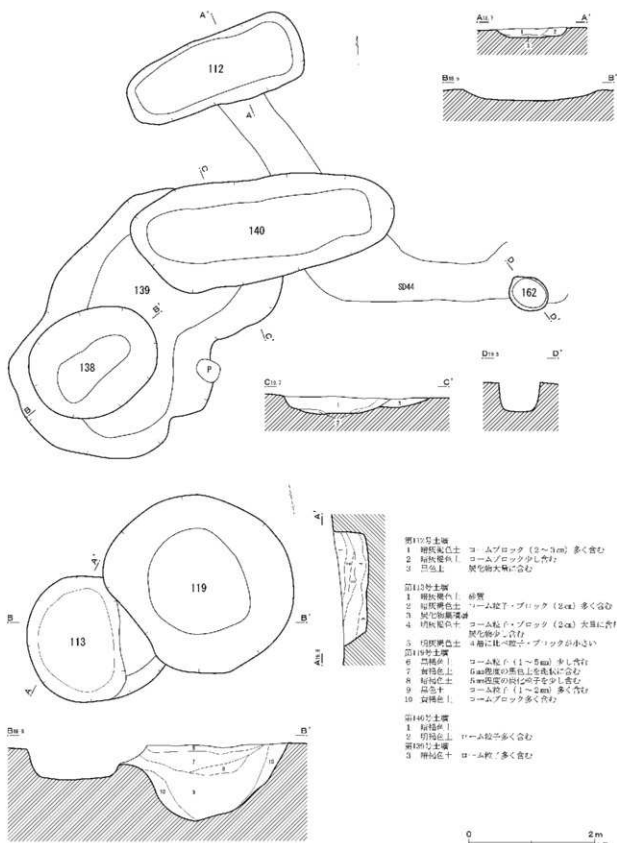
色土で、遺物は出土していない。

第115号・第118号土坑（第117図）

C-24グリッドで検出した。第118号は円形の掘り込みで鍋底状の小土坑である。

一方、第115号は、主体部の形態が不定であるものの、入口部を備えた地下式墳と考えられる。覆土には天井から崩落した大量の土砂が混じり込んでいる。このことと、他の三方の隅部が方形の主体部を意図したらしいことも考え合わせると、北方の不定も、あるいは崩落土を壁面と見誤った結果かも知れない。

遺物は、第115号より縄文土器1点と平安時代の土器類4点、素焼瓦片1点が出土した。



第116図 中世以降の土溝 (9)

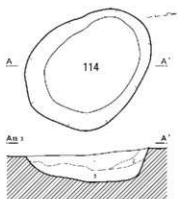


図114号土庫

- 1 灰白土 炭化物(3~5cm)少し含む
- 2 黄褐色土 ローム状土・ブロック(10cm)含む
- 3 黄褐色土 ローム状土多く含む

図115号土庫

- 1 黒色土 ローム状土少し含む
- 2 黄褐色土 ローム状土含む
- 3 黄褐色土 ローム状土に含む
- 4 黒色土 ローム状土少し含む
- 5 黄褐色土 ローム状土含む
- 6 黒色土 ローム状土多く含む
- 7 黄褐色土 ローム状土に含む
- 8 黄褐色土 経路(ローム状土・ブロック(2cm)で形成)
- 9 黒色土 ローム状土多く含む

図117号土庫

- 1 黒色土 ローム状土少し含む
- 2 黒色土 ローム状土・ブロック(2cm)多く含む
- 3 灰白土 板子鉄入わず

図117号土庫

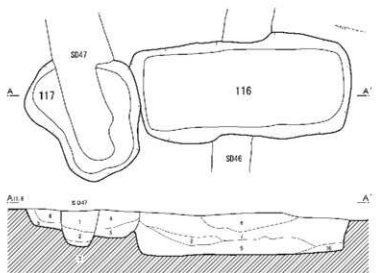
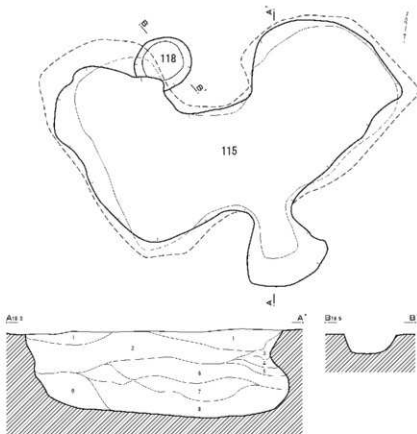
- 4 黄褐色土 ローム状土少し含む
- 5 黄褐色土 ローム状土・ブロック(2cm)少し含む

図116号土庫

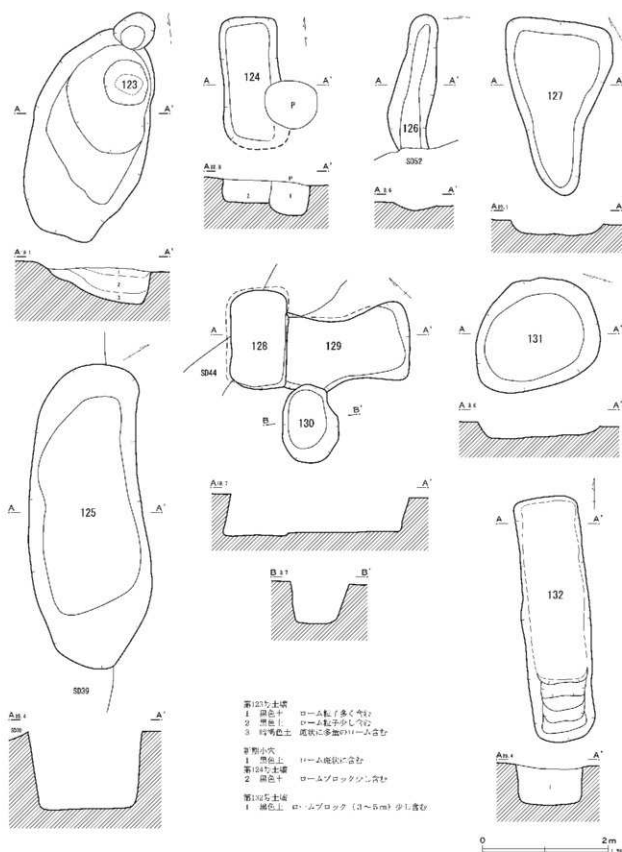
- 6 黒色土 ローム状土無含む
- 7 黒色土 ローム状土大量に含む
- 8 黄褐色土 ローム状土のみに形成
- 9 黒色土 ローム状土少し含む
- 10 黒色土 ローム状土に含む

図122号土庫

- 1 灰白土 酸化土(5~10cm)・ロームブロック少し含む
- 2 黄褐色土 ローム状土大量に含む



第117図 中世以降の土庫(10)



第118図 中世以降の土坑 (11)

第116号・第117号土壌 (第117図)

C-24・25グリッドで検出した。第46・47号溝跡とも重複し、その先後は第46号溝跡・第116号・第117号・第47号溝跡の順で新しくなる。

第116号は平面長方形で、断面箱状となり、黒色土基調で埋設しているが、ローム混入物を多く含む。また、第117号は平面瓢形で堀底が南傾する。なお、第47号溝跡は、この土壌で終結するため、付属施設の可能性もある。

遺物は、第116号より平安時代の須恵器1点、近世から近代にかけての陶磁器・瓦類7点、青銅片1点、凝灰岩製磁石1点が出土した。

第122号土壌 (第117図)

D-25グリッドで検出した。北方からやや西に傾いた軸をとる長方形土壌である。西方の第132号土壌と並列しており、南方に段差をもつなど、共通した用途を意図して設けられたことは確実である。断面形は箱形で、上層の黒色から下層の明褐色へと覆土が極端に変化する。

遺物は、出土していない。

第123号土壌 (第118図)

E-25グリッドで検出した。開口部の形状は線対称に近い楕円形だが、堀底は北側に傾斜しており、また、東西方向も西側に傾斜している。

覆土は、周辺土壌より一際黒い土が流入しているが、多くのロームブロックを含んでいる。反転した地山が見つからず特定はできなかったが、中世前後の倒木の可能性がある。

遺物は、混入した縄文土器のみが出土した。

第124号土壌 (第118図)

C-24・25グリッドで検出した。ほぼ北方に軸を合わせる長方形土壌で、東に重複する小穴に一部を破壊されている。覆土は黒色土の単層で、断面形は箱形となる。

遺物は、須恵器片2点、鉄片1点が出土した。

第125号土壌 (第118・124図)

D-25グリッドで検出した。第39号溝跡の掘削

途上に発見したため、両者の先後を確認してない。長楕円の平面は同溝の方位と合致しており、埋設途上の掘削など、時間的に関連づけることもできる。断面は箱形で、黒色土と黄褐色土が互層となって堆積していた。

遺物は、第124図8に示した素焼鉢と9の常滑甕破片が出土した。遺物の内容から、本壇は中世期に構築されたものと想定できる。

第126号土壌 (第118図)

A・B-26グリッドで検出した。第126号土壌から派生する小溝のようだが確定できず、土壌とした。掘り込みは浅く、断面は皿状であった。

遺物は、縄文時代の打製石斧1点と、近世から近代にかけての焙烙片3点が出土した。

第127号土壌 (第118図)

A-26グリッドで検出した。平面形は北に広がる撥形で、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色系土で、遺物は出土していない。

第128号～第130号土壌 (第118図)

C-26グリッドで検出した。方形2基と楕円1基の重複であるが、三者の堀底が同標高であり、壁の一部がせり出すことから、第115号土壌のような入口付地下式壇ともとれる。

遺物は、第129号より中世と思われる常滑などの施釉甕2点が出土した。これらより、少なくとも第129号は中世期に機能したと考えられる。

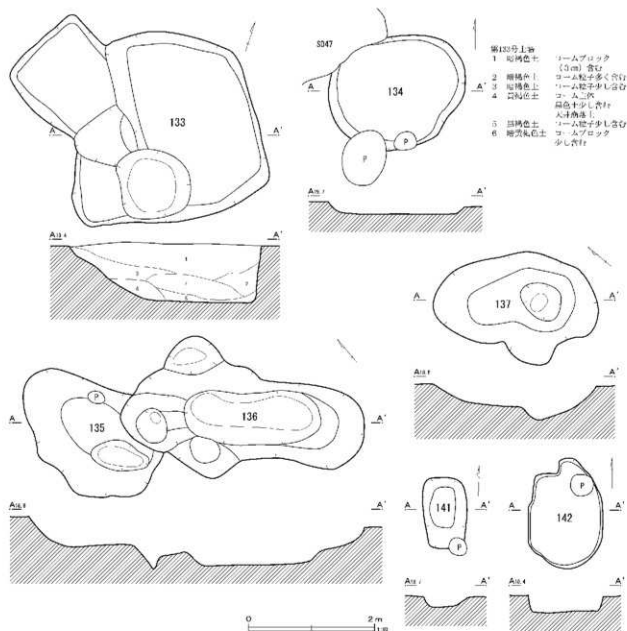
第131号土壌 (第118図)

F-24グリッドで検出した。平面形はややひしゃげた楕円で、断面は緩い鍋底状となる。

遺物は、近世と思われる片口と捏鉢それぞれ1点が出土した。その内容から、本壇は近世期に構築されたものと推定できる。

第132号土壌 (第118図)

D-25グリッドで検出した。第122号土壌と並列し構造も共通するなど、同用途で築かれたのは確実である。また、第11号住居跡とも重複するが、こちらは先後が歴然としていたため、住居跡の調



第119図 中世以降の土坑 (12)

査を優先した。

形態は、ほぼ南北を示す長方形で、断面は箱形となる。南に段差を残すが、これが反復掘削の痕跡かどうかは判断できなかった。

遺物は、出土していない。

第133号土坑 (第119図)

D-25グリッドで検出した。複数の掘り込みが重複したような土坑である。覆土が共通するため同一坑としたが、確信がもてない。東の方形部が

一段と深く底も平坦であり、地下式墳の主体部に似る。西の段差上は入り口や壁面の崩落、さらには廃棄時における破壊の結果かも知れない。

遺物は、出土していない。

第134号土坑 (第119図)

D-24グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は鍋底状と思われるが、掘り込みが浅く、確定できない。

遺物は、須恵器2点が出土したのみである。

第135号・第136号土壌 (第119図)

F-25グリッドで検出した。2基の重複だが、先後を確定できなかった。遺構の性格、形状についても同様である。第135号は開口部洋梨形で、墳底は平坦だが南方が窪む。本墳に伴うかは、重複する第136号の状況も含め判断し兼ねる。

一方、第136号土壌は、平面長楕円で、北の3箇所小穴が重なるかに見える。しかし、側壁の小穴は軸に対し線対称の位置にあり、深さも同等である。また、北端の小穴は南端の段差と対になるものとれる。

いずれにせよ、今報告では確定できず、すべてを同墳として報告する。

遺物は双方とも出土していない。

第137号土壌 (第119図)

C-26グリッドで検出した。楕円の大型土壌で、側壁が一部張り出す。小穴が重複したとも思えるが、底がなく、判断できなかった。

断面形の基調は皿状で、南方に緩い傾斜の小穴を追加する。こちらは、その位置関係より、本墳に付属するものと解釈した。

遺物は、出土していない。

第138号～第140号土壌 (第116図)

C・D-26グリッドで検出した。大型土壌が3基重複するが、いずれも皿状の断面形で、浅い。第138号は第139号の調査途上に認識できたもので先後は不明だが、第139号と第140号は後者の方が前期に構築されたことが確認できた。

第138号と第140号の平面形は楕円だが、第139号は瓢形になる。円形あるいは楕円土壌が2基重複したことも考えたが、根拠は見いだせなかった。覆土は、暗褐色系土が主体であった。

遺物は、3基とも出土していない。

第141号土壌 (第119図)

B-26グリッドで検出した。南北に軸をとる小型の長方形土壌である。断面形は椀状となり、遺物は、出土していない。

第142号土壌 (第119図)

Z-31グリッドで検出した。北に一部張り出すが、開口部は楕円を意図したと考えられる。覆土は暗褐色土の単層で、遺物は出土していない。

第143号～第146号・第154号・第155号土壌 (第120図)

D-27・28グリッドで検出した。第146号を除き、同規模同形態の土壌5基が軸を揃え、重複あるいは隣接して構築されている。

これらが指し示す方向は、ほぼ方位軸に一致しており、平面形は隅の丸い長方形が基調となっている。また、断面形は、楕円の小土壌である第146号も含め鍋底状で、覆土は黒色系と黄褐色系土が主体となる。

遺物は、第144号で近世から近代にかけてと思われる陶磁器片が1点、第146号で同じ時期と考えられる焙烙片1点が出土した。

第147号土壌 (第120図)

C-27グリッドで検出した楕円の小規模土壌である。小穴と重複するが、先後は確認していない。断面形は椀状で、遺物は出土していない。

第148号土壌 (第120図)

C-27グリッドで検出した。北半は第7次調査における崩落防止の養生部にあたり、調査をしていない。円形鍋底形状の土壌と思われる。

遺物は、近世から近代にかけての焙烙片が1点出土したのみである。

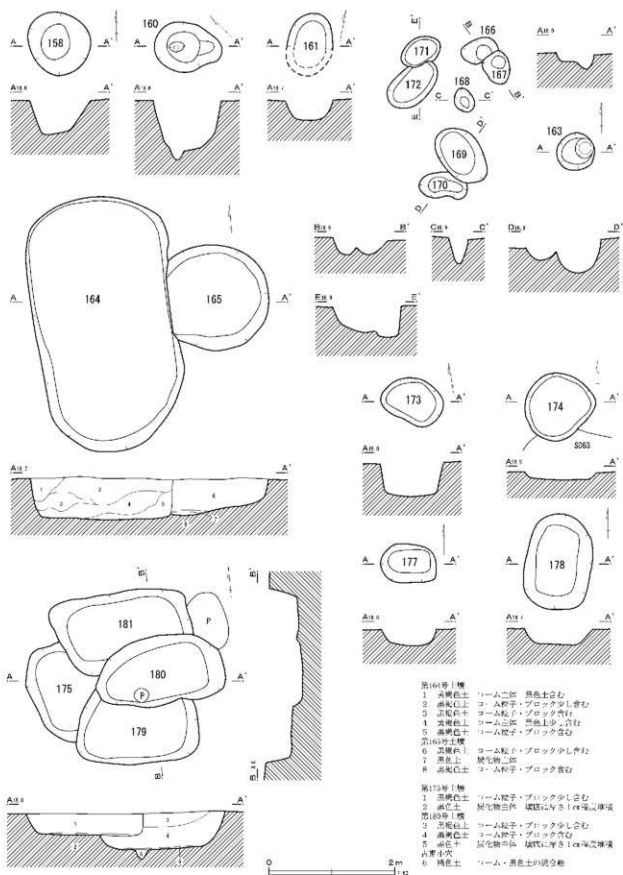
第149号土壌 (第120図)

C-27グリッドで検出した。平面形は北東方にひしゃげる円形、断面形は箱状となる。

遺物は、出土していない。

第150号土壌 (第120図)

E-28グリッドで検出した。平面形は円形をめぐらしたと考えられるが、南方がやや緩傾斜となり、その分ゆがんでいる。東西方向の断面形は鍋底状で、重複する小穴との先後は競合部が少なかったため、確認できなかった。



- 第164号土層
- 1 赤褐色土
 - 2 赤褐色土
 - 3 赤褐色土
 - 4 赤褐色土
 - 5 赤褐色土
 - 6 赤褐色土
 - 7 赤褐色土
 - 8 赤褐色土
- 第173号土層
- 1 コーム粒多・ブロック少含む
 - 2 コーム粒多・ブロック少含む
 - 3 コーム粒多・ブロック少含む
 - 4 コーム粒多・ブロック少含む
 - 5 コーム粒多・ブロック少含む
 - 6 コーム粒多・ブロック少含む
 - 7 コーム粒多・ブロック少含む
 - 8 コーム粒多・ブロック少含む
- 第175号土層
- 1 赤褐色土
 - 2 赤褐色土
 - 3 赤褐色土
 - 4 赤褐色土
 - 5 赤褐色土
 - 6 赤褐色土
 - 7 赤褐色土
 - 8 赤褐色土
- 第180号土層
- 1 コーム粒多・ブロック少含む
 - 2 コーム粒多・ブロック少含む
 - 3 コーム粒多・ブロック少含む
 - 4 コーム粒多・ブロック少含む
 - 5 赤褐色土
 - 6 赤褐色土
 - 7 赤褐色土
 - 8 赤褐色土
- 第181号土層
- 1 コーム・赤褐色土の混合層
 - 2 赤褐色土
 - 3 赤褐色土
 - 4 赤褐色土
 - 5 赤褐色土
 - 6 赤褐色土
 - 7 赤褐色土
 - 8 赤褐色土

第121図 中世以降の土壌 (14)

遺物は、近世以降と思われる土鍋片が1点出土したにすぎない。

第151号土壌 (第120図)

G-27グリッドで検出した。楕円の小土壌で、断面形は傾斜が緩い鍋底状となる。

遺物は、出土していない。

第152号土壌 (第120図)

F-28グリッドで検出した。東側の一部を攪乱で破壊されるが、略円形の平面形は把握できた。断面形は緩い鍋底状で、遺物は、混入したと思われる須恵器片1点が出土したにすぎない。

第153号土壌 (第120図)

D-28グリッドで検出した。平面形は隅丸正方形、断面形は鍋底状を呈する。

遺物は、出土していない。

第156号・第159号土壌 (第120図)

C-27・28グリッドで検出した。第156号は平面楕円形で断面鍋底状となる。また、円形鍋底形の第159号は、第156号にすべてか収まる形で重複すると現地では判断したが、両者の位置関係からすると、同一塚の可能性もある。

遺物は、出土していない。

第157号・第176号土壌 (第120図)

E-27グリッドで検出した。2基の土壌、さらに第16号井戸跡とも重複しているが、先後は確認していない。平面形は、第157号が幅広、第176号が幅狭の洋梨形で、断面形は鍋底状となる。

遺物は、第157号より縄文時代の磨石1点、近世から近代にかけての陶磁器類110点、硯1点、鉄片1点が出土した。

第158号土壌 (第121図)

D-27グリッドで検出した。平面円形の小型土壌である。断面は台形となり、遺物は近世から近代の陶磁器・瓦片が2点出土した。

第160号土壌 (第121図)

C-28グリッドで検出した。開口部楕円だが、複数の掘り込みを合わせた構造となっている。深

い椀状の北端に小穴が追加されるが、これは、その深さから本塚に伴うものと考えられる。

遺物は、出土していない。

第161号土壌 (第121図)

C-27グリッドで検出した。南半を後世に破壊されているが、開口部は楕円形を呈すると考えられる。断面形は椀状で、遺物は、かわらけの小片が1点のみ出土した。

第162号土壌 (第116・124図)

D-26グリッドで検出した。第44号溝跡の掘削途上に認識したもので、その先後は確認していない。小規模な円形土壌だが、断面形は箱形で、覆土中より第124図に示した土鍋2個体を含む3点と、石臼2点が出土した。

小規模な掘り方のわりに出土した遺物が大きく、器種も取り揃えられていることから、これら5点は中世期に埋め置かれたと考えられる。

第164号・第165号土壌 (第121・124・125図)

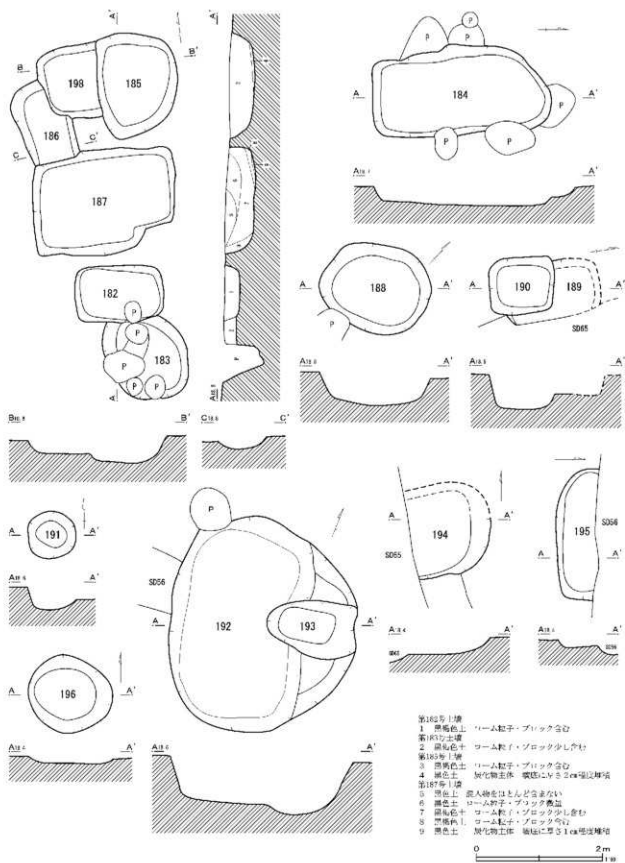
B-27グリッドで検出した。大規模な楕円形土壌である第164号と円形の第165号の重複であるが、双方とも掘り込みは深く、断面形は鍋底状となる。土層断面の観察より、第164号が後出することが確認できた。

覆土の構成は極端に異なり、第164号では数層に分層ができたのに対し、第165号は単一で、塚底近くに炭化物の集中層が堆積していた。

第164号の遺物は縄文土器1点と須恵器1点、近世の陶磁器類15点、かわらけ1点、焙烙3点、土鍋1点、凝灰岩製砥石4点が出土した。その内容から、同塚は近世期の所産と考えられる。

また、第165号よりは中世と思われる素焼甕7点、かわらけ片1点が出土した。遺物の様相から、同塚は中世期に構築されたと推定できる。

第124図に第164号出土の砥石4点を示した。断面形はすべて四角だが、正面形では丸みを帯びたものも存在する。また、第125図1は第165号より出土した在地壺である。



第122図 中世以降の土壌 (15)

第163号・第166号～第172号土壌 (第121図)

B-27グリッドで検出した。円形、あるいは楕円形の小土壌の集中として把握した。断面形は小穴に近いものの、周囲には同類が展開しないなど、詳しい判断はつきかねる。

遺物は、第163号より近世から近代にかけてのかわらけ・焙烙類3点が出土した。

第173号土壌 (第121図)

A・B-27グリッドで検出した。ややひしゃげた楕円土壌で、断面形は箱形となる。

遺物は、出土していない。

第174号土壌 (第121図)

A-27グリッドで検出した円形土壌で、第64号溝跡と重複するが、その先後は確認できなかった。掘り込みは浅く、断面形は鍋底状となる。

遺物は、出土していない。

第175号・第179号～第181号土壌 (第121図)

A-28グリッドで検出した。4基の長方形、あるいは楕円土壌の重複で、断面は鍋底状が基調となる。先後は第175号と第180号の関係のみ前者が後出することを確認した。双方の壙底に炭化物の薄層が堆積しており、同所での重複を含め、同一用途で構築されたと想定できる。

遺物は、第175号より縄文土器2点と、近世以降と考えられるかわらけ片4点が出土した。

第177号土壌 (第121図)

A-28グリッドで検出した。東西に方位軸をもつ小型の長方形土壌である。壙底は鍋底状で、遺物は出土していない。

第178号土壌 (第121図)

A-28グリッドで検出した。ほぼ南北を指す長方形の小土壌である。壙底は平坦だが、壁面の傾斜がなだらからず、断面形は台形となる。

遺物は、出土していない。

第182号・第183号・第185号～第187号・第198号土壌 (第122図)

A-27・28グリッドで検出した。長方形あるい

はそれに近い楕円土壌の重複である。断面形はおおよそ鍋底状となる。それぞれの重複関係は、第182号が第183号を破壊していることが確定できたが、他は確認できなかった。

第185号と第187号の壙底には炭化物の薄層が堆積していた。この層は中世遺物を出土した第165号と共通しており、遺物は第187号より鉄滓が1点出土したにすぎないものの、この2基も同じ時代に構築された可能性が高い。

第184号土壌 (第122図)

A-27・28グリッドで検出した。ほぼ南北に軸をとる長方形土壌だが、北壁が張り出す。壙底は平坦で、他遺構が重複したとは考えられない。

遺物は、近世から近代にかけてと思われる陶磁器類1点、かわらけ・焙烙片3点が出土した。

第188号土壌 (第122図)

B-28グリッドで検出した。平面の形状は短軸が広い楕円形で、断面形は緩い鍋底状となる。

遺物は、陶磁器小片が出土したのみである。

第189号・第190号土壌 (第122図)

B-28グリッドで検出した。断面鍋底状の方形と長方形土壌の重複だが、軸が揃わず、有機的な関連は薄いと考えられる。

双方とも、遺物は出土していない。

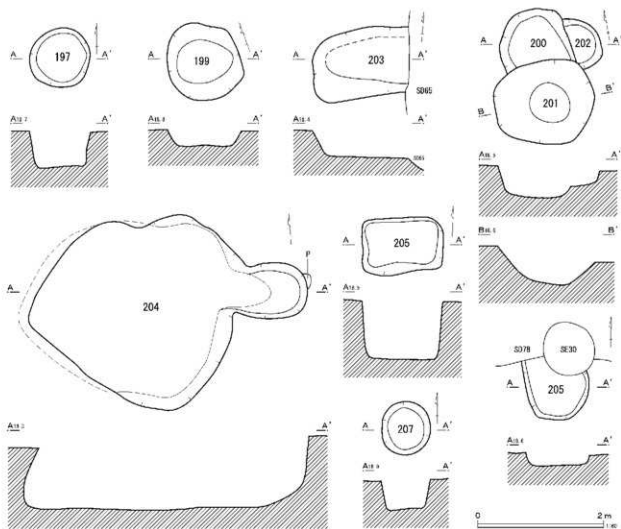
第191号土壌 (第122図)

B-28グリッドで検出した。円形の小型土壌で、断面は鍋底状となる。遺物は出土していない。

第192号・第193号土壌 (第122・125図)

B-28グリッドで検出した。2基の重複だが、第192号は方形に近い掘り込みと深さから、地下式壙の可能性が強く、第193号はその出入口にされていたとも考えられる。

遺物は、第192号より陶磁器類1点、常滑甕1点、第125図2に示した素焼鉢を含む土鍋・捏鉢類4点、同図3に示した凝灰岩製の砥石1点が出土した。出土遺物の様相から、本壙は中世中期に機能したと考えられる。



第123図 中世以降の土坑 (16)

第194号土坑 (第122図)

B・C-28グリッドで検出した。第66号溝跡と重複するが、先後は確認できなかった。また、通路確保のため、北半は未掘で終わった。平面形は楕円で断面は鍋底状になるものと考えられる。

遺物は、出土していない。

第195号土坑 (第122図)

C-28グリッドで検出した東西を指す楕円土坑だが、北は第57号溝跡と重複しており、一緒に掘削してしまった。そのため、先後は確認できていない。坑底は平坦で、遺物は出土していない。

第196号土坑 (第122図)

D-28グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、

断面形は鍋底状に整えられている。

遺物は、出土していない。

第197号土坑 (第123図)

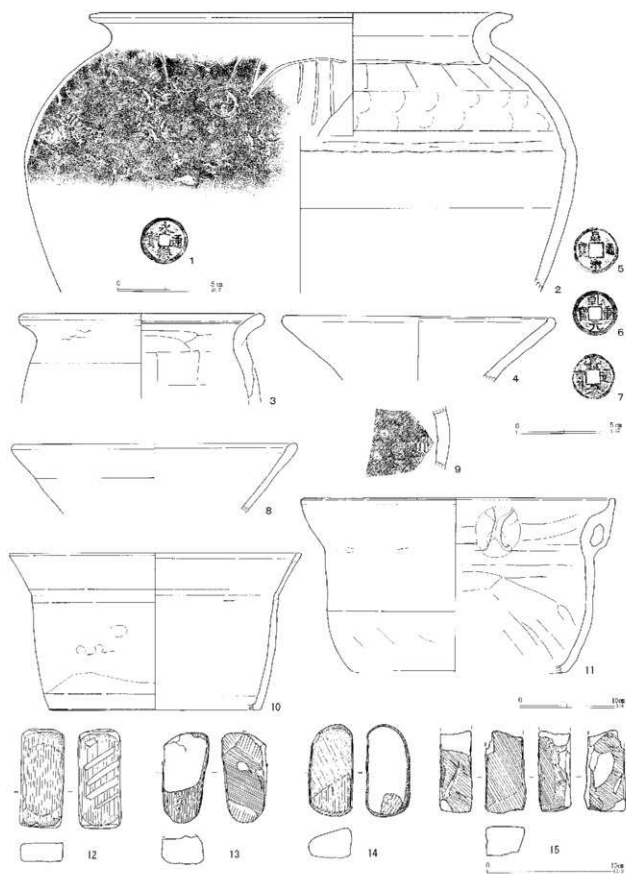
B-27グリッドで検出した。円形の小規模土坑だが、断面形は箱形となる。

遺物は、須恵器片1点、近世らしき陶磁器片1点、かわかけ片1点が出土した。遺物の遺存状況から、本坑は近世期に埋没したと思われる。

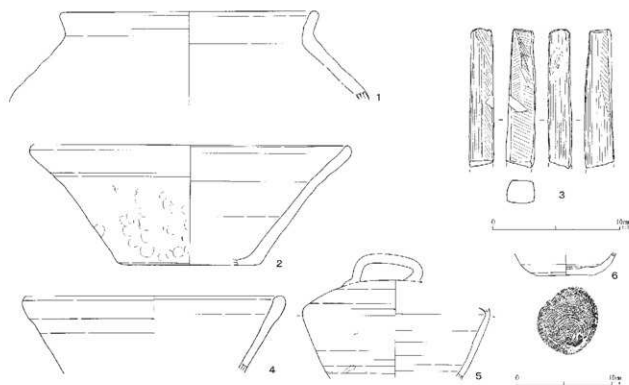
第199号土坑 (第123図)

B-29グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は鍋底状を呈する。

遺物は、出土していない。



第124図 中世以降の土壇出土遺物(1)



第125図 中世以降の土壌（2）・井戸跡出土遺物

第200号～第202号土壌（第123図）

B-29グリッドで検出した。円形土壌3基の重複である。個々を識別しないまま調査に及んでしまったため、先後は確認できていない。断面形は、第201号が碗状である他は鍋底状である。

遺物は、第202号で近世以降と考えられる素焼壺片1点が出土したにすぎない。

第203号土壌（第123図）

B-28・29グリッドで検出した。東西に軸をとる楕円土壌と考えられるが、第66号溝跡を掘削する途上に本壌を認識したため、先後を含め、確認していない。断面形は緩い鍋底状と推定される。

遺物は、出土していない。

第204号土壌（第123図）

Z-30グリッドで検出した。方形の主体部をもつ地下式墳である。進入口は長軸入りではなく、隅に設けられている。また、形状に微妙なゆがみがあることから、拡張なども考えられる。

遺物は、出土していない。

第205号土壌（第123図）

Y-32グリッドで検出した。ほぼ東西に向けた小型の長方形土壌で、断面形は箱形である。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器片が3点と、馬蹄と思われる鉄製品が1点、さらに鉄片3点が出土した。

第206号土壌（第123図）

E-30グリッドで検出した。開口部形状が楕円の土壌と思われるが、第30号井戸跡に加え第80号溝跡とともに掘削をしたため、先後関係や全形を把握できなかった。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器片1点が出土したのみである。

第207号土壌（第123図）

D-31グリッドで検出した円形の小土壌で、断面形は箱形であった。

遺物は、出土しなかった。

(3) 井戸跡

番匠・下道遺跡第7次・第8次調査では、33本の井戸跡を調査した。基本的には掘削時の危険を回避するため、筒底を確認せずに調査を断念したが、一部では、全体の調査終了後、重機によって下位の土層観察を試みた。

遺物の出土は井戸跡によって片寄りがあり、全くないもの、あるいは明らかな混在資料のみが出土したものもある。そのため、井戸跡の掘削期を中世から近代と広く想定し、出土遺物の様相や遺存状況によって時期が特定できるものについてのみ、これを明示する。

第1号井戸跡 (第126図)

E-21・22グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形は漏斗状である。覆土は、2・6層が埋面崩落土であるが、その他の層も起伏に富んでおり、一部は人為的に埋戻された可能性もある。確認より1.2m以下は危険回避のため掘削を断念した。

遺物は、平安時代の須恵器破片1点が出土したのみである。

第2号井戸跡 (第126図)

E-25グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形は漏斗状である。覆土の流入は、他の井戸跡に比して単純だが、かなり上層にも帯水形成層が認められた。また、最上層は混入ブロックがこなれておらず、他所で掘削された土が埋戻された可能性がある。

遺物は、縄文土器14点、平安時代の土器類40点、近世に相当すると思われる陶磁器片3点が出土した。陶磁器片の存在より、本井戸跡は近世期に機能したものと考えられる。

第3号井戸跡 (第126図)

G-25グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形は漏斗状となる。覆土はローム混入物を多く含む暗色系の土で満たされていた。湧水のため、確認面から1m以下の調査を断念したが、

覆土には水性形成層は認められなかった。

遺物は、縄文土器1点と平安時代の土器類6点が出土したのみである。

第4号井戸跡 (第126図)

E-24グリッドで検出した。平面形はほぼ円形、壁面崩落の痕跡もなく、ほぼ筒形を保っている。覆土は黒褐色土がもつばらで、単純な自然埋没と考えられる。

遺物は、平安時代の土器類7点が出土したのみである。

第5号井戸跡 (第126図)

G-25グリッドで検出した。筒部の平面形状は円形だが、北方に段差を設けている。最終堆積土は全体を覆っており、段部に堆積した5層は井戸使用前に埋戻された整形土かも知れない。筒部の断面形は円筒形で、大きな崩落痕は認められず、自然に埋没したものと考えられる。

遺物は、出土していない。

第6号井戸跡 (第126図)

G-25グリッドで検出した。第36号溝跡と重複するが、先後は確認していない。開口部の直径が1mに満たない規模な井戸で、断面形は円筒形となる。覆土は、2層が壁面崩落土と考えられるが、他層は自然堆積のようである。

遺物は、出土していない。

第7号井戸跡 (第126図)

F-23・24グリッドで発見した。開口部がほぼ円形の大形井戸であるが、湧水のため確認面から0.8m以下の調査を断念した。断面形は緩くすばまっており、覆土はロームブロックの混入が少ない黒色系土が主体であった。

遺物は、縄文土器3点と平安時代の土器類5点が出土したのみである。

第8号井戸跡 (第126図)

G-27グリッドで検出した。第59号溝跡および小穴と重複するが、その先後は確認していない。開口部の形状は円形で、漏斗状にすばまる筒部をも

つ。覆土は、中層までが、ローム混入物が少ない黒褐色土で、調査不能部付近以下はこれを大量に含む茶褐色土に変化していた。

遺物は、平安時代の須恵器片1点と、土鍋片1点、常滑甕片1点が出土した。井戸の使用期はおおよそ中近世と考えられる。

第9号井戸跡 (第126図)

E-28グリッドで検出した。開口部は円形で、断面形はほぼ円筒形となる。覆土はローム混入物が少ない黒褐色土がもっぱらで、調査範囲では変化を認められなかった。

遺物は、出土していない。

第10号井戸跡 (第126図)

E-29グリッドで検出した。第54号溝跡の掘削時に発見したもので、先後の確認はできなかった。平面形は円形で、断面形はおおよそ漏斗状となる。覆土は、ローム混入物が少ない黒褐色土が主体で、間に他の性質の土層を挟む互層となっている。このうち、4層では帯水に起因すると考えられる鉄分が多く沈着していた。

遺物は、土鍋片1点が出土した。井戸の機能期はおおよそ中近世と考えられる。

第11号井戸跡 (第127図)

D・E-28グリッドで検出した。長径2.5mを超える大型の井戸で、断面形は漏斗状となる。覆土は、黒褐色土と茶褐色土の薄層が交互に堆積しており、下層ほどそれぞれの明度が増す。

遺物は、平安時代の須恵器1点、中近世と思われる土鍋・埴輪片14点、かわかけ片5点が出土した。これらから、本井戸跡は中世から近世期のいずれかで機能したものと考えられる。

第12号井戸跡 (第127図)

D-27グリッドで検出した。第11号と並び、径2.5m近くにもなる大型の井戸である。覆土は、第11号ほどではないが、黒褐色土と茶褐色土の互層となり、こちらでは上位の崩落に起因すると思われるローム主体の層も介在する。

覆土中より陶磁器類などの出土はないが、最下層で曲物の底板が出土した。おそらくは中世・近世に機能したものと考えられる。

第13号井戸跡 (第127図)

D-27グリッドで検出した。第11号・第12号の二つの大型井戸跡に挟まれた位置に掘削されているが、それぞれの関係は不明である。

平面形は円形で、断面形は一方が崩落に起因する漏斗状となる。覆土は、外部から流入した黒色土と壁面が崩落したローム質土の互層となる。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器片2点が出土した。

第14号井戸跡 (第127図)

D・E-27グリッドで検出した。第62号溝跡と重複するが、その先後は確認できなかった。開口部の形状はほぼ円形、断面形は緩い漏斗状となる。確認面から約1.3mで筒底に至るが、その間ロームブロックを大量に含む暗黄褐色土のみが堆積していた。廃棄される際、何らかの事情で一気に埋戻されたと考えられる。

遺物は、縄文時代の磨石1点、中近世の陶磁器1点、土鍋片2点、施釉された甕片1点などが出土した。これらより、本井戸跡は中近世に機能したと考えられる。

第15号井戸跡 (第127図)

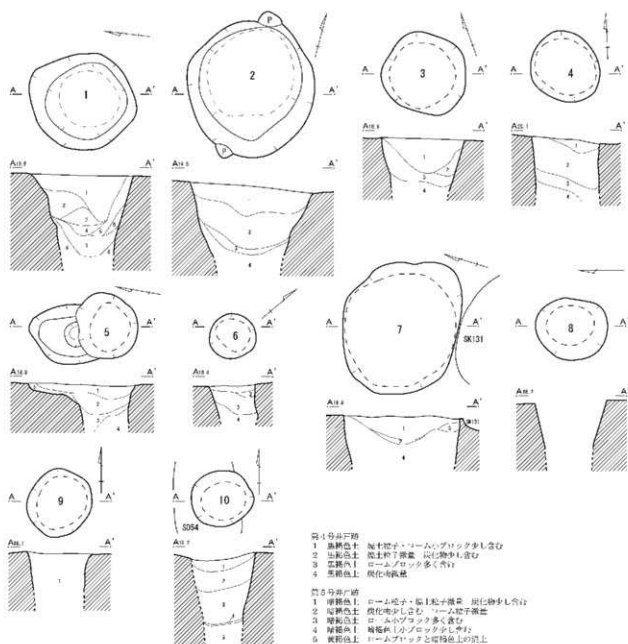
D-27グリッドで検出した。第62号溝跡と攪乱により上位ではその存在を把握できなかった。開口部の形状はほぼ円形、断面形は一部の崩落により漏斗状となる。上位は黒色土が堆積しているが、中層の4層は鉄分が沈着した水性層と暗黒灰色の極薄い層が互層となったものである。

遺物は、出土していない。

第16号井戸跡 (第127図)

E-27グリッドで検出した。2基の土壇と重複しており、その墳底が露出した時点で本井戸跡の存在に気づいたため、先後は確認していない。

開口部の形状は楕円形、断面形は緩い漏斗状と



第1号井戸跡

- 1 黒褐色土 ローム塊が多く含む 埋填土上段子少し含む
- 2 灰褐色土 ロームブロック多く含む 埋山朝落土
- 3 暗褐色土 ローム塊多く含む
- 4 厚層赤土 ローム塊少し含む
- 5 灰褐色土 ロームブロック多く含む
- 6 暗褐色土 黒色土少し含む 埋山朝落土
- 7 厚層赤土 ロームブロック (5cm) 多く含む
- 8 黄褐色土 ローム塊 (5cm) 多く含む

第2号井戸跡

- 1 灰褐色土 ローム塊子・ロームブロック (5cm以下) 多く含む
- 2 灰褐色土 ローム塊少し含む
- 3 黒褐色土 ローム塊子少し含む 未成歩積
- 4 厚層赤土 赤一様高

第3号井戸跡

- 1 厚層赤土 ローム塊少し含む
- 2 厚層赤土 ローム塊子多く含む
- 3 厚層赤土 ロームブロック・灰化物少し含む
- 4 黒褐色土 ローム塊子多く含む

第4号井戸跡

- 1 黒褐色土 粘土粒子・ロームのブロック少し含む
- 2 灰褐色土 粘土粒子層 灰化物少し含む
- 3 厚層赤土 ロームブロック多く含む
- 4 黒褐色土 灰化物塊

第5号井戸跡

- 1 厚層赤土 ローム塊子・粘土粒子層 灰化物少し含む
- 2 灰褐色土 灰化物少し含む ローム塊子散在
- 3 暗褐色土 ロームブロック多く含む
- 4 厚層赤土 埋填土上段子少し含む
- 5 黄褐色土 ロームブロックと暗褐色土の上

第6号井戸跡

- 1 厚層赤土 赤一様塊状 (一部埋填層)
- 2 灰褐色土 灰化物少し含む
- 3 黒褐色土 灰化物多く含む
- 4 厚層赤土 ローム塊子少し含む

第7号井戸跡

- 1 灰褐色土 灰化層 (1~2cm) ・ローム粒少し含む
- 2 厚層赤土 ローム塊少し含む
- 3 黒褐色土 ローム塊子少し含む
- 4 黒褐色土 ローム塊子含む

第8号井戸跡

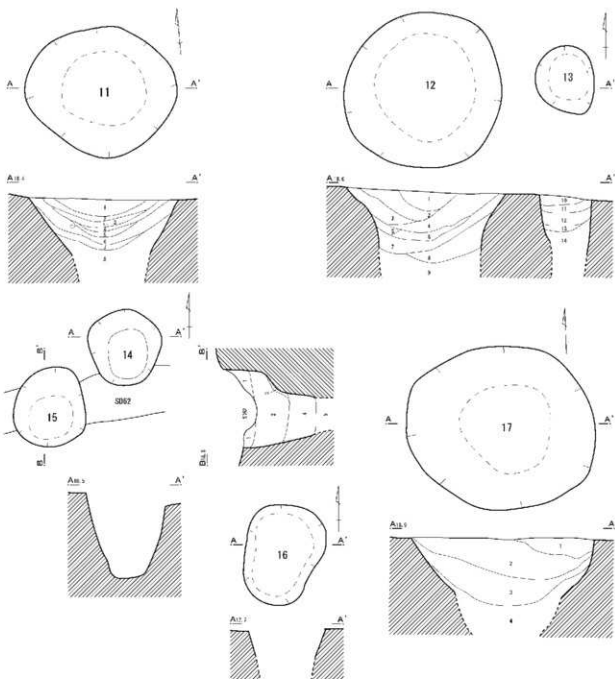
- 1 灰褐色土 ローム塊子散在 ロームブロック (5cm以下) 少し含む

第10号井戸跡

- 1 厚層赤土 ローム塊子少し含む
- 2 灰褐色土 埋山朝落土 黒色土含む
- 3 灰褐色土 ローム塊子含む
- 4 厚層赤土 埋山朝落土 赤一様塊状
- 5 黒褐色土 ローム塊子散在



第126図 井戸跡 (1)



第13井跡

- 1 黒色土 コムの子を含む
- 2 緑褐色土 灰分多く含む
- 3 黒褐色土 炭褐色土を含む
- 4 緑褐色土 灰分多く含む
- 5 土褐色土 腐敗土を含む
- 6 黒褐色土 灰分多く含む
- 7 黒褐色土 炭褐色土を含む
- 8 黒褐色土 灰分多く含む

第15井跡

- 1 赤色土 コムブロックの盛土を含む
- 2 茶褐色土 コムブロック・灰分を含む
- 3 赤色土 コムブロックの盛土を含む
- 4 赤褐色土 コムブロック・黒色土を含む
- 5 赤褐色土 コムの子・ブロックを含む
- 6 赤褐色土 コムの子
- 7 赤褐色土 コムブロックの盛土を含む
- 8 赤褐色土 コムの子
- 9 赤褐色土 コムの子・ブロックの盛土を含む
- 10 赤褐色土 コムの子
- 11 赤褐色土 コムの子
- 12 赤褐色土 コムの子
- 13 赤褐色土 コムの子
- 14 赤褐色土 コムの子

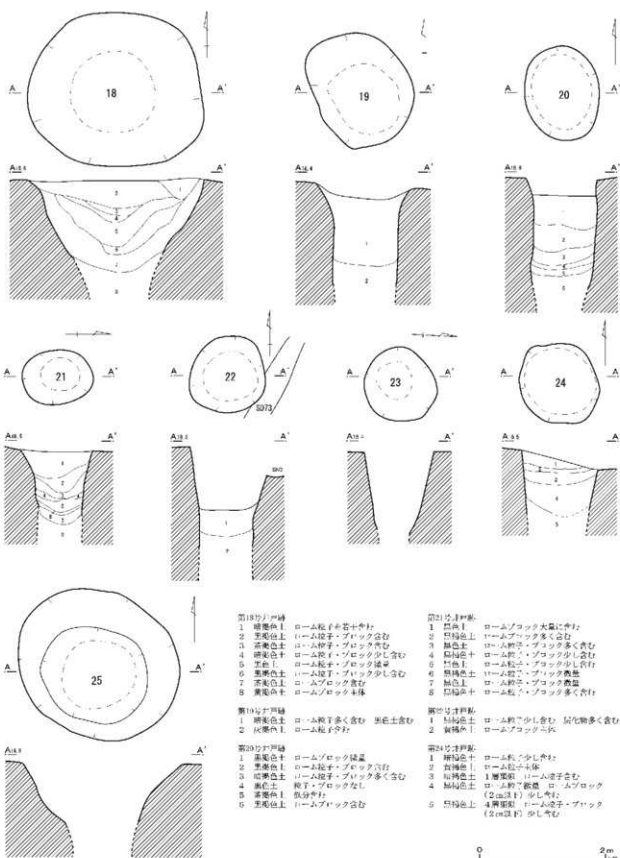
第16井跡

- 1 コムブロックの盛土を含む
- 2 黒色土 コムの子を含む
- 3 赤褐色土 コムの子を含む
- 4 赤褐色土 灰分を含む
- 5 緑褐色土 灰分を含む

第17井跡

- 1 黒褐色土 コムの子・ブロックを含む
- 2 赤褐色土 コムの子・ブロックを含む
- 3 赤褐色土 コムの子・ブロックを含む
- 4 赤褐色土 コムの子・ブロックを含む

第127図 井戸跡(2)



第18号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 埋戻土
- 5 赤土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 埋戻土

第19号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 灰褐色土

第20号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 赤褐色土
- 5 赤褐色土
- 6 赤褐色土

第21号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 赤褐色土
- 3 赤褐色土
- 4 埋戻土
- 5 赤土
- 6 赤褐色土
- 7 赤褐色土
- 8 埋戻土

第22号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 埋戻土

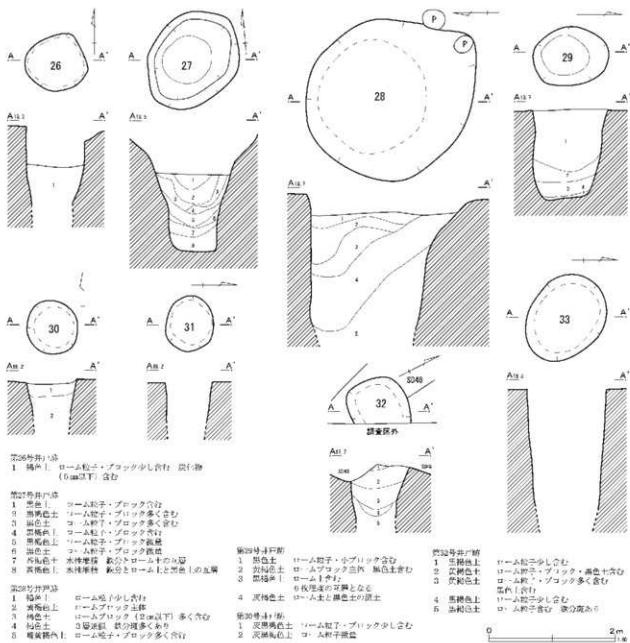
第23号井戸跡

- 1 埋戻土

第24号井戸跡

- 1 埋戻土
- 2 埋戻土
- 3 埋戻土
- 4 埋戻土
- 5 埋戻土

第128図 井戸跡 (3)



第129図 井戸跡(4)

なる。覆土は、ローム混入物を多く含む灰黒褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第17号井戸跡(第127図)

A-28・29グリッドで検出した。長径3m近くの大型井戸で、断面形は漏斗状となる。覆土は黒褐色土と黄褐色土の互層で形成されており、4層はほとんどがロームブロックである。

遺物は、焙烙片2点と羽口の断片1点が出土した。前者から、本井戸跡は中近世のいずれかで利用されたと考えられる。

第18号井戸跡(第125・128図)

B-28・29グリッドで検出した。径3m近くの大形井戸で、断面形は漏斗状になる。覆土は大略黒褐色土と黄褐色土の互層となっており、8層中には鉄分が沈着した薄層が所々に存在した。

遺物は、平安時代の須恵器片1点、中近世と思われる陶磁器片2点、土銅片3点、常滑焼片6点などが出土した。また、下層で用途不明の板材断片が出土した。遺物の様相から、本井戸跡は中近世のいずれかで機能していたと考えられる。

本井戸跡出土品として第125図に2点を示したが、4は在地産茶臼鉢、5は瀬戸美濃産の瘦瓶である。後者は内外面ともオリーブ灰の釉が施される江戸末期のものである。

第19号井戸跡 (第128図)

D-28・29グリッドで検出した。平面の形状は楕円形だが、崩落によるもので、筒部は垂直に掘削されている。覆土は上層の暗褐色土と下層の灰褐色土に大きく分かれるのみで、帯水性の形成層は存在しなかった。

遺物は、縄文時代の礫器1点、中近世にあたると思われる陶磁器類2点、焙烙片1点、摺鉢片4点が出土した。遺物の内容から、本井戸跡は中近世のうちに構築されたと想定できる。

第20号井戸跡 (第128図)

C-29グリッドで検出した。平面形楕円の中型の井戸で、井筒は円筒状となる。上層は黒褐色土が堆積しており、中層で一旦明度を増すが、さらに下層では黒褐色土が再び現れる。

遺物は、近世と考えられる陶磁器片4点、焙烙片5点、摺鉢片4点などが出土した。これらから、本跡は近世期に構築されたと判断できる。

第21号井戸跡 (第128図)

C-29グリッドで検出した。平面形楕円形だが崩落によるもので、下位の井筒は円筒形となる。覆土は黒色土と黒褐色土がめまぐるしく変化した互層となる。

遺物は、中近世の摺鉢片が1点出土した。

第22号井戸跡 (第128図)

C-29グリッドで検出した。上位の第73号溝跡や攪乱を除去した後に発見した井戸である。遺存部の開口部形状は円形、断面形は上位で軽い漏斗

状となるが、井筒部は円筒形である。覆土は中位の黒褐色から、下位の黄褐色に変化するが、薄層の交互堆積や水性形成層は認められない。

遺物は、平安時代の須恵器片が埋れ込んでいたのみである。

第23号井戸跡 (第128図)

B・C-29グリッドで検出した。第66号溝跡と重複しているが、その先後は確認していない。開口部の形状は円形だが、筒部が互に片寄って設けられている。断面形は漏斗状で、覆土は黒褐色土のみの単層であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類4点と凝灰岩製の砥石片1点が出土した。

第24号井戸跡 (第128図)

B-29グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形はほぼ筒形である。覆土は、上層に明度が強い土が堆積しているが、中層以下は黒褐色土となる。

遺物は、平安時代の須恵器片1点と、中近世の施釉焼片2点が出土した。井戸跡の機能期もこの幅のなかでとらえられる。

第25号井戸跡 (第128図)

A-29グリッドで検出した。開口部の形状は円形、断面形は漏斗状となる。筒部に至る直前で調査を断念したが、以下は垂直に落ちるものと考えられる。覆土は、ロームブロックが大量に含まれる暗黄褐色土の単一層であり、一気に埋戻された可能性が強い。

遺物は、出土していない。

第26号井戸跡 (第129図)

C-30グリッドで検出した。第73号溝跡と大部分が重複しており、同溝の掘削途上で発見したため、先後は確認できなかった。平面形は円形で、断面形はほぼ筒形となる。覆土は、炭化物を含む褐色土の単一層であった。

遺物は、出土していない。

第27号井戸跡 (第129図)

C-30グリッドで検出した。第73号溝跡の掘削が完了する直前に発見したため、両者の先後関係は把握できなかった。

開口部の形状は楕円形、断面形はおおよそ漏斗状となる。覆土は、上位が黒色土と黒褐色土の互層となり、最下層が鉄分が薄く沈着する帯水性の層となる。

遺物は、中近世の陶磁器2点、土銅片4点、施釉された甕1点などが出土した。それらから、本井戸跡は中近世のいずれかに構築・利用されたものと想定できる。

第28号井戸跡 (第129図)

C-29グリッドで検出した。直径が3m近くにおよぶ大型の井戸だが、井筒部の偏在は壁面の崩落が大きく生じた結果と考えられる。しかし、平面円形の中で北方に片寄る井筒も径が大きく、下位では大きくすぼまる気配を見ている。

覆土は、南方からの流入が顕著で、帯水時期に壁面が崩落したロームブロックを大量に含む土が下層に多く堆積していた。

遺物は、近世の陶磁器片1点が出土した。

第29号井戸跡 (第129図)

C-31グリッドで検出した。平面形は楕円形、断面形は筒状となる。覆土は明暗の互層で、強くしまっている。

遺物は、出土していない。

第30号井戸跡 (第125・129図)

E-30グリッドで検出した。第206号土壇と第80号溝跡と重複するが、その先後は確認できなかった。平面形状は円形、断面形は緩い漏斗状になるものと考えられる。覆土は、ローム混入物の少ない灰黒褐色土が主体であった。

遺物は、第125図6に示した1点を含め、かわらけが4点出土した。

第31号井戸跡 (第129図)

Y-33グリッドで検出した。径1mに満たない

小規模な井戸で、断面形は筒形となる。覆土は黒褐色土が堆積していた。

遺物は、出土していない。

第32号井戸跡 (第129図)

E-30グリッドで検出した。第32号溝跡中にあり、同溝に破壊されている。開口部はおおよそ円形になると思われる、断面形は緩い漏斗状となる。覆土は中層の黄褐色土を挟み、上下に黒褐色土が堆積していた。

遺物は、出土していない。

第33号井戸跡 (第129図)

F-27グリッドで検出した。平面形状は楕円形、断面形はおおよそ筒形である。覆土はロームブロックの少ない褐色土の単一層であった。

遺物は、出土していない。

(4) 柱穴跡

番匠・下道遺跡の調査では、建物跡を特定するに至らない多数の小穴を発見した。分布が集中するのは、B~G-20~25、I・J-20・21、A-28、C~F-30、X・Y-33・34グリッド付近で、B~Gでは広範囲にわたって多数のものが、また、X・YではL字に列化する気配も見せる。

調査区の北半では、おおよそ近世から近代の溝により成せられた区画に基づいて掘削されているようだが、一律には判じがたい。このあたりでは繰り返し建物が構築されたようである。

遺物は、47本の小穴から、縄文時代の土器24点、同石器・剥片類3点、平安時代の土器類12点、中世から近代の陶磁器・瓦類50点、同銭貨1枚が出土したが、すべて立柱に伴う埋戻し時の紛れ込みと判断できる。

ほとんどの覆土は、平安時代の掘立柱穴と識別が容易であり、また、径が小さいものが多いことから、大方が近世から近代に掘削されたものと考えられる。

VII 横沼新田遺跡の遺構と遺物

1. 平安時代の遺構と遺物

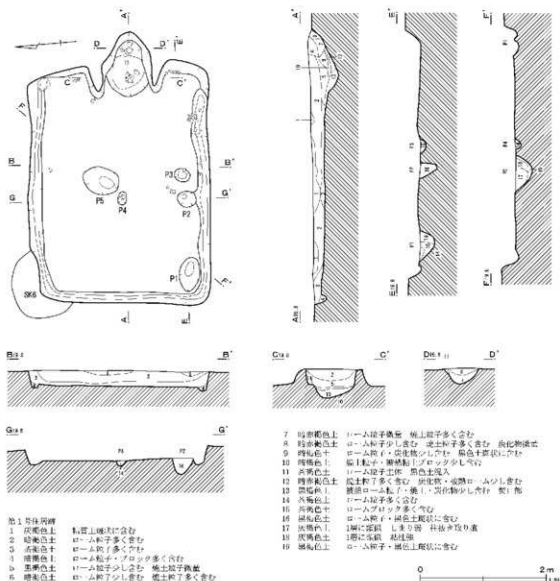
(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第130・131図)

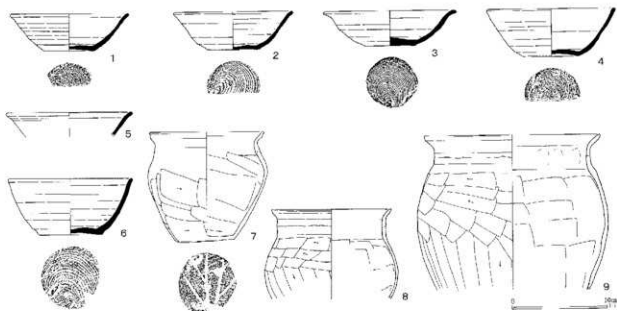
G・H—15・16グリッドで検出した。第6号土壇と重複するが、土層観察から、本住居跡が先出すると判断した。竪穴形状は長方形、カマドの位置から算定した主軸方位はS—85°—Eである。覆土は暗褐色から黒褐色土で占められ、上層には灰がかった土が堆積していた。

床面はほぼ平坦で、壁溝がカマド壁を除く3方向にめぐらされ、本住居跡に伴うと考えられる小穴が4本確認できたが、用途を特定できるものはなかった。

カマドは東壁に設けられているが、明確な構造物の痕跡は見分けられなかった。焼土などの多寡から、おおよそ6層から13層までの焚口部下層や煙道部分に残骸が重層していると考えられる。



第130図 第1号住居跡



第131図 第1号住居跡出土遺物

第23表 第1号住居跡出土遺物観察表 (cm./%)

押図	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
131	1	住	須恵器	環	(12.2)	3.9	(5.4)	20	長白	普通	7.5YR5/4に赤い褐	東金子
131	2	住	須恵器	環	(12.3)	4.0	5.5	30	長赤白	良好	7.5Y6/1灰	東金子
131	3	住	須恵器	環	(13.5)	3.7	5.2	40	赤白黒	不良	2.5Y7/2灰黄	胎土緻密、白い、産地不明
131	4	住	須恵器	環	(13.3)	5.1	5.8	50	長砂赤白	良好	5Y6/1灰	東金子
131	5	住	須恵器	環	(13.0)	[2.6]		20	長白	良好	7.5Y6/1灰	
131	6	住	須恵器	環	(12.9)	6.0	6.6	30	長赤白	普通	5Y6/1灰	東金子
131	7	住	土師器	小型甕	11.9	11.7	6.0	80	長石砂白	普通	10YR5/2灰黄褐	底部木葉痕
131	8	住	土師器	台付甕	(12.4)	[9.5]		30	長石白	普通	5YR4/4に赤い赤褐	接合痕明顯
131	9	住	土師器	甕	(18.4)	[16.4]		20	長石砂白	普通	5YR5/6明赤褐	

遺物は、平安時代の土器片が132点出土した。内訳は、須恵器環蓋類が36点、同壺瓶類が31点、土師器甕類が65点であった。第131図に一部を示したが、壺甕類の復元はなしえず、須恵器環と土師器甕類が中心である。このなかで、7は口縁外部に凹状部をめぐらせ、底裏面に木葉文を描く小型甕である。

第2号住居跡 (第132・133図)

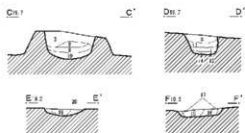
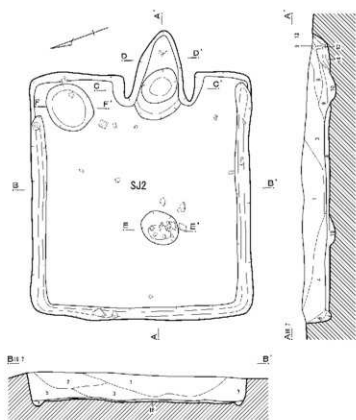
I-15グリッドで検出した。竈穴形状は長方形、カマドの位置から算定した主軸方位はS-71°-Eである。覆土の大半は黒褐色から暗褐色土で占められていた。

床面はほぼ平坦で、カマド壁を除く3方向に壁溝がめぐらされ、北東隅には浅い落ち込みを確認

した。これは、カマドが片寄る南側とは反対にあることから、貯蔵穴となるかは疑わしい。

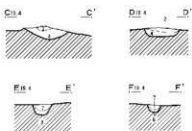
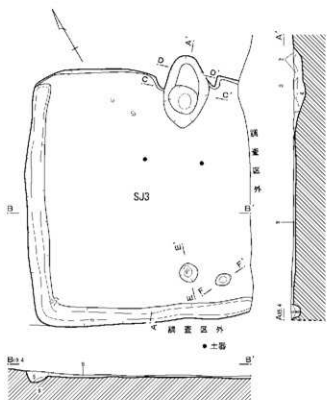
また、竈穴の中央やや西寄りに焼土などを多く含む皿状の落ち込みも発見したが、貼床で覆われており、燃焼施設として機能したのか、床下土壌の埋土に焼土を集めたのか、特定できない。だが、特殊な機能が付託されていたのか、この部分から最も多くの遺物が出土している。

カマドは東壁に設けられ、若干煙道方向にずれているが、9層の途切れる箇所が竈設部の痕跡と考えられる。11層以下にも焼土は多く含まれているが、焚口上に堆積する10層がこれらより後に堆積していることから、比較的長くカマド天井が崩落せず、その剥落や煙道を通じて流入する土砂が



第2号住居跡

- 1 赤褐色土 ローム砂子・ブロック・粘土粒子散見
- 2 赤褐色土 1層と類似がやや不明な
- 3 腐植土 ロームブロック (3cm以下) 多く含む
粘土粒子散見
- 4 赤褐色土 ローム砂子多く含む
- 5 赤褐色土 ローム砂子少し含む
- 6 赤褐色土 ローム砂子少し含む
- 7 赤褐色土 ローム砂子多く含む 11ームブロック含む
- 8 赤褐色土 ローム砂子散見 腐植土・ムブコック少し含む
- 9 赤褐色土 粘土粒子・ブロック多く含む
- 10 赤褐色土 ローム砂子少し含む 炭化物多く含む
- 11 赤褐色土 ローム砂子・腐植土・ムブコック
・粘土粒子を含む
- 12 赤褐色土 腐植土・ムブコック・粘土粒子多く含む
- 13 赤褐色土 粘土粒子・ブロック多く含む
- 14 赤褐色土 ローム砂子少し含む 炭化物多く含む
粘土粒子散見
- 15 赤褐色土 11ーム砂子・含む 腐植土散見
- 16 赤褐色土 ローム砂子多く含む 腐植土少し含む
- 17 赤褐色土 ローム砂子少し含む
- 18 赤褐色土 11ームブロック・赤褐色土散見を含む 炭化物
- 19 赤褐色土 ロームブロック・粘土粒子散見
- 20 赤褐色土 ロームブロック・赤褐色土・粘土粒子
・炭化物散見を含む

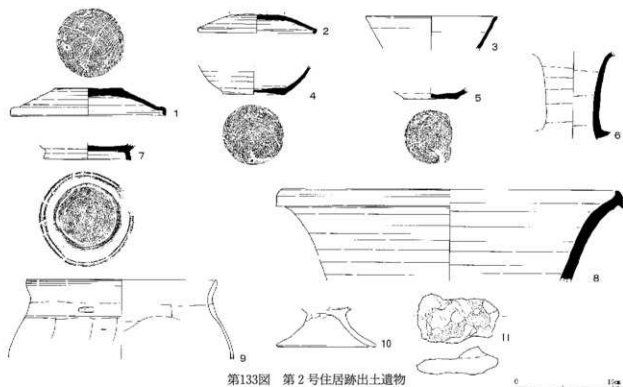
0 2m
1cm

第3号住居跡

- 1 砂褐色土 ローム砂子・炭化物少し含む
- 2 砂褐色土 腐植土・ムブコック多く含む 炭1・炭2の腐植土
腐植土層
- 3 赤褐色土 粘土粒子多く含む 炭化物散見
- 4 砂褐色土 腐植土少し含む 炭化物少し含む 腐植土
- 5 砂褐色土 ローム砂子少し含む
- 6 赤褐色土 11ームブロック含む
- 7 赤褐色土 11ーム・粘土粒子少し含む
- 8 赤褐色土 ロームブロック含む
- 9 砂褐色土 ロームブロック土層 炭土上を含む

0 2m
1cm

第132図 第2号・第3号住居跡



第133図 第2号住居跡出土遺物

第24表 第2号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

棟号	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
133	1	2住	須恵器	蓋	(16.3)	2.9	7.3	40	長白黒	不良	2.5Y8/3淡黄	東金子?
133	2	2住	須恵器	蓋	(12.0)	[2.0]		40	長砂白	良好	5B5/1青灰	
133	3	2住	須恵器	坏	(13.7)	[3.6]		20	長石砂白	良好	N4/0灰	東金子?
133	4	2住	須恵器	坏		[3.1]	6.5	70	長砂白黒	良好	7.5Y5/1灰	東金子?
133	5	2住	須恵器	坏		[1.2]	5.7	70	長白	良好	5Y4/1灰	東金子
133	6	2住	須恵器	長頸瓶		[9.3]		80	長白針	良好	N6/0灰	南比企
133	7	2住	須恵器	高台付罐		[1.8]	9.1	80	長石白	良好	N4/0灰	東金子?
133	8	2住	須恵器	甕	(35.2)	[9.7]		10	長白	良好	N4/0灰	東金子?
133	9	2住	土師器	甕	(20.0)	[8.4]		20	片長石白	普通	7.5YR5/4にぶい梅	
133	10	2住	土師器	台付甕		[4.2]	(10.1)	60	角長石白黒	良好	2.5Y4/2暗灰黄	
133	11	2住	鉄製品	鉄滓	長さ5.0	幅8.5	厚さ3.0	重さ123.6g				

堆積する期間があったと考えられる。

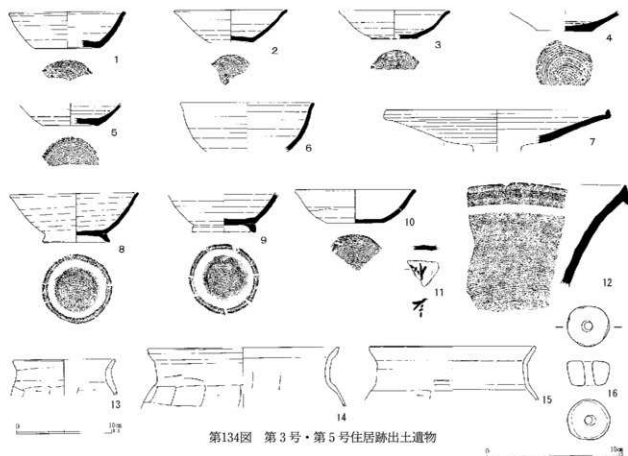
遺物は、平安時代の土器片185点が出土している。内訳は、須恵器坏蓋類が44点、同壺瓶類が4点、同甕類が8点、土師器坏類(ロクロ土師器)3点、同甕類が126点であった。また、鉄滓も1点出土している。

第132図に出土遺物の一部を示したが、復元された器種は多彩である。なかでも須恵器類の器種構成が充実しているのが特徴となるだろう。

第3号住居跡 (第132・134図)

L-18グリッドで検出した。東壁が確定できなかったが、正方形の竪穴形状は想像できる。カマドの位置から算定した主軸方位はN-20°-Eである。確認時すでに覆土はほとんど残っておらず、貼床と、内部施設の埋土のみが遺存していた。

壁溝はカマド壁を避けており、他住居跡の傾向から、本住居跡も3方向にめぐらされていたものと考えられる。南東隅に小穴を2本発見したが、用途は不明である。カマドも遺存状況が悪く、十



第134図 第3号・第5号住居跡出土遺物

第25表 第3号・第5号住居跡出土遺物観察表 (cm/%)

採出	番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	残存	胎土	焼成	色調	備考
134	1	3住	須恵器	坏	(12.0)	3.8	(6.9)	20	長砂白	良好	5Y6/1灰	東金子?
134	2	3住	須恵器	坏	(11.7)	3.4	(4.8)	20	長石白	良好	5Y6/1灰	東金子?
134	3	3住	須恵器	坏	(11.5)	3.0	(4.8)	20	長砂白	良好	5Y6/1灰	東金子?
134	4	3住	須恵器	坏		2.2	(6.0)	40	長石砂赤白	良好	7.5Y5/1灰	
134	5	3住	須恵器	坏		[2.4]	(6.0)	20	長砂赤黒	普通	2.5Y8/3淡黄	東金子?
134	6	3住	須恵器	埴	(13.9)	[4.2]		20	石白針	良好	5YR6/1灰	南比企
134	7	3住	須恵器	高盤	(23.4)	[3.6]		10	長石白黒	普通	5Y6/1灰	東金子?
134	8	5住	須恵器	高台付坏	13.4	5.2	6.9	60	長石砂白	良好	5Y5/1灰	東金子?
134	9	5住	須恵器	高台付埴		6.6	7.0	70	長石砂白黒	良好	7.5Y4/1灰	東金子?
134	10	5住	須恵器	坏	(12.4)	3.6	(5.9)	20	長石白針	普通	5Y6/1灰	火障、一部繊維痕、南比企
134	11	5住	須恵器	坏					白針	普通	5Y6/2灰オリブ	墨書あり、南比企
134	12	5住	須恵器	壺					長石白針	良好	N5/0灰	南比企
134	13	5住	土師器	台付壺	(10.6)	[3.8]		30	角砂赤白	良好	7.5YR5/4にぶい楊	
134	14	5住	土師器	壺	(19.9)	[6.4]		30	角砂赤白	普通	7.5YR5/4にぶい楊	
134	15	5住	土師器	壺	(17.8)	[5.7]		20	角長石砂赤黒	普通	7.5YR5/4にぶい楊	
134	16	5住	石製品	紡錘車	孔径0.6 上径3.4 下径2.9 厚さ1.9 重さ29.0g							凝灰岩製

分な観察ができなかった。

遺物は、平安時代の土器片58点が散漫に出している。内訳は、須恵器坏蓋類が27点、土師器壺類が31点であった。第134図1～7にその一部を示したが、復元できたのは須恵器類がもっぱらで、東金子産の疑いがあるものが多い。

第4号住居跡 (第135図)

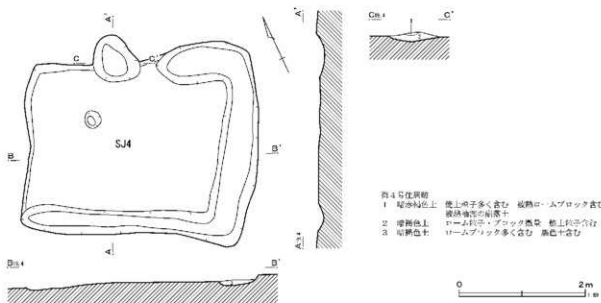
M-15・16グリッドで検出した。重機による表土掘削後の遺構確認段階で、すでに床は破壊され、掘り方のみで検出できたが、カマドや周溝の巡りから、長方形の形状やN-25°-Eを指す主軸方位など、全体の規模は確定できる。

カマド壁はカマドを境に段差が設けられており、その側にのみ壁溝がめぐらされたらしい。ほかに小穴を1本発見したが、用途は不明である。

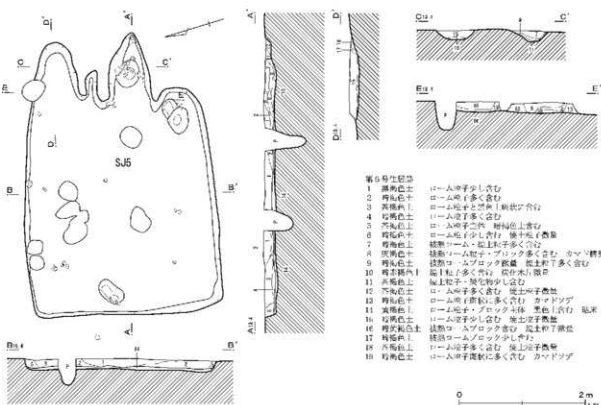
遺物は、平安時代の土師器器類1点が出土したにすぎない。

第5号住居跡 (第134・135図)

I・J-11・12グリッドで検出した。竪穴の形状は長方形、カマドの位置から算定した主軸方向はS-76°-Eである。覆土の大半は黒褐色から暗褐色土で占められていた。



- 第4号住居跡
- 1 暗赤褐色土 焼土多し含む 板敷ロームブロック含む 破砕燐灰石多量
 - 2 暗褐色土 11-ムロ土・ブロッケン体 焼土多し含む
 - 3 暗褐色土 11-ムロ土多し含む 黒色土含む



- 第5号住居跡
- 1 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 2 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 3 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 4 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 5 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 6 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 7 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 8 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 9 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 10 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 11 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 12 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 13 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 14 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 15 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 16 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 17 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 18 暗褐色土 11-ムロ土多し含む
 - 19 暗褐色土 11-ムロ土多し含む

第135図 第4号・第5号住居跡

床面はほぼ平坦で、壁溝はない。カマド脇と西壁下に小穴を確認した。堅穴内での位置関係から、前者は貯蔵穴、後者は入口構造を支える補助柱穴の可能性がある。

カマドは同一壁で2箇所を確認した。それぞれにソデが遺存し、壁面の復元も行われていないことから、共存しつつ機能していたということになるが、確定できない。

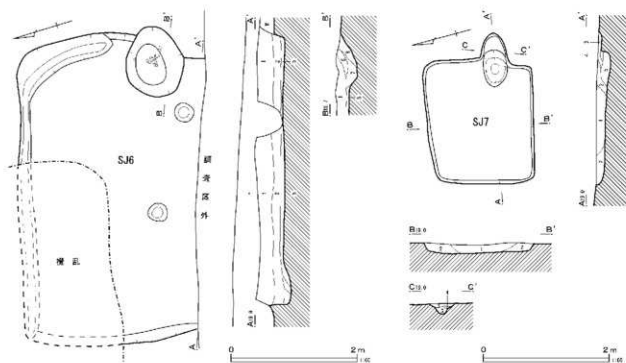
遺物は、平安時代の土器片41点が出土している。内訳は、須恵器坏蓋類が14点、土師器甕類が26点である。第134図8～16に出土遺物の一部を示したが、須恵器坏類と土師器甕類が中心である。産地が特定できる須恵器は南北産が多い。また、16の凝灰岩製紡錘車は肉厚の粗製品である。

第6号住居跡 (第136図)

H・I—17グリッドで検出した。安全上幅広く緩衝帯を残した渠道に面した調査区外にかかってしまったため、南壁の位置が確定できず、加えて北西の一部破壊されているが、おおそ長方形の堅穴形状は想定できる。また、カマドの位置からS—73°—Eの主軸方位も特定できる。

全体の確認時すでに覆土はほとんど残っておらず、壁溝とカマドの埋土のみが遺存していた。また、2箇所小穴を発見したが、本住居跡に伴うものか確認できなかった。

壁溝は、北東隅に確認できるものの、西壁下では途切れてしまっている。また、カマドは掘り方だけか遺存しており、構築材はすべて流出・混合されてしまっていた。



第6号住居跡

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム・粘土粒少量 |
| 2 暗褐色土 | コ・土粒少し含む 地上砂子多く含む |
| 3 暗褐色土 | 石灰質・ローム粒多量・粘土粒少量含む |
| 4 暗褐色土 | ローム粒少し含む ロームブロック含む |
| 5 暗褐色土 | ローム粒少・ブロック半量 褐色土含む |
| 6 暗褐色土 | 粘土粒多量含む |
| 7 暗褐色土 | 粘土粒少し含む 細粒ロームブロック(4cm以下)含む |
| 8 暗褐色土 | ローム・粘土粒多量含む |

第7号住居跡

- | | |
|--------|------------------|
| 1 暗褐色土 | ローム粒少し含む |
| 2 暗褐色土 | 石灰質・地上砂子少し含む |
| 3 暗褐色土 | 砂一塩子・ブロック多量含む |
| 4 暗褐色土 | 石灰質少し含む |
| 5 暗褐色土 | 石灰質多量含む 地上砂子多量含む |
| 6 暗褐色土 | ローム粒・ブロック多量含む |

第136図 第6号・第7号住居跡

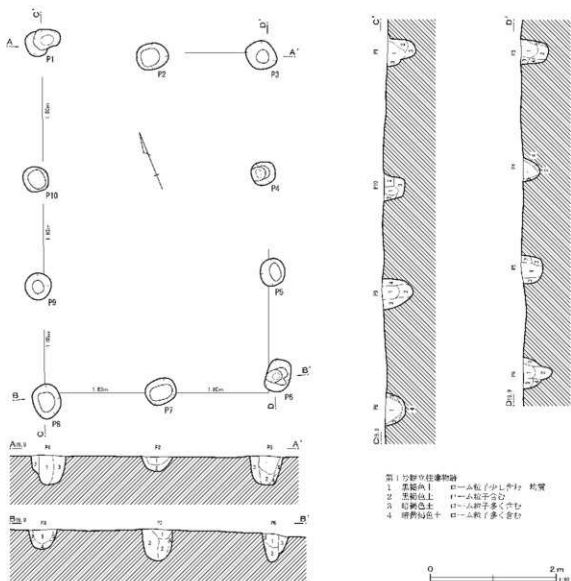
遺物は、平安時代の土器片63点が出土している。内訳は、須恵器环蓋類が13点、須恵器壺瓶類が2点、土器甕類が48点であった。カマドから比較的まとまって出土したものの、図に示せるほどに復元が可能な個体はなかった。

第7号住居跡 (第136図)

U-3・4グリッドで検出した。遺構分布の稀薄な北側調査区で唯一発見された住居跡であるが、長短軸それぞれ2mを下回るきわめて小規模なものであり、居住空間を構成する通常の住居跡とは考えられない。

カマド以外の施設は見つからず、煙道も段差を設け、最小限の施設構造で済ませている。その位置から算定した主軸方位はS-80°-Eで、至近の第7号掘立柱建物跡や南側調査区の第1号住居跡と似通っていることから、これが横沼集落の主体と時期を異にする可能性も少ない。おそらくは、北側調査区の2棟の掘立柱建物跡とともに、特定の用途を担っていたものと思われる。

覆土の大半は褐色から暗褐色土で占められていた。また、カマドでは天井の崩落らしき痕跡層が遺存していた。遺物は、出土しなかった。



第137図 第1号掘立柱建物跡

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第137図)

F・G-15・16グリッドで検出した。2間×3間の側柱建物で、柱間はすべてにわたって等間を意識しているが、実体としては若干北西に開く気配がある。また、桁方向の中軸方位はN-29°-Eで、第3号・第4号住居跡などとは共通するものの、他の掘立柱建物跡と軸方位に比べると東への傾きが強い。

覆土は、柱穴の中央に堆積する黒褐色土の1層・2層が柱痕や、柱を抜き取った後の埋土で、3層・4層が立柱時の補填土と考えられる。

遺物は出土しなかったが、柱穴の掘り方形態規模、加えて覆土の特徴から平安時代に構築されたものと判断した。

第2号掘立柱建物跡 (第138図)

H・I-15・16グリッドで検出した。表面上は2間×3間の側柱建物にみえるが、柱穴の配置換えなどがあり、桁方向の中軸方位N-4°-Eの変更をせずして建物構造の変更があったことをうかがわせる。

桁柱のうち2本が重複し合うP4・5とP11・12は、それぞれ南側が古くに掘削されている。これをもとに、中央のP13を加えて建物の構造を想定すると、当初の規格は2間×2間の南北に長い総柱建物となる。

その後、何らかの事情により、総柱の建物を廃し、桁側にそれぞれ1穴ずつを新たに設け、側柱建物に変更されたと考えられる。柱間は、新旧いずれも梁桁それぞれのなかでは等間を保つよう配慮されている。

ちなみに、南のP4からP13の掘り方が安定した円形であるのに対し、北辺のP1からP3は形態規模が不揃いとなっている。掘削の新旧が識別できたのはP2のみであったが、このことから、改築に際し、北辺の3穴もわずかながら南西に移しかえられたと想定できる。

柱穴の覆土は、それぞれ個別に番号を付与した。1層・2層が柱痕もしくは柱抜き取り後の流入土、3層・4層が立柱時の補填土だろう。

遺物は出土しなかったが、柱穴の掘り方形態や覆土の特徴から本掘立柱は平安時代に構築されたものと判断した。

第3号掘立柱建物跡 (第138図)

H・I-15グリッドで検出した。第2号・第5号と軸を同じくし、その間に構築されている。2間×2間規模の側柱建物東西棟である。桁方向の中軸方位はN-87°-W、梁桁それぞれが等間で配置されている。

掘り方の規模は小さく、掘り込みも浅い。覆土は、立柱部に関わる範囲が黒褐色、埋土がローム混入物多く含む茶褐色土であった。

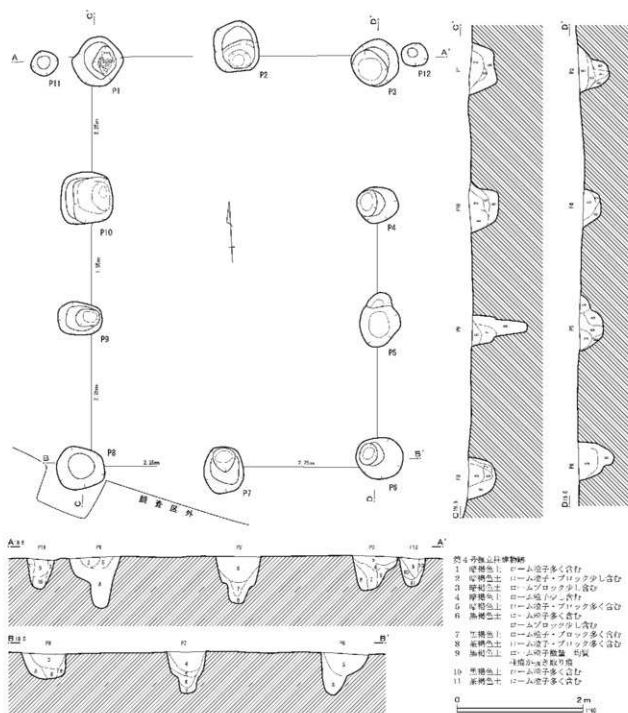
遺物は出土しなかったが、柱穴の掘り方や覆土の特徴から平安時代に構築されたものと判断した。

第4号掘立柱建物跡 (第139・140図)

K・L-17・18グリッドで検出した。南北に長い側柱建物で、桁方向の中軸方位はN-3°-Eである。北端の両側に類似する小穴が発見できたため、これも合わせて報告する。柱穴の配置は、梁方向が等間で、桁方向は両脇が梁と規格を同じくするが、中央柱穴間が1尺ほど狭くなる。掘り方の開口部形状は隅丸方形から円形で、前代の名残をとどめている。覆土の観察では、柱はほぼすべて抜き取られており、本棟では8層が、また両脇の柱穴では11層が立柱時の補填土と考えられる。

遺物は、P1・P2・P4・P6より縄文土器1点、平安時代の土師器3点、同須恵器25点が出土した。とくに、P1では、須恵器甕の大破片が24点意図的に埋置されていた。しかし、ほかは混入と思われる小破片である。

P1より出土した須恵器甕は第140図に示した。口縁・底部を欠くが全体に自然釉が附着し、外面に平行叩き、内面に無文当て具痕が残る。東金子産の可能性が強い。



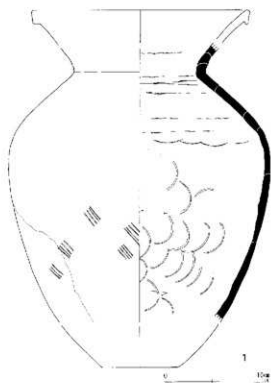
第139図 第4号掘立柱建物跡

第5号掘立柱建物跡 (第141図)

H・I-14・15グリッドで検出した。第3号掘立柱建物跡とまったく同じ規模で並列する東西棟である。規模の小さい2間×2間の側柱建物で、柱間は梁桁ごとの等間となる。桁方向の中軸方位

はN-85°-Wである。

柱穴の覆土は、中央に堆積する黒褐色土の1層・2層が柱痕や、柱を抜き取った後の埋土で、茶褐色の3層・4層が立柱時の補填土と考えられる。整然とした痕跡を残すのはP4・P5のみで



第140図 第4号掘立柱建物跡出土遺物

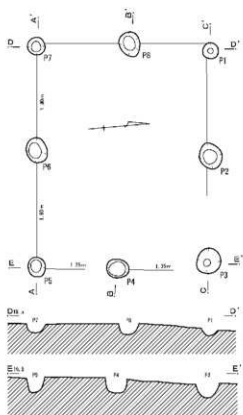
あり、基本的に柱は廃棄後に撤去されたものと理解できる。

遺物は出土しなかったが、柱穴の掘り方形態や覆土の特徴、さらに並列する掘立柱群との関係から平安時代に構築されたものと判断した。

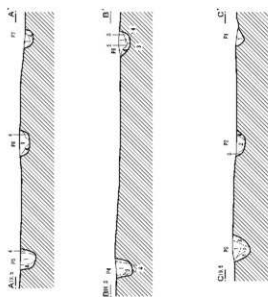
第6号掘立柱建物跡 (第142図)

Q・R-5グリッドで検出した。2間×3間相当の東西棟であるが、桁方向にあたる北側の中間柱は1穴も見つからなかった。また、南側もごく小さな2穴が見つかったのみである。これに対し、内部には外周と同規模の4柱が配置されており、東西列との関係から、明らかに一連の構造物と認められる。建物構造に鑑みて南北方向の中軸線から算定した主軸方位はN-88°-Eである。

柱穴の掘り方は内外で際違った違いはない。さらに、外周柱の不足や内周の位置に堂奥への片寄りがないことから考えると、中央の4柱は、仏堂



第141図 第5号掘立柱建物跡



- 第6号掘立柱建物跡
- 1 赤褐色土 土・土粒子多し 漆喰 埋戻
 - 2 黒褐色土 コーム状(骨付) 漆喰
 - 3 赤褐色土 コーム状(骨付)
 - 4 赤褐色土 土・土粒子多く含む

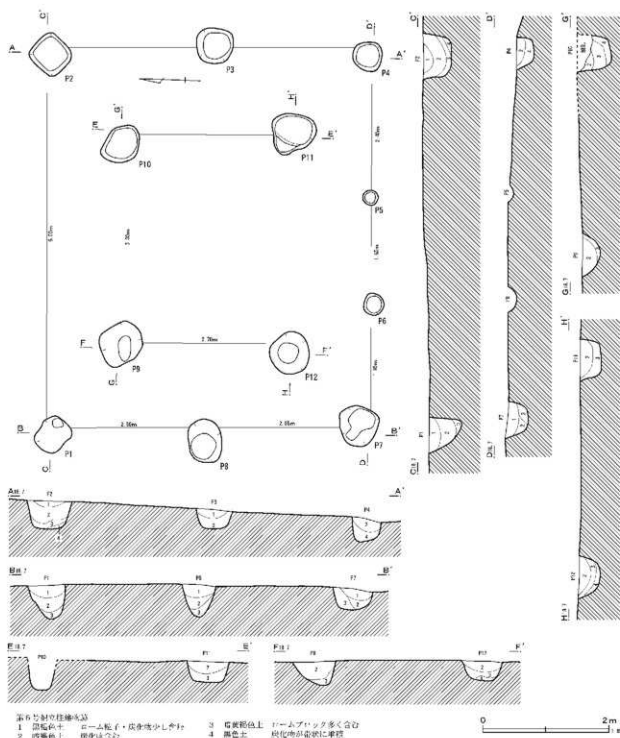
0 2m
1:100

などという四天柱とは異なり、建物の側柱となる可能性もある。この場合、外周の柱穴は四面堂形式の屋根庇や、縁を支持していたとされる。

だが、梁中間柱のP3・P8は、意図的に外側にずらされている気配もある。この柱配置を重視

すると、中央の4柱は内陣を支える束柱であったことも考えられる。

いずれにせよ、南面の小規模な2穴は、若干の片寄りがあるものの、建物への昇段施設と考えられ、平入りの高床構造が想定できる。



第142図 第6号掘立柱建物跡

柱穴の埋土では柱痕は見つからなかった。炭化物が帯状に堆積する4層の黒色土が他の建物に比して異質であり、立柱に際し、柱を受けるための特別な工法が用いられたともとれる。

遺物は、P12より平安時代の土師器片1点が出土した。小片であるため、時期判定の根拠にはなりにくい。柱穴の掘り方形態や覆土の特徴などを総合して、南調査区の集落と同様、平安時代に構築されたものと判断できる。

第7号掘立柱建物跡 (第143図)

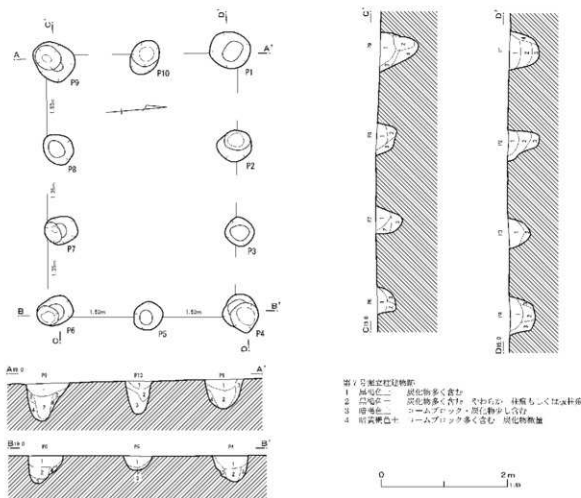
S—4グリッドで検出した。東西に長い2間×3間の側柱建物で、桁方向の中軸方位はN—85°—Wである。梁間は等間であるが、桁側は西側の柱間がやや広い。また、四周の柱穴が対角線にあ

わせた形で掘削され、さらに中間柱より外側に張り出して配置されている気配がある。いずれにせよ、南調査区と同規格建物よりは規模に劣る。

柱穴掘り方の埋土は、柱根部分の名残である2層や抜柱後の流入土である1層が黒褐色で、立柱時の補填土である3層・4層はやや黄色味を帯び、ロームブロックを含んでいる。

確認面から底面まで、1・2層が整然と堆積している状況はないことから、建物の放棄後、すべての柱が撤去されたと思われる。

遺物は出土しなかったが、柱穴の掘り方形態や覆土の特徴、建物の梁桁比などから、平安時代に構築されたものと判断した。



第143図 第7号掘立柱建物跡

2. 中世以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

第8号掘立柱建物跡 (第144図)

L-16グリッドで検出した。一部が攪乱破壊されているが、他柱穴の並びより、P1にあたる1穴を推定し、掘立柱建物跡と認定した。

残存部からすると、建物の基調は東西に長い2間×2間の側柱建物であるようだが、西側梁間の1穴がない。攪乱部にあたるとも考えられるが、その範囲は限定的で、P1・P7間の距離が東梁より短いこともその証左となるだろう。

桁方向の中軸方位はN-85°-Eで、多少のゆがみがあるものの、梁桁側とも柱間は等間である。柱痕は、東側の5穴でそれらしき黒褐色土から遺存していたが、残存部が浅いため、確定はできない。

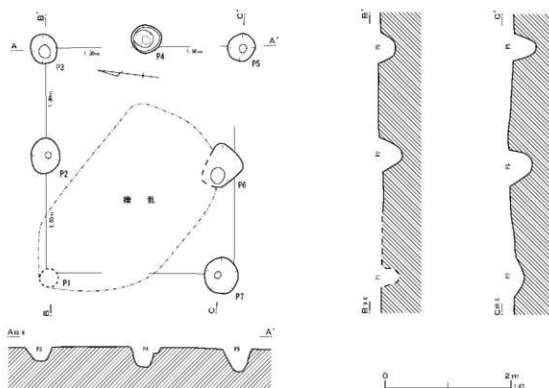
遺物は、P2・P4より、平安時代の土師器3点、須恵器1点が出土したが、いずれも小片であるため混入したものと判断できる。

第9号掘立柱建物跡 (第145図)

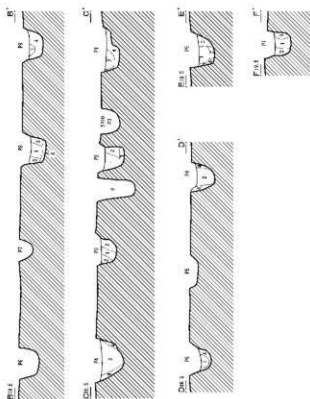
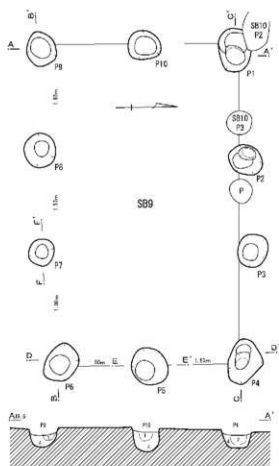
K・L-15グリッドで検出した。2間×3間の側柱建物で、東西に長い。柱穴の間隔は、梁方向では等間で、桁方向では中央が両側より1尺狭く、梁間と同じ柱間が設定されている。

桁方向の中軸線から算出した軸方位はN-89°-Wである。柱穴の形態は円形が基本で、掘り込みは浅いものの、柱痕もしくは抜き取り痕が1層として観察できた。同じように、2層は破壊を伴う抜き取り痕で、3層・4層が立柱の際の補填土と考えられる。

遺物は、P7・P8より、平安時代の須恵器1点と近世の陶磁器類4点が出土した。いずれも小破片で、構築期判定の根拠にはなり得ないが、柱穴の形態や覆土の特徴より近世期に構築されたものと推定できる。

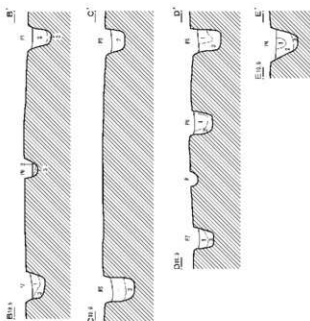
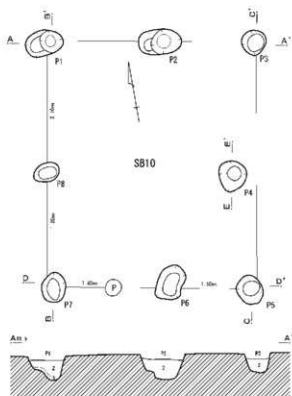


第144図 第8号掘立柱建物跡



第9号掘立柱建物跡

- 1 赤褐色土 ローム砂子・ブロック構造、柱痕が浅く残存
- 2 黄褐色土 ローム砂子・黄褐色、ロームブロック多量含む 柱痕が取り残
- 3 黄褐色土 ローム砂子多く含む ロームブロック含む
- 4 暗褐色土 ローム砂子・ブロック土体

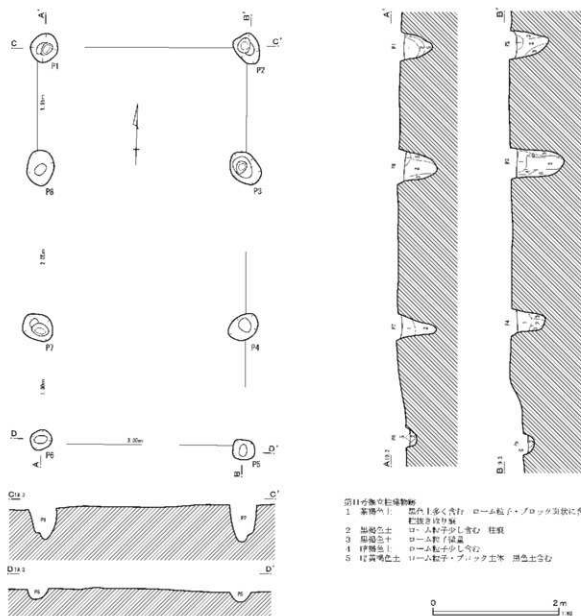


第10号掘立柱建物跡

- 1 暗褐色土 ローム砂子少量
- 2 黄褐色土 ローム砂子・ブロック多量含む
- 3 黄褐色土 ローム砂子・ブロック多く含む



第145図 第9号・第10号掘立柱建物跡



第146図 第11号掘立柱建物跡

第10号掘立柱建物跡 (第145図)

K・L-15・16グリッドで検出した。2間×2間の側柱建物だが、桁間の1穴が建物の内側に設置されている。

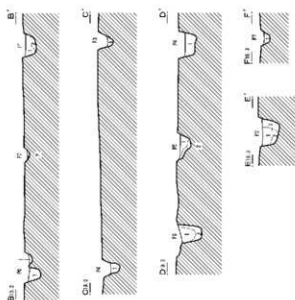
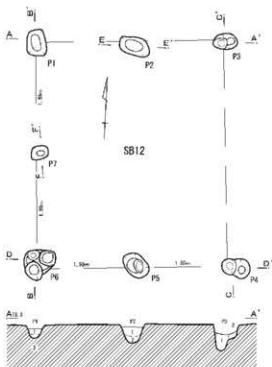
桁方向の中軸方位はN-14°-Eである。柱間は、梁桁ともに間隔を違えているが、総体で正確な長方形を成しており、内側に設置されたP4も意図的にずらされたと考えられる。柱穴の大半は立ち腐れの痕跡を見ることができなかったが、同

じ1層ながら、P4の遺存状況はこれに相当するかも知れない。

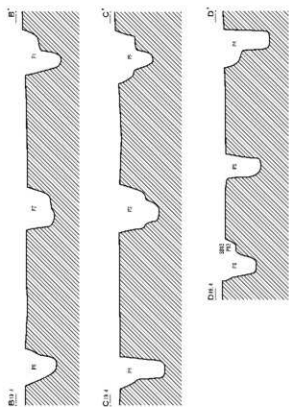
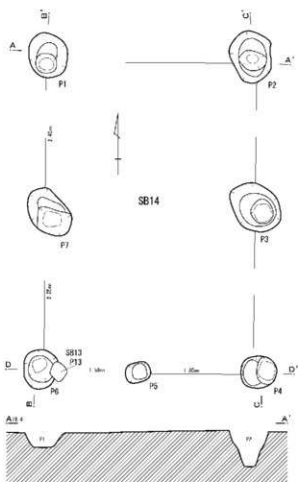
遺物は、P1・P2・P3・P5より平安時代の土器類2点、近世の陶磁器類2点、砥石1点、寛永通寶1点などが出土したが、柱間や柱穴の特徴から、近世期に構築されたと判断できる。

第11号掘立柱建物跡 (第146図)

J・K-13・14グリッドで検出した。1間×3間の側柱建物で、桁方向の中軸方位はNである。

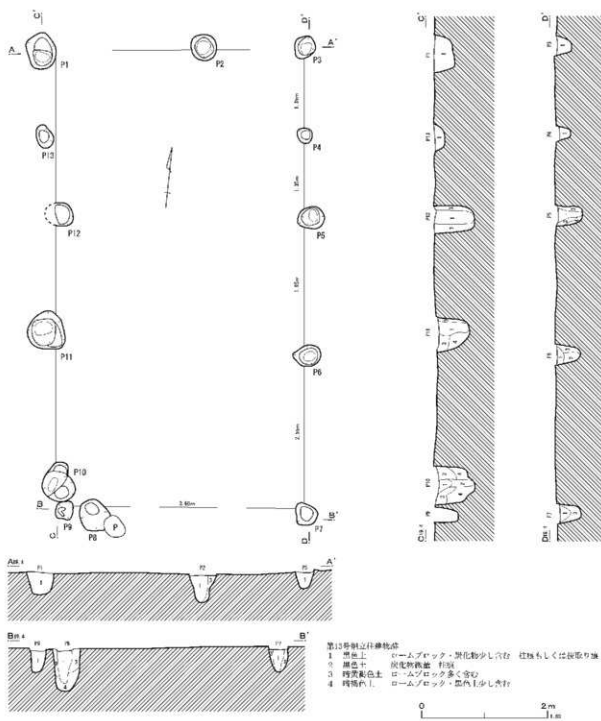


- 図147号掘立柱建物跡
- 1 黒色土 土を少し含む
 - 2 粘質褐色土 ワーム穴 黒色土少し含む
 - 3 赤褐色土 黒色土・ワーム穴・ブロック塊散在



0 2m
1m

第147図 第12号・第14号掘立柱建物跡



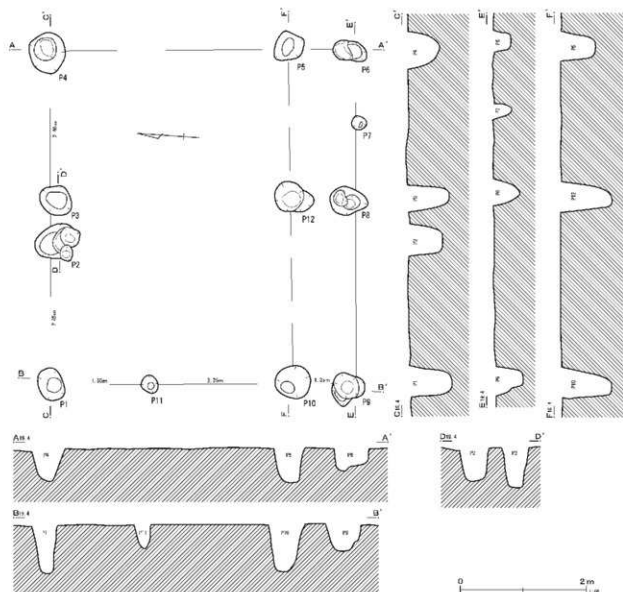
第148図 第13号掘立柱建物跡

柱間は、中央が広く、両側が狭い。柱穴開口部は径0.4~0.5m程度で、周辺の小穴と混同することはない。

南方の地山が第1号溝跡に向かって削平されており、その付近の柱穴は浅かったが、本来はP2・

P3のようなしっかりした掘り方を設置したと考えられる。半数を超える柱穴で、2層にあたる柱根の痕跡を発見していることから、抜き取りは慎重に行われたと考えられる。

遺物は、出土していない。



第149図 第15号掘立柱建物跡

第12号掘立柱建物跡 (第147図)

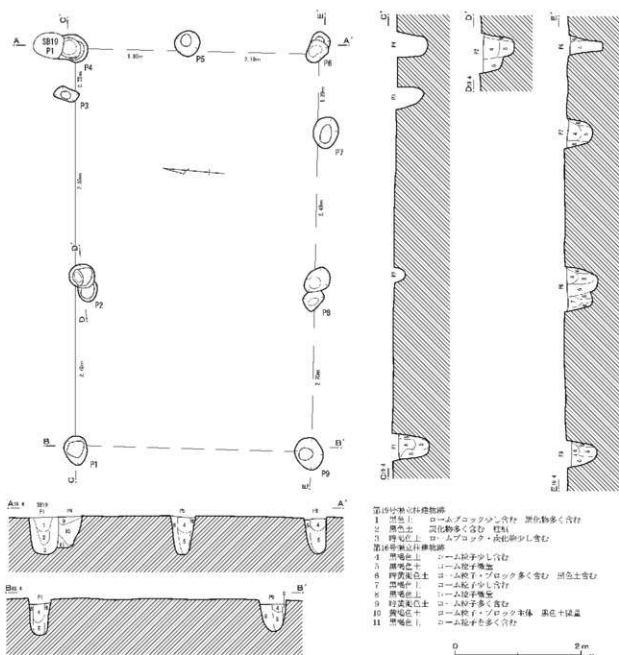
K・L-13グリッドで検出した。2間×2間の南北棟である。桁方向の中軸方位はN-1°-W、柱間は等間であるが、東側梁間の中間穴がない。対面するP7の規模からすれば、浅い柱穴が消失してしまった可能性もある。明確な柱の立ち腐れ痕は発見できず、最終堆積の1層は柱抜き取り後の流入土と考えられる。

遺物は、出土していない。

第13号掘立柱建物跡 (第148図)

K-11・12グリッドで検出した。第19号掘立柱建物跡と重複するが、柱穴は競合しない。また、第139号土壌とも重複するが、本掘立柱が新規に構築されたことを確認段階で認識できた。

大略2間×4間規模の南北に長い側柱建物で、桁方向の中軸方位はN-5°-Wである。柱穴配置や本数が片寄りがあり、桁間は南方が一律に広い。柱穴内は柱の立ち腐れ痕、あるいは抜き取り痕の炭化物含む黒色土がよく残っており、抜き取られ



第150図 第16号掘立柱建物跡

たとしても、慎重に行われたと想像できる。

遺物は、出土していない。

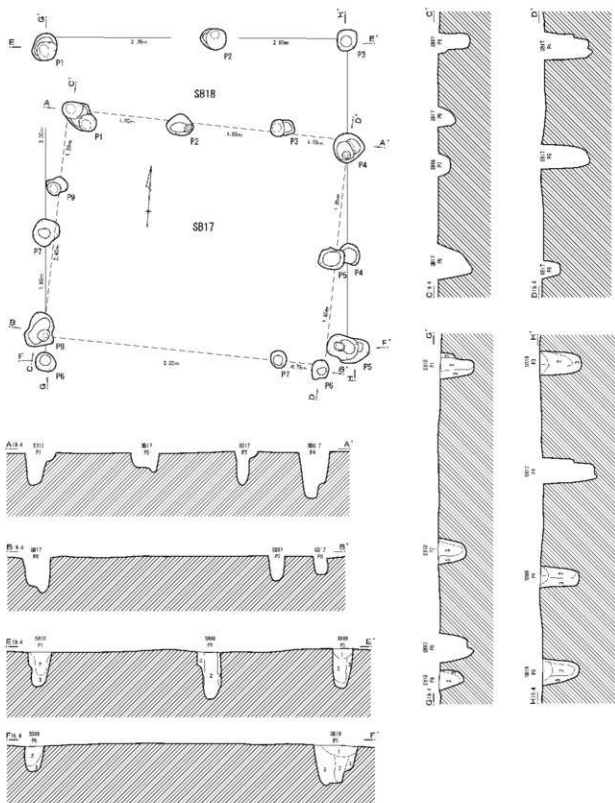
第14号掘立柱建物跡 (第147図)

K-11グリッドで検出した。第13号掘立柱建物跡と重複するが、直接ではないため、先後は不明である。柱穴配置の基調は2間×2間の南北棟で、桁方向の中軸方位はN-3°-Wである。梁間の一方を欠き、同じP6は桁並びの6穴と較べると規

格が一段下がる。また、確信はないが、結線上の2穴も本掘立柱に付属するものとして扱った。

柱穴の埋土は、中央に黒褐色の柱痕あるいは慎重な抜き取り痕が残るものが多く、暗褐色の補填土とは歴然とした差があった。

遺物は、P6より平安時代の須恵器が出土したが、小片で混入したものと考えられる。覆土の特徴や柱穴の形態は近世の他掘立柱と類似する。

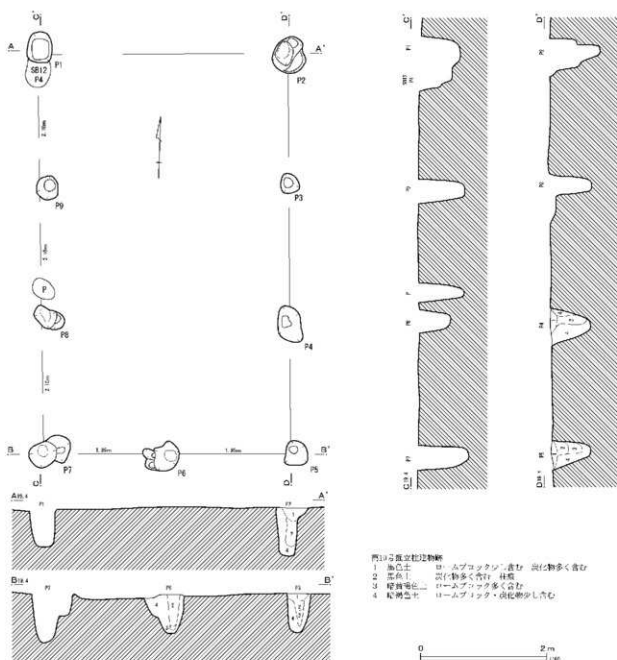


第15号 掘立柱建物跡

- 1 掘立柱ニ ヨ・ムブロック少し含む 炭化物・瓦土粒少量
 2 腐植土 炭化物少し含む 丹土
 3 埋戻土上 コーンスブリック多く含む

0 2m

第151図 第17号・第18号掘立柱建物跡



第152図 第19号掘立柱建物跡

第15号掘立柱建物跡 (第149図)

J・K-11・12グリッドで検出した。2間×2間相当の東西棟で、桁方向の中軸方位はN-1°-Wである。東の梁間を1穴欠くが、南面には底穴を有し、東の中間には小規模だがもう1穴が設けられる。

柱穴の埋土は、一部に柱痕もしくは大規模な破壊を伴ね抜き取り痕が認められるものの、大半

は再掘削らしき痕跡が見られる。このことから、重複する第16号掘立柱建物跡の構築を機に建物が取り払われたと解釈できる。

遺物は、P1・P5より平安時代の須恵器2点が出土したが、いずれも小片であり、柱間の配置や柱穴の形態などから、本掘立は近世期に構築されたと推定される。

第16号掘立柱建物跡 (第150図)

J・K-11・12グリッドで検出した。第15号掘立柱建物跡と重複し、東の梁列は第19号掘立柱建物跡の西桁設置線と合致する。第19号とは柱穴が重なり合っており、第19号の後出が確認できた。基本形は2間×3間の側柱建物を目指しているようだが、柱間はいずれも等間とはならない。桁方向の中軸方位はN-87°-Eである。

柱穴は、多くで黒褐色土の柱痕が認められ、P8では改築痕を見つけた。しかし、同じ2穴構造のP2ではこれを発見できなかった。

遺物は、出土しなかった。

第17号掘立柱建物跡 (第151図)

K・L-11グリッドで検出した。重複する第18号掘立柱建物跡との先後は不明である。2間×3間の東西棟のようだが、柱間が定まらない。しかし、側柱建物としての体裁は整っており、桁方向の中軸方位はN-86°-Wとなる。埋土は、P4・P5に柱痕らしき痕跡を認める他はかなり乱れている。雑に柱を抜き取られたようである。

遺物は、P8より時代不明の陶磁器小片が出土した。柱穴形態や覆土の特徴から、近世期に構築されたものと考えられる。

第18号掘立柱建物跡 (第151図)

K・L-11グリッドで検出した。第17号掘立柱建物跡と重複するが、先後は不明である。建物の基調は2間×2間の南北棟のようで、梁桁の規模がほぼ同等である。南北方向の軸方位はN-6°-W、柱間は南に片寄って中間穴が設けられる。柱穴の埋土は、黒褐色土の柱痕が多く残る。

遺物は、出土しなかった。

第19号掘立柱建物跡 (第152図)

K-11・12グリッドで検出した。第13号掘立柱建物跡と重複するが競合はないため、先後は確定できない。また、第16号掘立柱建物跡とは、断面観察の結果、本掘立が後出することを確認した。

遺物は、2間×3間の南北棟だが北側の梁間柱

穴を欠く。桁方向の中軸方位はN-3°-Wである。検出された柱穴間は梁桁ともに等間で整然と配置されている。

柱穴内の埋土は、1層・2層の黒色土が柱の立ち腐れ、もしくは抜き取り痕で、ロームブロック含む7層が柱受の突き固め土、8層が立柱時の周辺補填土と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第20号掘立柱建物跡 (第153図)

M・N-12・13グリッドで検出した。2間×3間の東西棟で、桁方向の中軸方位はN-78°-Wである。柱間は、梁と、西桁は等間であるが、東側だけが若干長い。柱穴の埋土は、四隅に柱痕らしき黒褐色土が認められたが、他は乱れていた。

遺物は、出土しなかった。

第21号掘立柱建物跡 (第153図)

K-13グリッドで検出した。大略2間×3間の東西棟で、桁方向の中軸方位はN-84°-Eである。柱間は梁間のみ等間、桁方向はすべて間隔を異にする。柱穴が浅いため、埋土における柱痕の痕跡等は特定できなかった。

遺物は、出土しなかった。

第22号掘立柱建物跡 (第154図)

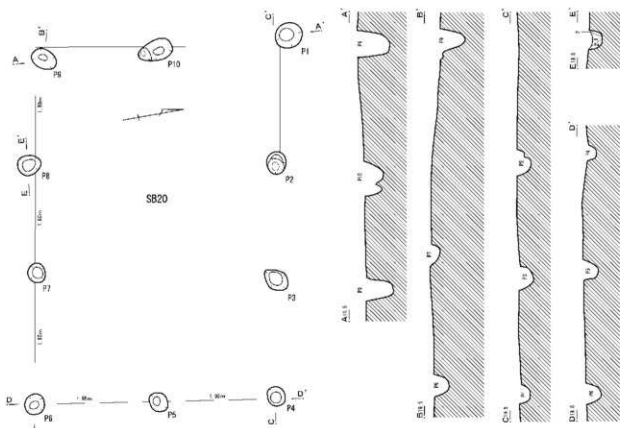
L-15グリッドで検出した。一部中間柱の片寄りもあるが、同規模の梁桁から、建物は2間×2間と考えられる。等間の東西方向を梁とし、桁方向の中軸方位を算出するとN-5°-Eとなる。埋土は、柱抜き取り後の流入土が1層・2層の暗褐色土、3層が立柱時の補填土だろう。

遺物は、出土しなかった。

第23号掘立柱建物跡 (第154図)

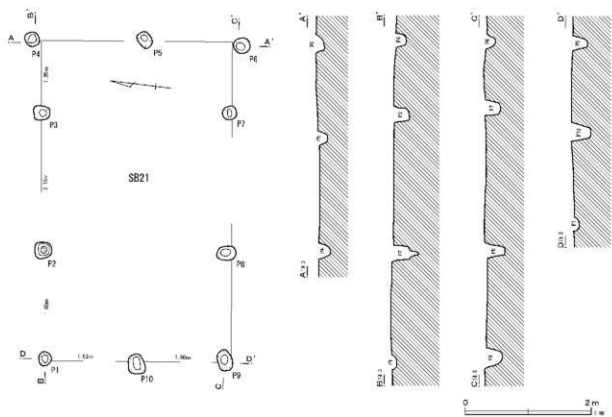
L-11グリッドで検出した。4柱のみの建物だが、住居跡の柱穴としては間隔が広すぎる。桁方向の中軸方位はN-3°-Eである。4穴ともしっかりとした掘り方を備えており、黒褐色土の埋土が中央に遺存していた。

遺物は、出土しなかった。

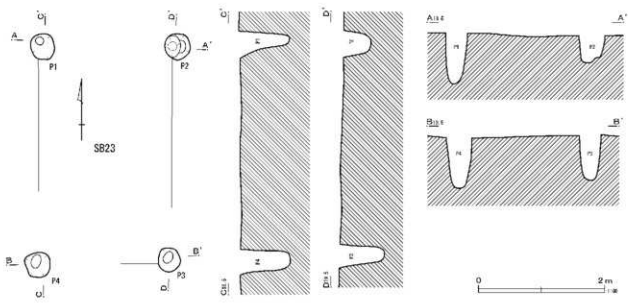
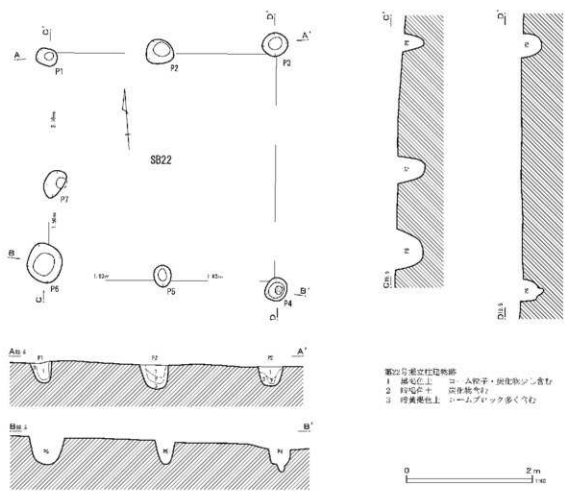


第20号竪立柱建物跡

1 黒褐色土 2 一入粒了少差 しまり器 3 暗褐色土 4 一入粒了中や多く含む



第153図 第20号・第21号竪立柱建物跡



第154図 第22号・第23号独立柱建物跡

(2) 柵列

第1号・第2号柵列 (第155図)

L-10・11グリッドで検出した。第132号土塊と重複するが、遺構確認時に両柵列の後出を判断できた。両者は至近で並列しており、共存、もしくは関連をもつものと判断し、一括する。

調査区北部の近世掘立柱建物跡群の中にあるが、そのいずれとも重複しない。また、両者ともN-4°-Wの軸方位をとり、代表的な第13号掘立柱建物跡の桁方向とも一致する。

柱穴数は、第1号が18本、第2号が15本と違いはあるが、その両端は共通しており、同じ規格のもとに設置されたことは疑いがなく、柱穴間隔は0.6mから隣接するものまでまちまちだが、掘立間を画する垣のような構造物が想定できる。

柱穴の覆土は、ロームブロック多く含む暗褐色から暗黄褐色土で占められており、これは、近隣の近世掘立柱群のそれとも類似している。掘立柱建物跡群のように、柱痕は発見できなかったが、これもより細い杭状物が固定されていた根拠になりうる。遺物は、出土しなかった。

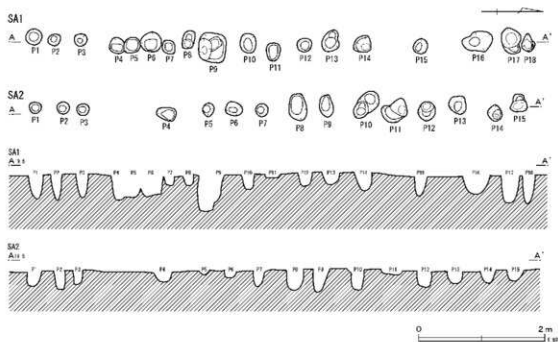
(3) 溝跡

第1号・第2号・第24号・第30号溝跡

(第156～160図)

第1号はI～N-10～18グリッド、第2号はM～O-10～15グリッド、第24号はI～L-10・11グリッド、そして第30号はJ～N-10グリッドに展開していた。第1号は調査区内で3度直角に屈曲し、北方では第2号と併走する。両者がともに東に屈曲する北方隅では、第24号溝跡が合流消滅し、第30号溝跡は本溝をはばかるようにクランクしている。以上より、4本の大溝は、ほぼ重なる土地利用のもとに繰り返し掘削された区画・区割の溝であると考えられる。

これら大規模な溝は、作業の効率を加味し、表土掘削の段階で、上層土を重機で掘り下げている。そのため、それぞれの掘削手順を確認することはできなかった。しかし、めざす方位はN-85°-E、あるいはN-5°-W前後で統一されており、前述のように、第30号が既存の第1号を意識して避けるなど、それぞれに有機的な関係があるのは確実である。



第155図 柵列

これらを軸として、例えば、第1号の直前で曲がる第9号溝跡などのように、小区画が追加されたり、付帯施設が追加されていったのだろう。

掘削・養生は何度となく行われたようで、第1号・第2号の並列部分では、実体としてさらに多くの「溝」が機能したと思われる。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類が中心で、第1号では、数点の平安時代須恵器・紡錘車を除き、近代を中心とする104点の陶磁器・瓦類が大勢を占め、時代不明の鉄片も1点出土している。第2号では、縄文時代の打製石斧1点、平安時代の須恵器3点があるが、近代を含む90点の陶磁器・瓦類が中心である。

また、第24号では、平安時代の須恵器2点と、近世から近代にかけての陶磁器類21点、黒曜石剥片1点、泥面子1点が出土したが、第30号では遺物が出土しなかった。

出土遺物の量比と時期から、本溝は近世に掘削され、その後養生や追加掘削が繰り返された上で、近代に廃絶されたと考えられる。

第3号・第4号・第15号溝跡 (第160図)

L・M-14~17グリッドに展開する溝で、第3号は第1号から派生するようにほぼ南北をめざし、途中より第4号が併走する。また、第15号は第3号と連動するように派生し、調査区東の攪乱中で消滅する。それぞれの軸方位はN、またはW-Eで大区画溝と類似しており、それぞれ小区画を成する用途が期待されていたと考えられる。

第3号より出土した遺物は、平安時代の須恵器2点を除く37点が近代主体の陶磁器類である。また、第4号では近世・近代の陶磁器・瓦類が25点出土し、第15号では遺物が出土しなかった。

第5号・第6号溝跡 (第158図)

調査区南西端のE-15・16グリッドで検出した。併走する小規模な溝で、ほぼ南北に向かっており、大区画と一致する。第16号・第17号のように、長く併走して両者間が通路状になるものか、

第14号・第21号のように、大区画内の端部施設に利用されたのかは判断できない。

双方とも、遺物は出土しなかった。

第7号・第8号溝跡 (第158図)

G-15・16グリッドで検出した。ほぼ南北を指し示す溝で、第7号の北端のみ第8号が併走する。両者の間は狭く、併存連携して溝間が利用されたというよりは、小区割が繰り返された結果として残された平行溝だろう。

遺物の出土は、第7号からがもっぱらで、近世・近代の陶磁器・瓦類を43点発見した。第8号では黒曜石の剥片1点が出土したのみである。

第9号・第11号溝跡 (第158・159図)

J~L-14・15グリッドで検出した。両者とも第1号溝跡に平行する東西溝が基調となり、第9号は屈曲南行する第1号に遮られるかのように、やはり南に屈曲する。さらに、第11号は屈曲した第9号を目安とするかのように終結する。

両者もやはり小区割の一部と考えられるが、遺物も出土せず、詳細は不明である。

第10号溝跡 (第159図)

J-16グリッドで検出した。東端が周回し、西端は第1号溝跡を目安に消滅する。また、同溝跡との合流点では第26号土壇と重複する。あるいは、同溝は本溝の付属施設なのかも知れない。

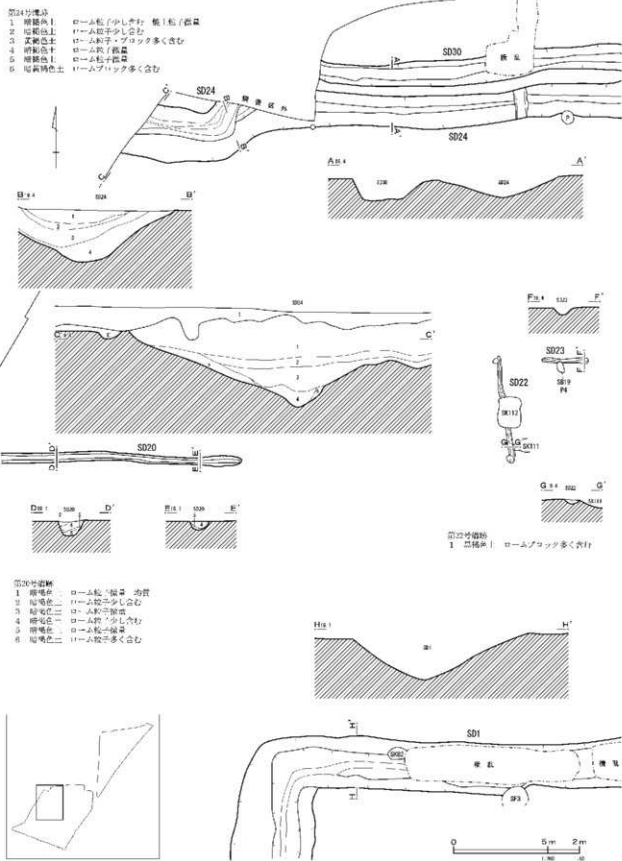
主要溝部の軸方位はN-85°Wと、大小区画溝の方位性と合致するが、付属施設存在から、区割を目的としたものでないのは確かだろう。

遺物は、平安時代の須恵器2点、近代の陶磁器類5点が出土した。

第12号溝跡 (第159・160図)

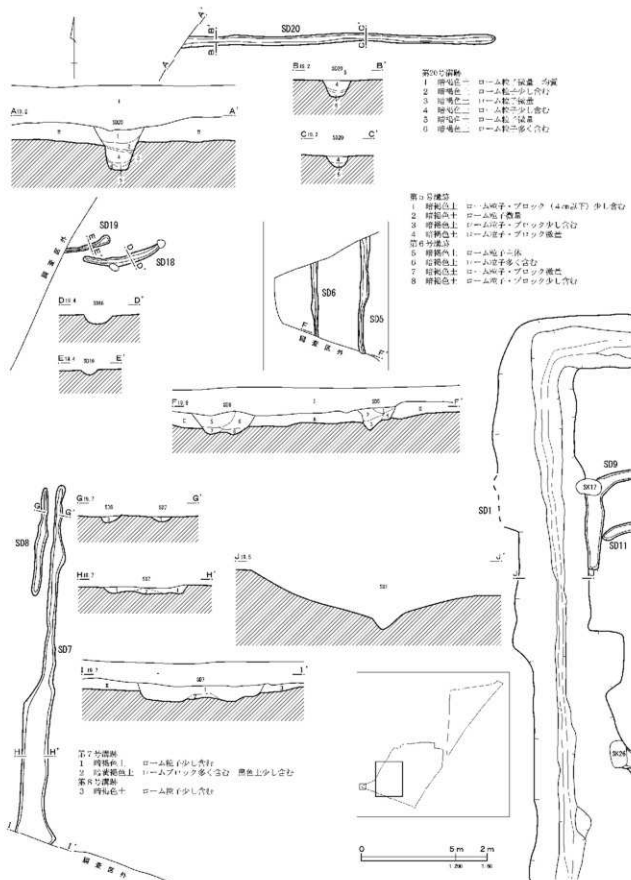
M-15グリッドで検出した。一旦途切れるが、小さな溝が窪み状にめぐる。しかし、用途を類推できる痕跡は発見できなかった。小区割を意図したと考えられる第3号溝跡をまたいで掘削されており、他溝とは時期が異なるかも知れない。

遺物は、出土しなかった。

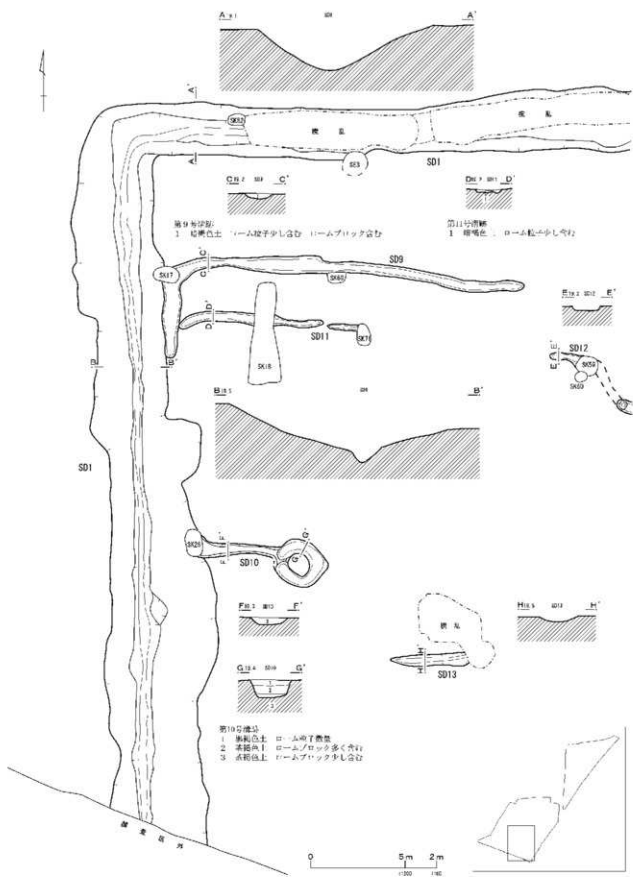




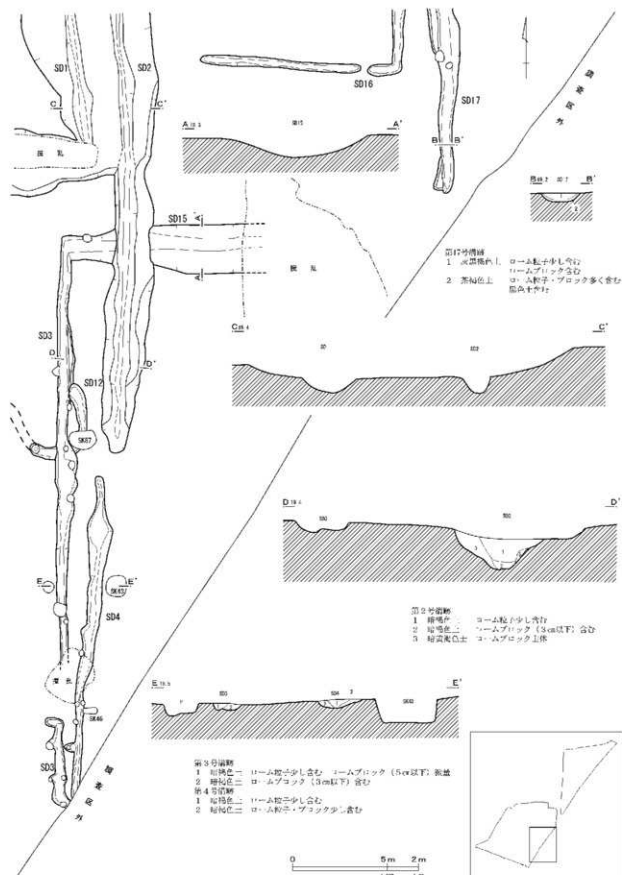
第157図 溝跡(2)



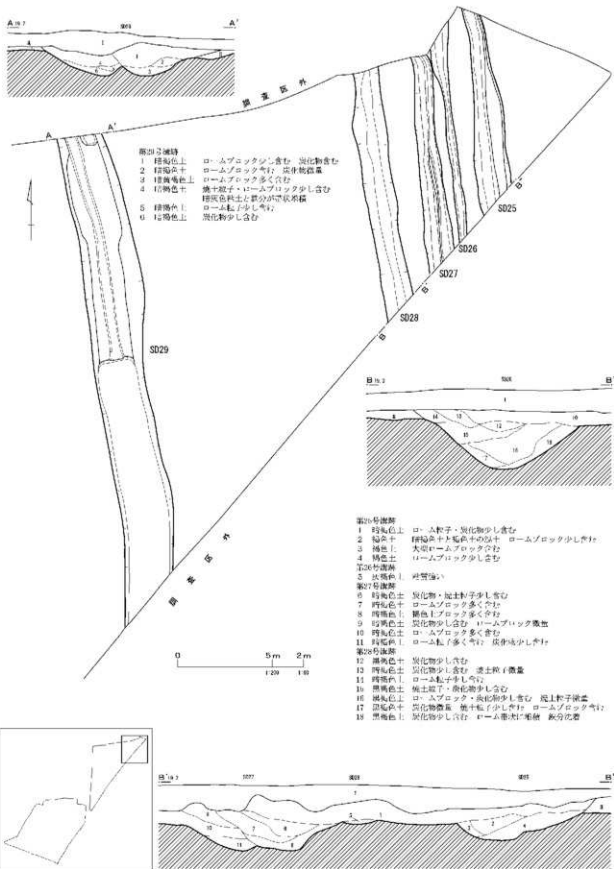
第158図 溝跡 (3)



第159図 清跡(4)



第160図 溝跡(5)



第161図 溝跡(6)

第13号溝跡 (第159図)

K-17グリッドで検出した。近隣に連携をもつ溝は存在せず、推定長が5から6mと短い、めざす軸方位はN-87°Eと、大区画を意識しているのは確実である。

遺物は、出土しなかった。

第14号・第21号溝跡 (第157図)

M・N-11グリッドで検出した。部分的に途切れ、溝中に小穴を追加するなど、特徴を同じくする溝がN-82°E前後角度で併走する。第1号・第2号溝跡とも平行し、両端は第16号など、直交する溝を目安に途切れていることから、大区画を意識していることは確実である。

遺物は、第14号より平安時代の須恵器2点、近代の陶磁器類1点が出土したにすぎない。

第16号・第17号溝跡 (第157・160図)

M・N-11~14グリッドで検出した。N-1°W前後の方位性を保ちながら併走するが、第16号は南方で直角に西方をめざす。また、第17号も、第1号あるいは第15号溝跡の延長線を意識したような位置で途切れており、結果として二重の長方形区画を作り出している。

遺物は、第17号より近世から近代の陶磁器2点が出土した。

第18号・第19号溝跡 (第158図)

調査区南西端のG・H-13グリッドで検出した。双方ともに小規模で南に張り出す弧状に展開することも共通しており、同じ用途のもと掘削されたと考えられる。平面の特徴から区画ではなく、個別施設の一部である可能性が高い。

双方ともに、遺物は出土しなかった。

第20号溝跡 (第156・158図)

H・I-12グリッドで検出した。N-89°E前後の方向で東西にのびる単独の溝である。第1号の南側と第24号の西クランク部を結ぶ線上で途切れており、両者のほぼ中間に展開している。さらに、第7号などと組めば、第1号のクランク幅

に四敷する長方形区画を成すこととなる。

遺物は、平安時代の土師器1点と、近世から近代にかけての陶磁器類7点が出土した。

第22号・第23号溝跡 (第156図)

K-12グリッドで検出した。おおよそN-5°-1°Wをめざす第22号と、ほぼ直交するように第23号が掘削されている。第22号の南端は第20号の延長上にあたるが、規模からして区画を意図したとは考えられず、個別施設の可能性が高い。

双方ともに、遺物は出土しなかった。

第25号~第28号溝跡 (第161図)

調査区最北端のV・W-1~3グリッドで検出した。4条がおおよそN-6°-1°Wをめざして併走しており、ずれはあるが、同一の区画線を意図したものと考えられる。

土層断面には、第28号を皮切りに第25号まで、時期とともに東方の溝に順に遷移した経緯が残されていた。また、前代の溝の名残の凹地も開口したままの状態が見て取れた。

遺物は、第25号より平安時代の須恵器1点と近世から近代にかけての陶磁器類3点、第27号より平安時代の土師器・須恵器3点と、近世から近代にかけての陶磁器類8点、第28号よりは平安時代の土師器26点と須恵器4点が出土した。

このうち、もっとも古くに掘削された第28号からは平安時代の遺物が集中しているが、溝の断面形態や平行溝の時期を加味すると、近世期に掘削されたものと判断できる。

第29号溝跡 (第161図)

U-2~5グリッドで検出した。大略N-8°-1°Wをめざしており、第25号溝跡などと平行することから、これらとの関係が想定される。

北側調査区壁での断面観察では、複数回の養生が繰り返されたことが見て取れた。時とともに東に遷移するのは第25号~第28号と共通する。

遺物は、出土しなかった。

(4) 土壌

第1号土壌 (第162図)

E・F-16グリッドで検出した。一部が調査区外にかかる半円丸方形の平面形はおおよその察しがつく。断面形は典型的な鍋底状で、遺物は出土しなかった。

第2号土壌 (第162図)

F-16グリッドで検出した。平面形長楕円の小規模な土壌である。長軸方向での断面形は鍋底状で、覆土はロームブロックが多く混入する暗褐色から黄褐色土が堆積していた。

遺物は、近世から近代の陶磁器類4点が出土している。

第3号土壌 (第162図)

G-16グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は、おおよそ鍋底状である。覆土は、ローム粒子多く含む黒褐色土のみが観察できた。

遺物は、出土しなかった。

第4号～第6号土壌 (第162図)

G-15・16グリッドで検出した。覆土に微妙な色彩差があるものの、3基は均等な間隔を置いて並列しており、近い時期に同じ用途目的で構築されたものと想定できる。第5号が第7号溝跡に破壊され、第6号が第1号住居跡を破壊して掘削されている。

三者の平面形はほぼ円形で、深さも確認面から0.2m内外と似通っている。覆土は、黒褐色土にローム粒子が混入するが、第4号ではこれが暗褐色化している。

遺物は、第4号で近世から近代の陶磁器類3点が出土した。

第7号土壌 (第162図)

G-16グリッドで検出した。第4号から第6号と位置的には規則性を見いだせないが、形態や覆土が共通しており、同種の土壌と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第8号土壌 (第162図)

H-16グリッドで検出した。第4号から第6号の並びの延長線上にあり、形態や覆土も共通することから、同種の土壌と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第9号土壌 (第162図)

H-15グリッドで検出した。単独で存在する小規模な土壌である。平面形はほぼ円形、断面形は鍋底状で、覆土はローム粒子・ブロック含む暗褐色系土が主体である。

遺物は、出土しなかった。

第10号・第11号土壌 (第162図)

H-16グリッドで検出した。隣接して構築された同種の土壌であるため、一括して記載する。平面形は円形、断面形は鍋底状で、覆土は上層に黒褐色土が堆積し、下層ほどに黄色味が増す。

遺物は、出土しなかった。

第12号土壌 (第162図)

H-16グリッドで検出した。不整楕円形を呈する土壌で堀底に段差などは認められなかったが、至近に構築されている第11号と同様な円形土壌が重複しあったものかも知れない。覆土も同号に共通している。

遺物は、出土しなかった。

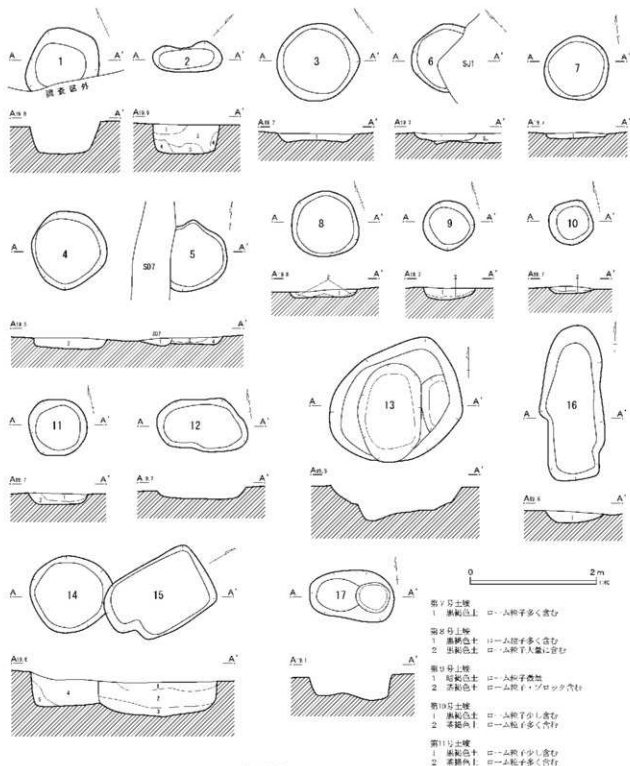
第13号土壌 (第162図)

I-15・16グリッドで検出した。平面形は大略楕円形だが、堀底は一定してない。複数の土壌が重複したかとも思え、意識して調査したが、その根拠は見いだせなかった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類が3点出土した。

第14号・第15号土壌 (第162図)

I-16グリッドで検出した。2基が重複しているが、断面観察の結果、第15号が後出すると判断した。第14号は平面円形で鍋底の掘り込みをもつ。第15号も断面形は共通しているが、開口部長方形



- 第2号土層
1 黒褐色土 コームブロック (5cm以下) 多く含む
2 暗褐色土 コーム粒子が少量含む
3 灰褐色土 コームブロック (5cm以下) 多く含む
4 赤褐色土 コーム粒子・ブロック多く含む
- 第3号土層
1 黒褐色土 コーム粒子多く含む

- 第7号土層
1 暗褐色土 コーム粒子少量含む
2 灰褐色土 コーム粒子多く含む
3 赤褐色土 湖面上吹寄せ含む
- 第8号土層
1 コーム粒子含む
2 黒褐色土 コーム粒子が含む
- 第6号土層
1 黒褐色土 コーム粒子多く含む

- 第9号土層
1 黒褐色土 コーム粒子多く含む
2 赤褐色土 コーム粒子・ブロック含む
- 第10号土層
1 黒褐色土 コーム粒子少量含む
2 赤褐色土 コーム粒子多く含む
- 第11号土層
1 黒褐色土 コーム粒子少量含む
2 赤褐色土 コーム粒子多く含む
- 第12号土層
1 灰褐色土 コーム粒子・ブロック多量含む
2 赤褐色土 コームブロック (5cm以下) 多く含む
3 暗褐色土 コーム粒子・ブロック含む
- 第14号土層
1 赤褐色土 コーム粒子少量含む
2 黒褐色土 コーム粒子含む
- 第16号土層
1 赤褐色土 コーム粒子少量含む

第162図 中世以降の土層 (1)

の一端が弧状に張り出す。この突出部は別個の土壌であるとも想定したが、土層断面では一連のものとしかとらえることができなかった。

覆土は、第14号が黒褐色土主体であるのに対し、第15号はロームブロックが多い暗褐色から褐色系の色彩土で埋設していた。

遺物は、出土しなかった。

第16号土壌 (第162図)

J-14・15グリッドで検出した。平面形の基調は長方形だが、左右に微妙な段が残る。あるいは、この種の長方形土壌に多い反復構築の結果であるかも知れない。断面形は箱形から緩い鍋底形で、暗褐色土が埋土となっている。

遺物は、出土しなかった。

第17号土壌 (第162図)

J-15グリッドで検出した。第1号土壌と第9号土壌と重複するが、両溝の掘削途上に本壌を発見したため、先後関係は把握できなかった。

平面形は楕円形で、堀底は東側が一段低くなる。この段差からすると、2基の土壌が重複したことも充分考えられるが、前述したとおり、詳細を判断することができなかった。

遺物は、出土しなかった。

第18号土壌 (第163図)

J・K-15グリッドで検出した。長方形の土壌が2基重複しているが、別個の土壌番号を付与せずに報告をむかえてしまった。掘り込みは箱形で、双方とも覆土は黒褐色が基調である。

遺物は、出土しなかった。

第19号・第20号・第21号土壌 (第163図)

J-15グリッドで検出した。近い範囲に小規模な土壌が集中していた。また、小穴も同様に集中しており、3基の一部もこの種に含まれるものかも知れない。平面形は円形から楕円形で、断面形は鍋底から椀状である。

遺物は、出土しなかった。

第22号・第23号・第75号～第77号土壌 (第163図)

J・K-15・16グリッドで検出した。5基が連続して重複しているため、まとめて記載する。

第22号と第23号は東西に長い長方形で、軸方向も揃っており、規模の大小はあるが、有機的な関連が推察できる。断面形は鍋底から椀状で、覆土は暗褐色土を主体としている。

これに対し、第75号・第76号・第77号は、前記した長方形土壌より古くに構築されており、開口部が略円形で、鍋底状の断面形も共通する。

遺物は、第22号より近世から近代の陶磁器類33点と瓦1点、第23号より近世から近代の陶磁器類14点と鉄片2点が出土し、第75号・第76号・第77号よりは出土しなかった。

第24号・第25号・第78号土壌 (第163図)

J・K-16グリッドで検出した。3基が重複しているが、第78号と他の2基との先後関係は把握できなかった。第24号と第25号は、先後を認定したものの、位置関係から見ると同一墳であった可能性も考えられる。第25号は、いわゆる地下式墳のような形態を示し、入口部は階段状に傾斜を強めている。第24号はその前室的ら位置にあり、第25号に向かって一部が張り出す。

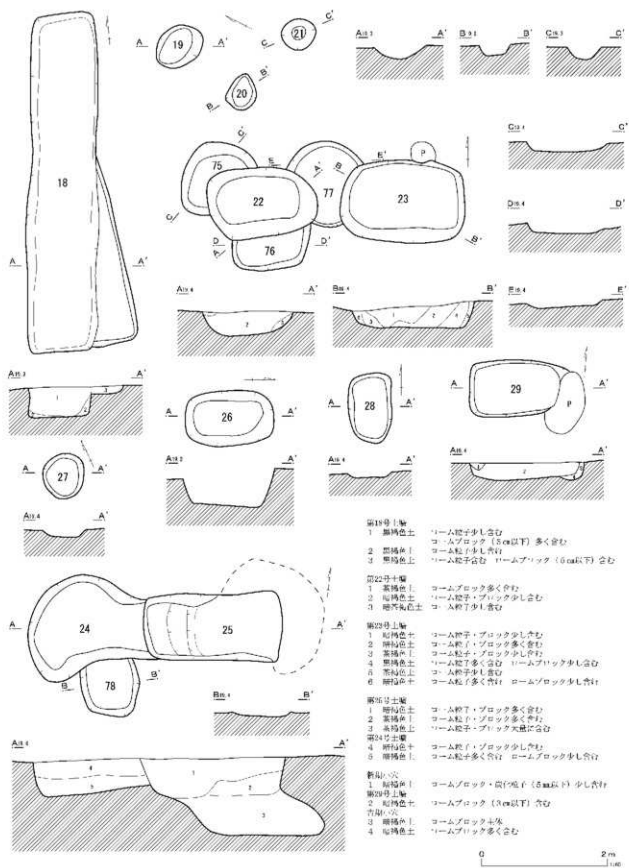
これに対し、第78号は、第28号土壌などと同じ形態と方位軸を示しており、共通する目的のもと構築された土壌と考えられる。

覆土は、暗褐色や茶褐色系土で一致しており、第25号は埋設時の崩落に起因するロームブロックが多く含まれている。

遺物は、第24号から平安時代の須恵器1点と、近世から近代にかけての陶磁器類27点、瓦2点、鉄片14点が、第25号より近世から近代にかけての陶磁器類が9点が出土した。対して第78号は、遺物が出土しなかった。

第26号土壌 (第163図)

J-16グリッドで検出した。第1号溝跡と第10号溝跡の合流点で第10号溝跡をふさぐように分



第163図 中世以降の土層 (2)

布する。同溝の東が平形に回るように終結していることから考えると、本墳もその付属施設とも考えられないわけではない。しかし、その根拠は見いだせなかった。開口部の形態は隅丸長方形、掘り込みは深く、墳底は鍋底状を呈する。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類1点が出土したにすぎない。

第27号土壌 (第163図)

K-15・16グリッドで検出した。小規模な円形土壌で、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第28号土壌 (第163図)

J-16グリッドで検出した。ほぼ南北に軸をもつ小規模な長方形土壌である。掘り込みは浅く、墳底は鍋底状を呈する。

遺物は、出土しなかった。

第29号土壌 (第163図)

K-16グリッドで検出した。2箇所小穴と重複しており、2穴の中間に構築されていることが断面観察から判断できた。開口部の形状は長方形で、第22号・第23号土壌とあわせて3基が直線上に分布しており、共通する認識のもと構築されたことがわかる。墳底は鍋底状で、覆土はロームブロックが多い暗褐色土の単一層であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類1点が出土したにすぎない。

第30号・第31号土壌 (第164図)

K-16グリッドで検出した。円形の土壌2基が重複しているが、断面観察の結果、第31号が後出することが確認できた。双方とも墳底は鍋底状だが、第31号の方が一段と深い。覆土は、ロームブロック・粒子を含む黒褐色から暗褐色土が中心で、第6号や第7号土壌と類似する。

両墳とも、遺物は出土しなかった。

第32号・第47号土壌 (第164図)

M-17グリッドで検出した。長方形と円形小

の土壌の重複である。土層観察では第47号が新規に構築されたものと判断したが、両者の重なり合いはわずかで、確定はできない。墳底は、第47号が皿状、第32号が鍋底状となり、覆土は、それぞれ黒褐色と茶褐色の単一層であった。

双方とも、遺物は出土しなかった。

第33号・第34号土壌 (第164図)

L-16グリッドで検出した。円形土壌の重複である。周辺にも第38号土壌などの円形土壌が点在するが、これらの関係は不明である。両墳とも断面形は鍋底状で、第33号の方が一段深く構築されている。覆土は、第33号が黒褐色土主体、第34号が暗褐色土主体と、若干傾向を異にする。

遺物は、第33号より近世から近代にかけての陶磁器類8点が出土した。

第35号土壌 (第164図)

K-18グリッドで検出した。調査区の南方に単独で分布する長方形土壌である。断面形は緩やかな鍋底状で、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第36号土壌 (第164図)

K-18グリッドで検出した。調査区の南方に単独で構築され、掘立柱建物跡と隣接するが、覆土に共通性はない。平面形はほぼ円形、断面形は緩い鍋底状であった。

遺物は、出土しなかった。

第37号土壌 (第164図)

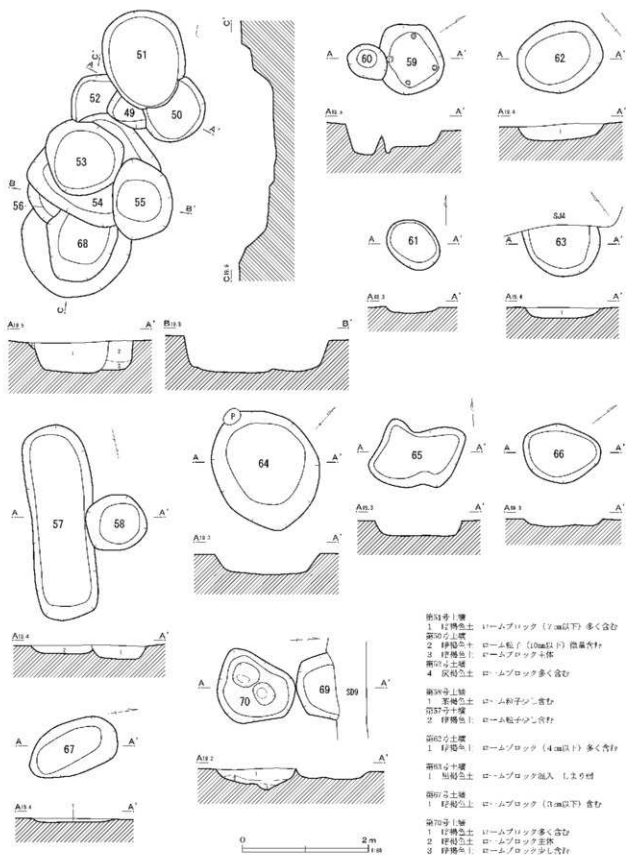
K-17グリッドで検出した。楕円の土壌である。北方がゆがむようだが、鍋底状の墳底は一定しており、北東を掘りすぎたかも知れない。

遺物は、出土しなかった。

第38号土壌 (第164図)

L-16グリッドで検出した。円形鍋底状の土壌である。掘り込みは深い。覆土はローム粒子多く含む暗褐色土の単一層であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類1点が出土したにすぎない。



- 第59号土層
 1 紅褐色土 ロームブロック (7cm以下) 多く含む
 第60号土層
 2 砂礫土+ ローム粒 (10mm以下) 微量含む
 3 砂礫土+ ロームブロック多量
 4 灰褐色土 ロームブロック多く含む
- 第69号土層
 1 茶褐色土 ローム粒子少なく含む
 2 砂礫土+ ローム粒子少なく含む
- 第62号土層
 1 砂礫土+ ロームブロック (4cm以下) 多く含む
- 第63号土層
 1 灰褐色土 ロームブロック散在、しりぞけ
- 第67号土層
 1 砂礫土+ ロームブロック (3cm以下) 含む
- 第70号土層
 1 紅褐色土 ロームブロック多く含む
 2 砂礫土+ ロームブロック多量
 3 砂礫土+ ロームブロック少し含む

第165図 中世以降の土壌 (4)

第39号・第40号土壌 (第164図)

L-16グリッドで検出した。おおそ円形を意図する2基の重複である。断面観察の結果、第40号が後出することを確認した。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色から茶褐色が主体である。

遺物は、両墳とも出土していない。

第41号・第42号土壌 (第164図)

L-16グリッドで検出した。後出する小穴を挟み、円形の第41号と楕円形の第42号が重複する。そのため両墳の先後は不明である。断面形は双方とも鍋底状で、覆土は暗褐色土が主体である。

遺物は、それぞれ近世から近代にかけての陶磁器類が1点ずつ出土したにすぎない。

第43号土壌 (第164図)

M-16グリッドで検出した。開口部形状は円形を意図するようだが、掘り上がりは隅丸方形に近い。断面形は典型的な鍋底状で、覆土はロームブロックが目立つ茶褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第44号土壌 (第164図)

M-16グリッドで検出した。開口部形状は楕円だが、墳底は南西に片寄っており、墳底形態から見ると用途的には円形であったと考えられる。覆土は暗褐色土主体で、遺物は出土しなかった。

第45号土壌 (第164図)

K-16グリッドで検出した。南北に軸をとる不整楕円形の土壌である。墳底も一定しておらず、継続的な使用を目的とした施設とはいえない。覆土は、暗褐色土の中央下層にロームブロックを多く含む層が分布している。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類2点が出土したにすぎない。

第46号土壌 (第164図)

M-17グリッドで検出した。小型長方形の小土壌で第4号溝跡とわずかに重複する。断面形はほぼ鍋底状、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第48号土壌 (第164図)

K-16グリッドで検出した。第45号土壌と並列しつつ分布する長楕円の土壌である。墳底は鍋底状で、覆土は暗褐色土のみが観察できた。

遺物は、出土しなかった。

第49号～第56号・第68号土壌 (第165図)

L-15・16グリッドにまたがって9基の土壌が重複しつつ見つかった。そのほとんどが円形鍋底状の土壌で、複雑に絡み合い、先後の判定をすべてにわたって行うのは困難であった。このうち、確定できたのは、第51号が第50号・第52号より後出することのみである。

覆土は、おおそ暗褐色土が主体で、ロームブロックの多寡によって分離が可能なものもあるが、全体にこれを識別するのは難しい。また、第52号は一部に灰褐色土が堆積していた。

出土遺物の帰属も判じがたい。第49号から第51号付近では、縄文土器が1点、平安時代の土器類が2点、近世から近代にかけての陶磁器類が37点、瓦片が1点、凝灰岩製の砥石が1点、鉄片が5点出土した。

また、第53号・第54号付近からは同期の陶磁器類5点が出土した。さらに、第55号からは同期の陶磁器類16点、瓦が1点、キセルが1点出土した。そして、第56号・第68号付近からは、同期の陶磁器類63点、瓦が4点、凝灰岩製の砥石1点、鉄片1点、判読不能の銭貨1枚が出土した。

遺物の様相から、これらの土壌はすべて近代に機能していたものと考えられる。

第57号・第58号土壌 (第165図)

L-15グリッドで検出した。両者の先後判定は重複部分が少なくおぼつかないが、第58号が後出すると判断した。

第57号は長方形の掘り込みを意図しており、墳底は平坦、覆土は暗褐色の土が主体である。また、第58号は円形の平面形と鍋底状断面形を呈する土壌で、覆土は茶褐色土が主体であった。

第57号から出土した遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類2点である。また、第58号では平安時代の土師器・須恵器が21点、近世から近代にかけての陶磁器類8点、石臼が1点出土した。平安遺物が多く混入しているが、陶磁器類の様相から、近代に構築されたものと判断でき、平安遺物の破壊をとまなう何らかの片づけ行為の反映と思われる。

第59号・第60号土壌 (第165図)

L-15グリッドで検出した。大小円形の土壌が重複しているが、その部分が少なく、もう一つ重複する第12号溝跡との先後も含め、構築順を判別できなかった。

断面形は、いずれも鍋底状であるが、このうち第59号には墳底の四隅に小穴が追加されている。だが、これが施設構築の痕跡かどうかは判断できなかった。

遺物は、第59号より近世から近代にかけての陶磁器類7点が出土した。

第61号土壌 (第165図)

L-15・16グリッドで検出した。楕円で鍋底状の断面形を意図する土壌である。掘り込みが浅く、遺物は、出土しなかった。

第62号土壌 (第165図)

M-15・16グリッドで検出した。やや楕円気味で鍋底状の断面形を呈するものである。覆土は、ロームブロックを多く含む暗褐色土の単一形成層であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類28点と、鉄片6点が出土した。

第63号土壌 (第165図)

M-15・16グリッドで検出した。第4号住居跡と重複しており、同住居跡を破壊している。開口部の平面形はほぼ円形、断面形は緩い鍋底状である。覆土は黒褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第64号土壌 (第165図)

L-14・15グリッドで検出した。開口部の形状はほぼ円形、断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類2点が出土したにすぎない。

第65号土壌 (第165図)

L-14グリッドで検出した。平面形が不整形だが、東西方向に長い楕円土壌の北西と南西に浅い小穴が重複したものかも知れない。覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第66号土壌 (第165図)

L-14グリッドで検出した。断面形鍋底状の浅い楕円土壌である。覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

第67号土壌 (第165図)

K・L-14・15グリッドで検出した。浅い楕円土壌である。覆土はロームブロック含む暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

第69号・第70号土壌 (第165図)

K-15グリッドで検出した。両墳ともおおよそ円形を意図していると考えられる。断面形は、鍋底状だが、第70号には2基の小穴が発見できた。断面観察では重複とは考えられず、同墳に伴うものと判断した。覆土は、双方とも暗褐色土が主体で、ロームブロックを含む。

両土壌とも、遺物は出土しなかった。

第71号土壌 (第166図)

K-15グリッドで検出した。南北に軸をとる長方形土壌で、第11号溝跡と重複するが、本墳が前期と判断した。覆土は、ロームブロック含む暗褐色から黒褐色土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第72号土壌 (第166図)

L-15グリッドで検出した。開口部円形の土壌であるが、墳底は北方に向かって片流れとなる。

覆土は暗褐色系土で、遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類6点が出土した。

第73号土壌 (第166図)

L-15グリッドで検出した。開口部長楕円の土壌で、掘り込みは浅く、遺物は出土しなかった。

第74号・第79号土壌 (第166図)

K-15グリッドで検出した。2基の円形土壌が完全に重複している。同一墳の段差かとも考えたが、断面には歴然とした差があり、別の土壌と判断した。双方とも断面形は鍋底状で、覆土は第79号が暗褐色、第74号がロームブロック主体の黄褐色土であった。

遺物は、両墳とも出土していない。

第80号・第81号土壌 (第166図)

K-15グリッドで検出した。楕円土壌2基の重複である。軸が直交することより、共通する用途のもとに繰り返して構築されたことも考えられる。墳底は平坦で、覆土はロームブロック多く含む暗褐色土で共通している。

遺物は、両墳とも出土しなかった。

第82号土壌 (第166図)

J-14グリッドで検出した。東方を攪乱で破壊されているが、東西に長い楕円の開口部形状と鍋底形の断面形は、ほぼ全容が把握できる。覆土は暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

第83号土壌 (第166図)

I-14グリッドで検出した。開口部形状が円形の小土壌である。断面形は椀形となり、墳底も平坦部がない。覆土は暗褐色系土で、遺物は出土しなかった。

第84号土壌 (第166図)

G-14グリッドで検出した。単独で存在する円形の小型土壌である。断面形は鍋底状で覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第85号・第86号土壌 (第166図)

G-14グリッドで検出した。楕円に近い不整形

の第85号と小型で円形の第86号がわずかに重複するが、その先後は判断できなかった。覆土は暗褐色系土で、両墳とも遺物は出土していない。

第87号土壌 (第166図)

M-15グリッドで検出した。第12号溝跡と重複するが、存在に気づくのが遅く、先後を把握していない。開口部は楕円形だが、南方にひしゃげる。断面形は鍋底状で墳底は一定している。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類1点のみが出土した。

第88号土壌 (第166図)

J-13グリッドで検出した。開口部は長方形で、平坦な墳底では5本の小穴を確認した。これらは本墳に付属するものではなく、より古くに穿たれたものと判断した。覆土は黒褐色土が主体で、遺物は出土しなかった。

第89号土壌 (第166図)

O-13グリッドで検出した。開口部楕円の深い土壌で、墳底までの傾斜に変化があるが、大略漏斗状で、墳底は平坦である。覆土は、ローム粒子を少量含む黒褐色土が変化なく堆積する。

遺物は、出土しなかった。

第90号・第91号土壌 (第166図)

N-14グリッドで検出した。第90号は攪乱に、第91号は第90号に破壊されている。第90号はおおよそ円形の土壌と考えられ、断面形は皿状となる。また、第91号は小型の楕円形で、東に向かう片流れの断面形となる。覆土は、暗褐色土が主体で、両墳ともに遺物は出土しなかった。

第92号土壌 (第166図)

O-13グリッドで検出した。単独小穴の後に構築され、第17号溝跡に破壊される。平面形は円形で、断面形状は鍋底状を呈する。覆土は暗褐色土が主体で、ローム粒子を含み、下層ほどにその量を増していく。

遺物は、出土しなかった。

第93号土壇 (第166図)

N-13グリッドで検出した。二重構造の円形土壇で、中央に小穴を追加する。下層に暗黄褐色土を堆積する覆土は一連の経過を示しており、小穴が本壇に伴うものと判断できる。

遺物は、出土しなかった。

第94号・第95号土壇 (第166図)

N-13グリッドで検出した。双方とも第7号井戸跡に破壊されているが、規模形態はおおよそ判断できる。両壇ともに円を基調とした平面形で、中央が窪む壇底上に黒褐色土が堆積する。

遺物は、第94号より近世から近代にかけての陶磁器類2点、第95号より同じく1点が出土した。

第96号土壇 (第166図)

M-13グリッドで検出した。単独で構築された楕円小土壇である。断面形はV字状で、壇底の平坦部は小さい。覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第97号土壇 (第166図)

L-13グリッドで検出した。南方が不整形化するが、掘削の意図は楕円であったと考えられる。断面形は鍋底状、覆土は暗褐色土中心であった。

遺物は、出土しなかった。

第98号土壇 (第167図)

M-12グリッドで検出した。ほぼ南北に軸を合わせる長方形土壇で、壇底は平坦である。覆土は暗褐色系土の単一層で、遺物は近世から近代にかけての陶磁器類1点のみが出土した。

第99号土壇 (第167図)

O-12グリッドで検出した。第17号溝跡と接するが、先後は不明である。楕円の土壇で、断面は鍋底状となる。覆土は暗褐色土が主体で、遺物は出土しなかった。

第100号土壇 (第167図)

O-12グリッドで検出した。小型の円形土壇で、断面形は椀状となる。覆土は暗褐色土が上層の一部に分布している他はローム粒子・ブロックで形

成された暗黄褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第101号土壇 (第167図)

N・O-12グリッドで検出した。第17号溝跡が中央で重複するが、先後を確認し損なってしまった。形態はやや撚形めいた長方形で、他の土壇と異なり、隅部がはっきりしている。掘り込みは浅いが壇底は平坦であった。

遺物は、出土しなかった。

第102号土壇 (第167図)

N-11グリッドで検出した。平面形は長方形から楕円形で、壇底は平坦である。重複する小穴との先後は不明で、遺物は出土しなかった。

第103号土壇 (第167図)

N-11グリッドで検出した。わずかに第17号溝跡と重複するが、その先後は不明である。平面楕円の土壇で、断面形は椀状となる。覆土は、中央上層に明度の強い土が分布しており、通常其自然堆積とは順序が逆になっていた。

遺物は、出土しなかった。

第104号・第105号土壇 (第167図)

L-12グリッドで検出した。軸長は異なるが、双方とも楕円の小規模な土壇で、第105号は壇底が不整形となる。覆土はいずれも暗褐色系土で、両壇ともに、遺物は出土しなかった。

第106号土壇 (第167図)

L-12グリッドで検出した。第10号井戸跡や小穴と重複するが、先後を確定できなかった。開口部は洋梨形で、壇底に窪みがあるが、鍋底状を意識して掘削されたと推定できる。覆土は、上層に暗褐色土、下層に黄褐色土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第107号土壇 (第167図)

L-11グリッドで検出した。楕円の土壇で、第2号柵列の柱穴3本と重複しているが、その先後は見分けられなかった。掘り込みは浅く壇底は平坦で、遺物は出土しなかった。

第108号土壌 (第167図)

L-11グリッドで検出した。第2号柵列の柱穴2本と重複するが、その先後は確定できなかった。楕円の小土壌で、断面形は椀状となる。

遺物は、出土しなかった。

第109号土壌 (第167図)

L-11グリッドで検出した。開口部形状楕円形の小土壌で、掘り込みが浅く断面形が確定できないが、鍋底状になると思われる。

遺物は、出土しなかった。

第110号・第111号土壌 (第167図)

K-12グリッドで検出した。複数の小穴及び第22号溝跡なども重複し、全形が不明であるが、楕円あるいは長楕円の土壌であると考えられる。掘り込みは、いずれも浅く、第110号は暗褐色土、第111号は暗黄褐色土が主体の埋土であった。

遺物は、両壌とも出土しなかった。

第112号土壌 (第167図)

K-12グリッドで検出した。第19号掘立柱建物跡や新期の溝跡・小穴とも重複するが、長方形の平面形は損なわれていない。掘り込みは浅く、黒褐色の埋土がわずかに残るのみであった。

遺物は、出土しなかった。

第113号土壌 (第167図)

K-12グリッドで検出した。平面形は長方形を意図しているようで、隣接する第112号と直交する方位軸で構築され、深さや覆土に含まれる粒子量も共通することから、同用途と推定できる。

遺物は、出土しなかった。

第114号土壌 (第167図)

K-11・12グリッドで検出した。開口部円形、断面鍋底状の土壌で、類似する第115号土壌と並列する。覆土は暗褐色土で、ローム粒子を多く含むが、これも第115号と共通する。

遺物は、出土しなかった。

第115号土壌 (第167図)

K-12グリッドで検出した。第114号と並列し、

平面および断面形、覆土の特徴や列化の傾向は南方の第4号～第6号土壌などとも共通する。

遺物は、近世から近代にかけての陶磁器類が1点出土した。

第116号土壌 (第167図)

K-11グリッドで検出した。周辺の小穴と規模がかわらないが、ロームブロックを大量に含む覆土から、周囲と差別化し、土壌として扱った。

遺物は、出土しなかった。

第117号土壌 (第167図)

J-12グリッドで検出した。断面形がなだらかな鍋底状となる円形土壌で、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第118号土壌 (第168図)

J-12グリッドで検出した。ほぼ南北に軸をとる長方形土壌で、断面形は箱形となる。覆土は、黒褐色土がもつばらで、自然堆積の一般的な傾向とは逆に、下層ほどローム混入物が減少する。

遺物は、出土しなかった。

第119号土壌 (第168図)

I-11グリッドで検出した。開口部円形、断面が鍋底状を呈する小土壌である。墳底には新期小穴が2本重複すると解したが、周囲にその分布がないことから、本墳に伴うことも考えられる。

遺物は、出土しなかった。

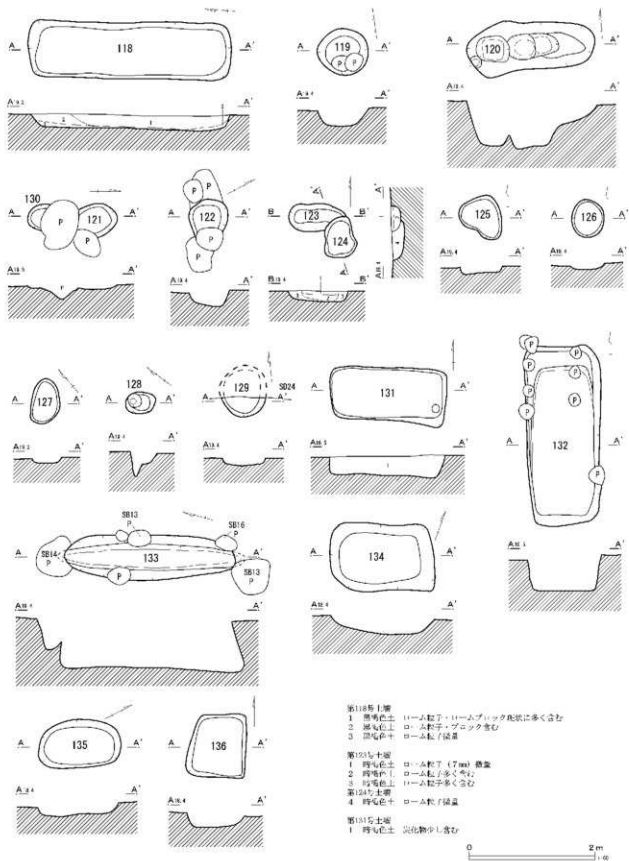
第120号土壌 (第168図)

I-11・12グリッドで検出した。ほぼ東西に向く長楕円の土壌である。墳底はいくつかの段差があるが、基調となる掘り方から逸脱するものではない。東側のテラスを基調とし、用途に応じて墳底を下げたものだろう。

遺物は、出土しなかった。

第121号・第130号土壌 (第168図)

L-12グリッドで検出した。第10号井戸跡をはじめ、いくつもの小穴と重複しており、詳しい観察は不可能であった。双方とも平面楕円の小土壌



第168図 中世以降の土壌 (7)

で、断面形は鍋底状となる。

両墳ともに、遺物は出土しなかった。

第122号土壌 (第168図)

J-11グリッドで検出した。4基の小穴と重複し、全形が把握しづらいが、開口部の形状は円形になると思われる。断面形はおおよそ鍋底状だが、北に向かって傾斜している。

遺物は、出土しなかった。

第123号・第124号土壌 (第168図)

K-12グリッドで検出した。楕円で小規模な土壌が直交するように重複している。断面観察の結果、第123号が後出すると判断した。いずれも断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土が主体で、第123号で部分的にローム粒子を多く含む。

双方とも、遺物は出土しなかった。

第125号土壌 (第168図)

J-12グリッドで検出した。平面形は不整形、断面鍋底状の小土壌である。覆土は暗褐色土が主体で、遺物は出土しなかった。

第126号土壌 (第168図)

J-12グリッドで検出した。円形鍋底の小土壌で、覆土は暗褐色土がもっぱらであった。

遺物は、出土しなかった。

第127号土壌 (第168図)

J-12グリッドで検出した。楕円鍋底の小土壌で、覆土は第125号・第126号などと共通する。

遺物は、出土しなかった。

第128号土壌 (第168図)

K-12グリッドで検出した。楕円で小規模な土壌である。堀底の一端に小穴が認められるが、これが、本墳の一部になるのか、周辺に分布する新期の小穴であるのかは確定できていない。

遺物は、出土しなかった。

第129号土壌 (第168図)

J-10・11グリッドで検出した。多くが第24号溝跡と重複しており、一括して掘削したため、先後の確認を行っていない。遺存部の状況から、円

形鍋底状の土壌であったと推察できる。

遺物は、出土しなかった。

第131号土壌 (第168図)

K-11グリッドで検出した。東西軸を意識した長方形で、断面形は箱形となる。覆土は暗褐色土がもっぱらで、遺物は出土しなかった。

第132号土壌 (第168図)

L-11グリッドで検出した。第1号・第2号柵列と重複するが、確認時に柱穴を見分けられず、先後は確定できなかった。長方形の北方には段差があり、二次にわたって構築されたことも考えられる。断面形は箱形で、段差は0.1m程度ある。

遺物は、出土しなかった。

第133号土壌 (第168図)

K-11グリッドで検出した。第14号独立柱建物跡や小穴と重複するが、その先後は確定できなかった。開口部は柳葉状で断面は漏斗状となる。堀底はほぼ平坦で、柳葉の両端では開口部より長く掘り込まれている。覆土は、暗褐色から順次明度を増すが、途中崩落層が介在する。

遺物は、出土しなかった。

第134号土壌 (第168図)

S-6グリッドで検出した。北方調査区に点在する3基の一である。開口部形状は長方形、断面形は皿状となる。北方の3基は形状が類似するが、軸が異なり、関連の有無は判断できない。

遺物は、出土しなかった。

第135号土壌 (第168図)

S-6グリッドで検出した。平面形は長方形を意識したと思われるが、楕円に近い。断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土しなかった。

第136号土壌 (第168図)

R-6グリッドで検出した。正方形に近い開口部形状を示し、断面形は鍋底状である。覆土は暗褐色土がもっぱらで、遺物は出土しなかった。

(5) 井戸跡

第1号井戸跡 (第169図)

J-17グリッドで検出した。平面は円形、断面形は筒状で、確認面から約1.5mの深度まで掘削されていた。覆土は自然堆積で、ロームブロックを多く含む3層は壁面崩落痕と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第2号井戸跡 (第169図)

L-15グリッドで検出した。平面形は楕円、断面形は筒状で、確認面から約1.0mまで掘削されていた。規模が小さく断面図を作成できなかったが、第1号と同趣の埋土が残っていた。

遺物は、出土しなかった。

第3号井戸跡 (第169図)

K-14グリッドで検出した。推定される平面形態は円形、断面形は、上位に崩落痕が残るが、ほぼ筒形で、確認面から約1.8mで検出した筒底は平坦であった。覆土は、全般に他の井戸跡より黒色味が強い。4・6層が崩落層だが、両層を含め、すべて自然堆積と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第4号井戸跡 (第169図)

L-14グリッドで検出した。推定される平面形態は円形、上位に埋設時の崩落の跡が残るが、断面形はほぼ筒形で、筒底は確認面から約1.4mで検出した。覆土の堆積は、他の井戸跡にくらべると比較的単純で、一律にローム粒子含む暗褐色系土が堆積していた。

遺物は、出土しなかった。

第5号井戸跡 (第169図)

K-12グリッドで検出した。平面形は円形で、断面形は筒形となる。確認面から約1.6mまで調査したが、危険回避のため、以下の掘削を断念した。覆土は自然堆積で、際だった崩落層もなく、上位から下位に向かい徐々にローム粒子の混入率が増していき、土色が黄色味を帯びてくる。

遺物は、出土しなかった。

第6号井戸跡 (第169図)

M-14グリッドで検出した。開口部の形態は円形で、断面形は筒形となる。確認面から約1.9mまで調査した段階で、危険回避のため、以下の調査を断念した。覆土は、黒褐色と茶褐色の互層で、各層は水平に近く堆積している。

遺物は、出土しなかった。

第7号井戸跡 (第169図)

N-13グリッドで検出した。第94号・第95号土塊と重複するが、土層観察の結果、本井戸跡の方が後出していると判断した。

開口部の平面形は不整形、断面形はほぼ筒形になると考えられるが、確認面から約0.8m掘削したところで調査を断念した。覆土は、比較的穏やかな堆積の暗褐色と急激な堆積の黄褐色による互層が繰り返されるようである。

遺物は、出土しなかった。

第8号井戸跡 (第169図)

N・O-12グリッドで検出した。第17号溝跡と重複するが、同溝跡中央部の掘削途上に本井戸跡の痕跡を認められなかったことから、同溝跡より古くに構築されたものと考えられる。

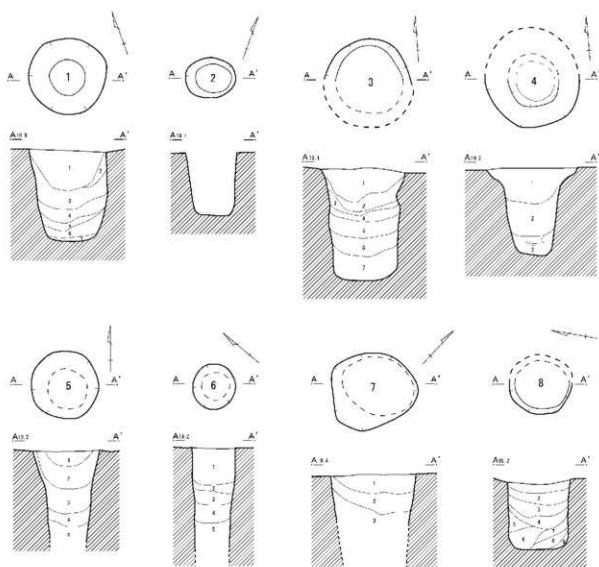
現存の開口部形態は円形で、断面形は深い鍋底形となる。確認面から約1.1mで検出した筒底は、第3号井戸跡と同じく平坦であった。覆土は、上層では黒褐色土が一律に堆積しているが、下層では黄色味を帯びた土との互層となる。

遺物は、出土しなかった。

第9号井戸跡 (第170図)

L-12グリッドで検出した。第1号溝跡と重複するが、遺構確認段階で本井戸跡の先出を識別できた。残存する開口部の形状は円形、断面はやや漏斗状で推移する。確認面より約1.3mまで掘削したが、以下の調査は断念した。覆土は、黒褐色と暗・茶褐色土の互層が繰り返されるが、壁面崩落の量によるもので、自然堆積と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

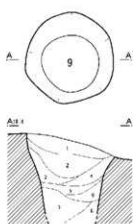


- 第1号井戸跡
- 1 掘場中 ローム粒が少し含む
 - 2 掘場底上 ローム粒が少なく含む
 - 3 万寿池上 コム・土砂・ブロックが多く含む
 - 4 万寿池底上 コム・土砂・ブロックが少し含む
 - 5 灰黒褐色土 ロームブロックが少し含む
 - 6 灰黒褐色土 ロームブロックが少し含む
 - 7 灰黒褐色土 ロームブロックが多く含む
- 第2号井戸跡
- 1 掘場中 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 2 掘場底上 ローム粒・ブロックが多く含む
 - 3 万寿池上 ローム粒が少し含む
 - 4 万寿池底上 ローム粒が少し含む
 - 5 掘場底上 ローム粒・ブロック
 - 6 掘場底上 ロームブロックが多く含む
 - 7 掘場底上 ローム粒が少なく含む
- 第3号井戸跡
- 1 掘場中 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 2 掘場底上 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 3 万寿池上 ローム粒が少し含む
 - 4 万寿池底上 ローム粒が少し含む
 - 5 掘場底上 ローム粒・ブロック
 - 6 掘場底上 ロームブロックが多く含む
 - 7 掘場底上 ローム粒が少なく含む
- 第4号井戸跡
- 1 掘場中 ローム粒が少なく含む
 - 2 掘場底上 ローム粒が少し含む
 - 3 万寿池上 ローム粒が少し含む
- 第5号井戸跡
- 1 掘場中 コム・土砂が多く含む
 - 2 掘場底上 コム・土砂が少なく含む
 - 3 万寿池上 コム・土砂・ブロック
 - 4 掘場底上 コム・土砂・ブロック
 - 5 掘場底上 コム・土砂・ブロック

0 2 m

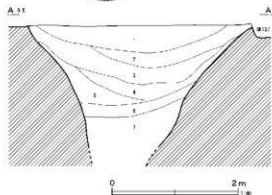
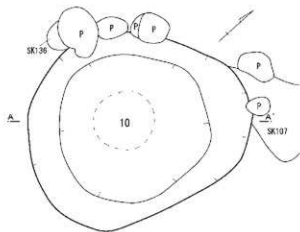
- 第6号井戸跡
- 1 掘場底上 ローム粒が少し含む
 - 2 万寿池上 ローム粒が少なく含む
 - 3 万寿池底上 ローム粒が少し含む
 - 4 掘場底上 ローム粒が少なく含む
 - 5 掘場底上 ロームブロックが多く含む
- 第7号井戸跡
- 1 掘場底上 ローム粒が少し含む
 - 2 掘場底上 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 3 掘場底上 ロームブロック・褐色土が少し含む
- 第8号井戸跡
- 1 掘場底上 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 2 掘場底上 ローム粒が少し含む
 - 3 掘場底上 コム・土砂・ブロックが多く含む
 - 4 掘場底上 コム・土砂・ブロックが少し含む
 - 5 掘場底上 ローム粒・ブロック・褐色土が少し含む
 - 6 掘場底上 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 7 掘場底上 コム・土砂・ブロック
 - 8 掘場底上 ローム粒・ブロックが少し含む
 - 9 掘場底上 ローム粒・ブロック

第169図 井戸跡(1)



- 第9号井戸跡
- 1 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(3cm以下)含む
 - 2 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(1cm以下)含む
 - 3 灰白色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 4 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 5 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 6 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 7 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 8 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む

- 第10号井戸跡
- 1 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(3cm以下)含む
 - 2 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(1cm以下)含む
 - 3 灰白色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 4 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 5 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 6 黄褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む
 - 7 赤褐色土 ローム粒「多く含む」ロームブロック(2cm以下)含む



第170図 井戸跡(2)

第10号井戸跡(第170図)

L-12グリッドで検出した。開口部径3.4mの大型井戸跡である。第106号土壌や近世の小穴と重複するが、そのいずれよりも古い。

平面形状は、洋梨形に近い円形で、断面形は漏斗状となる。確認面から約2.0mまで掘削した時点で危険回避のため調査を断念した。

覆土は、比較的黄色味を帯びた各層が幅広くレンズ状に堆積しており、筒を限る構造物の痕跡は見あたらない。すべてが撤去された後に自然堆積したと考えられる。

遺物は、瀬戸美濃の徳利片1点、染付片1点、渥美甕片2点、かわかけ片1点、焙烙片2点、凝灰岩製磁石1点のほか、混入した縄文土器片1点、平安時代の土師器片7点が出土した。

遺物の様相から、本井戸跡は近世後期に埋没したものと考えられる。

(6)柱穴跡

横沼新田遺跡では、16棟の近世期の掘立柱建物跡を報告したが、それでもなお、多数の単独柱穴跡を残すこととなった。これらの分布は、南側調査区の全体に及んでいるが、とくに掘立柱建物跡群に重なって濃くなる傾向がある。

また、単独柱穴類の覆土は、褐色土を基調としてローム混入物を多く含む共通した特徴がある。これは、近世掘立柱建物跡にも通じ、なかには柱痕や抜き取り痕が観察できるものもある。

このようなことから、残された単独柱穴も大方が近世期に掘削され、何らかの建物の一端を担っていた可能性が強い。

ちなみに、掘立柱建物跡と同様、単独柱穴類からの出土遺物は極端に少なく、微細な陶磁器片などがわずかに出土したにすぎない。これによって詳しい時期を特定するのは困難である。

VIII 北谷遺跡の遺構と遺物

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 土壌

第1号・第2号土壌 (第171図)

B-2グリッドで検出した。2基が重複している。開口部の形状は、いずれも楕円形、断面形は緩い鍋底状となる。

覆土は第3号土壌に類似する暗黄褐色であるため、縄文時代に構築されたものと判断した。覆土が地山と見分けづらく、遺構確認をはじめとして掘削全般にわたり手取取ったため、断面図を作成できなかった。両者の先後関係も不明である。

遺物は、出土しなかった。

第3号土壌 (第171図)

B-2グリッドで発見した。小型の楕円土壌で、壁面は急傾斜で、墳底はやや東方に流れている。覆土は自然堆積の暗黄褐色土で、地山と見分けづらかった。

遺物は出土しなかったが、覆土色などから、縄文時代に構築されたものと考えられる。

(2) 炉穴

第1号・第2号炉穴 (第171図)

E-3グリッドの削平斜面肩で発見した。円形2基が重複している。第1号は、覆土の2層・3層に多くの焼土粒子・ブロックを含んでおり、直下の墳底が炉床であったと考えられる。

これに対し、第2号は6層中に焼土粒子が含まれるのみであり、明確な炉床が形成されていない。おそらく、6層下か炉床で、7層は何らかの事情で掘り方として埋戻されたものだろう。

断面観察の結果、第1号が新期に構築されたものと判断した。遺物は、いずれの炉穴からも出土しなかった。

第3号・第4号炉穴 (第171図)

E-3グリッドの第1号・第2号とともに群を

なす形で分布している。こちらも2基が重複しているが、削平された斜面にさしかかっているため、発見できた覆土はわずかであった。

双方ともに、明確な炉床範囲は把握できなかったが、第3号は、3・4層と5層における焼土粒子の混入率から、4層の下位あたりが炉床であったと推定できる。

同じく第4号は、1・2層間の歴然とした焼土粒子・ブロックの含有差から推定して、1層下面に炉床が存在したと考えられる。土層断面を観察した限りでは、第4号が新期に構築されたものと見られるが、重複部が少ないため確定はできない。

遺物は、双方とも出土していない。

第5号炉穴 (第171図)

E-3・4グリッド、第1号方形周溝墓の周溝を完掘した際に発見した。単独で存在し、楕円、鍋底形態の掘り込みをもつ。明確な炉床は発見できなかったが、焼土ブロックの混入率から、1層下あたりに炉床があり、2・3層はその掘り方と考えられる。

遺物は、出土しなかった。

第6号・第7号炉穴 (第171図)

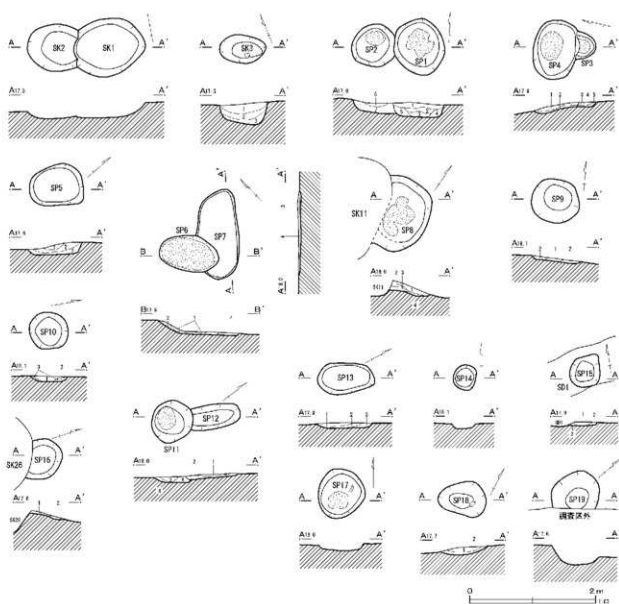
第1号方形周溝墓のD-4グリッド部分の周溝を完掘した際に発見した。長楕円の2基が直交するように重複している。周溝墓の掘削により、残された部分はわずかであるが、第6号では炉床部分が大きく残っていた。

両者の先後は、第6号の炉床が破壊されていないことから、同号の後出と判断したが、遺存状況が悪いため、確定はできない。

遺物は、出土していない。

第8号炉穴 (第171図)

E-3グリッドで発見した。調査区北東の削平部にあり、近世の第11号土壌にも破壊されている。



第3号土壌

- 1 暗赤褐色土 コム灰
- 2 暗褐色土 1層より粘
- 3 暗黄褐色土 2層より粘

第1号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土質
- 2 暗赤褐色土 灰土粘土質・ブロッケン
- 3 暗褐色土 灰土ブロッケン
- 4 暗褐色土 灰土粘土質・少し含む
- 5 暗褐色土 灰土粘土質

第2号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土ブロッケン
- 2 暗褐色土 コム粘土・土

第4号炉穴

- 1 暗赤褐色土 灰土粘土・ブロッケン多く含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第5号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土・ブロッケン・含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・粘
- 3 暗黄褐色土 コム粘土・土

第6号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土ブロッケン含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 3 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 4 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第7号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 3 暗黄褐色土 灰土粘土・ブロッケン土
- 4 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第8号炉穴

- 1 暗褐色土 コム粘土・多く含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 3 暗黄褐色土 灰土粘土・ブロッケン土
- 4 暗褐色土 コム粘土・土

第9号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土ブロッケン土
- 2 暗黄褐色土 灰土粘土・コム粘土・ブロッケン土

第10号炉穴

- 1 暗黄褐色土 灰土粘土・ブロッケン少し含む
- 2 暗黄褐色土 灰土粘土・多く含む
- 3 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第12号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 3 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 4 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第13号炉穴

- 1 暗褐色土 コム粘土・ブロッケン多く含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 3 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第14号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第15号炉穴

- 1 暗褐色土 灰土粘土・少し含む
- 2 暗褐色土 灰土粘土・少し含む

第171図 土坑・炉穴

堀底の高さは、斜面方向に沿っており、斜面の下
方が利用時の足場になると考えられる。

炉床は、明確なものは形成されていないが、3
層に多くの焼土粒子やブロックが含まれているこ
とから、同層の下部およびその直下と考えられ、
4層は足場の掘り方となるだろう。

遺物は、出土しなかった。

第9号炉穴 (第171図)

D-3グリッドの南方で発見した。略円形の掘
り込みが単独で構築されているが、炉穴群の大き
な弧状分布の中にある。

遺存状態は悪く、0.05mほどの深さが識別でき
た程度である。中央の1層が被熱赤化しており、
これが炉床部分と判断できる。また、2層は、そ
の掘り方、もしくは受熱によって変質した地山と
考えられる。

遺物は、出土していない。

第10号炉穴 (第171図)

C-4グリッドで発見した。平面円形、断面鍋
底の掘り込みが単独で構築されており、明確な炉
床も形成されていない。あるいは1層は掘り返し
層なのかも知れない。

遺物は、出土していない。

第11号・第12号炉穴 (第171図)

B-4グリッドで発見した。円形の第11号と楕
円形の第12号が重複している。いずれも掘り込み
が浅く、第11号の3層において焼土ブロック・粒
子を多く混入するのみである。

遺物は、両号とも出土していない。

第13号炉穴 (第171図)

B-4グリッドで検出した。単独の楕円掘り込
みだが、第11号・第12号に近く、これらともに
群を形成している。2層に焼土ブロックが多く混
入しており、この直下が炉床と考えられる。しか
し、堀底などに明確な痕跡を残していない。北方
の3層は掘削時の掘り方と考えられる。

遺物は、出土していない。

第14号炉穴 (第171図)

C-5グリッドで確認したが、一部の覆乱され
ている上に、掘り込みも浅く、断面図を作成でき
なかつた。

遺物は、出土していない。

第15号炉穴 (第171図)

C-4グリッドの第1号溝跡肩部で発見した。
受熱や硬化の程度から、1層とその周辺が炉床と
考えられ、2層は受熱外周部と思われる。

遺物は、出土していない。

第16号炉穴 (第171図)

C-1・2グリッドの北部削平斜面肩で発見で
きたもので、斜面上は近世の第26号土壇に破壊さ
れている。受熱痕はわずかに残るのみで、1層が
炉床、2層は足場の掘り方となるだろう。

遺物は、出土していない。

第17号炉穴 (第171図)

C-4グリッドで発見した。円形の掘り込みが
単独で存在する。中央南方にやや片寄った箇所
に炉床が発見できた。

遺物は、出土していない。

第18号炉穴 (第171・172図)

調査区の東南方、C-6グリッドで発見した。
炉穴群の弧状分布とは隔絶した位置にあり、単
独で楕円の窪みを掘り込む。断面形は緩やかで、堀
底は皿状となる。

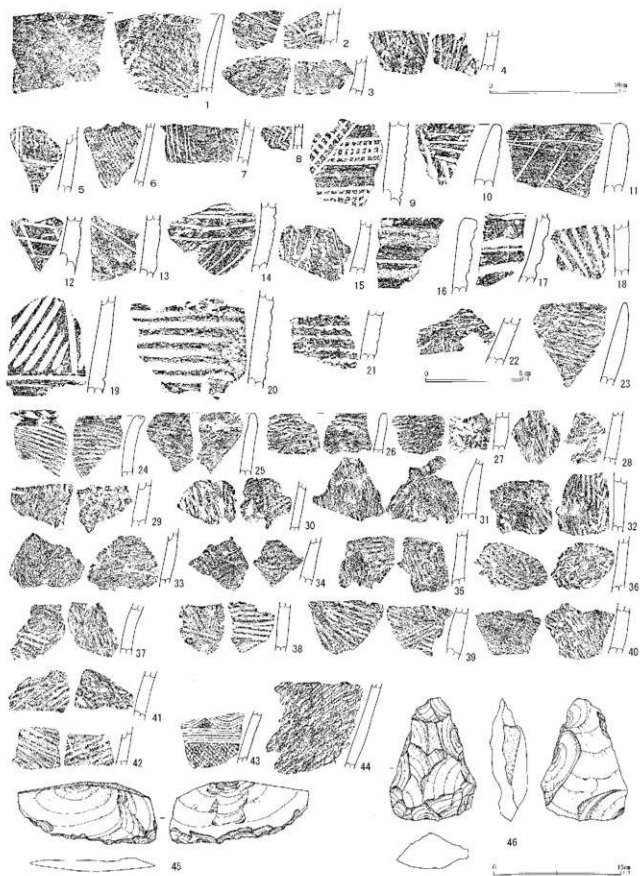
2層は被熱し固化したロームブロック層であ
り、炉床は2層中にあると考えられる。この層
より早期後葉の条痕文系土器が9点と、チャート
の剥片類が2点出土している。

出土土器を第172図1～4に示したが、いず
れも条痕のみの破片で詳しい時期がわからない。

第19号炉穴 (第171図)

E-3グリッドで検出した。一部調査区外にか
かるが円形鍋底の掘り方形態は識別できる。覆土
は暗褐色系土で、炉床は形成されていない。

遺物は、出土していない。



第172图 炉穴・遺構外出土遺物

(3) 遺構外

北谷遺跡第1次調査の遺構外よりは、総計169点の遺物が出土した。すべてが彌文時代に製作されたもので、このうち148点が土器、21点が石器類であった。

縄文土器は、屋外炉の検出数を反映して、早期後葉条痕文系が大半の106点を占める。また、同じ早期の燃糸文系2点、押型文系3点、沈線文系が31点出土しており、早期土器が全体の出土比の96%を占める。

その他の時期では、前期の竹管文系が2点、中期の加曾利E系が3点、後期の堀之内系の土器が1点出土したが、後二者は小片であったため、図示はしていない。

これに対し、石器類は、18点が黒曜石・チャート・ホルンフェルスの剥片類である。製品は、削器・打製石斧・礫器がそれぞれ1点ずつ出土したのみであった。

第172図5以降にこれらを示したが、5～7は燃糸文系の土器片である。3点とも原体の絡条体を回転方向にやや引きずりながら施文しているためか、節を観察できず、残された痕跡は条痕様や沈線様になる。

また、8は今調査で唯一発見できた押型文系の土器片である。縦位に山形文が施文されているが、小片であるため、全体の構成は判断つかない。器壁は薄いものの、胎土に粘質感がなく、細砂粒が際立つ燃糸文系の特徴に近い。

9～23は沈線文系土器で、9～15は細い沈線で直線的な文様を描くものである。横位区画が伴う文様帯構成が想定できるものには9と14があり、前者は格子沈線帯で幾何文を描く三戸式土器の典型例である。

これに対し、16～20は太い沈線で直線文様を描くものだが、16・17はこれに添えるように細い沈線も併用されている。18・19は区画内を斜位施文帯とするものだが、他の破片は全面に横位線が展

開すると考えられる。

一方、21・22は貝殻腹縁文、23は無文の破片である。前者のうち21は破片内すべてが横位展開だが、22は下位に縦位文も観察できる。また、23は器表を若干削り込むものの、意図的なものではなく、口唇部も尖頭状となっているため、燃糸文系と沈線文系の狭間にあたる無文土器群ではないようである。

24～42は条痕文系土器であるが、工具、あるいは隆線などで描き出した文様は見あたらない。唯一、24の角頭状口唇部に斜位の刻みが施されるのみである。そして、25・26の口縁部片は24と異なる円頭状であり、口唇部形態の共通から製作期を特定することはできない。

他の破片も含め、条痕ははっきりしないものが多く、表裏ともに擦痕に終始する個体も多い。胎土の含有粒子もさまざまだが、やや粘質感があることでは共通している。これらが、乾いた質感とはっきりした条痕が大勢を占める野島・鶴ヶ島台式に相当しないことだけは確かだろう。

43は竹管文系諸磯a式に相当する波状文系統の土器である。文様帯区画と内部波状文充填は同じ櫛状工具で賄われており、下位縄文の単節RL原体は1段3条で製作されている。また、44は無節Lが横位施文されているが、こちらの原体は1段2条の手法で製作された可能性がある。

石器は45・46の2点を示したが、前者は横刃型の削器である。ホルンフェルスの薄い横長剥片を切先状部まで粗く加工し、自然面を残す背面と逆側縁を持ち手としている。

また、46は同じホルンフェルス製の礫器、もしくは打製石斧である。西洋梨に似た外形と肉厚の断面形は、早期中葉から後葉における打割具の典型的な特徴を示しているが、今回の調査では沈線文系・条痕文系土器のいずれもか出土しており、どちらに伴うかは判断できない。

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 方形周溝墓

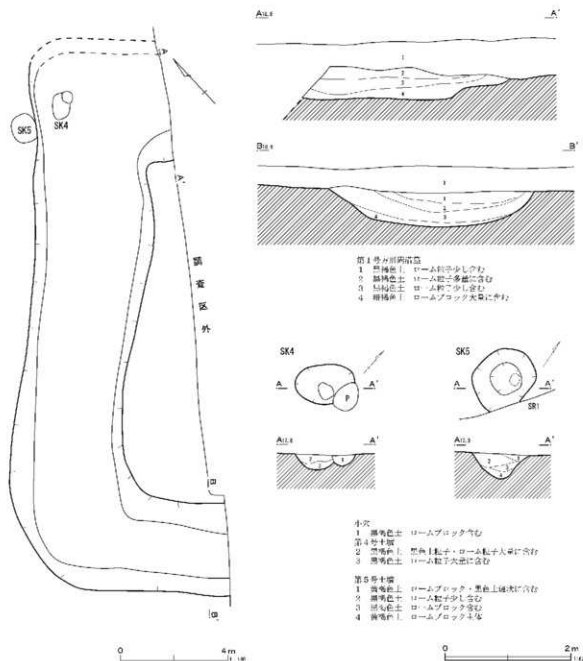
第1号方形周溝墓 (第173図)

D・E-3〜5グリッドで検出した。推定される外周の規模が最大で21m、同じく方台部が15.5mにもなる大規模な周溝墓である。

今回の調査区では全体の約1/3ほどが調査できたことになるが、北の隅部が攪乱されており、

平面的には確定していない。しかし、調査区脇の土層断面観察で溝外周の立ち上がりが把握できたため、おおよその規模が推定できる。

主軸方位は、N-41°-W、あるいはN-49°-Eとなるが、溝幅の極端な違いや遺物出土の傾向など、この周溝墓の構築者がめざした方位の根拠がないため、特定ができない。だが、北西に向かっ



第173図 方形周溝墓・古墳時代の土壌

て狭まる台地の地形的な環境からすると、北西—南東軸が優先された前者の軸方位を意識した可能性が高い。

周溝の横幅は3.5m～4.2mと幅広く、壁面はなだらかに立ち上がる。隅部の平面形は、外周は緩やかだが、内周下端ははっきりしており、構築時の丁寧な作業姿勢が察せられる。

溝底はほぼ平坦で、溝の断面形はおおよそ台形状で推移するようである。また、北隅の溝底では、後述する第4号土壌を発見したが、楕円形で小規模なものであった。溝内への追跡を彷彿させるような軸に沿う長方形土壌は検出していない。

調査区は、全般に表土化が著しいため、方台部の盛土は検出できず、溝底から段差なく方台部に移行するかどうかは判断できない。

また、観察できた周溝の埋土はすべて自然堆積で、覆土4層がロームブロックを大量に含むため、方台部から盛土が流出したとも考えられる。しかし、このような埋没状況は遺跡内の他の土壌や溝でも一般に認められるため、流出を特定できるものではない。

これに対し、上層の覆土は黒褐色土がもっぱらであり、中層の2層にローム混入物が多く、4層ともあわせ、互層を形成している。

遺物の出土はすべて周溝の埋土からで、埋没時に混入した縄文土器23点と、古墳時代前期の土師器3点を発見した。古墳時代の土師器は、図に示せるものではなかったが、壺形土器の破片を溝底面の近くより検出しており、本周溝構築築期の目安となると考える。

(2) 土壌

第4号土壌 (第173図)

E-3グリッドで検出した。第1号方形周溝墓の調査中、溝底で初めて確認できた土壌であり、覆土も類似することなどから、同周溝墓ときわめて近い時期に構築されたと考えられる。

周溝墓埋土の4層との関係が認識できていれば、その先後や埋没途上の掘削など、両者の関連性を判断できたであろうが、全体の遺構確認当初はこの土壌の存在を予期できなかったため、それらを確認できなかった。

東側の一部は近世に掘削された小穴で破壊されているが、全形の把握に支障はない。平面形は楕円形で、断面形は壁面が緩やかに落ち込む椀状となり、壙底の平坦部は少ない。

覆土はローム粒子を多く含む黒褐色土が主体であり、前述したように、黒褐色土の色相や質は方形周溝墓のそれと近い。

遺物は、出土していない。

第5号土壌 (第173図)

E-3グリッドで検出した。第4号土壌と同様に、第1号方形周溝墓の調査途中、北東部の溝肩で発見できた土壌である。

開口部の平面形は楕円形、壁面は緩傾斜で、断面形は緩い椀状となる。東側壁面の変形に見合うように、覆土の最上層にロームブロックを多く混じえる黄褐色土が堆積する。

これに共通する土は最下層でも観察でき、逆に中層の黒褐色土ではロームの混入物が少ない。黄褐色が基調となる両層のうち、少なくとも1層は埋戻されたともとれるが、確信はない。

ローム混入物の多寡に違いがあるが、この黒褐色覆土の特徴や土壌開口部の形態や断面形は、至近に存在する第1号土壌と類似している。第1号方形周溝墓の溝底と溝肩の違いはあるが、両土壌は、ほぼ同じ時期に構築され、周溝墓を意識していたものと考えられる。

また、両者の開口部規模が共通することは、第4号土壌が第1号方形周溝墓の埋没過程、しかも溝底が当初の掘削面に近い初期に構築された可能性が高いことを示唆している。

遺物は、出土していない。

3. 近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

第1号・第3号溝跡 (第174図)

B・C-4・5グリッドで発見した。第1号は、N-19-WおよびN-72-Eをさしつづ北方に閉じるコの字に展開しており、第3号は、N-17-Wに展開して第1号にほぼ直交する形で重複する。土層観察では、第1号が完全埋没後に第3号が掘削されたと判断した。

調査区脇の断面で見るとかぎり、第1号は基本第II層をなだらかに掘り込んでおり、上幅では1間ほどであったようである。そのもっとも深い部分だけが調査区内で精査が可能であったようである。一部が深くなることから、掘削や養生が繰り返されたと考えられる。

第1号溝跡からは、遺物は出土していない。また、第3号溝跡からも縄文土器が3点出土したのみである。

第2号溝跡 (第174図)

D-3杭付近で一旦途切れるが、方位性と覆土の特徴から、同一溝跡と判断した。おおよその軸方位はN-72-E。断面形は箱形であり、一部に溜まりのような掘り込みが伴う。

遺物は、縄文土器が2点出土したにすぎない。

第4号～第7号溝跡 (第174図)

調査区南西方で並行あるいは直交しつづ重複しあう4本の溝を一括して説明する。

第4号と第5号は、隣接し、N-15-W、N-12-Wとほぼ同じ方位性をもって掘削されている。両者に先後があるか、共存かは判断できなかった。このうち第4号は、北方で自然消滅する。調査区南方の壁面(B)を観察すると、急傾斜の断面が観察できるが、断面A近くでは、その傾斜も曖昧となっている。

これに対し、第6号・第7号は、それぞれN-69-EとN-65-Eをさしつづ第4号と直交するものだが、より西に展開しないことから、共存し

ていたと考えられる。第5号も含め、断面形は鍋底状で、覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、第5号溝跡より縄文土器が1点出土したにすぎない。

(2) 土壌

第6号土壌 (第175図)

E-3グリッドで検出した。平面円形、断面鍋底状で、覆土は暗褐色系土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第7号土壌 (第175図)

E-3グリッドで発見した。円形鍋底の小型土壌で、覆土はローム粒子・ブロックを含む暗褐色土がもっぱらであった。

遺物は、出土しなかった。

第8号土壌 (第175図)

D・E-3グリッドで検出した。平面形は円形、断面形は傾斜が緩い碗状となるもので、覆土はローム片混じりの暗褐色土であった。

遺物は、出土していない。

第9号土壌 (第175図)

D-3グリッドで検出した。緩い傾斜の鍋底状断面を呈する円形土壌である。覆土はもっぱら暗褐色土で、ローム粒子が混入していた。

遺物は、出土していない。

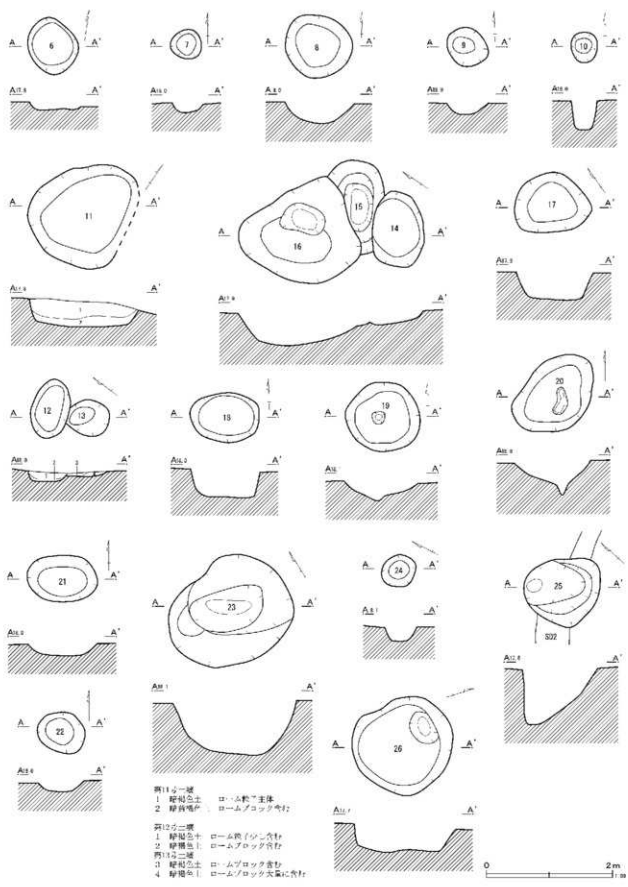
第10号土壌 (第175図)

D・E-3グリッドで検出した。平面円形、断面箱形の小型土壌で、柱穴とも考えられるが、周囲の同種遺構より横断面が太い。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土の単一層であった。

遺物は、出土していない。

第11号土壌 (第175図)

D・E-2・3グリッドで検出した。洋梨形の平面形と鍋底状の断面形が意図されている。覆土は、上層が暗褐色で、下層ほど明度とローム混入物の粒大や量が増す。



第175図 近世の土壇（1）

遺物は、出土しなかった。

第12号・第13号土壌 (第175図)

C-3グリッドで確認した。楕円の第12号と円形の第13号が重複している。両者の先後は、前者が後出するものと判断した。断面形はいずれも緩い鍋底状で、覆土は暗褐色土にローム混入物が加わる土が主体である。

遺物は、双方とも出土しなかった。

第14号～第16号土壌 (第175図)

E-3グリッドで検出した。楕円を基調とする3基の重複であるが、第16号が一段と大型で椀状の掘り込みも深い。覆土は暗褐色系土がもつばらであり、ロームブロック・粒子が混じる。第14号・第15号が浅かったため、三者の先後関係は確定できなかった。

遺物は、第16号の覆土中より縄文土器が出土しているが、埋没時に混入したものだだろう。

第17号土壌 (第175図)

D-2グリッドで検出した。平面形は半円形に近く、断面形は鍋底状である。覆土はローム粒子が混じる暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。

第18号土壌 (第175図)

D-4グリッドで検出した。楕円の平面と鍋底の断面形を呈するもので、覆土はロームが混じる暗褐色土の単一層であった。

遺物は、縄文土器が2点出土しているが、埋没時の混入と考えられる。

第19号土壌 (第175図)

C・D-4グリッドで確認した。平面形は円形で、断面形は皿状となる。さらに堀底中央に小穴が穿たれており、その位置関係から本土壌に伴うものと考えられる。

遺物は、出土していない。

第20号土壌 (第175図)

C-4グリッドで検出した。ややひしゃげた楕円の平面形を基調として椀状に掘り込まれてい

る。すばまった堀底ではさらに小穴が追加されているが、その位置関係から本壌に伴うと認識して大過ないものとする。覆土は暗褐色系土が主体で、ロームブロック・粒子が混じる。

遺物は、縄文土器4点が出土しているが、埋没時の紛れ込みと思われる。

第21号土壌 (第175図)

B-3グリッドで発見した。平面が楕円形、断面が鍋底状の土壌で、覆土はローム混じりの暗褐色土であった。

遺物は、出土しなかった。

第22号土壌 (第175図)

C-3グリッドで検出した。円形鍋底の小型土壌で、覆土は暗褐色土にローム混入物が加わるものであった。

遺物は、出土していない。

第23号土壌 (第175図)

C-3グリッドで発見した。平面形はひしゃげた楕円形、断面形は緩やかな鍋底状となる。今調査で発見された土壌の中では最も大型で、西部に段差が設けられ、堀底は東側に片寄る。覆土は土量の割には均質で、暗褐色を主体として、ローム起源の粒子・ブロックを混じえる。

遺物は、出土していない。

第24号土壌 (第175図)

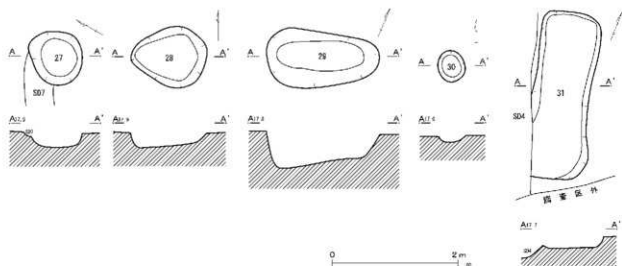
C-3グリッドで検出した。円形鍋底状の小型土壌である。覆土はローム粒子が混じる暗褐色系土がもつばらであった。

遺物は、出土していない。

第25号土壌 (第175図)

D-2グリッドで確認した。第2号溝跡が上位で重複するがその先後は確認していない。断面形は北西に比重がある片流れで、この方向の壁は垂直に立ち上がる。南東は斜めに立ち上がるが、それとともに開口部も拡大している。覆土は暗褐色土が主体であった。

遺物は、出土していない。



第176図 近世の土壇（2）

第26号土壇（第175図）

C-2グリッドで検出した。開口部形はほぼ円形、断面形は緩い鍋底状である。また、北隅の小穴は重複である可能性が高い。覆土はローム混じりの暗褐色土が主体であった。

遺物は、覆土中より縄文土器1点が出土した。しかし、埋設時の混入だろう。

第27号土壇（第176図）

C-5グリッドで確認した。第7号溝跡と重複するが、同溝跡がここで終結しており、両者が連動することも考えられるが、暗褐色主体の覆土の観察では確定できなかった。

遺物は、出土していない。

第28号土壇（第176図）

C-5グリッドで検出した。平面形は洋梨形で、断面形はやや片流れの鍋底状である。覆土は暗褐色で、ロームブロック・粒子が混じる。

遺物は、出土していない。

第29号土壇（第176図）

B-2グリッドで発見した。平面形は長楕円、断面形はやや片流れの箱形である。覆土はローム混じりの暗褐色土であった。

遺物は、出土していない。

第30号土壇（第176図）

B-2グリッドで検出した。円形鍋底の小型土壇で、覆土は暗褐色土の単一層であった。

遺物は、出土していない。

第31号土壇（第176図）

C-6グリッドで確認した。断面箱形、平面長方形の土壇で、第4号溝跡と一部接するが、連動しないと考えられる。覆土はロームブロック混じりの暗褐色土であった。

遺物は、出土していない。

（3）柱穴跡

今回の調査では、調査区東部で数本の柱穴らしき小穴が発見できた。位置や深さには規則性がなく、いくつかを組み合い建物を構成するとは考えがたい。柱痕も見つからず、ロームブロックや粒子を混じえる暗褐色土が堆積するのみであった。用途は不明だが、覆土の堆積密度と土壌の大半に通じる土色の特徴から、これらは近世期に掘削されたものと判断した。

IX 調査のまとめ

1. 旧石器時代

本書で扱った5遺跡では、それぞれに複数時期の遺構や遺物が発見されており、弥生時代を欠くものの、結果として旧石器時代から中近世に至る広い時代を網羅するほどになった。

そのため、ここでは個別の遺跡ではなく、時代ごとに調査の成果をとりまとめ、注目遺構などについてあらためてふれることとする。

これら5遺跡のうち、旧石器時代の遺物が出土したのは、御新田遺跡と番匠・下道遺跡である。とくに御新田遺跡では、それぞれ1箇所であるが、100点規模の石器集中と350点がまとまった礫群を発見した。石器群は、槌状剝離を有する槍先形尖頭器と搔器・彫器を中心に組成されている。

石器群の石材は黒曜石を主体とし、玉髄がこれに次ぐ。また、前者が搔器や削器と、そして後者では、削片石材との整合に矛盾が残るものの、彫器と対応する関係が認められた。これに対し、槍先形尖頭器は双方を用いており、少なくとも玉髄では槌状剝離が加えられている。また、削片が出土していることから類推すれば、黒曜石でも槌状剝離が行われたと考えられる。

このような器種による石材の使い分けを含め、御新田遺跡のような石器相は、入間市西武蔵野遺跡(西井1996)で発見されているものの、坂戸台地では鶴ヶ島市泉橋遺跡(関口2003)でわずかな資料が確認されていたのみであった。西武蔵野遺跡では槌状剝離を有する槍先形尖頭器と搔器に黒曜石が用いられ、ナイフ形石器と彫器ではガラス質安山岩やチャート・硬質頁岩など多様な石材が利用されている。御新田遺跡ではナイフ形石器を欠いているが、石材の使い分けや礫群を伴うこと、搔器や彫器の形態などからして、同遺跡に近い石器群と見なして大過ないとする。

その編年的な位置であるが、西武蔵野遺跡につ

いては報文中で、砂川期の石器群と搔器等が共通する一方、ナイフ形石器の形態が異なる点に着目して砂川期より新时期に位置づけた。しかしその後、大枠としての砂川期に含める考えや、それより古く位置づける説なども示されている。

いずれにせよ、これらは資料数が限られる現状では特異ともいえる石器群であり、御新田遺跡での発見例が加わることで論議が一段と進むことが期待される。

一方、第II章でふれたとおり、入間台地では地域的な異動の復元作業も現実的になりつつある。台地を貫くこととなった近年の圏央道新設に先立つ一連の事前調査では、およそ半数の遺跡で旧石器が確認されている。今回報告を終える鶴ヶ島ジャンクション以東の坂戸台地北東部でも本報告の他に在家遺跡(村端2007他)や木曾免遺跡(西井2008)で旧石器集中が検出されるなど、その検出率に変動はなく、路線周辺における旧石器遺跡の濃密な分布を証明した。

だが、御新田遺跡の近辺では、繰り返し越辺川水系の越水作用を受けたようで、各地点の層厚や質、そして還元化の差が著しく、一律な出土層の比較が難しい。例えば、在家遺跡では明瞭な暗色帯が形成されており、武蔵野台地の標準層位との対比が容易にできた。だが、西隣の宮庭跡跡ではこれを見分けることができなかった。また、台地先端の木曾免遺跡では、調査区の中でもめまぐるしく堆積層が変質する状況であった。

旧石器の位置づけに際し重要な根拠となる層位的所見の欠落は、石器群の類例を積み重ねて補うほかない。幸いにも、この周辺は元来調査頻度が多い地域でもある。時の経過とともに編年秩序は自ずと整い、活発な動きを示した人々の足跡をうかがうことも早晚可能となるだろう。

2. 縄文時代

今回報告の遺跡では、横濱御新田遺跡を除く4遺跡で縄文時代の遺構・遺物を確認した。

時期を追ってまとめると、早期では燃糸文系期の住居跡が御新田遺跡で見つかり、番匠・下道遺跡や北谷遺跡でも土器が出土している。また、北谷遺跡では沈線文系土器と、条痕文系期の竈穴も発見されている。竈穴は御新田遺跡や番匠・下道遺跡でも複数が残されていた。

前期では、御新田遺跡と番匠・下道遺跡で黒浜古期の竈穴住居跡各1軒を調査し、後者では期山II期や黒浜期の土壌も発見された。また、番匠・下道遺跡南側の斜面には沖積土が厚く堆積しており、検出遺構の時期はもとより、竹管文系や、前期末から中期初頭の土器片も出土した。

これに対し、牛原遺跡と御新田遺跡では勝坂期の集落が残されており、牛原ではこれらの分布が環状化する。さらに同遺跡では、軸を揃えて居並ぶように後期初頭の柄杓形敷石住居跡と大量の遺物が廃棄された大型土壌が構築されていた。

このように、4遺跡では、ことさらに膨大な遺構や資料には出くわさなかったものの、多くの時期にわたる痕跡が残されており、縄文人がこの周辺で絶えず活動していたことがわかる。

このなかで、とくに際立つ三つの成果についてさらに詳しくふれていく。

まず、御新田遺跡で発見された燃糸文系期の竈穴住居跡であるが、この期の住居跡は、元来稀にしか発見されない上に竈穴が残く、とかく疑念の目で見られがちである。だが、本遺跡の例は、下層で黒く固い土が堆積しており、遺構の存否から床面の位置まで、異論が差し挟まれる余地がない。0.5mもの深い竈穴の床面やその直上からは共時性の強い大破片が多く出土し、憂いなく検討が加えられる例となった。

住居跡は単独で発見されたが、2軒を確認したとされる熊谷市萩山遺跡(森田1995)を筆頭に、

県内の燃糸文系期住居跡は密集する例が多い。ただし、春日部市坊荒句遺跡(中野2004)をはじめとするこれらは、大部分が稲荷原式より古期にあたることから、新时期の本遺跡には通じないともとれる。だが、燃糸文系直後と推定される日高市向山遺跡(黒坂1995)の住居跡群も、軸が揃う萩山例と同様、整然と分布している。

このような観点から、現地では住居跡の周辺で確認を繰り返したが、さらなる発見はかなわなかった。ちなみに、遺構外で出土した燃糸文系土器55点の分布は調査区の南西隅に集中している。したがって、この期の主体は團圞式の路線からはずれぬ二階川の湾入部にあると考えられる。

このように、御新田遺跡の住居跡は、遺跡の主体から離れて建てられた可能性が強い。しかし、中央に凹部を設け、南半の壁際と中央の柱穴を線対称に近く配するなど、構造物は燃糸文系に通有の要素が十分に意識されている。

一方、竈穴に保証された出土土器の一括性は、実際の破片を前にしても訂正の余地がない。細くて疎らに燃糸文が施文されたものや、粗大な節が残る破片を一定量含みながらも無文土器が主体となる組成や、沈線に至らぬ凹部帯と、円頭状の口唇部から凹部帯までの幅広さは、東山式成立直前の様相を端的に示している。

前出の向山遺跡で出土した燃糸文系末期の土器は、東地区でこの種の無文土器が大勢を占め、西地区では沈線と口縁の間隔が狭まった東山式がすべてであった。向山例は地点差で両者の違いを証明したが、今回の発見は、これを遺構の一括性で保証したことになる。

口縁下に凹文を一周させる稲荷原相当型式の最終段階から東山式にかけての土器が出土した住居跡は、県内では深谷市四反歩遺跡(金子1993)で2軒が報告されているにすぎない。ましてや、破片の大きさと出土量、口縁部片の多さなど、御新

田遺跡のような充実した遺物と一括性の担保を兼ね備えた住居跡は、県内の燃糸文系期全体を見渡しても例がない。この住居跡は、燃糸文系期の検証に欠かせない資料となるだろう。

次に、御新田遺跡ではこのほか勝坂期の竪穴住居跡と集石土壇、そして焼土と完形土器・石斧を奉じた墓を彷彿させる土壇も発見されている。さらに、台地の湾入部を挟んだ牛原遺跡では、同様な遺構が環状にめぐっていた。

牛原遺跡では、竪穴が消失した住居跡や時期判定に窮する縄文土壇もあるが、最終的に住居跡6軒、土壇40基をしのぐ数がこの期に構築されたのは確実である。また、集石土壇31基のうちには環を欠くものもあったが、覆土や断面形状の共通から、この類に含めて考えた。

その結果、おぼろげながら、これらがめぐる弧が浮かび上がることとなった。弧が延びる未調査の台地北側は、曲線が成長する適度な余地を残しつつ、二階川の谷に突出している。出土土器は勝坂Ⅱ式に限られており、いささか心もとない環は、その活動期の短さに志留している。

埼玉県内で発見された勝坂中葉期の住居跡は、県南西部に集中していた。坂戸台地北東部では景台遺跡で住居跡1軒が報告されている（加藤1999）ほかに、大谷川の谷を隔てて牛原遺跡と対峙する金山遺跡で器形復元可能な土器が採集されている（伊藤他1983）にすぎない。

また、県南西部の同期集落を見渡しても、この期の遺構がまとまる遺跡は、飯能市芦刈場遺跡（小泉他1979）など、わずかしかない。さらに、現荒川を隔てた大宮台地や越辺川以北の諸台地では、勝坂Ⅲ式期から本格化する環状集落がもつぱらである。勝坂系の全体分布からみれば当然ともいえるが、坂戸台地北東部の牛原遺跡例は、その中葉期に秩父盆地や県北部に先んじて勝坂系が伸長する過程をものかたる例となるだろう。

短期で終始した牛原集落は、逆に遺構の分布を

解説するのに都合がよい。表土化による誤差の恐れもあるが、推定外周径およそ100mの環状分布は、いくつかの群で形成されている。

すなわち、一つは調査区北東の小型住居跡だけが並立する空間で、その南東では住居跡を核に規模の大きい集石が土壇とともに密度濃く分布している。これに対し、南側では、居住跡と土壇が主体でわずかな集石が切わる東寄りグループ、そして、居住跡を欠き小規模な集石と土壇が散在するグループとに分けられる。

さらに、地形に沿って環の東に点在する住居跡もある。また、環から70mほど西の在家遺跡でも同期の住居跡が発見されている（村端2007）。つまり、居住地は、台地突出部の環を尊重しながらも、湾入部に両翼を広げているらしく、東の居住群に対面する西群が、在家遺跡から連続する環の西北西に隠されている可能性が強い。

転じて、同じ時期に残された御新田遺跡の居住群も、その分布は西側の湾入肩部に沿って集中している。牛原の東西二群を合わせた三者が示す共通は、むしろ居住が湾入肩部を中心に展開すると考えるに十分な根拠となる。

さらに一歩進め、集石と土壇だけの南西遺構群が東西の間に介するならば、そこは、両者がつかさどる共有空間と見ることもできる。ここを環の中軸と見なせば想定される東西の居住群が対称位置にくることもその証左になるだろう。

このように、遺構群の環は、東西の湾入部に展開した居住群の両翼を絡め、少なくとも南側に共有空間を介しつつ成立したと推定できる。だが、北側については推測の手だてがなく、台地突端に見合う象徴空間が広がるのか、両翼と対立する居住群が存在するのか、判断がつかない。

一方、対立と融合のモザイクは遺構内でも見ることができた。第3号住居跡は、東関東系である小判形の小型穴に、4本の支柱穴・土器埋設坑・炉辺敷設・入り口柱穴などを配置していた。内部

施設の内容は西関東系の第1号住居跡と同じで、ほとんど人が立ち回れる余地がない。

さらに、炉には連続三角文をデフォルメした華美な横帯文土器を埋め、炉辺には蛇体文が貼付された浅溝の一部だけを入り口に向けて設置している。蛇体の向きは呪術的な意味を、窮屈な構造は特別な目的を彷彿させるが、類例の調査が行き届かず、その性格を想像できない。

だが、このような手のこんだ遺構から、この地が本格的な居住地として選ばれたことが想像でき、遺構群間の違いも各々目的が備わった行動の累積がもたらしたと確信できる。

そして最後に、牛原遺跡では極めて規格に優れた後期初頭の柄鏡形敷石住居跡が見つかった。

竅穴は、主体部の壁に沿って等間隔の柱列を配し、4本柱を備えた柄部が接続するものであった。はじめの2期は敷石がなく、改築は柱位置をかえ、柄部を縮めている。主体部を16等分するように見える柱列は、第I期で対ピットを含めて主軸をはさみ、第II期は軸上を起点としている。

柄部の第I期は、両脇で整形的な埋戻しが行われている。また、第II期は柄幅が1/2となり、両脇が雑壇に埋戻されるが、4本の柱穴と柄部先端の短溝は、かわらず機能していたようである。各期の奥壁と柱穴放射の中心、そして柄部先端の比は、およそ1:2となる。

似たような形状は、さいたま市下加遺跡（山形1992）や川口市灰原遺跡（金箱1985）など県内のみならず、調布市上布田遺跡（赤城1992）をはじめ多摩・相模域でも見られ、後期前葉の普遍的な一類型であることがわかる。また、柄部先端に重なる短溝は、平塚市王子ノ台遺跡（秋田1991）などで柄内完結の例が確認されている。

これに対し、第III期では敷石が追加される。主体部の外周も雑壇状に埋戻され、柄部のさらなる縮小に連動して埋戻穴や短溝が移動するが、4本の柱穴は維持される。また、旧埋戻位置に新たな

小穴が設けられる。

一見したところ、敷石は炉を囲む大石から始め、余白を埋めつつ順次外周へと進めたと考える。しかし、実は周到な計画に沿って先ず空間を案分する石を外周に配した上で実施されていた。

第177図では、石の敷設をはじめとして、住居跡の諸施設から想定できる二次元的な規格を下段に、算定の過程を上段に示した。また、やみくもに測り込んだものではあるが、この住居跡から読みとれる関係式を脇に掲げた。

そもそも第III期の敷石規格に気づいたきっかけは、外周に同じような石が適当な間隔で並び、これらが主軸を介して線対称に位置する上に、1点の石をはばかり、隣の緑泥石片岩が挟られていた（巻頭図版3-2左下）ことに始まる。

先ず、NとJ、Iと仮想のMを結びその交点Oが主軸線とも合致することを確認した上で同点から放射状に各石を結ぶと、同図右上のような整った空間分割が推定できた。基本の放射角は20°となり、ANとBIが成する例外的な角度から、これらが意図的なものであることがわかる。

第II期までとは一転、炉から脱した中心Oと案分石、さらに案分石同士の結線は、炉を囲む3枚の大石が象徴する空間を分け、大石の背を規制している。そして、この規格を逆手に敷石すべてを復元することも可能となった。

ただし、E・F脇の4枚の石は、放射や線対称から導けるものではない。柄部から炉周辺までを敷石する例も多いことから、逆に対ピット周辺は土間であったとも仮定できる。しかし、第IV章で記したとおり、図上左の対ピットを塞いだ石が発見されており、他の敷石状況を加味すると、F点の石が独りあったとは考えにくい。

案分石による空間設定はこれだけではない。BCDと伏連位置Eが成する五角形は竅穴外形と相似で、MJ線との交点では外形の1/2となる。そして、AとB以下すべての案分石は放射線上に

あるだけでなく、柄部の各結節点や、小溝の両端と直線的な関係を持つ交点に置かれている。

つまり、あらかじめ配された石は主体空間を案分するだけでなく、既存の柄部4穴を念頭にO点からの距離も調節されているのである。新埋壘の位置もここから逆算され、小溝や間の小穴も既存の規格を援用して移動・新設されている。

同図をもとに再度まとめると、短破線は竅穴の絶対軸を表し（基軸線）、T・S・Oは第I期から第III期における空間分割の起点となる。また、長破線は竅穴の基本骨格を示し（骨格線）、実線は主体部の空間を奥・両脇・入口に分ける（分割線）。そして、短実線は主体部と柄部の接続や各施設の位置や幅の設定を行うための線（設定線）で、主軸を挟み線対称となるV字角、V字と交差しつつMYJ間を行き来する交差角、要所から発する放射角の3種で構成されるのである。

この規格が他のすべてで通じるとは思えないが、例えば日高市寺脇遺跡7号住居跡（松本2006）では、RF分割2：1、V字角38°、交差角50°を設計の基本にし、両側の柱穴はRF分割1/2の仮想Mからの放射角で決定されている。

また、入間市坂東山遺跡第1号柄鏡形敷石住居跡（鈴木1996）も牛原例と同じRF分割比と角度で設計されており、丸味を帯びた柄部の外形は、交差角の交点 α 、その主軸直交線とMYJとの両交点からそれぞれcdまでの距離を半径とする三つの弧を描き合わせて原形を得ている。

さらに、この住居跡ではABNIW各点にあたる案分石が特定できる。そこで、NOI分割線に加え、NaWとAb、IbWとBaという4本の敷石設定線を復元すれば、第2号ともどもY字と外縁の複合で石が敷かれたと確定できる。

これらによる設計は、柄鏡形の退潮後にも引き継がれている。堀之内II式期と思われる川越市上組遺跡98号住居跡（黒坂1989）は、RF分割2：1、V字・交差角45°で設計されており、柄相当部は、

E点で展開する直線列と、 α 点を心とする半径YSの円を接続させている。

同じ規格は県内にとどまらない。RF分割2：1、V字角38°、交差角45°の横浜市山田大塚遺跡36号住居跡（石井1990）では、柱列から離れるaとbも規格に基づき帰属を確定できる。また、RF分割1：1、V字角50°、交差角50°の同遺跡35号住居跡では、坂東山例と同じく α 点をずらして柄相当部の弧状柱列を配している。

さらに、対置される弧はRF分割2：1、V字角38°、交差角42°の同市華蔵台南遺跡3号住居跡（石井1993）でもみられ、V字・交差角が同じながらRF分割1：1となる4号住居跡の炉周辺に残る凹地？も、交差角の結線とAc線・D原P線に沿った意識的なものと判明する。そして、同じ住居跡の柄相当部で無秩字に見える柱穴群も、 α Fを半径とする円周と、E点以下この円周を行き来する交差角を想定すれば、彼らの設計を推し量ることができる。

以上のような共通から、後期前葉の柄鏡形住居跡や敷石の一部は、四つの要素に独自の偏差を加えつつ建造されたと理解できる。

敷石が施工された第III期に限らず、どの期をとっても牛原例ほど鮮やかな規格を示す柄鏡形敷石住居跡も稀であろう。その本場ともいえる神奈川県の実験による劣作（山本他1996）をひもとも、性格や上部構造について示唆に富む資料はふんだんにあるものの、竅穴と敷石の双方にわたり詳しい設計規格が牛原例以上に容易く、しかも確信をもって読みとれるものはない。

もっとも、この成果は敷石1個あたりの面積が大きくとれる結晶片岩に負うところが大きい。

結晶片岩の産地は、群馬県南西部から埼玉の外秩父山地北部にかけて分布する三波川帯に限られている。運搬を前提とした切り出しが山上で行われたとは考えにくく、石の大きさと重さ、変化が多い内陸河川環境を考慮すれば、陸路や独木舟

の利用も現実的ではない。石は河川脇で切り出され、全てが筏で運搬されたと推定できる。

そこで、現在の河川を頼りに牛原遺跡の敷石に使われた絹雲母・緑泥石・紅簾石片岩の転石が合わせて確認できる地区を求めると、越辺川流域では嵐山町遠山地区の柳川沿岸、荒川上流では寄居町赤浜地区がもっとも下流となる。

このうち荒川は、熊谷市以南における当時の流路が不明な上に、たとえ現荒川低地帯を流れたとしても大宮台地側が想定される。牛原遺跡が面する二階川に至るには、あらためて下流から長い遡航をせねばならない。これに対し、柳川は嵐山町で都幾川と合し、東松山市で越辺川に注ぐ。そして、程なく二階川との合流点にたどり着く。

現状では、ことさらに長く困難な道を選び理由は無い。つまり、産地は柳川沿岸で、切り出しに適した露頭を吟味すると、より遡る小川町下里地区であった可能性が高い。仮にそこから諸河川を航行、二階川を遡上して遺跡に至ったとすると、その距離は28.4kmになる。推定564.2kgにもおよぶ搬入石材の重さを加味すると、稀にみる縄文時代の長距離大量輸送の実証例となる。

さらに、さいたま市指扇地区で調査された大木戸遺跡(註1)では、柄鏡形住居跡の奥座に長さ1.4m、重さ71.7kgの紅簾石片岩を敷いていた。ここは、二階川合流点よりさらに9.8km下流から大宮台地内の小谷を遡上した位置にある。

両者の共通は、柳川産結晶片岩の供給が牛原のみの単発ではなく、普遍的なシステムとして存在したことを示唆している。ちなみに、小川間は緑泥石片岩を刻んだ板石塔婆が最も多い地域で、中世の採石場が残る下里地区では現在も同岩が建築材として出荷されている。

片理に従う割離は新しい露頭の亀裂に木製楔を打ち込めば比較的容易なものの、硬度6もある変成岩の分割は、意に添う節理を見極める経験に裏打ちされた眼力が必要である。加えて、牛原遺跡

の敷石では分割時にあけられた矢穴までもが残されていた(図版6-1)。矢穴は石工の高い技術を裏づけており、今昔を問わず、それは作業を重ねてこそ培われるものである。

ともあれ、これほどの規格で敷石を目論む彼らが、個別に石を集めたり、やみくもに運んだ大石をその場であたふた割ったとは思えない。現に對の矢穴は見つからなかった。となると、牛原側の求めに応じた石材が産地から出荷されたことになる。だが、改築歴から堅穴が既存していたことは明らかである。ならば、その規模や敷石の設計をどのように供給側に伝えたのだろうか。

また、このような桁はずれの運送が少人数で淡々と行われたはずがない。当然そこには騒ぎあったはずである。そこなここと重ねられた談判だけでなく、牛原からの見返りや、石に上乘せされて繰り上げられたものやひとの交流についてもあれやこれやと想像をたくましくできる。

牛原遺跡の柄鏡形敷石住居跡は、石材に無縁な地域での発見にとどまらず、当時における建築規格や物資の運搬体制など、多くの方面にこれまでにない情報を提供できる。反面、視野の広がりに伴う新たな課題も生ずることだろう。

ダヴィンチの「ウィトルウィウスの人間」では、喉元の軸基点に加え、広げた四肢を描くために円の直径に対する黄金比を意識しつつ設定された胸元の点がある。その点から発する四肢の内側接線は、牛原例の案分と重なる。そして、牛原例でもFQ:FOや、EQ:Eと奥座石切込点などに黄金比と近似する値を見いだせる。

円と方、そして人が驚きだす幾何の妙は、時や場所を超えて世にあるものを魅了するのだろうか。古くより研究者を惹きつけてやまない柄鏡形敷石住居跡の謎は、牛原例の発見を経て、むしろ深まったといえるかもしれない。

註1 平成13年度当事業団調査、現在整理中。

3. 古墳時代

本書で扱った遺跡のなかで古墳時代の痕跡を発見したのは北谷遺跡のみであった。第II章で紹介したとおり、坂戸台地北東部における古墳時代までの集落展開は、弥生時代中期以来の伝統的な占地向向を踏襲し、その縁辺に集中しており、やや内陸で、可耕地に乏しい他の4遺跡には進出しにくかったようである。

そのようななか、北谷遺跡では全体規模が20mを超える大型の方形周溝墓を発見した。供献土器はわずかな破片しか遺存せず、重複する土壌なども併置して時期判定を行ったに過ぎないが、周辺の遺跡で検出された周溝墓の形態に比しても古墳時代前期の判断は誤りないものと考えられる。

既述のとおり、今回の調査区より北側は更新世に形成された後背湿地地形が広がっている。圏央道の予定地は、推定されていた遺跡範囲の北側2/3に及んでいたものの、埼玉県による試掘調査では、後背湿地部分に遺構や遺物は確認されなかった。そのため、立川ローム層が堆積する微高地についてのみ本調査を実施した経緯がある。第6図にみる調査区東西の養殖池や荒地を頼りに推定すると、台地の連なりは南側の北方遺跡に向かい、南ほど幅広くなることがわかる。

このような洋梨状地形のひろがりには、北谷遺跡の東に隣接する木曾免遺跡にも共通し、ここでも北側で同時期・同規模の大型方形周溝墓が発見されている。さらに、この周溝墓は、葬儀にあたり特別に焼成された供献土器を多数取り揃え、中軸をあわせつつ西隣にほぼ1/2の規模で築造された小型周溝墓を従えていた(篠田2008)。台地の南方では同期の竪穴住居跡が発見されており(加藤・北堀・柳楽1987)、大型周溝墓を造成した人々の居住地が展開していたと想定できる。

さらに、同じような地形および居住域と墓域の関係は、川越市上組遺跡でも発見されている。こちらは四隅が切れる古相の周溝墓が北端に、その

地形的制約にならう形で南に接して両部が連結する新相の周溝墓が構築されていた。全体規模は平均9mで、住居跡群は延べ19軒が一定間隔をあけた南に残されていた。

木曾免遺跡や上組遺跡との共通を見るかぎり、北谷遺跡の周溝墓を築いた人々の居住空間も台地幅が拡大する北方遺跡に想定するのが順当だろう。弥生時代以来、古墳時代後期に至るまでの伝統的遺跡立地を加味すると、墓域より内陸に居住域が存在する可能性は薄い。

さらに、北谷遺跡を木曾免集落の墓域として想定することも可能だが、その場合、主要谷からみて裏にあたる位置に墓域を設けたことになる。これは、木曾免遺跡で発見された弥生時代中期の環濠集落や、後期の坂戸市杉遺跡(加藤2001)などで見られる古い型式の占地向向であり、ここでは時期に通じる類型を援用するのが妥当だろう。

さらに、木曾免・北谷遺跡の大型周溝墓の台地に占める位置を詳しく見ると、全体の規模や溝の幅、その形態などの規格にとどまらず、北に突き出た立川ローム面の北端を幾ばく残し、なおかつ地形の中央ではなく、東に寄せる占地向向までもが共通していることがわかる。

重なる一致や墳墓の格を加味すると、二つの集落が極めて親和・友好的な実力者の元に共立していたと解することができる。

これまで蓄積されてきた調査成果をひもとく限り、坂戸台地北東部では両遺跡のような大型周溝墓は見つかっていない。加えて、附属墓を従えるまでの大型墓を擁する集落が併呼の間で並び立つような様相は、他の場所では想定しにくい。

仮定を重ねた憶測の域を出ないが、今回発見した大型周溝墓からは、北谷・木曾免両集落が連合体を組織しつつ坂戸台地北東部集落群の上位に君臨していた構図を導き出すことも可能である。

4. 古代

古代の遺構・遺物は、番匠・下道遺跡と横沼新田遺跡の2遺跡で発見された。前者では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡5棟、そして後者では竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡7棟を調査した。

既述のとおり、両遺跡は県道上井草坂戸線をはきみ隣接しており、その分布や遺物の性格に大きなちがいはない。古代に関していえば、両者は同一の集落跡と見なすことができる。それぞれの成果を総合すると、今回の調査では竪穴住居跡17軒、掘立柱建物跡12棟を検出したことになる。

遺構の路線に沿ってではあるが、古代遺構の分布は南北280mにおよぶ。当然ながら、これらはいくつかの特徴ある遺構群に分けられる。例えば、番匠の主体部では、住居跡が密集する西部域と、基軸をそろえて計画的に配置された東部の掘立柱建物跡群とがあり、掘立柱群の西列線と平行する不可侵線が存在したかのように、4軒の住居跡が直線に並んでいる。

また、番匠最北の第2号住居跡から横沼南部にかけての住居跡は、十分な間隔を保ちつつ建造されており、最終的に掘立柱建物跡を含めた両者が混合して分布する。そしてさらに、100mを隔てた横沼北部では、特異な掘立柱建物跡2棟と小型の住居跡が散立している。

掘立柱建物跡を中心とする番匠東群と横沼北群では確定しにくい、住居跡出土遺物から、両遺跡の存続期間は9世紀半ばを前後する数十年間と想定できる。これらの出土地を見るかぎり、4地区の構造差は、移転や新期の入植に起因するものではなく、集落内で階層・機能的な差異である可能性が高い。このなかで、とくに異質なのが番匠東群と横沼北群である。

番匠東群に類似するコの字配置の掘立柱群は、近くでは坂戸塚の越遺跡(屋間1991)、同市稲荷前遺跡(富田1992)、鶴ヶ島市富士見一丁目遺跡(黒坂1998)などで発見されている。これらからは、

大型住居と井戸を枠内に収め、ひときわ大きな複数の北面棟と、東西列のいずれかに総柱建物を備える基準規格が想像できる。また、その性格については、律令制の薫陶を受けた人物の邸宅、あるいはその末端機能を請け負った機関などの説がある(鳥羽1997他)。

番匠東群の建物群は、配置内に住居跡や井戸跡が発見されず、総柱建物もない。また、北面には複数の建物と並ぶものの、いずれも一般的な規格で、しかも東の第2号掘立柱建物跡は、北面の中心となる第1号ではなく、東列の第3号に基軸をそろえ、その延長的な位置づけであったことが柱穴の設置規格から推定できる。

このように、番匠東群は、想定されるコの字配置建物群の規格に不足する要素が多く、横沼南群で縦列化する掘立柱群のように、追加建造の累積がもたらした表面的な帰結ともとれる。だが、そもそも何故この場所かという問題は残るが、建物群は浅い谷に面しており、その使用者に属して厨的機能を果たしたと思われる大型住居の役割は、湿気などの制約から、建物群と並立する番匠西群にて賄われていたと考えられる。

西群の住居跡は、散在する横沼南群に比して、建物跡群の隣接空間にこだわるようにひしめき合っている。出土遺物も施釉陶器や硯、鉄鎌など、通常の集落では見つかりにくいものも多量に出た。大隗片をふんだんに用いた第5号住居跡の重厚なカマドもその役割ならではの充実と理解することもできる。また、中近世と判定した第1号と第7号井戸跡は、陶磁器類が出土しておらず、住居跡群に付属する可能性も残されている。

総柱建物の欠落もあるが、番匠東群は、コの字列化の由来を継承しつつ地形地質に即した変形を加え、西群の住居跡の一部とともに計画的に配置されたものと考えられる。

一方、集落域とは隔離した位置に特異な建物跡

を残すのが横沼北群である。その隔たりは100mほどもあり、南方の集落と関わりない一群との解釈もできないわけではない。

もっとも特徴的なのは二重の柱列を組む第6号掘立柱建物跡で、内柱列が引寄ることより、これが単純な身舎と庇の関係にあたらないことがわかる。だが、具体的には、外列が壁面となって内列が束柱や四天柱のような機能を果たすのか、内列による身舎に縁的な構造物が加わるのか、建築学的な素養を欠くため判断がつかない。

いずれにせよ、その基礎配置からすれば、南面平入りの神仏安置堂である可能性が高い。また、第7号住居跡は一辺平均1.8mと極小であるにも関わらず、カマドが備わる。さらに、普遍的な構造の第7号掘立柱建物跡も、南方の同規格建物に比べると極端に面積が小さい。

このうち第6号は、その構造に加え、番匠・横沼集落群の良に建立されていることから、鬼門除け、あるいはそれに類する思想を象徴する建物として、その構成員が構築したと推定できる。

他の2棟は堂跡との共存を保証する根拠はない。だが、時を違えて至近の距離に孤高の建物が存在したとは想定しにくい。加えて、住居跡は、規模の面で建物跡と通じる上に方位軸も一致することから、ともに機能した可能性が強い。三者は併存し、堂跡に従う2棟は、臨時または個人向きともいえる規模から、その運営にあたっての副次的な施設であったと考えたい。

翻り、逆に鬼門方位から集落を見ると、その総意をつかさどる人物の本拠は、今回の調査区より西側に隠されていると推定できる。番匠東群は集落の中心的建物群ではなく、東に拠していることとなる。このように考えた場合、番匠西群の単独柱穴から出土した「左」の墨書は、中核部継承者に対する格の差に加え、遺跡中心域との位置関係を示す語として読むこともできる。

今回実施した番匠・下道および横沼新田遺跡の

調査は、南東の谷と北東の堂跡の発見により古代集落の東端を確定させたといえる。第11章で紹介したが、両遺跡は西隣りの宮町遺跡（大谷1991）を中心とする準内陸の古代遺跡群に含めることができる。同遺跡に加え、さらに西の住古中学校遺跡（加藤・北堀・柳葉1987）や南の精進場遺跡（埼玉県教育委員会2002他）に至るまで、付近では間断なく古代遺構が連なると推定されている。

空想久しいこの地で古代集落群がにわかに膨張を遂げた背景は、やはり高麗建郡や東山道武蔵路敷設に帰納させるしか手だてがない。牛原遺跡で発見された中世道の関係から次項で詳しくふれるが、東山道支路の有力二案のうち古海道東遺跡案をそのままたどると、まさに宮町群の中心を南北に貫くことになる。

宮町遺跡の墨書「路家」は、単なる路傍の居住地とは思えず、「家」なる機関が拠り所とする路線の結節点をも暗示している。宮町群は、この支路案から不二を仰ぎつつ稀代の内陸集落である若葉台遺跡群や、日高市拾石・玉神遺跡（松本1997）など飯能台地奥の高麗中核遺跡群をめざす直線経路の分岐点ともなり得る位置にある。

番匠・横沼集落を引き合いに出すまでもなく、古代における特別施設の存在は集落内の掘立柱建物率を押し上げる要因となる。宮町遺跡における建物率の高さ、区画薄、稜付境などの出土は、まさに別格施設の存在を示唆している。

宮町群への入植は、「路家」を端緒に、この施設に関わる一団が第二次・第三次的な取組基盤を育み、番匠・横沼集落の成立を招く地政学的な下地を醸成したと考えられる。

ちなみに、番匠・横沼の集団は、平安期の宮町や東の木曾免遺跡の集団と比べてより多くの東金子産須恵器を手にしており、群内の一律ではない住民構成が察せられる。このちがいが、押する権力や出自に起因するのか、行政単位他によるものなのかは、報告までに考えが至らなかった。

5. 中近世

中近世の遺構は、今回報告の5遺跡すべてに残されていた。しかし、近世期の土壇や柱穴類は遺物も少なく、詳細をつかめぬものが多い。

このなかで、御新田遺跡で発見できた大規模な掘立柱建物跡と、連携する区画溝は、方位軸を意識しつつ南面して建造されており、調査区の南に鎮座する諏訪神社との関連も憶測できる。

だが、設定された柱間幅の割に掘り方は小さく浅い。規模に見合う豪壮な建物を支えるには無理があると考えざるを得ない。このことから、建物跡は、居住用の家屋ではなく、均等に並列する空間割を要する生業施設で、板屋根が葺かれた程度の小屋掛けであったと推定できる。

これに対し、番匠・下道遺跡および横沼新田遺跡では多くの溝跡・井戸跡・土壇を、さらに後者では加えて掘立柱建物跡や欄も発見した。

土壇は大半の用途が不明であるが、番匠遺跡の中央西側では地下式塀跡が残されていた。地下式塀は、遺跡の西側を対象とした昭和162年度の調査でも見つかっており、掘立柱建物跡や井戸跡とともに土鍋や渡来銭、かわらけが多く出土している(加藤・北畑・柳楽1991)。今回の調査では、断面台形の堀跡に沿って分布しており、12世紀代に遡ると思われる渥美の甃が出土したことより、堀跡の掘削年代をも示唆することとなった。

また、他の溝跡も主に区画を目的としており、紛れた遺物から中世期に掘削されたと推測されるものもあるが、近代に至るまでのたび重なる養生や掘り返しによって遺構の原形や遺物の原位置を失っているものが大半であった。

それでもなお、近辺の調査成果を見るかぎり、これほどの中近世遺構や遺物がまとまって確認された例は、館跡関連遺跡の他にはない。

重層・連続的な溝による区画割は、戸宮前館跡などで、中世館跡と連動した街区割りを継承したものが発見されている(木戸2004、村端2007)。だ

が、暮らしに関わり深い地下式塀を多数残す番匠例は、戦略・戦術に縁遠い在地土豪層の自然発生的な屋敷などか想定できる。

一方、今回の調査では、遺構がないことで証明できた事例もある。前述の戸宮前館跡南部の立て込んだ街区は、幅20m、深さ2m余りの谷すらも並列する堀を掘削してその中に取り込んでいた。なのに、県道片柳川越線隔着た牛原遺跡では、この間に地形変化がないにも関わらず、片鱗すらも発見できなかった。このことより、近世川越児玉往還(吉田1994)にあてられるこの県道が、中世後期に機能していたことがわかる。

もう一つ、牛原遺跡の調査区は、戸宮前館跡と県道をさきみ対峙する大堀山館跡(梅沢2003)の直北に位置している。近い箇所では北外堀から30m程であるにもかかわらず、か細い区画溝を除き、関連街区がなかった。ただし、この区画溝の屈曲部は同館跡の対角延長上にあたることから、共に縄張りされたものと考えられる。

さらに、区画溝の西方20mでは心間約4mの平行溝が見つかった。硬化面や路盤工跡が残るわけではないが、調査ではこれを中世の道路跡と判定した。もちろん、2条の溝は単に大堀山館跡の北外郭を分かつものという解釈も可能である。しかし、南北に視点を広げると、これらを道路跡として捉える妥当性が理解できる。

両溝が指し示す軸方位はおおよそN-7°-W。この方位軸を南に延長すると、大堀山館跡の西外堀と約50mを隔てて平行しつつ、1kmで古代と中世の道路跡が発見された古海道東遺跡に至る。同遺跡では東山道武蔵路の西側溝と目される古代溝跡と中世鎌倉街道日堀兼道に比定される硬化面が発見されている(内田2007)。

北に向かい若干西に振れるそれぞれの詳しい方位軸は現状では確定しがたいが、とくに中世道は調査区脇の川越市道と併走しているように見え

る。この現道は、以前より古道の伝承が残されており、大谷川以北は近代に西遷したことが確認されている(村本・小川1992)。試みに、この市道の方位性の起点となる小畔川北岸の東洋大学南交差点から古海道東遺跡、そして牛原遺跡の溝跡を結べば、おおよそ現道や溝跡の方位性と矛盾ないN-9°-Wの指向方位が得られる。

中世道に頼る直線規範はないようだが、仮にその指向を尊重して北方に延長すると、坂戸市塚越地区の大宮住吉神社や西光寺の脇をぬけて越辺川の低地に至る。そして、『第一軍管地区迅速図』では、坂戸台地を繰取る飯盛川にさしかかる場で同市赤尾地区をめざす道に接触する。

もう一つ、古海道東遺跡で特定された道路跡の東山道武蔵路については、少なくとも川越市八幡前・若宮遺跡(富元2005)付近に駅家が存在することで大方が一致している。試みに、同遺跡での粘土採掘坑や井戸跡の分布から駅家の本体を北東に想定し、100m程離れた位置から古海道東遺跡の東側現道部分を結んで北に延長すると、大堀山館跡の東をかすめつつ、牛原G遺跡と御新田遺跡の間に介する谷にうずたかく積まれた産業廃棄物の山を貫き、やはり赤尾地区に到達する。その指し示す方位はN-3°-Wで、大堀山館跡東外堀の方位角N-4°-Wとほぼ合致する。

大堀山館跡を囲う東西外堀の基準軸ともとれる両路線がめざす赤尾地区は、高麗川や、高坂丘陵から流れ出る九十九川、そして直前では高坂台地と東松山台地を画する都幾川さえも東わた越辺川の流路が急転東南に変じる地点でもある。これは、坂戸台地と赤尾地区の間に横たわる水田の下にも扇状地形の基盤が広がるため、この沖積地の安定性をものかたっている。

また、赤尾地区に對面する東松山台地も東南にせり出しており、最も近接する先端の古凍地区との距離は約0.6kmにまで狭まる。その結果、外秩父正丸以北、釜伏以南の水流はすべてこの一点に集

約されることになる。これに対し、下流にあたる川島町に広がる水路や自然堤防からは、ここで集約された水流が塩散・乱流を繰り返したデルタ地形が現れてくる。

河川の合流点やその直下を横断するのは渡河の常道である。計画的な路線の設計者が先ずもって心を砕くのは効率や安全、そして路線の安定的な存続を保証する地形環境だろう。そのすべてに立ちはだかるのが低地帯の横断と大河の渡河であり、路線はなによりも優良な渡河点を紡ぐように設定されたはずである。

吉見町で相次いだ古代道の発見(弓2002他)であらためて注視されている古凍地区へ武蔵路が向かうとするならば、両台地間の横断は、諸河川を束ねた赤尾地区を経るのが最も理にかなう。

古海道東遺跡における所見では、武蔵野台地だけでなく、入間台地でも堀兼道が武蔵路を継承していたことにも言及している。両側溝か堀割状かなどの土木的形状や路幅の矛盾があるものの、東山道古海道東ルートを探るかぎり、併走して同じ赤尾地区をめざす牛原遺跡の中世道堀兼道の有力候補に挙げることができる。

しかし、赤尾地区に達するのは共通するものの、地域に残る伝承は、大堀山館跡の東を迂回するような現道や東北の短冊状地割を堀兼道にあてている(埼玉県教育委員会他1982)。迂回の終起点は東山道古海道東ルート上にあり、古代からの継続性からすれば、こちらも十分な説得力がある。

両者が併走するのか、はたまた先後があり、堀割状遺構を欠く牛原遺跡の路線が中世後期に交代したのか、現状ではいずれとも決しがたい。

ともあれ、大堀山・戸宮前をはじめ、周囲に林立する5館跡は、地形などによる若干の異動があるものの、牛原路線の指向方位を対称軸とする鶴翼に配されている。この一事をもってしても、近隣の中世動態をひもとく上で看過できない遺構となるだろう。

引用文献

- 赤城高志 1992『調布市上布田遺跡 第2地点の調査』調布市埋蔵文化財調査報告23 調布市教育委員会
- 秋田かな子 1991『東海大学校地内遺跡調査報告』2 東海大学校地内遺跡調査委員会
東海大学校地内遺跡調査団
- 石井 寛 1990『山田大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告X I
横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛 1993『牛ヶ谷遺跡 華蔵台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XIV
横浜市ふるさと歴史財団
- 岩瀬 譲 1985『鶴ヶ丘 (E区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第45集
- 伊藤研志・加藤恭朗 1981『勝呂庵寺』坂戸市教育委員会
- 伊藤研志他 1983『坂戸市史』原始資料編 坂戸市
- 内田正英 2007『10, 川越市古海道東遺跡 (第1次) の調査』『第40回遺跡発掘調査報告発表要旨』
埼玉考古学会
- 梅沢太夫 2003『中世北武蔵の城』岩田書院
- 大谷 徹 1991『宮前遺跡 I』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第96集
- 大谷 徹 2008『宮廻館跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第354集
- 岡本健一 1993『谷津/二反田/下向山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第131集
- 川口 潤 1993『白草遺跡 I・北篠場遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第129集
- 加藤恭朗 1985a『6, 坂戸市小沼郷之内遺跡の調査』『第18回遺跡発掘調査報告発表要旨』
埼玉考古学会
- 加藤恭朗 1985b『附島遺跡発掘調査報告書 I』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 1997『景台遺跡発掘調査報告書 III』坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗 1999『景台遺跡発掘調査報告書 II』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2001『移遺跡』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗 2005『若葉台遺跡発掘調査報告書 VI』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗他 1987『附島遺跡発掘調査報告書 II』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1987『古代のさかど』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1988『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第 I 集』坂戸市教育委員会
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1989『勝呂庵寺』坂戸市遺跡発掘調査団
- 加藤恭朗・北堀彰男・柳楽 理 1991『坂戸市遺跡群発掘調査報告書第 III 集』坂戸市教育委員会
- 金子直行 1993『四反歩遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集
- 金箱文夫 1985『叭原遺跡 (先土器・縄文時代編)』川口市文化財調査報告書第23集 川口市教育委員会
- 亀田直美・青木美千子 2004『戸宮前/在家/宮廻』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第297集
- 川越市教育委員会 1996『川越市文化財保護年報』平成7年度
- 川越市教育委員会 2005『川越市文化財保護年報』平成16年度
- 木戸春夫 2004『戸宮前/在家/宮廻』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第297集
- 木本雅康 1992『宝亀2年以前の東山道武蔵路について』『古代交通研究』創刊号 古代交通研究会
- 黒坂祐二 1989『上組 II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集
- 黒坂祐二 1995『向山/上原/向原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
- 黒坂祐二 1998『富士見一丁目遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第189集
- 黒坂祐二・宅間清公 2007『埼玉県木曾免遺跡と御新田遺跡』『考古学ジャーナル』No.553
ニューサイエンス社
- 小泉 功他 1972『川越市史』第一巻 原始古代編
- 小泉 功・小久保徹 1976『登戸遺跡』『埼玉県土器集成』4 埼玉考古学会
- 小泉 功他 1979『芦刈場遺跡』飯能市教育委員会
- 埼玉県教育委員会・埼玉県立歴史資料館 1982『県内鎌倉街道伝承地所在確認調査報告書』
- 埼玉県教育委員会 2002『埼玉県埋蔵文化財調査年報』平成13年度

- 齊藤 稔・加藤恭明他 1983『若葉台遺跡シンポジウム』鶴ヶ島市教育委員会 若葉台遺跡発掘調査団
- 酒井清治 1987『宮・郡寺・郡家』『埼玉の考古学』新人物往来社
- 酒井清治 1993『武蔵国内の東山道について』『国立歴史民俗博物館研究報告』第50集
- 篠田泰輔 2008『木曾免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集
- 清水理史 2003『地震沼遺跡第1～3次発掘調査報告書』鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第52集
鶴ヶ島市遺跡調査会
- 鈴木秀雄 1996『坂東山/坂東山西/後B』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第166集
- 関口和也 1990『埼玉県川越市大字下広谷の城址群』『中世城郭研究』第4号 中世城郭研究会
- 関口陽子 2003『泉橋遺跡第1次調査 三ツ木屋敷第2次調査』鶴ヶ島市埋蔵文化財調査報告第54集
鶴ヶ島市遺跡調査会
- 高橋一夫 1982『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県史編纂室
- 立石盛詞 1987『女堀II・東女堀原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68集
- 立石盛詞 1989『御伊勢原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集
- 田中一郎 1976『上谷遺跡』坂戸市教育委員会 東坂戸団地遺跡調査団
- 田中英司 1995a『向山/上原/向原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第155集
- 田中英司 1995b『横田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第163集
- 田中 信 1996『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(XI)』川越市教育委員会
- 谷井 彪 1976『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 富田和夫 1992『稲荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第120集
- 富田和夫 1994『稲荷前遺跡(B・C区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第145集
- 富元久美子 2005『八幡前・若宮遺跡(第1次調査)』川越市遺跡調査会調査報告書第31集
- 島羽政之 1997『北武蔵における律令期集落の検討』『埼玉考古』第33号 埼玉考古学会
- 中野達也 2004『枋荒道遺跡2次調査地点』春日部市遺跡調査会報告書第13集
- 西井幸雄 1995a『柳戸/新山/向山/青柳/光山遺跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第154集
- 西井幸雄 1995b『西久保/金井上』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 西井幸雄 1996『丸山/青梅道南/十文字原/東武蔵野/西武蔵野』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第164集
- 西井幸雄 2008『木曾免遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第352集
- 早川由利子 1995『川越市東下川原遺跡発掘調査報告書』東下川原遺跡調査会
- 早川由利子 1997『鶴ヶ島中学西遺跡発掘調査報告書』鶴ヶ島市教育委員会
- 平野寛之 2002『16、入間郡一霞ヶ関遺跡-』『坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古別冊6
埼玉考古学会
- 平野寛之 2005『天王遺跡(第15次調査)』川越市遺跡調査会報告書第32集
- 昼間孝志 1991『塚の越遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第101集
- 昼間孝次 1976『霞ヶ関遺跡』『埼玉県土器集成』4 埼玉考古学会
- 松本尚也 1997『9、日高市拾石・王神遺跡の発掘調査』『第30回遺跡発掘調査報告会発表要旨』
埼玉考古学会
- 松本尚也 2006『寺脇』日高市埋蔵文化財調査報告書第32集 日高市教育委員会
- 宮籙交二 1999『一天狗遺跡』地点13区発掘調査報告書 鶴ヶ島市教育委員会
- 村端順樹 2007『戸宮前II/在家II』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第342集
- 村本貞夫・小川 忍 1992『川越市歴史の道調査報告書』文化財調査報告書第8集 川越市教育委員会
- 森田安彦 1995『2、江南町萩山遺跡の調査』『第28回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 山形洋一 1992『下加遺跡』大宮市遺跡調査会報告第35集
- 山本剛久他 1996『敷石住居の謎に迫る』資料集 神奈川県埋蔵文化財センター かながわ考古学財団
- 弓 明義 2002『吉見町西吉見条里II遺跡の古代道路跡』『坂東の古代官衙と人々の交流』
埼玉考古別冊6 埼玉考古学会
- 吉田 稔 1994『川越・児玉往還』歴史の道調査報告書第十七集 埼玉県教育委員会